

# 日本語文法学会

The Society of Japanese Grammar

## 第26回 大会発表予稿集

**2025**年**12**月**20**日**田**・**21**日**田**

会場：専修大学

主催 日本語文法学会

公開シンポジウム 共催：言語系学会連合



## 第26回大会プログラム

○2025年12月20日(土) 午後12:30- 受付開始 ※13:00 までにご着席ください。

研究発表	A 会場 10 号館 8 階 (10081)	B 会場 10 号館 8 階 (10082)	C 会場 10 号館 9 階 (10091)	D 会場 10 号館 9 階 (10092)
司会	野間 純平 (島根大学)	岩田 美穂 (就実大学)	窪田 悠介 (国立国語研究所)	堤 良一 (岡山大学)
13:00   13:40	宮田 瑞穂 (無所属) 比喻にかかわる用法における 「もう」の分析―「もはや」 との対比を踏まえて―	角出 凱紀 (京都大学大学院 生) 日本語における疑似接辞 [マ ンモス] の発達について―用 法基盤モデルに基づく分析―	坂本 瑞生 (東北大学大学院生)・ 山下 大希 (名古屋大学大学院生) 日本語において抽象格と形態格を 区別する意義―無助詞の分析―	松本 優 (名古屋大学大学院 生) 不明確項指示用法の不定語と 指示詞の照応について
13:50   14:30	米村 雪乃 (東京外国語大学 大学院生) 石川県能登地方七尾方言のゼ ロ格について	陳 星宇 (名古屋大学大学院 生) 接続助詞「と」の淵源―同時 の意を表す「と等しく」はな ぜ「に等しく」でなかったか ―	包 雅梅 (華東理工大学) 数量形容詞“多い”と“少ない”の非対 称性―肯定・否定極性形容詞のス ケール構造の違いに基づいて―	新山 聖也 (筑波大学非常勤 研究員) 結果相を表すテラル文におけ る動作主―動作主不在説の検 討―
14:40   15:20	【招待】 大槻 知世 (静岡大学) 日本語の使役形式の地域差 ―(s)as, -(s)ase を中心に―	池田 来未 (神戸大学) 複合動詞「～ツクス」の通時 的変遷	李 依格 (大阪大学大学院生) 話し言葉における否定でない形 の選択メカニズム―般化線形混 合モデルによる検討―	周 世超 (三重大学特任講 師) 「さすがに」の意味・機能の 細分化について
15:20   15:50	休憩			
司会	中川 奈津子 (九州大学)	林 淳子 (東京大学)	田川 拓海 (筑波大学)	陳 秀茵 (東洋大学)
15:50   16:30	阪上 健夫 (東京大学大学院 生) 山梨県奈良田方言の終助詞 「二」の用法と意味機能―理 由の接続助詞からの派生過程 に着目して―	【招待】 福嶋 健伸 (実践女子大学) 古代日本語における動詞基本 形の捉え方―不完成相か、完 成相か、〈未来〉を表すのか ―	孫 思琦 (総合研究大学院大学大 学院生)・井戸 美里 (国立国語研 究所)・窪田 悠介 (国立国語研 究所) 談話戦略としての認識の是正―カ ラの文末用法の分析―	上田 地平 (関西大学大学院 生) 動詞「終わる」の意味拡張と 構文の変化
16:40   17:20	李 強楠 (関西大学大学院 生) 「V てくれる/あげる」構文にお ける恩恵と動作の受け手の重 層構造が引き起こす習得困難 点―恩恵と動作の受け手の 混同・ニ格とノタメニ格の混 同において―	山下 大希 (名古屋大学大 学院生) 【移動領域】補語の助詞標示 の変遷―非制御的な移動動詞 を中心に―	黄 銘君 (北海道大学大学院生) 非情物主語における再帰的使役表 現の成立可能性―所有傾斜制約の 再検討―	張 明 (川村学園女子大学) 「はといえば／はというと」 はいつ使われるのか
17:30   18:10	丹野 靖大 (東北大学大学院 生) 主題のみからなる疑問文につ いて	幸松 英恵 (東京外国語大 学) ノダ文の「原因・理由」提示 用法の変遷について	【招待】 大島 デイヴィッド義和 (名古屋大 学) 現代日本語の尺度的累加量化詞に ついて―類推・添加・最低条件用 法の再考―	バリハワダナ ルチラ (京都 大学) 形式名詞の無助詞用法
18:30   20:00	懇親会 [10 号館 16 階 相馬永胤記念ホール]			

○2024 年 12 月 21 日（日）午前（パネルセッション）

9:00- 受付開始 ※9:30 までにご着席ください。

	A 会場 10 号館 8 階（10081）	B 会場 10 号館 8 階（10082）
	パネルセッション（大会委員会企画）	パネルセッション（一般）
9:30   11:30	テーマ 日 本 語 学 と 形 式 意 味 論 を つ な げ る ― GrammarXiv データベースの活用の可能性 ―	テーマ 方言におけるノダ相当形式の対照研究
	司会 田中 英理（大阪大学） 発表 1. 田中 英理（大阪大学） 導入・背景の説明 2. 水谷 謙太（愛知県立大学）・井原 駿（津 田塾大学） 最上級修飾語「少なくとも」をめぐ って 3. 窪田 悠介（国立国語研究所） 対比のハを めぐって	司会 野田 春美（神戸学院大学） 発表 1. 野田 春美（神戸学院大学） 本パネルセッションの 趣旨と概要 2. 江口 正（福岡大学） ノダ相当形式にコピュラが現 れにくい方言―福岡県福岡市方言― 3. 田附 敏尚（神戸松蔭大学） 複数のノダ相当形式が ある方言―青森県五所川原市方言― 4. 野間 純平（島根大学） ノのない方言における「ノ ダ文」 ―山梨県早川町奈良田方言・島根県出雲市平田 方言―
11:30   12:50	昼食休憩	

○2024 年 12 月 20 日（日）午後（会員総会・大会式典・シンポジウム）

12:50   13:10	会員総会 10 号館 3 階 黒門ホール（10031）
13:10   13:30	大会式典 10 号館 3 階 黒門ホール（10031）
13:40   17:10	日本語文法学会 第 26 回大会シンポジウム （言語系学会連合共催、一般無料公開） 10 号館 3 階 黒門ホール（10031）
	テーマ「日本語文法研究は何がどう進化しているのか」  講師 1. 衣畑 智秀（福岡大学） 仮説検証としての文法史研究 講師 2. 中俣 尚己（大阪大学） 日本語文法研究はデータをどのように扱ってきたか  コメンテーター：田川 拓海（筑波大学） 企画・司会：建石 始（神戸女学院大学）



12月20日(土)

【研究発表】13:00～18:10 [10号館8階・9階]

## A会場 10号館8階(10081)

(司会：野間 純平)

- |        |   |       |      |
|--------|---|-------|------|
| 13:00～ | 比喩にかかわる用法における「もう」の分析<br>—「もはや」との対比を踏まえて—  | 宮田 瑞穂 | … 1  |
| 13:50～ | 石川県能登地方七尾方言のゼロ格について                       | 米村 雪乃 | … 9  |
| 14:40～ | 【招待】日本語の使役形式の地域差<br>—-(s)as, -(s)aseを中心に— | 大槻 知世 | … 17 |

(司会：中川 奈津子)

- |        |  |       |      |
|--------|--|-------|------|
| 15:50～ | 山梨県奈良田方言の終助詞「ニ」の用法と意味機能<br>—理由の接続助詞からの派生過程に着目して—                                     | 阪上 健夫 | … 25 |
| 16:40～ | 「Vてくれる／あげる」構文における恩恵と動作の受け<br>手の重層構造が引き起こす習得困難点<br>—恩恵と動作の受け手の混同・二格とノタメニ格の混<br>同において— | 李 強楠  | … 33 |
| 17:30～ | 主題のみからなる疑問文について  | 丹野 靖大 | … 41 |

## B会場 10号館8階(10082)

(司会：岩田 美穂)

- |        |  |       |      |
|--------|--|-------|------|
| 13:00～ | 日本語における疑似接辞「マンモス」の発達について<br>—用法基盤モデルに基づく分析—      | 角出 凱紀 | … 49 |
| 13:50～ | 接続助詞「と」の淵源<br>—同時の意を表す「と等しく」はなぜ「に等しく」で<br>なかったか— | 陳 星宇  | … 57 |
| 14:40～ | 複合動詞「～ツクス」の通時的変遷                                 | 池田 來未 | … 65 |

(司会：林 淳子)

- |        |  |       |      |
|--------|--|-------|------|
| 15:50～ | 【招待】古代日本語における動詞基本形の捉え方<br>—不完成相か、完成相か、〈未来〉を表すのか— | 福嶋 健伸 | … 73 |
| 16:40～ | [移動領域]補語の助詞標示の変遷<br>—非制御的な移動動詞を中心に—              | 山下 大希 | … 81 |
| 17:30～ | ノダ文の「原因・理由」提示用法の変遷について                           | 幸松 英恵 | … 89 |

## C 会場 10 号館 9 階 (10091)

(司会：窪田 悠介)

- |         |   |                |      |
|---------|---|----------------|------|
| 13:00 ～ | 日本語において抽象格と形態格を区別する意義<br>—無助詞の分析—                   | 坂本 瑞生<br>山下 大希 | … 97 |
| 13:50 ～ | 数量形容詞“多い”と“少ない”の非対称性<br>—肯定・否定極性形容詞のスケール構造の違いに基づいて— | 包 雅梅           | …105 |
| 14:40 ～ | 話し言葉における否定ていねい形を選択メカニズム<br>—一般化線形混合モデルによる検討—        | 李 依格           | …113 |

(司会：田川 拓海)

- |         |   |                        |      |
|---------|---|------------------------|------|
| 15:50 ～ | 談話戦略としての認識の是正<br>—カラの文末用法の分析—               | 孫 思琦<br>井戸 美里<br>窪田 悠介 | …121 |
| 16:40 ～ | 非情物主語における再帰的使役表現の成立可能性<br>—所有傾斜制約の再検討—      | 黄 銘君                   | …129 |
| 17:30 ～ | 【招待】現代日本語の尺度的累加量化詞について<br>—類推・添加・最低条件用法の再考— | 大島 デイヴィッド<br>義和        | …137 |

## D 会場 10 号館 9 階 (10092)

(司会：堤 良一)

- |         |                                  |       |      |
|---------|----------------------------------|-------|------|
| 13:00 ～ | 不明確項指示用法の不定語と指示詞の照応について          | 松本 優  | …145 |
| 13:50 ～ | 結果相を表すテアル文における動作主<br>—動作主不在説の検討— | 新山 聖也 | …153 |
| 14:40 ～ | 「さすがに」の意味・機能の細分化について             | 周 世超  | …161 |

(司会：陳 秀茵)

- |         |                        |               |      |
|---------|------------------------|---------------|------|
| 15:50 ～ | 動詞「終わる」の意味拡張と構文の変化     | 上田 地平         | …169 |
| 16:40 ～ | 「はといえば／はというと」はいつ使われるのか | 張 明           | …177 |
| 17:30 ～ | 形式名詞の無助詞用法             | パリハワダナ<br>ルチラ | …185 |

12月21日(日)

【パネルセッション】9:30～11:30

**A会場 10号館8階(10081) パネルセッション(大会委員会企画)**

(司会: 田中 英理)

テーマ 日本語学と形式意味論をつなげる  
ー GrammarXiv データベースの活用の可能性ー

発表1	導入・背景の説明	田中 英理	…193
発表2	最上級修飾語「少なくとも」をめぐって	水谷 謙太 井原 駿	…197
発表3	対比のハをめぐって	窪田 悠介	…207

**B会場 10号館8階(10082) パネルセッション(一般)**

(司会: 野田 春美)

テーマ 方言におけるノダ相当形式の対照研究

発表1	本パネルセッションの趣旨と概要	野田 春美	…215
発表2	ノダ相当形式にコピュラが現れにくい方言 ー福岡県福岡市方言ー	江口 正	…221
発表3	複数のノダ相当形式がある方言 ー青森県五所川原市方言ー	田附 敏尚	…226
発表4	ノのない方言における「ノダ文」 ー山梨県早川町奈良田方言・島根県出雲市平田方言ー	野間 純平	…233

**【シンポジウム】13:40～17:10 10号館3階黒門ホール(10031)**

日本語文法学会第26回大会シンポジウム(言語系学会連合共催・一般公開)

日本語文法研究は何かどう進化しているのか

(企画・司会: 建石 始 コメントーター: 田川 拓海)

講師1	仮説検証としての文法史研究	衣畑 智秀	…240
講師2	日本語文法研究はデータをどのように扱ってきたか	中俣 尚己	…248

日本語文法学会入会案内	…256
-------------	------



## 比喩にかかわる用法における「もう」の分析 —「もはや」との対比を踏まえて—

宮田瑞穂（無所属）<sup>1</sup>

### 1. はじめに

「もう」と「もはや」は、先行研究（森田 1989、飛田・浅田 1994、金 2006、박 2018）において類似性が指摘されている。実際、(1) のように同じ文脈で「もう」と「もはや」を使用した場合、(1a) と (1b) はどちらも状態変化を表すと判断される。

(1) a. 彼の病気はもう手遅れだ。

b. 彼の病気はもはや手遅れだ。（飛田・浅田 1994）

本稿では (1) の「もう」および「もはや」の用法を「時間にかかわる用法」と呼ぶ。先行研究では、時間にかかわる用法の「もう」と「もはや」の類似性を認めつつ、「もはや」は「取り返しがきかない（森田 1989: 1126）」、「以前の状態に戻れない（박 2018: 92）」という「現状不可変性（金 2006: 94）」というニュアンスを伴うという点で「もう」と異なると述べる。

一方で、関（2019）は「もはや」には時間にかかわらない (2) のような用法があることを指摘する。例えば、(2a) における「もはや」はスコットが時間の推移の中で人間から操り人形に変化したことを表しているのではない。(2b) も同様に、ロボットが時間の推移の中で人間の姿に変化して行く様を表しているのではない。本稿では、関（2019）に倣って (2) の用法を「比喩にかかわる用法」と呼ぶ。

(2) a. フォルステルが顎で助手席を示した。「こっちへ来い」スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。（関 2019: 73）（下線部筆者）

b. このロボットはもはや人間です。あなたの言葉が分かるだけでなく、心も理解します。（*ibid.*: 90）（下線部筆者）

興味深いことに、(1) に示したように、時間にかかわる用法では「もう」と「もはや」はほとんど同じ文脈に現れることができたが、比喩にかかわる用法では、「もう」の使用ができない場合がある。

---

<sup>1</sup> mythic38@gmail.com

- (3) a. ??スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形だった。  
b. このロボットはもう人間です。

「もう」の持つ様々な用法については既に先行研究が存在する（小出 2017、宮田 2025 など）<sup>2</sup>。しかし、比喩にかかわる用法における「もう」の使用条件についてはこれまで十分に検討されていない。そのため、本稿では関（2019）の比喩にかかわる「もはや」の分析を参考に、比喩にかかわる用法における「もう」について分析を行う。なお、関（2019）は「A はもはや B である」という形式の用例を扱っているため、本稿でも比喩の形式として「A は {もう / もはや} B である」という連辞的隠喩（山梨 1988）<sup>3</sup>のみを扱う。

## 2. 関（2019）の「もはや」の分析

本稿では、比喩にかかわる「もう」の分析に先立ち、関（2019）の「もはや」の議論を参照する。関（2019）は「もはや X（である）」を、話題の対象があるカテゴリーから別のカテゴリーへと移行する表現として捉え、さらに X を「プロセスにおける究極的な目標点・終着点」と位置づけている。例として、(4) ではスコットが「人間」カテゴリーから「操り人形」カテゴリーへ移行していることが「もはや」によって示されているとし、図 1 のように図示する。

- (4) フォルステルが顎で助手席を示した。「こっちへ来い」スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。（関 2019: 73）

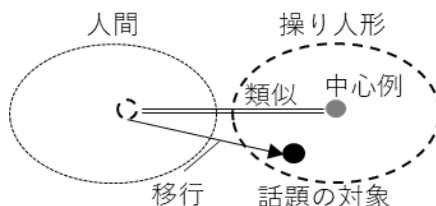


図 1 関（2019: 89）

<sup>2</sup> これらの研究では、主に「もう」の「時間にかかわる用法」、「程度にかかわる用法」、「数量にかかわる用法」について分析を行っている。

<sup>3</sup> 山梨（1988: 16-20）はその他の隠喩の形式として (ia) のような「主辞的隠喩」、(ib) のような「述辞的隠喩」、(ic) のような「統合的比喩」、(id) のような「文脈的隠喩」を挙げている。

- (i) a. （目つきのきつい男が襲い掛かってきた状況で）狼が襲い掛かってきた。  
b. 彼は夢を食べて生きている。  
c. 太郎兵衛は・・・現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡がくもって、其金を受け取ってしまった。  
d. そりゃね、・・・パンよりもお茶漬の味がいい年になってきている。

また、(5) の例では風の強さが「強風」「暴風」を経て最終的に「台風」という終着点に至っていることを示しているとする。

(5) 強風の中でも記念撮影！強風？いや暴風！もはや台風だよ！

(関 2019: 91) (一部省略)

以上のように、関 (2019) は「もはや X」を移行と終着点の観点から説明する。次節では、関 (2019) の挙げる用例を手がかりに、比喻にかかわる「もう」の使用について観察する。

### 3. 比喻にかかわる「もう」の用例

「もはや」と比較した時に、比喻にかかわる用法における「もう」の最大の特徴は、連辞的隠喩と共起すると不自然になる点である。(6) は関 (2019) が示した用例の「もはや」を「もう」に置き換えた例だが、「もはや」を使用する場合と比較するときわめて不自然となる。さらに、(7) および (8) でも同様の事実が確認される。

(6) a. スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。

b. ??スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形だった。

(7) a. もはや採用インフラ。8 割強の就活生が「企業 SNS は必要」<sup>4</sup> (下線部筆者)

b. ??もう採用インフラ。8 割強の就活生が「企業 SNS は必要」

(8) a. プレゼント付！8 番らーめん秋の新作はもはやイタリアン？な「クリーミートマト唐麵」！人気の野菜トマトらーめんも見逃せない<sup>5</sup> (下線部筆者)

b. ??プレゼント付！8 番らーめん秋の新作はもうイタリアン？な「クリーミートマト唐麵」！人気の野菜トマトらーめんも見逃せない

一方で、「もう」に後続する名詞が「～のようだ」、「～同然だ」、「～みたいだ」などの直喩の標識 (山梨 1998: 36-38) を伴うと、文が自然となることが観察される。

(9) a. スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形みたいだった。

b. 「もう採用インフラ同然」8 割強の就活生が「企業 SNS は必要」

<sup>4</sup> <https://forbesjapan.com/articles/detail/80477>, 2025 年 9 月 24 日最終確認

<sup>5</sup> [https://fupo.jp/article/8ban\\_2509/](https://fupo.jp/article/8ban_2509/), 2025 年 9 月 24 日最終確認

c. 8 番らーめん秋の新作はもうイタリアンのような「クリーミートマト唐麵」！

(6) から (8) と (9) の対比から、「もう」は連辞的隠喩と共起すると不自然だが、直喩とは自然に共起することが確認できる。

さらに、(10) のように直喩の標識を伴わない連辞的隠喩の場合でも、「もう」を自然に用いることができる用例も見られる。

(10) a. このロボットはもう人間です。

b. 強風の中でも記念撮影！ 強風？ いや暴風！ もう台風だよ！

以上の観察から、比喩にかかわる「もう」を自然に用いるためには、直喩の標識を用いるか、その他文脈に何らの条件が関与していると考えられる。本稿は、この使用制限は「もう」の意味に基づくものであると主張する。そのため、4 節では「もう」の意味について本稿の規定を述べる。

#### 4. 「もう」の意味

本稿では宮田 (2025) に従い、「もう」の多様な用法を捉えるため、「もう」は被修飾部によって導入される何らかの尺度を参照する副詞であると考えられる。なお、石神 (1978) や池田 (1999) は「もう」が時間的推移を表す点を指摘しているが、宮田の提唱する意味はこの時間にかかわる用法にとどまらない多様な用法を同一の枠組みで捉えることが出来る<sup>6</sup>。具体的には、「もう」は尺度を構成する要素を、被修飾部が表す  $p$  が当てはまる要素の集合と、 $p$  に先立つ段階で  $p$  とは異なる要素 ( $\neg p$ ) の集合に分割する。この時両集合の境界を移行点 ( $d_{\rightarrow}$ ) と呼ぶ<sup>7</sup>。また、尺度と「もう」を除いた文の真偽が評価される点 (評価点:  $d_e$ ) を、 $p$  が当てはまる要素の集合上に位置づける。図 2 に「もう」の尺度構造を簡略化して示す。

<sup>6</sup> 「もう」が尺度を参照すると想定することによって、(ia)のような時間にかかわる用法だけでなく、(ib)のような時間にかかわらない用法を統一的に説明することができるという利点がある。

(i) a. 太郎はもう学校に行った。

b. 昨日のライブ、もう最高！

<sup>7</sup> 本論文では便宜上「移行点」「評価点」としているが、より正確にはこれらは点的なものではなく、時間間隔 (interval) として捉えるべきである。



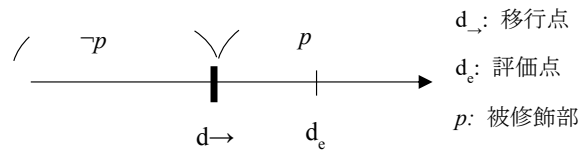


図 2 「もう」の尺度構造

ここで重要なのは、「もう」を用いる場合には2つの段階が必要であり、尺度上において別の段階から当該段階への移行が認められなければならないという点である。(11)に示すように、「もう」は現実世界で常に成り立つ恒常的な状態を表す文とともに用いることができない。これは、「もう」を用いる際に段階の移行が必須であることを示している。

(11) a. \*水はもう 100 度で沸騰する。

b. \*1+1 はもう 2 だ。

(宮田 2025: 34)

## 5. 比喩にかかわる用法における「もう」の分析

本節では、3 節の用例観察及び 4 節で示した「もう」の意味を踏まえ、比喩にかかわる用法における「もう」の使用条件について明らかにする。第一に、連辞的隠喩と「もう」が共起できる (12) (= (10)) の例を考える。これらの用例に共通する特徴は、どちらも文脈によって程度尺度が構築されるという点が挙げられる。

(12) a. このロボットはもう人間です。

b. 強風の中でも記念撮影！強風？いや暴風！もう台風だよ！

例えば、(12a) について関 (2019: 90) は「ロボット」が「人間」に近づいていくプロセスにおいて、話題の対象である「このロボット」は「人間」カテゴリーにカテゴリー化できる基準点を過ぎていると話者が判断し、カテゴリー化している」と述べる。この指摘に従えば、(12a) は時間の経過とともにロボットの「人間度」が増すという時間尺度と程度尺度の両方が関わる文脈だといえる。(12b) についても同様に、話者は風の強さを「強風」「暴風」「台風」という順序に基づいて尺度化し、その中で当該の風の強さが「台風」という段階に至ったことを表現している。以上から、「もう」は文脈から尺度上の移行が読み取れる場合に限って連辞的隠喩と共起できるといえる。

次に、直喩と「もう」が共起する例を考える。「もう」は(13)のように、連辞的隠喩と共起できない場合であっても、「ようだ」などの直喩の標識を用いると自然となる。(14)(= (9b, c))も同様である。

(13) a. ??スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形だった。

b. スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形みたいだった。

(14) a. もう採用インフラ同然。8割強の就活生が「企業 SNS は必要」

b. 8 番らーめん秋の新作はもうイタリアンのような「クリーミートマト唐麵」！

直喩(シミリ)と隠喩(メタファー)の関係については、いくつかの先行研究がある。鍋島(2008, 2011)は両者を同一の実態とみなし、語用論的分析において区別するのではなく統一的に扱うべきであると主張する。一方、加藤(2018)はコーパス調査と作文実験に基づき、隠喩と直喩が異なる文脈で用いられることを示している。

本稿はこれらの語用論的分析の議論を踏まえつつも、意味論的観点から直喩と隠喩を区別する立場を取る。その根拠の一つが(15)、(16)である。隠喩は「かなり」や「より」といった程度副詞と共起しにくい、直喩は共起可能であるという点である。Kennedy & McNally(2005)によれば、これらの *very* や *more* にあたる副詞は「段階的述語(gradable predicate)」だけを修飾する。したがって、直喩の標識である「ようだ」等は、述語に段階性を付与する文法的要素であると考えられる。

(15) a. ??人生はかなり旅だ。

b. 人生はかなり旅のようだ。

(16) a. ??人生はより旅だ。

b. 人生はより旅のようだ。

以上を踏まえると、「もう」が連辞的隠喩と共起できないのは、連辞的隠喩が段階性を持たないためである。4 節で述べたように、「もう」は尺度構造をもつ句を修飾し、段階の移行を意味する副詞である。そのため、段階性を欠く述語とは「もう」は共起できない。この点は3 節の(11)に示した事例とも一致する。一方で、直喩の述語は段階性を持つため、「もう」と共起可能である。そして、「A はもう B のようだ」という形式は、「A のある側面が [B のようだ] といえる領域に至っている」ことを表す。

一方で、(17) に示すように「もはや」は連辞的隠喩とも直喩とも共起可能である。

(17) a. スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。

b. スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形のようにだった。

「もはや」が段階性のない隠喩と共起できるという事実は、関 (2019) の提示する「カテゴリー間の移行」という説明だけでは十分に説明できない。関の言う「移行」は、鍋島 (2011) などが言及する比喩におけるカテゴリー間の写像関係を踏襲していると考えられるが、写像関係はカテゴリー間の対応を示すものであって、カテゴリー間の移行を示すものではない。そのため、「もはや」と隠喩が共起する例を、「カテゴリー間の移行」という記述で捉えることは適切ではない。

むしろ「もはや」の意味の第一義は「その状態にあることを強調する」点にあり、「移行」が見られる場合も、それは「もはや」の意味的制約ではなく文脈に依存する解釈にすぎないとする。比喩にかかわる用法に限らず、「もはや」には「段階の移行」を前提としない例が存在する。その一つが (18) である。(18a) ではワンピースの色が緑から黄色へと漸次的に移行したと解釈するのは不自然であり、そのため「もう」を用いることはできない。しかしながら、「もはや」は使用可能であり、ここではワンピースの色が「(緑ではなく) 黄色である」ことを強調する機能を果たしている。したがって、「もはや」の使用条件として「段階の移行」が必須とはいえない。

(18) a. 緑のワンピースをネットで注文したが、届いて見たらデザインも違うし、色ももはや黄色だった。

b. ??緑のワンピースをネットで注文したが、届いて見たらデザインも違うし、色ももう黄色だった。

さらに、時間にかかわる用法では、この「強調」と文脈的に生じる「移行」とが重なり合うことで、先行研究 (金 2006、박 2018 など) が指摘してきた「現状不可変性」というニュアンスが導かれると考えられる。ただし、本稿の立場を十分に裏づけるには、より広範なデータと精緻な分析が必要である。したがって、時間にかかわる用法を含めた「もはや」の体系的な意味分析を今後の課題とする。

## 6. おわりに

本稿では、「もう」の比喻にかかわる用法を中心に検討し、その意味を精緻化することを試みた。その結果、直喩と隠喩を区別する観点として、述語の段階性の有無を示したとともに、「もう」は常に「段階の移行」を前提とするという宮田（2025）の主張を裏づけた。また、「もはや」を一貫して「カテゴリー間の移行」として捉えてきた関（2019）の分析を再検討した。その結果、「もはや」の使用には必ずしも段階の移行が必須ではなく、むしろ「強調」という側面に意味の核を求める立場を提示した。

## 参考文献

- 池田英喜(1999)「「もう」と「まだ」:状態の移行を前提とする2つの副詞」『阪大日本語研究』, 11, 19-35.
- 石神照雄(1978)「時間に関する<程度性副詞>「マダ」と「モウ」—<副成分>設定の一試論—」『国語学研究』, 18, 26-38.
- 加藤祥(2018)「隠喩と直喩の違いは何か:用例に見る隠喩と直喩の使い分けから」,『認知言語学研究』, 3, 1-22.
- 金英兒(2006)「時の副詞の考察:「すでに」・「もう」・「もはや」について」,『日本文化学報』, 28, 77-95.
- 小出慶一(2017)「「もう」はどのようにフィラーになったか:フィラー化の経路とフィラーの機能」,『さいたま言語研究』, 1, 1-11.
- 鍋島弘治朗(2008)「シミリはメタファーか?:語用論的分析」,日本語語用論学会事務局編『日本語語用論学会発表論文集 第4号』, 63-70.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』, くろしお出版.
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版.
- 宮田瑞穂(2025)『日本語の副詞「もう」および「まだ」の研究:時間にかかわる用法から程度にかかわる用法まで』, 博士課程論文, 東京大学(未公刊).
- 関ソラ(2019)『現代日本語におけるカテゴリーの周辺例を明示する表現に関する考察』, 博士課程論文, 名古屋大学.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 山梨正明(1988)『比喻と理解』, 東京大学出版会.
- 박종승(2018)「類義副詞의 意味分析:もう.もはや.すでに.とつくに를 중심으로」,『日本語文学』, 55, 71-93.
- Kennedy, C., & McNally, L. (2005). Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language*, 81(2), 345-381.

# 石川県能登地方七尾方言のゼロ格について

米村雪乃（東京外国語大学大学院生）

## 1. はじめに

本発表は、石川県能登地方七尾市（図 1）で話されている方言において、格助詞を伴わず文中であらわれる名詞項（以下、「ゼロ格」）についての予察的な発表である。七尾市で話されている方言にも下位分類が存在するが、現段階では七尾市御襖地区で話されている方言を「七尾方言」と呼ぶ。



図 1 七尾市の位置（七尾市ホームページより）

七尾方言は共通語と同様格助詞による格標示を行うこともあるが、主語・目的語は助詞を伴わずに名詞のみで実現されることが多い。本発表では七尾方言の助詞を伴わない名詞項に着目し、1) 自動詞主語 (S)・他動詞主語 (A)・他動詞目的語 (P) の標示のされ方とその区別について（格配列）と、2) 共通語では二で標示される項における七尾方言の二と  $\phi$  の現れ方について述べる。これらを踏まえ、主語、目的語、二格標示され得る項の 3 つの項が  $\phi$  で現れうるが、それぞれの項がどの機能を果たすかが予測可能であることから、主格・対格・与格のほかにゼロ格を立てることを提案する。

## 2. 先行研究

七尾方言の格体系を詳細に述べた論文は管見のかぎり見つからないが、近隣方言である富山市方言の格に関する記述は小西（2016, 2022）に詳しい。小西（2016）では、富山市方言の格として主格の形式に「 $\phi$ ・ガ・ア・ナ」、対格の形式に「 $\phi$ ・オ」、与格の形式に「ニ・ $\phi$ 」を立てこれら 3 つの格すべてに「 $\phi$ 」を挙げており、機能面に着目した分類がなされているといえる。富山市方言の格成分のゼロ標示について述べた小西（2022 : 95）では、富山市方言の格配列の解釈の 1 案として、「対格型 (S・A が同一、O が別)。主格には  $\phi$ 、ガ、対格には  $\phi$ ・オの変異」があるという解釈のほかに、「中立型 (S・A・O がすべて  $\phi$ ) と対格型 (S・A がガ、O がオ) が併存」するという「中立格」の解釈を提示している。

本発表では、後者の「中立格」（ゼロ格）の解釈を七尾方言に適用する<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 角田（2009 : 179）でも、「格は形に関することであることを強調しておく。（中略）又、ゼロ格も格の一種である」と述べられている。

### 3. 調査の概要

調査は、主に国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」のために作成された格助詞の調査票<sup>2</sup>を用いた（以下、例文の末尾に「格(ID)」として示している）。このほかに、「基本例文 50 要地方言訳（以下、50 例文）の調査」で収集した例文も参考にしている（以下、例文の末尾に「50 例文(例文番号)」として示している）。50 例文は方言文法研究会の提案する「日本語の基本的な構文、文法形式（助詞・助動詞類）を含む 50 個の共通例文を要地方言に訳出し、概略的な体系を付す」（方言文法研究会 2025：75）調査である。他に発表者が作成した調査票も使用した（例文の末尾に記号のないもの）。以下、断りのない限り、グロス発表者が付した。今回は、以下 3 人（うち 1 人は参考）の調査協力者の方に対して共通語の例文を提示し方言訳してもらった調査を行った。調査は 2025 年 2 月・5 月・6 月・9 月に行っている。

表 1 調査協力者の情報

イニシャル	現在の居住地	生年	年齢	性別
FM	七尾市松本町	1947 年	70 代	男性
KK	七尾市魚町	1949 年	70 代	女性
YM（参考）	金沢市弥生（18 歳まで七尾市、その後金沢市）	1944 年	80 代	女性

### 4. 七尾方言の格体系

#### 4.1. 概要

七尾方言は、共通語では有形標示（ガ、オ、またはニ）が自然な環境において名詞が助詞を伴わずに用いられる傾向にある。表 2 は共通語での格助詞の分布との対応を示したものである。

表 2 共通語と七尾方言の格助詞の対応

共通語での格助詞	七尾方言での格助詞
ガ	ガ・ア・φ
オ	(オ)・φ
ニ	ニ・φ

#### 4.2. 七尾方言の S、A、P の格標示

##### 4.2.1. 七尾方言における S の標示

七尾方言で S（自動詞の主語）は主格助詞ガ<sup>3</sup>またはア、もしくはφで示される。ガはやや

<sup>2</sup> 「下地理則の研究室」<https://www.mshimoji.com/blank-13> にて公開されている（最終閲覧日 2025.9.16）。

<sup>3</sup> 主格助詞ガは [ŋa] で実現する。

共通語的な表現で、一般的にはアが接続する。近隣方言である富山市方言の格について記述した先行研究である小西（2016：103）では、「アは単独で音節を成さず、前接名詞句の末尾音により」実現が異なり、/i/ に後接する場合は前接拍と融合して /Cja/、/e, u, o/ に後接する場合は前接拍と1音節を成して /a/ となる」と述べられているが、七尾方言においても同様である<sup>4</sup>。このほかにアが /N/ に後接する場合に「ナ」（アの異形態）が用いられることがある<sup>5</sup>。

#### 【アが接続する例】

- (1)    { hanakoa / hanako }    mado            aketasakai            musu            haittekita  
          hanako = { a / φ }        mado            ake-ta=sakai            musu            hair-te=ki-ta  
          花子={ NOM / φ }        窓            開ける-PST=CSL        虫            入る-SEQ=来る-PST  
          「花子が窓を開けたから虫が入ってきた」 （50 例文(10)一部改変）

#### 【φの例】

- (2)    kabeni                            { tokee / tokeea }            kakattoruyo  
          kabe=ni                        tokee = { φ / a }            kakar-tor-u=yo  
          壁=DAT                        時計= { φ / NOM }            かかる-PROG-NPST=SFP  
          「壁に時計がかかっているよ」 （格(2)一部改変）

φの場合、Sは動詞に隣接している必要はない。

- (3)    { tokee / tokeea }<sup>6</sup>        tyanto            kabeni            kakattoruyo  
          tokee = { φ / a }            tyanto            kabe=ni            kakar-tor-u=yo  
          時計= { φ / NOM }        ちゃんと        壁=DAT            かかる-PROG-NPST=SFP  
          「時計がちゃんと壁にかかっているよ」 （格(2)一部改変）

### 4.2.2. 七尾方言におけるAの標示

七尾方言において、A（他動詞文の主語）は、Sと同様、格助詞ガ・ア、もしくはφで示される。S同様、ガで標示される際は共通語的な表現となる。

- (4)    { hanako / hanakoa }        { gohaN / ?gohaNo }        tabeta  
          hanako = { φ / a }        gohaN = { φ / ?o }        taber-ta  
          花子 = { φ / NOM }        ご飯 = { φ / ? ACC }        食べる-PST  
          「花子のご飯を食べた」

### 4.2.3. 七尾方言におけるPの標示

七尾方言においてP（他動詞文の目的語）は、格助詞のオかφで示される。原則としてφで示され、有形標示オは共通語的な会話以外ではほとんど聞かれず、容認度も低い。

<sup>4</sup> 前接拍と融合を起こしているためこれが接語であるかの検証が必要であるが、今後の課題とする。

<sup>5</sup> 富山方言では /N/ に後接しない環境でも稀に「ナ」が用いられる場合がある（アの異形態ナが析出されたもの）が、七尾方言では用いられない。

<sup>6</sup> 七尾方言では主格・主題ともにφとアを用いるため、形式上区別がなされない。そのため、この場合の tokee { φ/a } は、主題主語である可能性がある。今回は主題に関する考察が十分に行えなかったため、以下の例文でも同様の検討を要する場合がある。

- (5) { *hanako / hanakoa* } { *inu / ?inuo* } *kootoru*  
 hanako = {  $\phi$  / a } inu = {  $\phi$  / ?o } kaw-tor-u  
 花子 = {  $\phi$  / NOM } 犬 = {  $\phi$  / ? ACC } 飼う -PROG-NPST  
 「花子が犬を飼っている」

#### 4.2.4. A と P が格助詞を伴わない場合

先述のとおり、七尾方言では A も P も格助詞を伴わないことがあるため、A と P がどのように区別されているのかが問題となる。調査の結果、A と P の区別には以下のような条件が影響することが判明した。

##### a. 語順

A は P に先行する。

- (6) { *kaatyaN / kaatyaNna* } *imooto* *tukaini* *yatta*  
 kaatyaN = {  $\phi$  / a } imooto tukai=ni yar-ta  
 母さん = {  $\phi$  / NOM } 妹 お使い = DAT やる -PST  
 「母さんが妹をお使いにやった」 (50 例文(17)一部改変)

# imooto kaatyaN tukaini yatta (妹が A、母さんが P と解釈される)

##### b. 有生性

一般的に、有生性の高い項が A となる。

- (7) { *hanako / hanakoa* } { *gohaN / ?gohaNo* } *tabeta*  
 hanako = {  $\phi$  / a } gohaN = {  $\phi$  / ?o } tabe-ta  
 花子 = {  $\phi$  / NOM } ご飯 = {  $\phi$  / ?ACC } 食べる -PST  
 「花子のご飯を食べた」

この場合、目的語が無生物の文であれば語順を変えることも可能である。

- (8) { *gohaN / ?gohaNo* } { *hanako / hanakoa* } *tabeta*  
 gohaN = {  $\phi$  / ?o } hanako = {  $\phi$  / a } tabe-ta  
 ご飯 = {  $\phi$  / ?ACC } 花子 = {  $\phi$  / NOM } 食べる -PST  
 「ご飯を花子が食べた」

##### c. 百科事典的知識や文脈

聞き手にとっていずれが A でいずれが P かが明確である場合には、ともにゼロ格で標示することが可能になる。

- (9) <sup>7</sup> { *hanako / hanakoa* } { *inu / ?inuo* } *kattoru*  
 hanako = {  $\phi$  / a } inu = {  $\phi$  / ?o } kaw-tor-u  
 花子 = {  $\phi$  / NOM } 犬 = {  $\phi$  / ?ACC } 飼う -PROG-NPST  
 「花子が犬を飼っている」

<sup>7</sup> ただし、話者からはこの文は「\*inu hanako kattoru」とは言いにくい（犬が A、花子が P であるのかと解釈される）というコメントをもらった。これは b. の有生性の条件が関与しているためだと考えられる。



有生性、百科事典的知識・文脈いずれを用いても A か P かの判断が難しい場合には、a.の語順という条件が優先されるが、有標の形式を用いる場合は、一般に A の方を有形標示する。

- (10) { ?inu / inua }            { neko / ?nekoo }            okkakeru  
       inu= { ? φ / a }        neko= { φ / ?o }            okkake-ru  
       犬= { ? φ / NOM }    猫= { φ / ?ACC }            追いかける-NPST  
       「犬が猫を追いかける」

ただし、A は P に先行するのが一般的であるため、語順を入れ替えた場合格助詞を用いたとしても文の許容度は下がる。

- (11) ?inu                      { neko / nekoa }            okkakeru  
       inu= φ                  neko= { φ / a }            okkake-ru  
       犬= φ                  猫= { φ / NOM }            追いかける-NPST  
       ? 「犬を猫が追いかける」

#### 4.2.5. S、A、P の格標示に関するまとめ

七尾方言では、S・A の標示にガ・ア・φ を用いることができるが、ガは共通語的な発話に多く、一般的にはアかφ が好まれる。P の標示には、オ・φ を用いることができるが、オはほとんど用いられず、基本的にはφ で標示する。

A と P がそれぞれφ で標示される場合は、a.語順、b.有生性、c.百科事典的知識・文脈が考慮され判断される。解釈があいまいになる場合は一般的に A の方をアで有形標示し、P には変わらずφ が用いられる傾向にある。

すなわち、A と P における格助詞を用いた有形標示とφ の組み合わせは、論理的には4通り考えられるが、以下の形式が好まれることになる。

表3 七尾方言の A と P の格標示

容認度	格配列	A	P	備考
○	中立型	φ	φ	両者の区別が明瞭な場合
○	対格型 (有標主格)	ア	φ	両者の区別が困難な場合
?	対格型 (有標対格)	φ	オ	
△	対格型 (有標主格・対格)	ア	オ	共通語的な発話においてのみ○

上記を踏まえ本発表では、七尾方言の格配列は、典型的には「S、A、P がφ の中立型」と「S、A がア (ガ)、P がφ の対格型」であるとみる<sup>8</sup>。A と P がどちらもφ で実現しても、4.2.4 で見たような条件により解釈が揺れることが無いことを踏まえると、格が形式の問題であるという前提に立ち、φ をゼロ格として認め、記述することが可能であると考ええる。

<sup>8</sup> 小西 (2022) では、富山市方言の格配列は「S、A、P がφ の中立型」と「S、A がガ、P がオの対格型」であると述べているが、これは情報構造まで含めた考察となっている。本発表では七尾方言の情報構造に関する検討が不十分であるため、富山市方言との比較は行えない。これは今後の課題とする。

#### 4.3. 共通語における与格相当の表現

ここからは、共通語における与格相当の表現について述べる。

七尾方言において、相手、時、受身文の動作主、使役対象等を示す際には与格助詞ニを用いる。「時」の用法を除いて、一般にニに先行する名詞は有生性の高いものになる。これは、有生性の高い名詞ほど主語や目的語として解釈されやすいため、それ以外の項を有標で示すことで主語や目的語でないことを明示していると説明できる。

〈相手〉

- (12) *kono hoN { tarooni / \*taroo } yakka*  
*kono hoN taroo={ ni / \*φ } yar-u=ka*  
 この 本 太郎={ DAT / \*φ } やる-NPST=SFP  
 「この本は太郎にやるか」 (50 例文(7)一部改変)

〈時〉

- (13) *oraN { aidani / \*aida } nusuttoni hairareta*  
*or-aN aida={ ni / \*φ } nusutto=ni hair-are-ta*  
 いる-NEG.NPST 間={ DAT / \*φ } 泥棒=DAT 入る-PASS-PST  
 「いない間に泥棒に入られた」 (50 例文(19)一部改変)

共通語で格助詞ニを伴う用法のうち、七尾方言においては、時間・相手・受動文の動作主・使役文の動作主（グループ A）の用法ではニを必須とし、着点・存在場所（グループ B）はニに加え条件付きでφが許容され、変化結果・目的（グループ C）ではニとφの両方が現れる。形式面でいえば、共通語では与格としてまとめられるグループ A～C は七尾方言においては、φと与格という異なる格標示を行うといえる。

表 4 共通語におけるニの用法と七尾方言での格標示の対応

グループ	用法	共通語	七尾方言
A	時間 相手 受動文の動作主 使役対象	ニ	ニ
B	着点 存在場所	ニ	{ニ / φ}※
C	変化結果 目的	ニ	{φ / ニ}

※φは条件あり

以下は、B グループの用法におけるφの例である。B グループにおいては、格助詞ニが付与されることも多い。

〈着点〉

- (14) taroo                      kiNno                      { ie / ieni }                      modotta  
          taroo                      kiNno                      ie = {  $\phi$  / ni }                      modor-ta  
          太郎                      昨日                      家 = {  $\phi$  / DAT }                      戻る-PST

「太郎は昨日家に戻った」(格(10))

〈存在場所〉

- (15) taroo                      zutto                      { tookyoo / tookyooni }                      oru  
          taroo                      zutto                      tookyoo = {  $\phi$  / ni }                      or-u  
          太郎                      ずっと                      東京 = {  $\phi$  / DAT }                      いる-NPST

「太郎はずっと東京にいる」(格(6))

以下は、C グループの例である。C グループは、格助詞ニを付与することも可能だが、通常は $\phi$ で示す。

〈変化結果〉

- (16) yoru                      { zyuuzi / zyuuzini }                      nattara                      hayo                      nemassi  
          yoru                      zyuuzi = {  $\phi$  / ni }                      nar-tara                      hayo                      ne-massi  
          夜                      10 時 = {  $\phi$  / DAT }                      なる-COND                      早く                      寝る-IMP

「夜は 10 時になったら早く寝なさい」(50 例文(5)一部改変)

〈目的〉<sup>9</sup>

- (17) tarooto                      ootooto                      { asobi / asobini }                      itta  
          taroo=to                      ootooto                      asobi = {  $\phi$  / ni }                      ik-ta  
          太郎=ASC                      弟                      遊び = {  $\phi$  / DAT }                      行く-PST

「太郎と弟が遊びに行った」(格 (41))

## 5. まとめと今後の課題

本発表では、七尾方言の格体系を概観し、ゼロ格( $\phi$ )を認める記述が可能かどうかを検証した。本発表で挙げた七尾方言における格体系をまとめると以下のようになる。

表 5 七尾方言における格

七尾方言における格	機能
主格 (ア・ガ)	自動詞文の主語／他動詞文の主語
対格 (オ)	他動詞文の目的語／経路
与格 (ニ)	時間／相手／受動文の動作主／使役文の対象／着点／存在場所
ゼロ格 ( $\phi$ )	自動詞文の主語／他動詞文の主語／他動詞文の目的語／経路／変化結果／目的／着点／存在場所

<sup>9</sup> 小西 (2016 : 107) で富山市方言では〈目的〉を表す名詞句は $\phi$ をとれる一方で、動詞 -(i) 形は不可となっているが、七尾方言では可能である。富山市方言同様、名詞もゼロ格を許容する (例：「仕事行く」)。

S、A、P の分布はここまでのところ条件立てて説明することが可能であることから、ゼロ格を立てる記述が可能であると考え。ただしいわゆる与格相当の名詞項についての検証は不十分であることから、今後の課題としては語順、有生性、百科事典的知識・文脈に加えどのような要素がゼロ格の機能を決めうるのか、より詳細な調査が求められる。これは、多くの言語で格標示が必須とされている中で、七尾方言に関してはゼロ格で標示ができる理由を明らかにすることにつながる<sup>10</sup>。

加えて、より複雑な文における格標示が課題となる。項の多い文や複文はもちろん、小西 (2022) が富山市方言で指摘した二重対格構文についても検討が必要である。二重対格構文は、七尾方言においても存在する。

- (18) *kuruma*      *moN*      *toosaNni*      *doddake*      *zikaN*      *kakattoraN*  
kuruma= $\phi$     moN= $\phi$     toos-u=ga=ni    *doddake*    *zikaN*    *kakar-tor-u=gaN*  
 車= $\phi$           門= $\phi$           通す-NPST=NLZ=DAT    どれだけ    時間    かかる-PROG-NPST=Q  
 「??車を門を通すのに、どれだけ時間がかかっているの。」(小西 2016 より改変)

小西 (2022) では、富山市方言においては「車」と「門」を対格とみることも、ゼロ格 (小西 2022 でいう中立格) の連続とみることも可能であると指摘しているが、七尾方言でいずれの解釈が適当かについては検討の余地がある。七尾方言における格体系を整理するにあたって、ゼロ格を立てることの意義をさらに明確にしていく必要がある。

#### 【略号リスト】

ACC: accusative (対格) / ASC: associative (共格) / COND: conditional (条件) / CSL: causal (理由) / DAT: dative (与格) / IMP: imperative (命令) / NLZ: nominalizer (名詞化) / NOM: nominative (主格) / NPST: non-past (非過去) / PASS: passive (受動) / PROG: progressive (継続相) / PST: past (過去) / Q: question (疑問) / SEQ: sequential (中止形) / SFP: sentence final particle (終助詞) / -接辞境界 / =接語境界

#### 【参考文献】

- 小西いずみ (2016) 『富山県方言の文法』 東京: ひつじ書房。  
 ————— (2022) 「富山市方言における格成分のゼロ標示 二重対格相当構文が可能になることに着目して」『日本語の格表現』 91-108. 東京: くろしお出版。  
 竹内史郎・松丸真大 (2022) 「本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について—京都市方言と宮城県登米町方言の分析—」『日本語の格表現』 65-90. 東京: くろしお出版。  
 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版』 東京: くろしお出版。  
 七尾市ホームページ (2013) 「七尾市の概要」  
<https://www.city.nanao.lg.jp/koho/aramashi/profile/gaiyo.html> [2025 年 5 月 24 日アクセス].  
 方言文法研究会 (2025) 「凡例」『全国方言文法辞典資料集 (9) 活用体系 (7)』 75-82.

<sup>10</sup> 竹内・松丸 (2022) では、京都市方言における格の識別に関する記述がなされている。京都市方言では ASP とともにゼロ格で標示されることが多いが、語順・有生性・格標示のほか言語論的に文脈から判断しているという説が提案されており、七尾方言でも同様の説をとれる可能性が高い。

# 日本語の使役形式の地域差—-(s)as, -(s)ase を中心に—

大槻知世（静岡大学）

## 1 はじめに

現代日本語の使役には、五段型「-さす」-(s)as（例：「見さす」mi-sas-u、「書かす」kak-as-u）、下一段型「-させる」-(s)ase（「見させる」mi-sase-ru、「書かせる」kak-ase-ru）の二つの主要な形式がある<sup>1</sup>。(1)–(3)のような例は、自然談話や、口語体テキストなどで観察される。

- (1) a. ノート見さして。  
b. ノート見させて。
- (2) a. 息を合わせて演奏する。  
b. 息を合わせて演奏する。
- (3) a. 民謡を歌わしたら右に出る者はいない。  
b. 民謡を歌わせたら右に出る者はいない。

これらはテ形や過去形における音声的なゆれといった表層的な現象に留まるものではない。いずれも(a)は五段活用型、(b)は下一段活用型の異なる活用体系をもち、異なる分布と異なる意味をもつ個別の形態素である。

日本語の使役は様々な観点から研究されてきたが、主要な形式である五段型「-さす」-(s)as と下一段型「-させる」-(s)ase の意味的な差異については、十分に記述されてきたとは言い難い。

高見（2011）は、共通語（標準語）において、両者には使役主の被使役事象への関与の強弱に応じて使い分けが存在すると指摘している。本発表ではこれを出発点として、近畿方言における「さす」-(s)as と「させる」-(s)ase の用法を取り上げる。

結論として、近畿では-(s)as が無標と考えられ、東日本の-(s)ase 選好と対照的である。

さらに本発表では、静岡県中部に見られる「-かす」-(r, s)akas を、使役事象の中の他動性を前景化した使役形式として位置づける。

これらを通じて、日本諸語の使役体系が静的な分類ではなく、地域差と歴史的変化、個別言語ごとの事象構造の捉え方などの相互作用により動的に形成されていることを示す。

## 2 先行研究

日本語の使役文は、様々な観点から論じられてきた。「させる」による使役文を中心に、山田（1908）は使役主体（使役主）と動作主体（被使役者）の関係、使役における関与のあり方、目的などに基づいて分類し、青木（1977）は強制・許可・放任といった分類を提示し

<sup>1</sup> 動詞が母音語幹の場合-sas や-sase が接続し、子音語幹には子音連続回避のために始めの s が脱落する。

(ア) tabe-sas-u 「食べさす」、tabe-sase-ru 「食べさせる」 ※末尾の-u, -ru は非過去接辞

(イ) nom-~~s~~as-u → mom-as-u 「飲ます」、nom-~~s~~ase-ru → nom-ase-ru 「飲ませる」

た。早津（2016）は山田の説をうけつつ、新たな二つの使役文の分類を提示し、現代日本語の使役の総合的な記述を行なっている。

一方、言語学の立場からは、「使役」は英語の causation に対応し、原因事象と結果事象の因果連鎖からなる事象構造をもつ用語として定義されている（Shibatani1976: 1, 西村 1998: 119–120, 西村 2015: 1021）。こうした抽象度の高い定義を採用すると、寺村（1982）のように、「させる」などによる使役構文と、「壊す」「開ける」のような有対他動詞の他動詞文とともに使役構文と見ることも可能になる。図 1– 図 2 は長谷川・田中（2024: 420 (4)–(5)）。

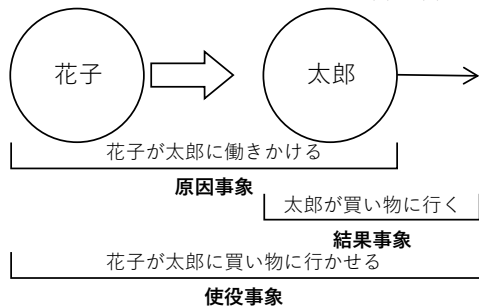
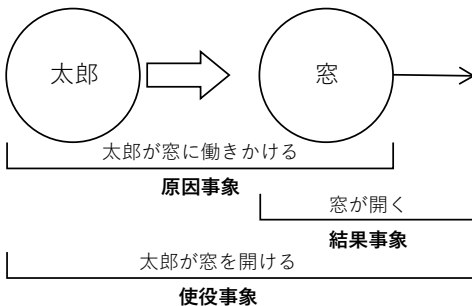


図 1 「開ける」の事象構造

図 2 「させる」使役構文の事象構造

Shibatani(1976)は他動詞と「させる」の部分的な類似性に着目し、前者を語彙的使役 (lexical causative)、後者を生産的使役 (productive causative) と呼ぶ。語彙的使役と生産的使役は、上図の通り事象構造において共通している。

これらの研究は、日本語の使役体系の全体像や構造的性質の解明に焦点があり、使役を担う主要な形式である「-さす」-(s)as と「-させる」-(s)ase の意味的な差異はあまり記述されてこなかった。松下（1930）以来、「-させる」が標準的であるのに対して、「-さす」は西日本方言に由来し、口語的変種に過ぎないといった説明に留まっていた。

これに対して、高見（2011）は、使役主の結果事象（被使役事象）への関わりや被使役者への働きかけが強ければ「-さす」が用いられやすく、それが弱ければ「-させる」が用いられやすいという傾向を指摘している。次例は高見（2011: 158 (80)–(81)）。

- (4) a. ?監督は、最初の台本どおりに、俳優をその場面で転ばすことにした。  
b. 監督は最初の台本どおりに、俳優をその場面で転ばせることにした。
- (5) a. ?昔のように、子供たちにこんな広いれんげ畑で自由に寝転がらしてやりたい。  
b. 昔のように、子供たちにこんな広いれんげ畑で自由に寝転がらせてやりたい。

(4a)では監督の意向や台本に従いつつ、俳優は自らの意志で転ぶのであり、その場合、被使役主が自らの意志で使役事象を起こす(4b)のほうが、適格性が高い。(5b)も、話者の許可を得て子供たちは自分の意志で寝転んでいる。

さらに、無対自動詞の場合、「-さす」は使役主が自らの意志や力で当該事象を引き起こすことを表し、「-させる」は被使役主が自らの意志や力で当該事象を引き起こすことを表す。次例は高見（2011: 161 (87)）。

(6) a. やんちゃ坊主の太郎が、また「ゆきちゃんを／母親を」泣かした。

b. やんちゃ坊主の太郎が、また「ゆきちゃんを／母親を」泣かせた。

「さす」使役の(6a)では、太郎が相手に直接的に働きかけて、相手が泣いたという意味合いが強く、「させる」使役の(6b)では、太郎のいたずらが遠因となって相手が悲しくなり泣いたという間接的な作用の意味合いが強いと分析されている。

### 3 本発表における使役の定義と理論的枠組み

本発表では、Shibatani (1976)、西村 (1998) にならい、使役を原因事象と結果事象の因果連鎖からなる事象構造をもつものとする見方を採る。

さらに、使役構文<sup>2</sup>をプロトタイプ・カテゴリーとして捉える。プロトタイプ観とは、中心的な事例を基準として、そのプロトタイプとの類似度に応じて、より中心的なメンバーやより周辺的なメンバーというように連続的に位置づけて分類するカテゴリー観である。この観点からは、たとえば形態的には使役でありながら意味的には受身として解釈されるような事例も、例外ではなくプロトタイプからの距離が大きい周辺的な使役構文として包摂的に理解することができる。

現代日本語共通語（標準語）の研究では、形態的に無標である語彙的使役が使役構文のプロトタイプとされる。これは、原因事象と結果事象の結びつきが緊密であるために単一の語彙項目として実現していると考えられるためである（西村・長谷川 2016: 298–299）。

本発表で扱う日本語諸方言も、共通語と同じく膠着語であり、文法的意味を接辞で表すことが一般的である。また、動詞の自他対応や使役接辞の形態や機能にも多くの共通性が見られ、意味的な基盤を共有していると考えられる。したがって、方言においても、語彙的使役構文を使役構文のプロトタイプに据えることは妥当であると言える。

以上の立場から、高見 (2011) を出発点として、以下では近畿方言における「-さす」「-させる」の意味的対立を検討する。

### 4 近畿方言の「-さす／-させる」

近畿方言においても、「-さす」（五段）と「-させる」（下一段）は、形態的に活用が異なるだけでなく、そうした活用の相違が意味的対立として定着しているものがある。たとえば「合わせる（下一段）」と「合わす（五段）」では、「音楽に合わせて歌う」と「顔を合わさないよう気をつける」のように、意味が異なる。依頼・授受に関わる表現でも、関西では下一段「見せて」と五段「見して<sup>3</sup>」では、英語の show me と let me look の差と並行的な違いがあり、五段の「さす」使役のほうが許容のニュアンスが前景化する場合がある。しかしそもそも、関西では、「さす」使役が頻度的に無標である可能性がある。

<sup>2</sup> ここでは、原因事象と結果事象が語彙的にせよ分析的にせよ述語であらわされるものを指す。

<sup>3</sup> 「見して」については、語基-(s)as に直接たどり着くことができない。接辞による派生を経て連用形を生じたものではなく、おそらく s 語幹動詞の連用形からの類推で生じた活用形であると思われる。

- (7) あんた一人くらい食わしたるで。  
 (8) ボール投げ過ぎて肩いわした。  
 (9) 不渡り出して会社こかしてもうた。  
 (10) 学生にあんまり金を払わすわけにもいかんから、安い店にしようや。  
 (11) 学生を廊下に立たすなんて、厳しい先生やな。

直接的な使役(7)–(9)だけでなく、間接的な使役(10)(11)においても、関西方言話者は「さす」使役を選好する。すなわち、使役主が結果事象に直接的に関与する場合でも、間接的に関与する場合でも、いずれも「-さす」が用いられやすく、使役主の関与の度合いによる選択が行われていないと考えられる。これらは、京阪で「-さす」が使役接辞としては無標であり広く機能することを示している。

『方言文法全国地図』(GAJ) 第3集第118–121図では、「開けさせる」「書かせる」「来させる」「させる」のいずれにおいても、近畿地方では「-させる」と「-さす」系の複数回答が多く、特に第118図では地理的には「-さす」系の分布が優勢に見える。また、三重県、奈良県を中心に、-rasu や-jasu といった形式も分布している。

国立国語研究所『日本語諸方言コーパス』(COJADS)<sup>4</sup>で、検索条件を【語彙素「させる」】と指定し、検索対象を近畿(三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山)に限定して短単位検索を行なったところ、22件の用例を得た。純粋に使役と思われる用例21件を見ると、語彙素は「させる」で登録されているが、実際の方言形は19件が「サス」系<sup>5</sup>であり、方言形も「サセル」なのは1件のみである。共通語に基づく分析と方言形の間に乖離が見られる。これは、近畿方言の「-さす」の生産性と頻度における無標性を裏付ける証拠と言える。

- (12) ムギ ドント イレテ ムギメシ クワシテ。(甲賀郡甲賀町 1897 年生男性)  
 麦[を] うんと 入れて 麦飯[を] 食べさせて  
 「麦をうんと入れて、麦飯を食べさせて。」
- (13) イヤデモ ギムキョーイク ウ ウ ウ ウケサシトルノカテ(京都市 1917 年生男性)  
 嫌でも 義務教育 フィラー 受けさせているのかって  
 「嫌でも義務教育受けさせているのかって」
- (14) ソリヤ ドコカテ ウチラカテ タベサシテクレン。(河内長野市 1892 年生女性)  
 それは どこでも 私たちでも 食べさせてくれない  
 「それはどこでも私たちも食べさせてくれない。」
- (15) ホイテ ホイデ タベサセテ モータンデ ソイワ ヨー オボエトルワ。  
 そして それで 食べさせて もらったんだそれは よく 覚えているよ  
 (和歌山県田辺市 1915 年生男性)
- 「そしてそれで食べさせてもらったんだよ それはよく覚えているよ。」

例(12)–(15)の下線は発表者による。ちなみに、【語彙素「さす」】は2件あり、いずれも方

<sup>4</sup> 中納言 2.7.2 データバージョン 2025.03 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

<sup>5</sup> 「サス」17件、「サス」と音形の共通部分が大い「ラス」「ヤス」計2件で、合計19件である。



言形は「サス」だった。

以上のように、近畿では五段型「-さす」が使役接辞として無標の形式であり、下一段型「-させる」は周遍的である。一方、東日本では「-させる」が規範的形式として安定しているが、「-さす」も定着しつつあり、主に直接使役を担っている。

方言によって無標の形式が異なるものの、いずれの形式も、原因事象と結果事象からなる使役事象の全体的な構造を活性化しているという点で共通している。

次節では、これとは対照的に、使役事象の一部部分、とくに他動性や結果事象、を前景化している使役形式「-かす」を取り上げ、その意味的な展開を検討する。

## 5 「-かす」使役の検討

### 5.1 静岡県中部の「-かす」使役

静岡県中部では使役形式「-かす」-(r, s)akas が見られる。GAJ 第3集には、県中部に akakasu「開けさせる」(第118図)、kakakasu「書かせる」(第119図)、kosakasu「来させる」(第120図)、sasakasu「させる」(第121図)の回答が確認できる。図によっては、こうした「-かす」は複数回答のうちの一つの場合もあり、第一回答であるかは不明である。

また、同じく静岡県中部の静岡市小鹿方言の文法を記述した中條(1983:164)には、使役として「行カカス」「食ベラカス」が報告され、主に高齢層が用いること、使役受身「行カセラレル」「食ベラカ(カ)セラレル」といった形式も見られることが記されている。

### 5.2 古語の「-かす」

古語にも「-かす」は見られ、「他動詞をつくり、他動的意味を強調する接尾辞」とされる(小田 2015: 48)。例(16)–(20)の現代語訳は発表者による。

- (16) 年ごろ知らでまどはかしつるも、わが罪にあらず。(うつほ・俊蔭)

「長年知らないで悩ませてしまったのも、私のせいではない」

- (17) 書き紛らかしたるを取り出でたとて(定頼集・詞書)

「それと分からないように書いていたのを取り出したといって」

- (18) 「[宰相中将ニ] 追い付け」とて走らかす。(建礼門院右京大夫集・詞書)

「『追い付け』といって走らせる。」

古語のカス型動詞は、当初は有対自動詞から派生し、既存の有対他動詞の守備範囲外であった〈動作主をより強く表出させた表現〉を担ったと指摘されている(青木 1997: 95–94)。

- (19) 荒れたところは狐など様のものの、人をおびやかさんとて、気おそろしう思はするならん(源氏物語・夕顔)

「荒れている所では狐などのようなものが、人をおどかさうとして、なんとなく恐ろしく思わせるのだろう」

- (20) 日ごろも斯くなむ宣へど、邪気などの、人の心たぶろかして斯かる方にて進むるようもはべなるを(同・柏木)

「数日来このようにおっしゃいますが、もののけなどが、宮の心を惑わせて、このような方面にすすめるようなこともございますうなのを」

「おびやかす」「たぶらかす」は、有対自動詞「おびゆ」「たぶる」から派生したと考えられるが、これらの自動詞は対応する他動詞「おびやす」「たぶらす」が既にあるため、上記のカス型動詞は、自他対応関係にある他動詞が表せない表現を担うために新しく派生した。中古から中世に時代が下るにつれ、自他対応の枠組みを超えて他動詞や無対自動詞からもカス型動詞が派生されるようになり、他動詞化形式として成立するに至った(青木 1997: 85)。

古語の「かす」と静岡県中部方言の「-かす」はいずれも四段～五段活用であり、四段動詞未然形(母音 a)に接続する点で一致する。

このことから、形態的・統語的には、静岡県中部方言の「-かす」は古語の「かす」の残存であると考えるのが妥当である。「-かす」はもともと他動性を強調する形式であったが、他動性と使役性が意味的に連続していることから、使役的な因果関係を表す形式へと機能を拡張させ、最終的に特化させたと解釈できる。

ここで、他動性について、角田(1991, 2010: 92)にならい、プロトタイプの捉える。すなわち、原型的他動詞とは「動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こすもの」である。この観点によると、他動詞も使役事象と同様に、原因事象と結果事象の因果連鎖からなる事象構造をもっている。

したがって、こうした構造的な類似を基盤として、静岡県中部方言の「-かす」は、他動性を強調する形式から、因果連鎖を表す使役の形式へと、メトニミー的に機能が変化したものと考えられる。

### 5.3 愛知県尾張地方の「-かす」

愛知県一宮市方言(旧木曽川町方言)でも「-かす」が用いられるが、使役ではなく、「タベラカス」(食べてしまう)、「アカラカイタ、アカラカイテマッタ」(中身を空けてしまった)のように、意図的ではないことを標示する形式として用いられる(平子達也氏教示)。

由来が同じと考えられる名古屋方言の「-らかす<sup>6</sup>」も、自動詞語幹・他動詞語幹のいずれも語基として接続することができ、〈或る現象を非意図的(強制的)に、望ましくない原因で惹起する〉意を表す(山田 1976: 19–27)。例(21)–(24)の下線は発表者による。

(21) 財布を落とらかす。

(22) 洗濯物を流らかす。

(23) 花をしなびらかす。

(24) 籠から鳥を飛び出さらかす。

これらの例はいずれも、原因事象と結果事象からなる使役構造に類似した事象構造をもつ。使役主に相当する話し手は動作主に働きかけるのではなく、非意図的に、結果事象が生じる

---

<sup>6</sup> 「-かす」も「-らかす」も同じ-(r)akasと考えている。山田(1976)を見る限りでは、「とる」「回る」に対応する形が「とらかす」「回らかす」であることから、形態音韻的には次のような変化が想定される。

(ア) tor-~~ra~~kas-u → tor-akas-u

(イ) mawar-~~ra~~kas-u → mawar-akas-u

「落とらかす」については、語尾を「らかす」に揃えるように平準化が働いたものと思われる。

ままにしているという点で、意味分類としては責任使役に相当するようと思われる。

しかし、話者の内省では意図的な操作ではなく、非意図性を強調する、不可抗力的な事態を表す形式として運用されている。

したがって、尾張地方の「-かす」は、古語や静岡県中部方言の「-かす」とは異なり、結果事象だけを前景化することで、あたかも自然にその事象が生じたかのようにするものと解釈できる。使役的な因果連鎖を弱め、非意図的な結果の顕在化を担う形式として特化したものと考えられる。尾張の「-かす」と静岡中部の「-かす」は同じ形態的基盤をもちながらも、因果連鎖のどの部分を前景化するかにおいて異なる変化を経ていると言える。

#### 5.4 個別の方言の使役の拡張の違い

「-かす」がもともとは他動性を強調する形式であったことを前提とすると、静岡県中部地方ではそれが他動性から因果連鎖の類似性・隣接性に基づいて使役に拡張して特化し、愛知県尾張地方では他動性から因果連鎖の中の結果事象だけを前景化して非意図性の強調に発展したと考えられる。

方言ごとに、同じ形式を異なる方向に再解釈した結果と言える。

### 6 考察

地域的には、京阪では五段型の「-さす」が無標の使役形式として保持され、東日本では下一段型の「させる」系列（津軽の「ラヘル・サヘル」なども含む）が無標で規範的な形式として安定している。

東日本における「-さす」は「-させる」に比して生産性が低く、分布範囲が狭く、直接使役に特化する傾向が見られる。これは、生産性の低い使役形式ほど直接使役を表すという通言語的な傾向（Shibatani & Pardeshi 2001: 163）と一致する。

静岡県中部地方の「-かす」は、本来的な他動性の標示から使役の標示への拡張の例であり、原因事象と結果事象の因果連鎖という事象構造における、他動性と使役性の連続性を示すものである。これに対し、尾張地方の「-かす」は因果連鎖の結果事象を前景化し、非意図性を表す方向へ特化している。

同一の形態が地域方言ごとに異なる意味機能を分化していく過程について、各方言の使役構文のバリエーションは、共通のプロトタイプからの拡張の方向性の違いとして体系的に理解することができる。

### 7 おわりに

本発表では、「-さす」「-させる」の地域的な差異を整理し、静岡中部と尾張の「-かす」形式の意味的展開について検討した。結果として、共通の形式を起点としながらも、方言によって、他動性の強調から使役、あるいは非意図性へと異なる方向に機能が拡張していると分析した。この分析は、日本諸語の使役体系が、形態・意味・事象構造の捉え方の地域差などの相互作用として動的に形成されていることを示す視座を提供するものである。

課題として、本発表では各方言の個別事例を中心に扱ったため、使役構文のプロトタイプと拡張事例のネットワークを描出するには至らなかった。今後は、個別方言の使役形式の分布と機能を体系的に整理し、方言ごとの使役構文ネットワークを理解することが課題である。これにより、多様な使役形式をもつ日本諸語の使役体系について、より精緻な位置づけが可能になるものと期待される。

## 参考文献

- 青木博文 (1997) 「カス型動詞の派生」『国語学』188. 95–82.
- 青木伶子 (1977) 「使役—自動詞・他動詞との関わりにおいて—」『成蹊国文』10. 26–39.
- 小田勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』東京：和泉書院.
- 国立国語研究所編 (1994) 『方言文法全国地図 第3集—活用編 2—』東京：大蔵省印刷局.
- Shibatani, Masayoshi (1976) The grammar of causative constructions: a conspectus. In Shibatani, Masayoshi (ed.) *The Grammar of causative constructions, Syntax and Semantics* 6. Pp. 5—41. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi and Prashant Pardeshi (2001) The Causative Continuum. 『神戸言語学論叢』3. 136–177.
- 高見健一 (2011) 『受身と使役—その意味規則を探る—』東京：開拓社.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』(改訂版第2刷 2010) 東京：くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』東京：研究社.
- 中條修 (1983) 「静岡県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 6 中部地方の方言』141–176. 東京：国書刊行会.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹編『構文と事象構造』日英語比較選書 5. 107–203. 東京：研究社出版.
- 西村義樹 (2015) 「使役構文」斎藤純男・田口善久・西村義樹編『明解言語学辞典』102. 東京：三省堂.
- 西村義樹・長谷川明香 (2016) 「第19章 語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点—」藤田耕司・西村義樹編『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学—』東京：開拓社.
- 長谷川明香・田中太一 (2024) 「使役の事象構造を考える」『日本言語学会第168回大会予稿集』430–435.
- 早津恵美子 (2016) 『現代日本語の使役文』東京：ひつじ書房.
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館書店. 復刊. (訂正再版 1978) 東京：勉誠社.
- 山田達也 (1976) 「派生語尾‘—らかす’の意味分析—名古屋方言—」『名古屋市立大学教養学部紀要 人文社会研究』20. 19–29.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』東京：寶文館.

## 山梨県奈良田方言の終助詞「ニ」の用法と意味機能

### —理由の接続助詞からの派生過程に着目して—

阪上 健夫（東京大学大学院生）

#### 1. はじめに

本発表では、山梨県早川町奈良田方言の終助詞「ニ」の用法を記述する。「ニ」は理由の接続助詞として文中で使われることもあるが、主に文末で（1）のように終助詞として使われる。

- （1）テレビオ ミテタイバ キヤクガ キトーニ。（テレビを見ていたら客が来たよ。）

#### 2. 問題の所在と方法

吉田（2007）は、奈良田方言では「ニ」が（2）のように理由の接続助詞として使われるとする。一方、吉田（2007）より少し下の年代の話者を調査対象とする小西ほか（2022：133-134）は、「ニ」を（3）のように平叙文に付く終助詞としている。

- （2）クライニ イッショニ イカザー。（暗いから一緒に行こう。）（吉田 2007【一部改】）

- （3）アゴター キットーニ（あごを切ったよ。）（小西ほか 2022：134）

奈良田方言では少し前までは「ニ」が理由の接続助詞として文中で用いられていたが、現在は終助詞として文末に使われるようになっていいると考えられる。

これと類似した現象が他方言に見られる。阪上（2025, 2025 予定）は、熊本県方言の理由の接続助詞「ケン」や鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞「ケ（一）」が、確かな事態を述べる終助詞のように文末で使用されるとする。「ケー」には（3）と同様の聞き手への告知の例のほか、（4）のように終助詞「ナー」が後接する例もあり、文末用法は「ケン」よりも広いとしている。

- （4）（良い景色の話で）アレワ エーケナー。（あれは良いよね。）（阪上 2025）

熊本県方言の「ケン」や倉吉方言の「ケ（一）」は理由の接続助詞の用法を残している。一方、佐藤（1971：26-27）、服部（1995：199）によると、三重県方言では理由の接続助詞由来の終助詞「ニ」が現在は理由の接続助詞として使われずに文末で使われる。（5）の聞き手への告知に加え、（6）の否定的勧告や（7）の話し手の意志を告知する例でも使えるとしている。また、（8）のように聞き手への勧誘の表現にも付くとしている。命令文や疑問文には付かない。

- （5）オーイ。 モー ヒチジハンヤニ。（おうい。もう七時半だよう。）（佐藤 1971：19）

- （6）イランコト 言ワンヤニ（余計なことを言いなさんよ）（服部 1995：200）

- （7）カシナ。 ワシガ シタンショニ。（貸してごらん。わたしがしてあげましょ。）

- （8）ヨバレヨニ。（ごちそうになりましょよ。）（佐藤 1971：20【一部改】）

共通語では (7) の申し出で意志形の後に終助詞「よ」が使えない。このような例でも終助詞「ニ」が使えるのなら、「ニ」に共通語の「よ」に置き換えられない用法があることになる。

加えて、「ニ」は佐藤 (1971: 21) によると (9) のように終助詞「ナ」と複合することがあり、その場合は音変化を起こして「ンナ」となるのが普通である。

(9) イケマスンナ。(行けますよな。)(佐藤 1971: 21 【一部改】)

そして、服部 (1995: 207) によると「ニ」は情報の教示が基本的な機能で、独話で使われることはない。「ニ」の意味機能は音調によって分かれ、上昇調 (ニ↑) は聞き手に認識を促して注意喚起し、非上昇調 (ニ↓) は聞き手が知ることが可能な事柄を示すとしている。このため「ニ↑」は問いかけへの単純な応答では注意喚起という働きかけがないため通常は用いられず、「ニ↓」は他者が話し手以上に発話内容を知るのが困難な場合は使えない (p.202-203)。(10) のような話し手の個人的な評価を表す例では「ニ」を使えないとしている。

(10) (料理を一口食べて) オッ。ウマイ {ワ↓/\*ニ↓}。(服部 1995: 204)

奈良田方言の「ニ」にこのような他の終助詞との接続や平叙文における使用制約があるか否かは明らかでない。勧誘の表現との共起関係も明確でない。そこで、本発表では「ニ」の使われる形態・統語環境と音調および文脈を整理し、「ニ」の意味機能を明らかにする。そのうえで、理由の接続助詞から終助詞への派生過程を考察する。そのために 2023~2025 年に (11) に示す 3 名の奈良田方言の高年層話者に協力を得て質問調査を実施した。

(11) A: 1934 年生 男      B: 1937 年生 女      C: 1938 年生 女

### 3. 奈良田方言の終助詞「ニ」の調査結果

#### 3.1. 「ニ」の生起可能な形態・統語環境

まず、(12) のように理由の接続助詞としては「デ」が積極的に使われることが確かめられた。話者 B は「ニ」も使えると回答するが (12a)、「ニ」は使えないと回答する話者がいる (12b)。理由の接続助詞の用法が衰退している点は、三重県方言の「ニ」と共通している。

- (12) a. カネガ      カカッテモヨイ {デ/ニ}      フジサンニ      ノポッテミタイ。  
(お金が      かかってもいいから      富士山に      登ってみたい。)      【B】<sup>1</sup>
- b. スグ      オデング      デキル {デ/\*ニ}      マッテーロ。  
(すぐ      おでんが      できるから      待っている。)      【C】

<sup>1</sup> 回答された形式には話者の ID を隅付き括弧 (【A・B・C】) で記す。

「ニ」は(13)に示すように終助詞として文末で平叙文に使われ、疑問文・勧誘文・命令文・禁止文には付かない。前接述語の品詞やテンスは問わず、非過去の名詞述語ではコピュラを介する(13b)。(14)のような推量形 *ra, dura* や、(15)のような意志形 *-zu* による勧誘文にも付く。

- (13) a. カエリワ クルマデ オクッテッテヤルニ。【平叙文】  
 (帰りは 車で 送って行ってやるよ。) 【B】  
 b. アシター アメドーニ。【平叙文】  
 (明日は 雨だよ。) 【C】  
 c. ソノ カイゴーニャー ダレガ イクー／イクヨ／\*イクニ。【疑問文】  
 (その 会合には 誰が 行くの／行くのよ?) 【C】  
 d. ヒガ クレタラ カエラザー (\*ニ)。【勧誘文】  
 (日が 暮れたら 帰ろう。) 【C】  
 e. フジサンニ ノボルジャー ウワギオ モッテイケ {ヨ／\*ニ}。【命令文】  
 (富士山に 登るなら 上着を 持っていけよ。) 【C】  
 f. アメガ フルジャー ソトデ アスンジョ {ヨ／\*ニ}。【禁止文】  
 (雨が 降るなら 外で 遊ぶなよ。) 【A】  
 (14) アシター アメガ フラスラニ。【平叙文・推量形】  
 (明日は 雨が 降らないだろうよ。) 【B】  
 (15) ヒガ クレタラ カイラズニ。【意志形 *-zu* による勧誘文】  
 (日が 暮れたら 帰ろうよ。) 【A】

後接する形式には終助詞「ナ」がある(16)。他の終助詞「カ」「ヨ」等は後接しない(17)。

- (16) A: (旅行に行った時の話になり) あの時は観光客が 200 人は来ていた。  
 B: アノトキヤー オーゼーダットーニナ。  
 (あの時は 大勢だったよね。) 【C】  
 (17) テカ° ミオ カク {ヨ／ニ／\*ニヨ}<sup>2</sup>。  
 ([私は] 手紙を 書くよ。)

### 3.2. 終助詞「ニ」の音調

「ニ」の音調は、(18)にあるように上昇調になることはなく、服部(1995: 207)が三重県方言の「ニ」について述べたような音調の対立はない。ただ、奈良田方言はピッチの上昇の有無と位置を弁別特徴としてアクセント核の次の拍が高くなる上げ核アクセントだが、「ニ」が付加すると述語のピッチの上昇位置が後ろに移動するという特徴がある(小西 2025)。

<sup>2</sup> 形態統語環境に関する一部のデータは小西いずみ(私信)の提供を受けた。





(23) a. (怪我人に) ビョーインイ      イットーホーガヨイニ 【A】 / イケバヨイニ 【C】。  
          (病院に                  行った方がいいよ                  / 行けばいいよ。)

b. カミナリガ      ナッタラ      ソトイワ      デルジャーナイ {ヨ/ニ}。  
          (雷が                  鳴ったら      外へは                  出るんじゃないよ。)                  【A】

このように、「二」が平叙文に付く際は話し手が真と判断する事態を聞き手に知らせ、認識するよう促す発話で使える。一方、質問への応答であっても(24)のような聞き手が知っているはずの事柄を聞かれて非難しながら答える場合には容認しない話者がいる。

(24) (花子の出身を聞かれ) ハジメモ イットージャナイカ。 オーサカ {ダヨ／\*ドーニ}。  
(始めも 言ったじゃないか。 大阪だよ。) 【A】

(25) (一人で歩いている時夕日を見て感動して) ユーヒガ キレーダ {ナー／\*ニ}。  
(夕日が 綺麗だな。) 【B】

(26) (聞き手を早川町役場で見かけた次の日に確認の意味で)

キニョー    ハヤカワチョーヤクバニ    {イタナ／\*イトーニ}。

(昨日    早川町役場に    いたね。)

【C】

(27) a. ライシュー      イッショニ      ハナミニ      イカズニ。  
(来週                  一緒に                  花見に                  行こうよ。)                  【A】

b. (独り言で) トウギノ      シューワ      ハナミニ      {イカズ/\*イカズニ}。  
(次の                  週は                  花見に                  行こう。)                  【A】

– 29 –

それに加えて、(28) のように話し手の意志を知らせる申し出でも「ニ」が意志形に付く。この点は佐藤 (1971) の三重県方言の「ニ」の記述と共通する。

- (28) オイシャー      イソガシーラ。      カーリニ      オレガ      イカズニ。  
 (あなたは      忙しいだろう。      代わりに      私が      行こう。)

【A】

そして、終助詞「ナ」との接続形は (29) のように聞き手との一致を想定して話し手の認識を述べる発話で使える。(29) の例では共通語では「からね」ではなく「よね」が自然となる。

- (29) (「富士山の景色は良かった。」と言われて) フジサンワ      ヨイ {ヨナ／ニナ}。  
 (富士山は      良いよね。)

【B】

接続形「ニナ」は共通語の「よね」の用法を担うものと思われる。日本語記述文法研究会 (2003: 266) は「よね」の用法を話し手の認識に言明して聞き手との共有を確認するものと、聞き手の方が詳しい情報の確認を求めるものに分ける。奈良田方言の「ニナ」は (29) のような話し手の認識を表すものに加え、(30) のように不確かで聞き手の方が詳しい情報の確認にも使える。

- (30) コトシノ      オマツリワ      チューシドー {ヨナ／ニナ}。  
 (今年の      お祭りは      中止だよね。)

【C】

以上のように、奈良田方言の「ニ」は終助詞「ナ」との接続形でも広い用法を持つ。

#### 4. 奈良田方言の終助詞「ニ」の意味機能

前節で述べた通り、奈良田方言の「ニ」は理由の接続助詞としては使いにくく、終助詞として平叙文に付く際は独話よりも話し手の知識や判断を新情報として聞き手に知らせる発話の文末に使える。一方で、聞き手が知っているはずの事態の認識を当然のこととして非難しながら促す場合には使えない。また、「ニ」は推量形や意志形にも付き、終助詞「ナ」が後接できる。

推量形への付加は理由の接続助詞の文中用法でも見られるが、「ニ」の意志形 -zu への付加は文末で見られる特徴である。奈良田方言の意志形 -zu は主節末にのみ現れ、従属節末では未来の事態の意志も動詞の基本形で表す<sup>5</sup>。意志形 -zu との接続形は聞き手への勧誘に加え、(28) のような話し手の意志を知らせる申し出の意味でも使われる。

<sup>5</sup> 中世・近世では従属節末においても意志形（「ウ」の類）が生起できた（北崎 2021）。奈良田方言において理由節末にも意志形 -zu が生起するなら古典語の特徴が残ることになるが、これは全く容認されない。

- イマ      オチャデンマ      イレルデ／\*イレズデ／\*イレズニ      アガツテミロー。  
 (今      お茶でも      入れるから／\*入れようから      上がってみろ。)

【A】

- (28) オイシャー      イソガシーラ。      カーリニ      オレガ      イカズニ。  
 (あなたは      忙しいだろ。      代わりに      私が      行こう。)

【A】【再掲】

共通語の終助詞「よ」は意志形に付く場合勧誘の意味では使えるが、話し手の申し出の意味では使えない。奈良田方言の「ニ」には共通語の「よ」からは予測できない意味機能もある。

奈良田方言の終助詞「ニ」はこういった知らせや勧誘・申し出の発話に使えることから、〈話し手の知識や判断・意志等を新情報として提示し、聞き手の認識に働きかける〉意味機能を持つと言える。ただし、聞き手の不理解を非難しながら知らせる場合には容認されにくい。独話で使いにくい点は三重県方言の「ニ」と共通で、この点は上の記述と一致する。

終助詞「ナ」との接続形の話し手の認識に言明し聞き手との共有を確認する用法も、上の意味機能で説明できる。(30)のような不確かな情報の確認の用法でも、新情報の提示の意味は読みとりにくい話し手の判断を述べて聞き手の認識に加えるように働きかける効果はある。

- (30) コトシノ      オマツリワ      チューシドー {ヨナ／ニナ}。  
 (今年の      お祭りは      中止だよね。)

【C】【再掲】

## 5. 奈良田方言の「ニ」の理由の接続助詞から終助詞への派生過程

奈良田方言の「ニ」が推量形に接続する点や話し手が真と見込んでいる事態を知らせる発話に使える点は、理由の接続助詞の用法と連続的である。(19)からも分かる通り、理由の接続助詞の文末用法は話し手が真と判断する事態を聞き手の認識に加えるように促す発話となる。理由の接続助詞が導く内容は話し手が真とみなすことが前提で、文末用法では話し手が真とみなす事態を知らせる意味が前面に出て、理由の意味が希薄になる場合がある。

- (19) (友達と楽しい日を過ごして) キョーノ      コトワ      ワスレノーニ。

(今日の      ことは      忘れない {から／よ}。)

【B】【再掲】

このような文末用法が頻用されて慣習化し、「ニ」が終助詞として用いられるようになったと考えられる。つまり、終助詞「ニ」の用法は理由の接続助詞と連続したものから派生したものと思われる。「ニ」は現在理由節を導く機能を失いつつあり、主に文末で使われている。

一方、(28)のように意志形に接続する点や(30)のように「断定形+ニナ」の形で話し手にとって不確かな事態の確認にも使える点は、理由の接続助詞にはない特徴と言える。熊本県方言の「ケン」や倉吉方言の「ケー」と終助詞「ネ」「ナ」の接続形には確かな認識に言明する用法はあるが、不確かな事態を確認する用法はない(阪上 2025, 2025 予定)。「ニ」の用法は認識への働きかけの意味は残しつつ、話し手が真と見込んでいる事態の提示という理由の接続助詞と連続した意味が希薄なものへと派生したと推測される。このような用法がある点で、奈良田方言の「ニ」の機能変化は熊本県方言の「ケン」や倉吉方言の「ケー」より進んでいると言える。

## 6. 結論と課題

本発表では奈良田方言話者に対する質問調査の結果に基づき、奈良田方言の終助詞「ニ」の用法と意味機能を記述した。「ニ」には〈話し手の知識や判断・意志等を新情報として提示し、聞き手の認識に働きかける〉意味機能があることが分かった。終助詞「ニ」については、通時的な派生過程も考察した。終助詞「ニ」の用法は理由の接続助詞と連続的なものから派生したと思われるが、現在の「ニ」の用法は理由の接続助詞と連続した意味が希薄なものへと広がっている。

三重県方言の「ニ」には奈良田方言と異なる用法が見られる。佐藤(1971:21)は勧誘文に「ナ」との接続形も付くとするが(31)、奈良田方言で勧誘文に「ニナ」を付けるという回答はない。

- (31) ウチト            イッショニ        イコンナ。  
      (わたしと        いっしょに        行こうよね。) (佐藤 1971:21)

共通語の「よね」も(31)で使いにくい。今後はこういった現象も含めて分析する必要がある。

## 参考文献

- 北崎勇帆(2021)「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』第17巻2号, 19-36.  
小西いずみ(2025)「山梨県奈良田方言における用言の活用形と終助詞の韻律」国立国語研究所 令和7年度 第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロゾディー」合同研究発表会  
小西いずみ・三樹陽介・吉田雅子(2022)「山梨県早川町奈良田」セリック・ケナンほか編『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』国立国語研究所 77-150.  
阪上健夫(2025)「鳥取県倉吉方言における理由の接続助詞「ケー」の終助詞化」日本語学会 2025 年度春季大会予稿集 109-114.  
阪上健夫(2025 予定)「熊本県方言における理由節の脱従属化——語用論的意味の固定化と文構造の解釈変更の観点から——」日本方言研究会『方言の研究 11』ひつじ書房  
佐藤虎男(1971)「転成文末詞「ニ(ニー)」について」『国文学攷』第57号, 18-28.  
白川博之(1991)「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要』第2巻39号, 249-255.  
白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版  
日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版  
服部匡(1995)「終助詞の機能について：伊勢方言のニの用法の記述と「よ」との比較」『言語学研究』第14号, 199-212.  
吉田雅子(2007)「山梨県早川町奈良田方言の原因・理由表現」方言文法研究会編『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』方言文法研究会

## 謝辞

本研究にご協力くださった奈良田方言話者の方々に深く御礼申し上げる。本研究はJSPS 科研費 20H00015, 21K18376, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の助成を受けている。

## 「V てくれる/あげる」構文における恩恵と動作の受け手 の重層構造が引き起こす習得困難点

—— 恩恵と動作の受け手の混同・二格とノタメニ格の混同において——

李強楠(関西大学大学院生)

### 1. はじめに

菊地・前原(2023:8~10)では「V てくれる」は学習者が問題なく使えて理解できるタイプ「A」と学習者があまり使えていないタイプ「B」とに分けられている。

タイプ「A」:お金を貸してくれる／写真を見せてくれる／パンフレットを持ってきてくれる  
／漢字を教えてくれる／使い方を説明してくれる

タイプ「B」:駅まで送ってくれる／店を予約してくれる／電気を点けてくれる／話を聞いてくれる／(自分が作った料理)を食べてくれる

そのうえで、タイプ「B」の認知的な難しさについて、「具体的な行為そのものを見る限り、恩恵の授受と一致した向きが見てとれない。〈視覚的な認知として、恩恵の向きが見てとれない〉(中略)〈行為そのものが相手から自分に向かう場合〉でなければ「V てくれる」は使えない」と学習者が誤って理解してしまうのは、今述べた「B」の認知的な難しさということもある」と指摘されている。また、(1)~(3)の例が挙げられ、「N をくれる」の場合には「リーさんは私におみやげをくれました。」のように受益者に「に」が付くことから、それに倣って「V てくれる」の場合も機械的に同じ「に」を付けてしまい、(中略)不適当に「V てくれる」に拡張してしまうこと(一種の過剰般化)による面が大きいと考えられる」と主張されている。

(1) リーさんは私に(×. →を)駅まで送ってくれました。

(2) リーさんは私に(×. →の)荷物を運んでくれました。

(3) リーさんは私の子供に(×. →と)遊んでくれました。

しかし、タイプ「B」の認知的な難しさと二格の過剰般化の本質的な原因はまだ明らかになっていない。本稿ではその原因をさらに掘り下げるために、学習者は二格とノタメニ格、恩恵と動作の受け手をどのように捉えているかを調査した。なお、本研究では着目しているのは「てくれる/あげる」構文における受け手の形式格(表層格)と意味格(深層格)である。そのため、山岡(2008:125)のいう「アゲルとクレルとは、格の視点・人称において性質が異なるが、意味格の構造においては、全く同じである。」にしたがい、「てくれる」構文と「てあげる」構文を区別せずに扱う。結論から言えば、その本質的な原因は、学習者が二格とノタメニ格とその意味格である恩恵と動作の受け手を混同し、区別できていないことにあると考えられる。学習者は単純に、機械的に二格を過剰に付けているのではなく、二格が恩恵と動作の受け手の両方を示すと誤って捉えているうえ、ノタメニ格との区別ができていない可能性が高い。また、その背景には現行の恩恵の受け手の記述と説明が日本語教育の場では、必ずしも適切ではない点があると推察する。

さらに、現実の「てくれる構文」では恩恵の受け手は省略されるのが普通である。例えば、スリーエーネットワーク編(2000:203)では「恩恵の受け手である「わたし」を省略した形で練習する」と述べられている。このように、(1)、(2)の場合、恩恵の受け手が省略されていれ

ば、「(1) リーさんは駅まで送ってくれました。(2) リーさんは荷物を運んでくれました。」のように、表記上、一見正確な文となるが、これは読み手が恩恵の受け手を自動的に補完しているためである。学習者が文を作る際、その背後に潜む恩恵の受け手を十分に把握していない恐れが、依然として存在すると考えられる。

## 2. 恩恵と動作の受け手、ニ格とノタメニ格に関する現行の記述と説明

日本語記述文法研究会編(2009:5, 6)では、ニ格について、着点、相手、場所、起因・根拠、主体、対象、手段、時、領域、目的、役割、割合が挙げられている。その中の相手、対象は、動作の相手、授与の相手(おばあさんが孫に絵をやる)、受身的な動作の相手、基準としての相手、動作の対象、心的活動の対象と記述されている。日本語記述文法研究会編(2009:105, 106)では複合格助詞ノタメニ格について、起因・根拠、動作の目的だと記述されている。以上から、動作の受け手は明確に記述されているのに対して、恩恵の受け手は明確に記述されていないことが明らかになった。そこで、「V てくれる/あげる」構文における恩恵の受け手はどのように記述されているかを見てみたい。

「てくれる」は、動作者を「が」、受益者(恩恵の受け手)を「に」または「のために」で表す。動作者は恩恵の与え手となる。

- ・あの人が僕に英語を教えてくれたんだ
- ・娘が私のために料理を作ってくれた。

ただし、動作の対象が受益者になる場合には、対象を表す「を」がそのまま用いられる。

- ・道に迷っていた人を助けてあげた。

日本語記述文法研究会編(2009:128)

山田(2004:89)は「動詞の項が受益者となる場合、その項としての格表示が保持されるが、特に強調したい場合に限ってノタメニ格が用いられる。また、主語以外に項を持たない自動詞の場合や、項以外に受益者を取る場合にはノタメニ格で表される。」と述べている。

また、総合的な日本語教科書を確認したところでは恩恵と動作の受け手の明示的な区別は見当たらない。例えば、スリーエーネットワーク編(2010:182)では「て形と結びついた授受動詞は、その動作と同時に利益や恩恵のやり取りもあらわします。」と説明されている。

従って、上記の山田(2004:89)や日本語記述文法研究会編(2009)のような現行の記述に基づくと思われる現場での説明では恩恵の受け手に固有の形式格が存在せず、結果として恩恵の受け手の形式格がニ格、ノタメニ格、ヲ格、ト格などにわたっているように(学習者には)見える可能性がある。だとすれば、学習者がタイプ「A」を学ぶ過程で定着した「ニ格＝恩恵と動作の受け手」という誤った認識をそのままタイプ「B」に過剰般化し、恩恵と動作の受け手を混同したとしても不思議ではないだろう。

## 3 調査概要

### 3.1 調査方法と調査協力者

本調査では恩恵と動作の受け手、二格とノタメニ格の混同を検証するために、初中級と上級レベルの学習者を対象に、調査問題を作成し、回答を収集した。また、協力者の回答意図を確認するために、フォローアップインタビューを行い、二格とノタメニ格の区別とその意味格である恩恵と動作の受け手の区別を答えてもらった。

#### 【調査方法と調査目的】

本調査では「V てくれる/あげる」構文と授受補助動詞を除いた「V」のみの構文を用いて、問題文を作成し、質問紙調査を実施した。全ての問題文は(1) (2) (3)のように二格(有生名詞句)を取れば、誤文となる条件である。調査は対面で行い、回答の後その場で用紙を回収した。また、回収後に一部の協力者を対象にフォローアップインタビューを実施した。

また、本調査の目的は、学習者による二格とノタメニ格の許容率と、それらに対応する意味格の認識を解明することにある。具体的には、「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文における許容率を比較することで形式格の混同の有無を検証し、その要因を探る。これに加え、フォローアップインタビューにより得られた協力者の意見を分析し、意味格である恩恵と動作の受け手に対する学習者の理解の実態を補足的に明らかにする。

#### 【調査協力者と実施時期】

日本の専門学校の中級クラスと上級クラスに在籍する就職と進学を目的とする初中級学習者と上級学習者である。出身はベトナム、中国、バングラデシュ、ミャンマーなどである。合わせて、53 名となっている。その中、N3、N2 レベルの初中級学習者は 39 名で N1 レベル以上の上級学習者は 14 名である。実施時期は 2025 年 6 月～2025 年 8 月である。

### 3.2 調査問題と分析方法

本調査では、22 の動詞(N5～N3 レベル)を主節の述語に「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文を問題文に作成した。全部 22 の動詞について、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を用いた調査を行い、その結果、二格(有生名詞句)とは共起できないことを確認した。下記は質問紙における正誤判断問題と多肢選択問題の具体例である。正誤判断問題の場合、主節の述語の(動詞/本動詞)が同じの問題文 1a、1b、1c、1d を一つの組とし、5 組を用意した。多肢選択問題の場合も同様に、問題文 2a、2b を一つの組とし、17 組を用意した。合計で 22 組である。ただし、質問紙における問題文の順番はランダムである。また、分析方法について、正誤判断問題では、1ab と 1cd を対照し、正誤判断問題では 2a と 2b を対照し、「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文の間で二格とノタメニ格の許容率の差を比較検証する。

I. 正誤判断(文として正しいかどうかを判断して、○か×を記入してください。)

1a 場面: 妹<sup>いもうと</sup>を助<sup>たす</sup>けたことについて、あなたは話<sup>はな</sup>している。

問題: 私<sup>わたし</sup>も仕事<sup>しごと</sup>で疲<sup>つか</sup>れたけど、妹<sup>いもうと</sup>に荷物<sup>にもつ</sup>を運<sup>はこ</sup>んだ。( )

1b 場面: 妹<sup>いもうと</sup>を助<sup>たす</sup>けたことについて、あなたは話<sup>はな</sup>している。

問題: 私<sup>わたし</sup>も仕事<sup>しごと</sup>で疲<sup>つか</sup>れたけど、妹<sup>いもうと</sup>のために荷物<sup>にもつ</sup>を運<sup>はこ</sup>んだ。( )

1c 場面: 友達<sup>とも</sup>の小野<sup>おの</sup>さんを助<sup>たす</sup>けたことについてあなたは話<sup>はな</sup>している。

問題: 小野<sup>おの</sup>さんが重<sup>おも</sup>い袋<sup>ぶくろ</sup>を持<sup>も</sup>っていたから、彼女<sup>かのじょ</sup>にその袋<sup>ぶくろ</sup>を運<sup>はこ</sup>んであげた。( )

1d 場面: 友達の小野さんを助けたことについてあなたは話している。  
 問題: 小野さんが重い袋を持っていたから、彼女のためにその袋を運んであげた。( )  
 II. 多肢選択問題(2つか2つ以上の正しい答えがある。思った答えをすべて○で選んでください)

2a 場面: 仕事で疲れた彼氏を助けたことについて、あなたは話している。  
 問題: 私も忙しいけど、それでも\_\_\_\_大変な仕事を手伝った。  
 選択肢: a. 彼氏のために b. 彼氏を c. 彼氏に d. 彼氏の e. なし

2b 場面: 彼氏からの手伝いについて、あなたは話している。  
 問題: 彼氏は毎晩遅くまで、\_\_\_\_仕事を手伝ってくれている。  
 選択肢: a. 私に b. 私のために c. 私を d. なし e. 私の

3a 場面: 彼女の病気にについて、あなたは話している。  
 問題: 僕はとても忙しいけど、すごく心配だから、病院の前でずっと\_\_\_\_待っている。  
 選択肢: a. 彼女のために b. 彼女を c. 彼女と d. 彼女に e. なし

3b 場面: 母と買い物に行ったことについて、あなたは話している。  
 問題: 僕は仕事で疲れたけど、スーパーで\_\_\_\_3時間待ってあげた。  
 選択肢: a. 母のために b. 母が c. 母を d. 母に e. なし

総じて言えば、検証は、比較分析を通じて行う。具体的には、「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文の間でニ格とノタメニ格の許容率を比較し、学習者による混同の有無を検証する。または、混同の主たる要因が授受補助動詞と本動詞「V」のいずれにあるかの解明を目指す。以上の問題によって検証するのは、以下の仮説1である。

仮説1: タイプ「B」のような「V てくれる/あげる」構文において、学習者の中でニ格とノタメニ格は同時に許容されるのに対し、「V のみ」の場合、ニ格が許容されにくい

さらに、ニ格とノタメニ格の比較に加え、学習者が「V てくれる/あげる」構文におけるニ格をどのように認識しているかを検証するため、ニ格とヲ格の許容率についても比較を実施する。ただし、ヲ格(有生名詞句)を必須格に取り得るタイプの問題文については、「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文をそれぞれ6問ずつ用意し、対応する6組を作成した。つまり、全部22組の中の6組である。具体例は3abである。したがって、ニ格とヲ格の許容率の比較にあたり、この6組を仮説2の統計分析の対象とする。

仮説2: ヲ格(有生名詞句)を必須格に取り得る「V てくれる/あげる」構文では学習者の中でニ格は許容されやすいのに対して、「V のみ」の場合、ニ格が許容されにくい。

### 3.4 調査結果

表1 ニ格とノタメニ格の比較 (n=106)

対応のないt検定

変数	ニ格 (n=53)		ノタメニ格 (n=53)		p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
「V てくれる/あげる」	12.60	3.92	13.62	4.60	.223
「V のみ」	8.98	3.97	14.15	4.36	<.001



ニ格とノタメニ格の許容率を T 検定で分析したところ、「V てくれる/あげる」構文の場合、( $t(104)=-1.225, p=.223$ )である。ニ格とノタメニ格の間で許容率に有意差が認められなかった。それに対して V のみの構文の場合、( $t(104)=-6.369, p<.001$ )である。ニ格とノタメニ格の間で許容率に有意差が認められた。これは仮説 1 を支持する結果となった。したがって、「V てくれる/あげる」構文においては、学習者にニ格とノタメニ格の混同が見られ、その主要因として授受補助動詞の影響が考えられる。

表 2 ニ格とヲ格の比較 (n=106)

対応のない t 検定

変数	ニ格 (n=53)		ヲ格 (n=53)		p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
「V てくれる/あげる」	3.66	1.58	2.60	1.62	<.001
「V のみ」	2.83	1.52	3.75	1.39	<.001

また、ニ格とヲ格の許容率を比較し、T 検定で分析したところ、「V てくれる/あげる」構文の場合、( $t(104)=3.397, p<.001$ )である。ニ格とヲ格の間で許容率に有意差が認められ、ヲ格と比べ、ニ格の許容率が有意に高かった。それに対して、「V」のみの構文の場合、( $t(104)=-3.248, p<.001$ )である。ニ格とヲ格の間で許容率に有意差が認められ、ヲ格と比べ、ニ格の許容率が有意に低かった。これは仮説 2 を支持する結果となった。この逆転現象は「V てくれる/あげる」構文において、授受補助動詞が学習者の格選択に決定的な影響を与えていることを示している。学習者は、ニ格を授受補助動詞が要求する受け手の形式格だと誤って認識し、それが本動詞が要求する必須格よりも優先されると考えている可能性が示唆された。

表 3 「V てくれる/あげる」構文における初中級と上級協力者の成績の比較 (n=53) 対応のない t 検定

変数	初中級 (n=39)		上級 (n=14)		p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
ニ格	12.74	3.89	12.21	4.13	.670
ノタメニ格	14.97	4.04	9.85	4.03	<.001

さらに、初中級と上級協力者におけるニ格とノタメニ格の許容率を比較し、T 検定で分析したところ、ニ格の場合、( $t(51)=.429, p=.670$ )である。初中級と上級協力者の間に有意差が認められなかった。それに対して、ノタメニ格の場合、( $t(51)=4.896, p<.001$ )である。初中級と上級協力者の間に有意差が認められ、上級協力者のノタメニ格の許容率が有意に低かったことが示された。この結果から、ニ格は過剰般化されたうえで、学習者の中で「V てくれる/あげる」構文の受け手の代表格に化石化されていく傾向が見られた。

続いて、フォローアップインタビューでは、「V てくれる/あげる」構文の受け手に対する学習者の認識を調査した。具体的には 4b のように、一つの問題文で、ニ格とノタメニ格を同時に選んだ協力者に対し、「この文では、ニとノタメニの違いは何ですか」と質問した。その際に「ニとノタメニの違いがわかりませんが、強いて言えば、ノタメニの方は私への恩恵の感じがより強い。ニは私にやった動作の方向を示す感じが強いです。(上級・中国)」という回答が得られた。そこで、調査者は「ニは恩恵を示さないのか」と再び質問した。協力者からは「そうでもない」という意見が得られた。

4b 場面: 彼氏<sup>かれし</sup>からの手伝<sup>てつだ</sup>いについて、あなたは話している。

問題: 彼氏は毎晩<sup>まいばんおそ</sup>遅くまで、      仕事<sup>しごと</sup>を手伝<sup>てつだ</sup>ってくれている。

選択肢: a. 私に    b. 私のために    c. 私を    d. なし    e. 私の

実際、山田(2004:89)にしたがえば、4b では、二格(有生名詞句)は許容されるべきではない。しかし、協力者は二格を許容したうえで、ノタメニ格との違いを明確に区別していない。協力者の回答から、恩恵の受け手にはノタメニ格、動作の受け手には二格を使うという認識がうかがえるものの、その区別自体が明確な判断として見えない。むしろ、方向性が感じられれば、それが恩恵による方向性なのか動作による方向性なのかを問わず、二格またはノタメニ格が許容できると判断されたと言った方が適切だろう。この結果から、学習者は二格とノタメニ格を明確に区別できておらず、その意味格である恩恵と動作の受け手の違いを正確に理解していない可能性が高いことが示唆された。

以上の調査結果と協力者の回答から、「V てくれる/あげる」構文において、学習者は二格とノタメニ格とその意味格である恩恵と動作の受け手を混同しており、「二格=恩恵と動作の受け手」という誤った認識を持っている可能性が高いことが示唆された。さらに、学習者は、授受動詞が文中に現れると、恩恵や動作の方向性を自然に感じられる。その結果、その受け手を示す際には「二格」(恩恵と動作の受け手)を使用すべきだという誤った言語ストラテジーを適用してしまう可能性がある。加えて、その誤った言語ストラテジーが化石化されていく危険性も懸念される。

#### 4. 恩恵と動作の受け手の混同・二格とノタメニ格の混同の一括解決に向けて

##### 4.1 恩恵と動作の受け手、二格とノタメニ格における重層構造

学習者が二格とノタメニ格、恩恵と動作の受け手を混同している現状を踏まえると、教授上の重要な課題として、「二格=恩恵と動作の受け手」という誤った認識を解きほぐす必要がある。その際に、二格は動作の受け手でノタメニ格は恩恵の受け手であることを学習者に認識してもらえれば、二格とノタメニ格とその意味格である恩恵の受け手と動作の受け手の混同を未然に防ぐことができると考えられる。そこで、山岡(2008)が主張する授受構文の意味格構造を見て行きたい。「くれる/あげる」構文の受け手について、山岡(2008:124~126)は目標格(動作の受け手)・受益者格(恩恵の受け手)のように、分離可能な二重の意味格が存在すると認め、動作の受け手を強調すれば、二格に、恩恵の受け手を強調すれば、ノタメニ格に、というように随意的に形式格を選べると述べている。

カラ・ガ	ニ・ノタメニ	ヲ	アゲル/クレル
起点-動作主格	目標格-受益者格	対象格	

(山岡(2000:127)を筆者一部修正)

また、「V てくれる/あげる」構文について、山岡(2000:127)では「授受補助動詞も一般の動詞や授受動詞と同様に必須格を要求し、名詞句との間に独自の関係(意味格)を持つ。」と述べられている。また、「V てくれる/あげる」構文における受け手の形式格と意味格の対応関係について、山岡(2008:128~129)は、i ~ iii の場合、受益者格が本動詞が要求する必須斜格(つま

り能動態の際に主語とならない必須格)のいずれかに対し、二次格として付与され、当該必須斜格の情報と融合されるが、その際、形式格にノタメニ格が現れる必要がないとする。一方、ivのような受益者格が強調される場合、またはv、viのような本動詞が要求する必須斜格のいずれにも対応しない場合、ノタメニ格を取って、表層に出てくるという。

- |     |     |           |     |          |
|-----|-----|-----------|-----|----------|
| i   | 太郎が | 花子を       | 助け  | てあげる。    |
|     |     | 対象格・受益者格↑ |     |          |
| ii  | 太郎が | 花子に       | 本を  | 貸し てあげる。 |
| iii | 太郎が | 花子に       | 会っ  | てあげる。    |
|     |     | 目標格・受益者格↑ |     |          |
|     |     | 受益者格のみ↓   |     |          |
| iv  | 太郎が | 花子のために    | 助け  | てあげる。    |
| v   | 太郎が | 花子のために    | 死ん  | であげる。    |
| vi  | 太郎が | 雪子のために    | 花子を | 助け てあげる。 |

(山岡(2008:128~129)を筆者一部修正)

山岡(2008)にしたがえば、i～iiiのように、授受補助動詞が要求する必須格の情報は本動詞が要求する必須斜格の情報と融合されることがあるが、恩恵の受け手は動作の受け手、動作の対象格などとは互いに独立していると考えられる。また、恩恵の受け手の形式格であるノタメニ格は省略されることがあるが、その存在が消滅するわけではないといえるだろう。

#### 4.2 学習者に向けた二格とノタメニ格、恩恵と動作の受け手の説明

前述から、現行の記述と説明では、恩恵の受け手には固有の形式格が示されていないため、学習者は授受補助動詞を「二格＝恩恵と動作の受け手」と結びつけて捉える危険性が指摘できる。それに対して、山岡(2008)によれば、意味格としての恩恵の受け手とその形式格であるノタメニ格が、授受補助動詞により要求される独立した必須格と認められる。本研究では山岡(2008)を踏まえ、教育上、学習者に対する説明として「恩恵の受け手にはノタメニ格、動作の受け手には二格をと教えること」を提案したい。ただし、この提案に際して、山岡(2001:30)の表2が示した「恩恵の受け手が対応する形式格は二格とノタメニ格である」という主張を修正し、「二格が恩恵の受け手を示すということはない」のように、ノタメニ格(恩恵の受け手)と二格(動作の受け手)の完全な分離を明確にする必要がある。

したがって、本研究では、タイプ「A」「B」を問わず、ノタメニ格(恩恵の受け手)が省略されることがあっても授受補助動詞が要求する必須格として存在し、二格(動作の受け手)とは相互独立していると主張する。下記の具体例が示すように、①では「私のために」が恩恵の受け手を、「私に」が動作の受け手をそれぞれ示す。②でも同様に、「私のために」が恩恵の受け手を、「私の仕事を」が動作の対象を示す。①と②の場合、恩恵の受け手と動作の受け手(または動作の対象)が重複するため、恩恵の受け手を表す「私のために」は省略されることになる。一方、③では恩恵の受け手と動作の対象が異なるため、このような省略は生じない。

- ① タイプ「A」：彼女は(私のために)私に英語を教えてくれた。

② タイプ「B」:彼女は(私のために)私の仕事を手伝ってくれた。

③ タイプ「B」:彼女は私のために弟を助けてくれた。

\* ()内は省略されるべき

このように指導することで、学習の初期段階から、恩恵の受け手を「ニ格」で示そうとする誤りを避け、「恩恵の受け手にはノタメニ格を、動作の受け手にはニ格を」と、その意味格の違いに基づいて確実に区別する基盤が形成され则认为られる。さらに、既習者においても、この明確な区別は、恩恵の受け手の正確な運用へと導くものとなると期待できる。

## 5. おわりに

本研究は、「V てくれる/あげる」構文の習得過程において生じやすい、恩恵の受け手と動作の受け手、並びにその形式格であるニ格とノタメニ格の混同の問題に着目した。そして、現行の文法記述において恩恵の受け手に対応する固有の形式格が明示されていないことを背景に、学習者が「ニ格＝恩恵と動作の受け手」という過剰般化された言語ストラテジーを構築し、それが上級段階まで持続・化石化される傾向があることを実証的に示した。

また、「V てくれる/あげる」構文では、学習者がニ格を過剰許容し、ノタメニ格との区別が困難である実態が明らかとなった。この混同は授受補助動詞に強く影響されており、タイプ「B」の認知的な難しさとニ格の過剰般化の根本的な原因の一端をなしていることが示唆された。

こうした問題に対し、本研究は山岡(2008)の議論を発展させ、意味格のレベルで「恩恵の受け手」と「動作の受け手」を明確に分離し、それぞれにノタメニ格とニ格を結びつけて指導する方法を提案した。このアプローチは、従来の記述が抱える問題点を理論的に克服し、タイプ「B」の認知的な難しさと学習者の誤った格選択を未然に防止すると认为られる。

今後の課題としては、タイプ「B」における「てくれる」の不使用とニ格の過剰般化という問題への教育的介入として、本研究で提案した指導法の有効性を教育現場で実証的に検証することが挙げられる。また、記述文法の観点から考えれば、①のように、ノタメニ格とニ格の存在が同時に認められれば、恩恵の受け手の形式格はどれになるのかという疑問が残っている。つまり、ニ格は恩恵の受け手を表すことがあるかどうかを明らかにする必要がある。

## 参考文献

- 菊地康人・前原かおる(2023)「文法的な見方を生かす授受動詞の日本語教育設計」『日本語文法』21(1), 4-19
- スリーエーネットワーク(編)(2010)『初級1 大地教師用ガイド』スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク(編)(2000)『みんな日本語初級Ⅰ 第2版 教え方の手引き』スリーエーネットワーク.
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版.
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法―』明治書院.
- 山岡政紀(2001)『日本語の述語と文機能』くろしお出版.
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版.

# 主題のみからなる疑問文について

丹野靖大（東北大学大学院生）<sup>1</sup>

## 1. はじめに

現代日本語の疑問文には、次のような、外形的に主題のみからなる疑問文が存在する。

(1) (お腹を空かせて家に帰ってきて) ただいま！ ごはんは？

(2) (冷蔵庫に入れておいたはずのプリンがない) ねえ、私のプリンは？

以後、このような疑問文を主題疑問文と呼ぶことにする。これまでこのような疑問文は、そもそも体系的な疑問文論において取り扱われないか、仮に取り扱われるにしても、次の(3)-(5)のように、不定語が省略されたもの、あるいは他の疑問文に補填解釈されるものと考えられてきた。すなわち、主題疑問文についての考察は、他の疑問文へとその記述を還元してきたといえる。

(3) 上皇は。(イヅクニオハシマスゾ。) (山田 1908: 1385)

(4) ぼくはビールにするけど、君は？ [どうする] (井上・黄 1998: 106)

(5) 山田は (どこにいるの)。 (益岡・田窪 2024: 176)

これにしたがえば、(1)は「ごはんは何?」、(2)は「私のプリンはどこ?」のように、不定語を含んだ文にパラフレーズして説明されることになる。しかし、そのパラフレーズはあくまで主題疑問文の解釈にまつわるものであり、主題疑問文そのものをあらためて検討すれば、そこには単純に他の疑問文の省略とは考えにくい点もある。したがって、主題疑問文を他の疑問文へと還元して記述することは困難であり、疑問文の世界を十全にえがきだすためには、いま一度、検討の余地があるといえるだろう。そこで本発表では、主題疑問文はそれそのものとしてどのような特徴をもつか、主題疑問文の意味・構造はどのようなものであるかということを明らかにする。

## 2. 先行研究

疑問文の世界を体系的にえがきだそうとする先行研究には、国立国語研究所 (1960)、仁田 (1991)、林 (2020) などがある。しかし、前二者は主題疑問文を体系内で取り扱わない。また、後者は、たとえば「太郎は?」という主題疑問文について、「文脈から「太郎を呼ぶか呼ばないか」と選択肢が決まっている特殊な不明項の特定要求と考える。なお、「太郎はいる?」など Yes/No 疑問文の省略の場合の「太郎は?」は【B】判定要求の疑問文とする」(林 2020: 71) と説明するが、いずれの説明も主題疑問文の説明を「太郎を呼ぶか呼ばないか」「太郎はいる?」といった、意味解釈されたところの他の疑問文に還元しようとするものであり<sup>2</sup>、主題疑問文そのものの説明としては不十分であるといえる<sup>3</sup>。

主題疑問文を直接取り扱った論考には、井上・黄 (1998) がある。井上・黄は、とくに日本語

<sup>1</sup> tanno.yasuhiro.q6@dc.tohoku.ac.jp

<sup>2</sup> ある言語形式そのものの情報の記述と、ある言語形式が解釈された情報の記述は、まったく別のものであることに注意が必要である。この点については、高本 (1996) の「解釈記録形式」の議論を参照。

<sup>3</sup> その他、山田 (1908)、益岡・田窪 (2024) など、他の疑問文へとその解釈を還元するにとどまり、主題疑問文そのものの十分な記述は与えられていない。

の「 $\alpha$ ハ？」疑問文について、先行文脈から解説を対応づけるもの（対比用法）、あるいは名詞句  $\alpha$  の意味論的性質から解説を対応づけるもの（独立用法）の2類があることを指摘している。しかし、井上・黄はもとより「 $\alpha$ ハ？」疑問文（および「 $\alpha$ 呢？」疑問文）の意味解釈メカニズムを明らかにしようとするものであるから、林と同様、主題疑問文を意味解釈されたところの他の疑問文へと還元して論じており、主題疑問文そのものへの説明は十分でないといえる。また、主題疑問文が対比用法・独立用法の広い用法を持ちうることにについて、提題助詞「は」が主題と解説を結びつけることから説明するが、「は」には提題の機能を担わない場合もあることから（cf. 尾上 1995）、このような「は」に重きをおいた説明は過剰であるといえるだろう。

このように、これまで主題疑問文は、そもそも体系的な疑問文論において取り扱われないか、仮に取り扱われるにしても、意味解釈されたところの他の疑問文から述語が省略されたものとして、その記述を還元してきたといえる。そのため、主題疑問文それそのものがどのような特徴をもつかについて、十分明らかになっているとはいえない。そこで、次にその点を検討する。

### 3. 主題疑問文の特徴

#### 3.1 特徴①：解釈の多様性について

ここからは、主題疑問文はそれそのものとしてどのような特徴をもつかということについて、3点述べていくことにする。まず、特徴の一つ目として、主題疑問文それそのものは、さまざまな Yes-No 疑問文、wh 疑問文として解釈されうるような、開放的な問い方をするという点あげられる。たとえば、先の(1)(2)に対して、次のそれぞれの応答が可能であろう（〔 〕はそれぞれの応答に対応する(1)(2)の解釈、〔 〕は省略とみなされてきた部分）。

(6) A: (お腹を空かせて家に帰ってきて) ただいま! ごはんは? (= (1))

B1: 今日はハヤシライスだよ。 [ごはんは〔何〕?]

B2: 今日は外で食べよう。 [ごはんは〔どうする〕?]

B3: もうできてるよ。 [ごはんは〔できてる〕?]

(7) A: (冷蔵庫に入れておいたはずのプリンがない) ねえ、私のプリンは? (= (2))

B1: 机の上に出しっぱなしだよ。 [私のプリンは〔どこ〕?]

B2: ごめん、僕が食べちゃった。 [私のプリンは〔どうした〕?]

B3: あるよ。冷蔵庫の中。 [私のプリンは〔ある〕?]

(6)(7)についてみると、Aの主題疑問文は、話し手にとっての単一の形式、単一の文脈において発話されている。一方 B1-B3 の返答では、聞き手の知識状態に応じ、A に対して複数の応答、複数の解釈が可能であり、かつ話し手もそのような応答・解釈の幅を許容していることがわかる。さらに、とくに(6)(7)の B3 をみると、主題疑問文には、その応答・解釈が Yes-No 疑問文・wh 疑問文の両方でありうる場合もあることがわかる。このように、主題疑問文それそのものは、さまざまな Yes-No 疑問文、wh 疑問文として解釈されうるような、開放的な問い方をするという特徴をもつ。

### 3.2 特徴②：前提命題について

次に、特徴の二つ目として、主題疑問文それそのものは、一般に疑問文がもつとされる前提命題を含意していないという点があげられる<sup>4</sup>。そのことについて、次の例文をみてみよう。

(8) 朝ごはん、何食べた？ (前提命題：朝ごはんには何かを食べた)

(9) 朝ごはん、食べた？ (前提命題：朝ごはんを食べたかわからない)

(8)の疑問文には、「朝ごはんには何かを食べた」という前提が含意されている。このように、一般に wh 疑問文には、wh 部分を存在量化した信念が含意されている。また、(9)の疑問文には、「朝ごはんを食べたかわからない」という前提が含意されている。このように、一般に Yes-No 疑問文には、疑問文が表示する事態が成立するかわからないという信念が含意されている。それでは、この点について、主題疑問文はどうだろうか。次の(10)(11)を検討しよう。

(10) (事件の捜査で被害者の経歴について調べている。助手に) 被害者、仕事は？

(11) (余命宣告を受けて、単身で移住してきた老齢の聞き手に) あ、ご家族は？

(10)についてみると、この主題疑問文には、「(被害者が) 仕事を何かしていた」「(被害者が) 仕事をしていなかったかわからない」という前提命題は含意されていない。(11)についても同様、「家族がどこかにいる」「家族がいるかわからない」という前提命題は含意されていない。もちろん、主題疑問文がそのような前提命題を排除するわけではないが、含意するということもしないのである<sup>5</sup>。あるいは、両者の発話とも、そのような前提命題を含意しないように、主題疑問文であることを積極的に選択しているとも考えられる。このように、主題疑問文それそのものは、一般に疑問文がもつとされる前提命題を含意していないという特徴をもつ。

なお、以上の2つの特徴は、述部を欠く主題疑問文に特有のものであるといえる。ここから、主題疑問文を、述部をもつような他の疑問文の省略であるとはいいいにくいと考えられる。

### 3.3 特徴③：主題疑問文たりうる主題の要件について

最後に、特徴の三つ目として、主題疑問文は、助詞をともなった主題からなり、さらにその主題が広義の説明対象であることがその成立のために必要であるという点があげられる。「は」主題以外の主題が疑問文として用いられうるかについて、(12)-(15)を観察しよう。

(12) (原稿を読んでいてわからないところがある) ねえ、この「磁力線」って？

(13) A: この仕事は到底源太には任せられない。 B: じゃあ、平次なら？

(14) A: ??鳴門ったら？ B: 鯛ですよ、鯛。

(15) ((1)の文脈で) \*ごはん ϕ？ / ((2)の文脈で) \*私のプリン ϕ？

(12)(13)は主題疑問文として成り立つと判断される。(12)の「って」主題による疑問文は引用的な名詞句の内実を説明するもの、(13)の「なら」主題による疑問文は条件的な名詞句が指定さ

<sup>4</sup> 普通、疑問文の前提の議論といえば、(8)に検討するような、wh 疑問文についてのそれに限られる。しかし、疑問文は一般に不明点をもって発せられることから、何が不明であるのかについての情報をもつ。本発表ではそれを広く前提と呼ぶ。wh 疑問文のいわゆる前提は、何が不明であるのかをどこまでを真として述べるかという形で明確に現れる。

<sup>5</sup> たとえば、(9)では、「朝ごはんを食べたかわからない」ということから、「朝ごはんを食べたかもしれない」「朝ごはんを食べなかったかもしれない」という信念が両立して存在している。しかし、(8)では、「朝ごはんには何かを食べた」ということから、「朝ごはんを食べた」信念が含意されるために、「朝ごはんを食べなかったかもしれない」という信念は排除される。一般に wh 疑問文では、wh 部分を存在量化した前提をもつために、このような信念の排除が起こる。

れた場合を説明するものであり、いずれも主題が広義の説明対象であるといえる。

一方、(14)(15)は主題疑問文として成り立ちにくい、成り立たないと判断される。(14)の「たら」主題は、たかだか注意を向ける対象にとどまるといえ、広義の説明対象とはいいいくいため、主題疑問文になりにくいと考えられる。さらに、(15)のような無助詞名詞句は主題疑問文にならない。無助詞名詞句が疑問文として用いられる場合は、主題疑問文としてではありえず、次のような、相手の文言を問い返すことによる疑問文として運用される (cf. 尾上 1973、仁田 1991)。

(16) (「ごはんは？」ときかれて) ごはん？ ああ、ごめん、まだ準備してない！

(17) (「私のプリンは？」ときかれて) 君のプリン？ 僕、知らない。

すなわち、無助詞名詞句は、それが疑問文であること(問い返し疑問文)と、その名詞句が主題として承認されること(φ主題)が両立しえないのである。このように、主題疑問文は、助詞をともなった主題からなり、さらにその主題が広義の説明対象であることがその成立のために必要であるという特徴をもつ。

#### 4. 主題疑問文の意味・構造

##### 4.1 主題についての一つの立場

では、上記の特徴をもつ主題疑問文の意味・構造はどのようなものだろうか。主題疑問文は、外形上は主題のみからなるのであったから、まずは、主題というものをどのように捉えるかという点が問題になる。このことに取り組むために、まずは、尾上 (1995)、堀川 (2012) などに代表される主題論の立場を確認・整理する。そして、その整理をもとに、主題疑問文の意味・構造について記述を与えることにする。

尾上 (1995) は、典型的な題目 (語) の要件として、次のものを掲げている。

(18) [題目 (語) の要件]

① 一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分という立場にある。

①-a 表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。

①-b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。

② その成分が、後続部分の説明対象になっている。 (尾上 1995: 31)

尾上にしたがえば、主題は、文の他の部分よりも線条的に先んじて、特別な位置に固定される成分であり、さらに文の他の部分が説明を与える対象であるような成分であるということになる。たとえば、尾上は、次の(19)を題目-解説関係が成り立つものとみなす。一方、次の(20)の各例文は、(18)の条件のいずれかを満たさないことによって、その関係が成り立たないものとみなす。

(19) a. 太郎は、次郎にりんごをやった。

b. りんごは、太郎が次郎にやった。 (尾上 1995: 32)

(20) a. あっ、あの時計、止まってる！

b. 今日は、とてもめずらしい体験をしました。

c. 太郎には時計をもらった。 (ibid.: 32)



(20a)は条件①－bを満たさず、(20b)(20c)は条件②を満たさない。とくに(20c)のように、「に」「で」「へ」「と」「から」などを含んだ要素は、説明対象とは呼びにくいという<sup>6</sup>。

この議論を引き継ぎ、構造的な卓越という条件を満たした成分が、後続部分とどのような意味の関係によって結ばれるかを検討するのが、堀川 (2012) である。堀川は、主題の構造的側面を、断裂要件と称して、「表現上の立場が明確に異なる前後両項の結合として語る表現スタイルをとる際の前提基盤部分」(堀川 2012: 5) と規定する。これは尾上の条件①を敷衍したものであるが、この要件を満たした成分のありかたについて、堀川は(21)のように述べている。

- (21) 「P ハ Q」という文のうち多くの場合は、表現として「P ハ」の時点でポーズが置かれ、その時点である種不安定な気持ちを抱えたまま一旦中断される。そしてそれに対して後続部分で何らかの解決が図られなければ落ち着かないという気持ちが働く。(中略) 簡単に言えば、「P ハ」によって一種の問いが投げかけられ一旦不安定な状態に置かれた後、その落ち着き先として Q が与えられるということである。

(堀川 2012: 185-186)

尾上・堀川の記述を通して、この立場の主題の捉え方について、次の2点がわかる。第一に、この立場は、主題が、文が線条的に成立することを積極的に利用して、ある段階において措定されるものであること、そしてそれが後続部分をまつものであることを認めている。すなわち、この立場では、主題文の成立に、(22a)のような主題が措かれる段階1、(22b)のような述部が述べられる段階2の2段階性が認められているということになる。なお、以後、例文中の「|」は堀川の意味で断裂が起こっている時点である。

(22) a. 飛行機は |  $\phi$  [段階1]

b. 飛行機は | もう出発した。 [段階2]

第二に、この立場は、堀川の記述にもあるように、主題が措かれる段階1では、文全体は「不安定な状態」であり、主題は（この段階ではまだ述べられていない）後続部分が述べられるための「問い」として機能することになる。このように、後続部分が述べられていない段階を主題文の成立において認めることで、主題をある種の「問い」として位置付けることになる<sup>7</sup>。この主題論の延長線上に、主題疑問文は自然に位置づけることができる。次に、そのことを確認する。

## 4.2 主題疑問文の意味・構造

主題疑問文の意味・構造を、4.1 節に確認した主題論によって問う。まずは構造からみよう。主題文は、主題が措かれる段階1、述部が述べられる段階2からなる。そこで、段階1で主題が措かれた時点では、述部は述べられておらず、「ある種不安定な気持ち」が生じる。その不安定さは、「後続部分で何らかの解決が図られなければ落ち着かない」。主題疑問文は、繰り返せば、

<sup>6</sup> 尾上は、このような「名詞句＋格助詞＋は」の成分を条件②が満たされないことによって題目ではないとみなすが、格助詞の介在によって、その文が表す事態にこの成分が強く牽引されることから、文の他の成分からの意味的卓越が弱く、題目ではないとみなすこともできる。すなわち、この成分は、条件①－aの意味的側面も満たさないと考えられる。

<sup>7</sup> 主題を疑問らしきをもったものとして捉える議論は、畢竟、主題をもつ文が二段階的に成立することを前提とする議論である。この立場には、古くは、佐久間 (1940)、三尾 (1940)、三上 (2003) などがあり、尾上・堀川もこの系列にあると考えられる。一方、山田 (1908)、森重 (1959)、川端 (2004) など、主題を、ひとつのことがらを了解する際に、賓位と同時に存在・分析される主位としてのみとらえる立場では、主題は疑問らしきとともに論じられることはない。

外形上は主題のみからなるのであったから、その構造は、主題文の段階 1 そのものであるといえる。すなわち、主題疑問文は、外形上は主題のみからなるが、それと同時に、その後に述べられることになる構造的スロットとしての述部を内容的に空の状態でもつ。Wh 疑問文が不定語を不明点のありかとするように、主題疑問文は、この構造的スロットとしての述部を内容的に空の状態でもつ<sup>8</sup>ことにより、その述部を不明点のありかとして、疑問文として成り立つのである。

主題疑問文は構造的スロットとしての述部を内容的に空の状態でもつ。一方、述部は言い表されていないのであるから、述部が存在するというのは一見逆説的である。そこで、構造的スロットとしての述部が存在するということが何によって保証されているかを考えたい。それが、3.3 節に確認した、助詞をとまなうという条件である。

(23) a. ごはんは |  $\phi$ ? [名詞句+助詞 |  $\phi$  (=内容的に空の述部)] (= (1))

b. \*ごはん  $\phi$ ? [名詞句+ $\phi$ ] (= (15))

(23a)は助詞をとまなない、主題疑問文として成立しているもの、(23b)は助詞をとまなわず、主題疑問文として成立しないものである。ある言語単位が助詞をとまなうとき、その言語単位が連用単位であることが線条的に保証される。その上で述部が述べられないことで、構造的に続くはずである述部が述べられていないという不安定性が生じる。対して、ある言語単位が助詞をとまなわないとき、その言語単位が連用単位であることは線条的には必ずしも保証されない。その上で述部が述べられないとしても、構造的に述部が続くことが保証されていない以上、上記のような不安定性は生じないのである<sup>9</sup>。そのために、無助詞名詞句は主題疑問文として成立できない。このことから、主題疑問文がそれとして成立している場合には、述部は内容的に空である構造的スロットとして確かに存在しているといえる。つまり、構造的な卓越成分を外形として、同時に述部成分を内容的に空の状態でもち、そこを不明点とする疑問文が、主題疑問文なのである。

では、以上のような構造をもつ主題疑問文の意味とはどのようなものであろうか。とくに、本発表では「は」主題疑問文について検討したい。次の例文をみよう。

(24) 朝ごはん、何食べた? (= (8))

(25) 朝ごはん、食べた? (= (9))

(26) (お腹を空かせて家に帰ってきて) ただいま! ごはんは? (= (1))

(27) (冷蔵庫に入れておいたはずのプリンがない) ねえ、私のプリンは? (= (2))

たとえば、(24)のような wh 疑問文は、「朝ごはんに何かを食べた、その何かとは何か」を問うものである。(25)のような Yes-No 疑問文は、「朝ごはんを食べたかどうか」を問うものである。これらに対して、(26)(27)は何を問うているか。いずれも、「ごはんはどのようにあるか」「私のプリンはどのようにあるか」といったことを問うていると考えられる。尾上 (1995) は、題目語の要件の②で、主題は後続部分の説明対象たるものと指摘している。(26)(27)のような主題疑問

<sup>8</sup> ある述語文が、その構造の一部を内容的に空としてもち、そのことを利用して疑問文として成り立つ場合、従来の研究はそれを wh 疑問文と同一視してきた。実際、不定語の語性を空欄そのものと捉える (尾上 1983) のは自然であって、この議論は正しいともいえる。しかし、本発表で検討した主題疑問文のように、述語文の構造的な空欄性は必ずしも不定語によってのみ表されるとは限らない。したがって、主題疑問文は、従来の疑問文の枠組みに位置付けられない。

<sup>9</sup> 無助詞主題は、冒頭に卓越するものの、それが後続部分をまつものであるとはその時点では決定しない。後続部分が、無助詞主題へと共同注意しているままに述べられ、はじめて後続部分との関係をもつ。言い換えれば、無助詞主題とその述部は、問いと答えの関係にないといえる。無助詞主題が独自の意味領域をもつことの、ひとつの事情であろう。

文は、主題として指定された名詞句がどのようにあるかを問うているから、尾上の意味で説明対象であるといえる。主題疑問文の意味は、主題文の意味に準じて位置付けることができる。

ただし、主題疑問文が問うものは、主題として承認された名詞句がどのようにあるかということに限られない<sup>10</sup>。主題疑問文の答えは、主題として承認された名詞句がどのようにあるかということ以外にも、許容するところがあるのである。次の例文を検討しよう。

(28) ショパンコンクールの優勝者は？ ——あの男です。

(29) (病院で、検査を受けるとき) あの、ネックレスは？ ——外してください。

(28)の問いに対する答えの関係は、三上(1953)以来「指定」と呼ばれ、主題がどのようにあるかを述べるものとは区別して考えられてきた。さらに(29)の主題は、堀川(2012)に「処置課題」と呼ばれるものであって、そのありかたが述べられる通常の主題とは区別して考えられてきた。しかし、主題疑問文は、(28)(29)のような答えも許容する。すなわち、主題疑問文の意味は、主題として承認された名詞句がどのようにあるかを問うとしては狭すぎることになる。主題疑問文は、それよりも意味を広くもつのである。堀川(2012)は、断裂要件を満たした成分が後続部分ともつ意味の関係、およびその意味の関係をもつ主題を大きく二種指摘する。ひとつは「属性の持ち主たるモノー属性」(堀川 2012: 182)という関係をもつ狭義主題(尾上の指摘に相当)、もうひとつは「〇〇の話に限っていえば」「〇〇に関する話題をするならば」(ibid.: 185)という共同注意的關係をもつ広義主題である。主題疑問文の意味は、狭義主題の領域に収まらず、広義主題の領域に進出する。これを踏まえれば、とくに「は」主題疑問文は、まずは〈主題として承認された名詞句について、それにまつわる情報を開放的に求める〉という意味をもつといえる。

## 5. おわりに

本発表では、主題のみからなる主題疑問文を取り上げ、主題疑問文はそれそのものとしてどのような特徴をもつか、主題疑問文の意味・構造はどのようなものであるかということを検討した。前者については、主題疑問文は、(i)さまざまな Yes-No 疑問文、wh 疑問文として解釈されうるような、開放的な問い方をすること、(ii)一般に疑問文がもつとされる前提命題を含意していないこと、(iii)助詞をともなった主題からなり、さらにその主題が広義の説明対象であることがその成立のために必要であることをみた。後者については、主題文が、主題が措かれる段階1、述部が述べられる段階2をもって成立するとする立場に立ったときに、段階1の構造をもち、そのまだ述べられていない述部を不明点とした上で、とくに「は」主題疑問文は、〈主題として承認された名詞句について、それにまつわる情報を開放的に求める〉という意味をもつことをみた。

以下、本発表で検討が及ばなかった点である。第一に、主題文は、主題と述部との間に多様な意味関係をもつことが知られているが、主題疑問文は主題文がもちうる意味のうち、どのようなものを問いと答えの関係として実現しえるのだろうか。すなわち、3.3 節の「主題が広義に説明

<sup>10</sup> むしろ、主題として承認された名詞句がどのようにあるかということ、主題疑問文単独では問いつらい場合もある。

(i) 雪 (generic) は白い。 (形容詞述語文) / \*雪は? ——白い。

(ii) 私 (specific) は幹事です。 (措定の準詞文) / \*私は? ——幹事です。

(i)(ii)のようなものは、従来、主題文の典型とされてきたものである。しかし、これらは、「雪は?」「私は?」と問うことで、「白い」「幹事です」といった述語を引き出すことはできない。主題疑問文の意味的領域の問題のひとつである。

対象である」ということ、4 節の「主題にまつわる情報を開放的に求める」ということの内実を精緻に検討しなければならない。第二に、主題疑問文は、どのような構造的卓越成分をその形式的領域にもつだろうか。もちろん、ここには、どのような提題助詞が主題疑問文として成立しえるかという問題も含まれる。が、その他にも、文頭に構造的に卓越する成分には、提題助詞名詞句のみならず、格助詞名詞句もありうることも、益岡（1987）、堀川（2012）、三原（2022）らによって指摘されている<sup>11</sup>。このような「は」主題以外の成分からなる主題疑問文についても検討が必要である。第三に、主題疑問文は疑問文論上どのように位置付けられるだろうか。主題疑問文は従来の疑問文体系にそのまま位置づけることが難しいのであった。主題疑問文がその位置を確かにもつような疑問文体系についても、あらためて検討しなければならないだろう。

#### 参考文献

- 井上優・黄麗華（1998）「日本語と中国語の省略疑問文「 $\alpha$ ハ？」「 $\alpha$ 呢？」」『国語学』192, pp.93-106
- 尾上圭介（1973）「文核と結文の枠：「ハ」と「ガ」の用法をめぐって」『言語研究』63, pp.1-26
- 尾上圭介（1983）「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院, pp.404-431
- 尾上圭介（1995）「「は」の意味分化の論理：題目提示と対比」『言語』24(11), pp.28-37
- 川端善明（2004）「文法と意味」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法 II』朝倉書店, pp.58-80
- 国立国語研究所編（1960）『話しことばの文型(1)：対話資料による研究』
- 佐久間鼎（1940）『現代日本語法の研究』厚生閣
- 高本條治（1996）「いわゆる「ウナギ文」発話の表意解釈とその記録形式」『国語学』184, pp.107-120
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 林淳子（2020）『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 堀川智也（2012）『日本語の「主題」』ひつじ書房
- 益岡隆志・田窪行則（2024）『基礎日本語文法 第3版』くろしお出版
- 三尾砂（1940）「文章分類についての一つの立場」『コトバ』2(9), pp.23-32
- 三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院
- 三上章（2003）『構文の研究』くろしお出版
- 三原健一（2022）『日本語構文大全 第II巻 提示機能から見る文法』くろしお出版
- 森重敏（1959）『日本文法通論』風間書房
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館

---

<sup>11</sup> 益岡（1987）は総記の「が」名詞句について、堀川（2012）は述語に数量などを含む場合の「が」「を」「に」名詞句について、三原（2022）は後置詞としての「が」「を」について、それぞれ構造的卓越性をもつことを指摘している。

# 日本語における疑似接辞「マンモス」の発達について —用法基盤モデルに基づく分析—

角出凱紀（京都大学大学院生）

## 1. はじめに

日本語の形態素「マンモス」は、<かつて氷河期に生息していた象に似た大型生物>という字義的な意味のほかに、(1) に示されるように<巨大・大規模>という比喩的な意味で使われることがある（以下、下線は筆者）。

- (1) a. 往時 10 万人規模の学生を集めたこのマンモス大学は…  
(『毎日新聞』2025 年 7 月 30 日, 全国版, 東京夕刊)  
b. …大和市と横浜市にまたがる約 3600 戸のマンモス団地だ。  
(『朝日新聞』2025 年 5 月 1 日, 全国版, 東京朝刊)

竝木 (2013: 49) は、「ある語が複合語の前の要素として使われたときに、単独用法とは異なる意味を持つようになる例」の一つとして、この「マンモス」を挙げている。その一方で、ごく少数ながら (2) のような事例が観察されることも事実である。

- (2) a. …マンモス化した古い組織からは出てこない独自の発想…  
(『朝日新聞』2019 年 1 月 3 日, 全国版, 東京朝刊)  
b. …分裂の原因は会のマンモス化に伴い…  
(『読売新聞』2012 年 1 月 12 日, 全国版, 東京朝刊)

ここでも (1) と同様に「マンモス」が<巨大・大規模>という比喩的な意味を帯びているが、派生形態素「-化」を付加された派生語として使用されており、竝木への反例となりうる。そこで、本研究では、共時的なコーパス調査に基づいて竝木 (2013) を実証し、その背景について通時的なコーパス調査に基づいて考察することを目的とする。

## 2. 共時的調査

本節では、形態素「マンモス」の使用実態について共時的な観点から考察を行う。

### 2.1. 方法

調査に使用するコーパスは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所 2025)

である (以下、BCCWJ)。同コーパスで、[マンモス] を検索したところ全 152 件がヒットするが、それらを手作業で次の二つの観点から合計四通りに分類する。第一の基準は [マンモス] が比喩的に使用されているのか、それとも字義的に使用されているのかという点である。第二の基準は、[マンモス] が (1) のような複合語の左側要素として生起しているか否かという点である。各分類の具体例は以下のとおりである。

(3) A. 比喩的かつ複合語

例) マンモス大学、マンモス機、など

B. 比喩的かつ非複合語

例) マンモス化、マンモスのよう (な)、など

C. 字義的かつ複合語

例) マンモス絶滅、マンモスハンター、など

D. 字義的かつ非複合語

例) マンモスの牙、マンモスを描いた、など

最後に、得られたデータに対してフィッシャーの正確確率検定 (Fisher's exact test) を実施することで [マンモス] の用法と生起環境に関連性があるかどうか検証する。データの分析には、R (R Core Team 2025) を用いる。その際の、帰無仮説  $H_0$  及び対立仮説  $H_1$  はそれぞれ以下の通りであり、有意水準は 0.05 とする。

$H_0$ : [マンモス] の用法と生起環境は独立である。

$H_1$ : [マンモス] の比喩的用法は複合語の左側要素として使用されるときに多い。

## 2.2. 結果

調査結果は以下の表 1 の通りである。表中のアルファベットは (3) で示した分類と対応している。また、検定の結果、得られた  $p$  値は  $2.2 \times 10^{-16}$  未満となり、有意水準を大きく下回った。これは、比喩的な [マンモス] が複合語の左側要素として有意に生起しやすいことを示すものであり、竝木 (2013) の指摘の妥当性を支持するものである。

表 1: BCCWJ における [マンモス] の生起頻度

	比喩的用法	字義的用法
複合語	A 58 件	C 6 件
非複合語	B 3 件	D 85 件

### 2.3. 考察

当該の「マンモス」とよく似た性質を示すものとしてゲルマン語学で指摘される疑似接辞 (affixoid) というものがある。例えば、＜頭＞を意味するオランダ語の *hoofd* や＜巨人＞を意味するドイツ語の *Riese* がそれぞれ＜主要な＞と＜巨大な＞という比喩的な意味を帯びるのは、複合語の左側要素として生起するときのみである (e.g. Stevens 2005; Booij and Hüning 2014; Ralli 2020)。

これに関して、構文形態論 (e.g. Booij 2010; Booij and Hüning 2014; Hüning and Booij 2010) では、(4) のような異なる抽象度の構文スキーマ (constructional schema) を想定しており、それぞれ矢印の左側が形式極、右側が意味極を表している。(4a) は任意の2つの要素からなる複合語全般の構文スキーマであり、(4b) はその2つの構成要素が名詞に限定された NN 型複合名詞の構文スキーマである。問題の疑似接辞の構文スキーマは (4c) である。

- (4) a.  $\langle [ [ a ]_{Xi} + [ b ]_{Yj} ]_{Yk} \leftrightarrow [ SEM_j \text{ with relation R to } SEM_i ]_k \rangle$   
b.  $\langle [ [ a ]_{Ni} + [ b ]_{Nj} ]_{Nk} \leftrightarrow [ SEM_j \text{ with relation R to } SEM_i ]_k \rangle$   
c.  $\langle [ [ hoofd ]_{Ni} + [ b ]_{Nj} ]_{Nk} \leftrightarrow [ main_i SEM_j ]_k \rangle$

端的に言うと、ここでは2つの名詞のうち前項が *hoofd* で埋められた形式極と＜主要な＞という比喩的な意味が結びついた一段階具体性が高い構文スキーマが想定されている。これと類比的に考えると、日本語の「マンモス」も同様の構文スキーマ (5) が存在すると予想される (以下、この構文スキーマに言及する際には簡略的に「マンモス+Y」と表記する)。

- (5)  $\langle [ [ \text{マンモス} ]_{Ni} + [ b ]_{Yj} ]_{Yk} \leftrightarrow [ \text{巨大な}_i SEM_j ]_k \rangle$

また、疑似接辞は、その名の通り文法性において語 (根) と接辞の中間に位置付けられる (Stevens 2005: 79)。このことから、件の構文スキーマは「マンモス」の単独 (i.e. 語根) 用法から文法化の過程を経た結果であることが予測される。

### 3. 通時的調査

本節では、前節で提示した仮説について通時的な観点から考察を進める。

#### 3.1. 方法

調査に使用するコーパスは『昭和・平成書き言葉コーパス』(小木曾他 2023) である (以下、SHC)。同コーパスで、「マンモス」を検索したところ全 93 件がヒットするが、このうち比喩的な意味を帯びていると判断できる 58 件を調査対象とする。得られた用例を、「マンモ

ス] が単純語として使用されている事例、派生語として使用されている事例、複合語として使用されている事例の三つに分類・集計し、その通時的な変遷を観察する。

### 3.2. 結果

調査結果をまとめたものが表2及び表3である。この表から、[マンモス] の通時的発達は大まかに三つの段階に分けることが可能である。

表2：SHCにおける比喩的な[マンモス]の生起頻度

成立年	単純語	派生語	複合語	
1933 年	2	0	0	第Ⅰ期
1941 年	0	0	0	
1949 年	0	0	0	
1957 年	4	3	1	第Ⅱ期
1965 年	1	3	12	
1973 年	0	0	9	第Ⅲ期
1981 年	0	0	9	
1989 年	0	0	5	
1997 年	1	0	2	
2005 年	1	0	2	
2013 年	0	0	3	

表3：SHCにおける比喩的な[マンモス]を含む複合語

	事例（粗頻度）
粗頻度≧3	タンカー（6）、企業（4）、大学（4）
粗頻度＝2	会社、都市、ビールパーティー、校、基地、選挙区
粗頻度＝1	部屋、東京、得票、スコアボード、朝日、冷蔵施設、票、酒場、ロッカー室、物産、幼稚園、機構、予備校、寄席、新興住宅地

1933 年から 1957 年までの第Ⅰ期には、[マンモス] が (6) のように単純語として使用されるのが専らであったことが読み取れる。



(6) a. ...この七尺に近いマンモスの様な巨大漢を惨々に撲り付けて...  
(70M 中公 1933\_07028 15230)

b. ...何百万を組織したマンモスのような労働者組織...  
(70M 中公 1957\_10007 48330)

続く 1957 年から 1965 年には、(7-8) のような派生語としての使用例が見つかる。

(7) a. 電通一社が業界で占めているマンモス的な地位...  
(70M 中公 1957\_11025 24170)

b. そのことが電通を今日のマンモス的な存在へ飛躍させた...  
(70M 中公 1957\_11025 36710)

(8) a. 事実、NHK は余りにもマンモス化した。  
(70P 読売 1965\_13029 15080)

b. ...披露宴は、しだいにマンモス化して盛大になってきた。  
(70M 文春 1965\_04034 40210)

さらにその後、[マンモス] の比喩的な使用は複合語の左側要素として生起するときに大きく偏り、(1) で見たような複合語としての使用へと至っている。

(9) a. ...日本を代表するマンモス企業東芝が...  
(70M 文春 1965\_06022 2350)

b. またソ連にはモスクワ大学という途方もないマンモス大学がある。  
(70M 文春 1973\_16033 37600)

また、表 3 に示すように、比喩的な [マンモス] を含む複合語は特定の後項に偏ったものではなく、疑似接辞 [マンモス] の生産性の高さが見て取れる。

### 3.3. 考察

得られたデータに基づいて、用法基盤モデル (usage-based model) の観点から、構文スキーマの発達について考察する。Langacker (2008: 168) によると、構文スキーマはスキーマ化 (schematization) によって獲得される。具体的には、まず典型的な事例であるプロトタイプから何らかの類似性に基づいた拡張事例が生まれる (i.e. 破線矢印)。そして、その両者から共通点が抽出される (i.e. 実線矢印) ことでスキーマが得られる (Langacker 1987, 1993)。その後、更なる拡張事例が生まれると新たなスキーマが抽出されることになり、より抽象度の高いスキーマへと更新されていくことになる (図 1)。

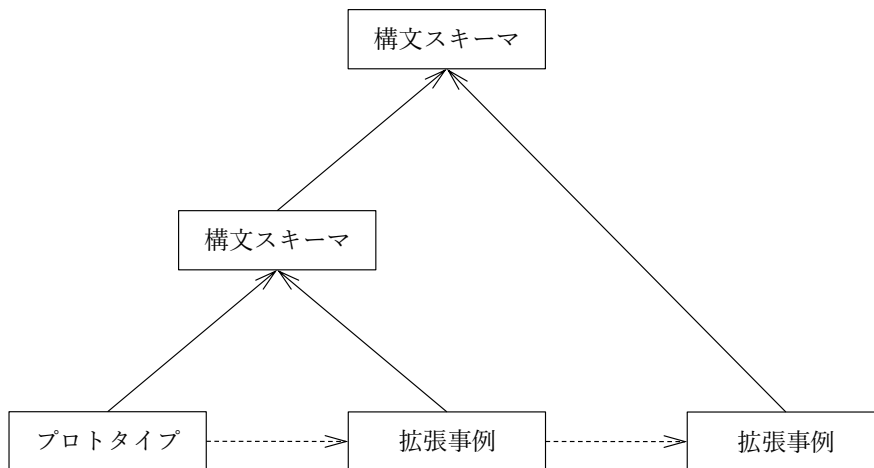


図1：用法基盤モデルにおける通時的構文変化 (Ishizaki 2012: 253 を一部改変)

「マンモス」の比喩的な使用における初期のプロトタイプは (6) に挙げる「マンモスのよう (な)」であったと考えられる。そこからの拡張事例として (7-8) に代表される「マンモスの」や「マンモス化」といった事例が登場するようになる。[-のような] が前接語であるのに対して [-的] と [-化] は派生接辞であるという違いは認められるものの、これらはすべて比喩指標に属している (中村 1977: 450-452) という共通性が見て取れる。したがって、後項の要素が比喩指標であるという制約が課された構文スキーマが抽出される (図2)。

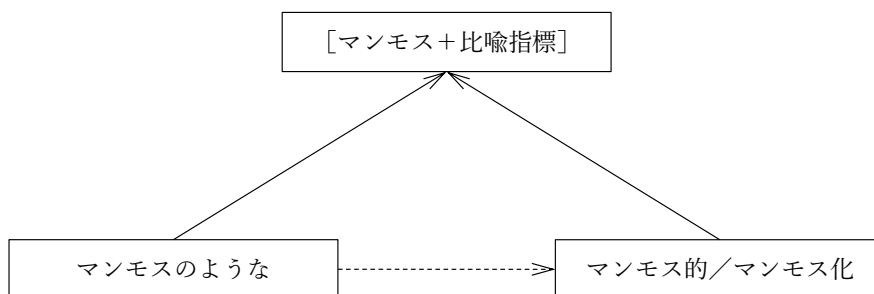


図2：単純語から派生語への拡張

その後、新たな拡張事例として「マンモス企業」や「マンモス大学」といった複合語の事例が登場するようになる。この段階になると、後項はもはや比喩指標である必要がなくなり、そのサポートなしに、＜巨大な・大規模な＞という比喩的な意味を表すようになっている。これにより、後項に幅広い要素が入ることを許す構文スキーマ (5) が抽出される、と分析することができるだろう (図3)。このような抽象度の高い構文スキーマの存在が、表3で

確認した生産性の高さに貢献していることが伺われる。

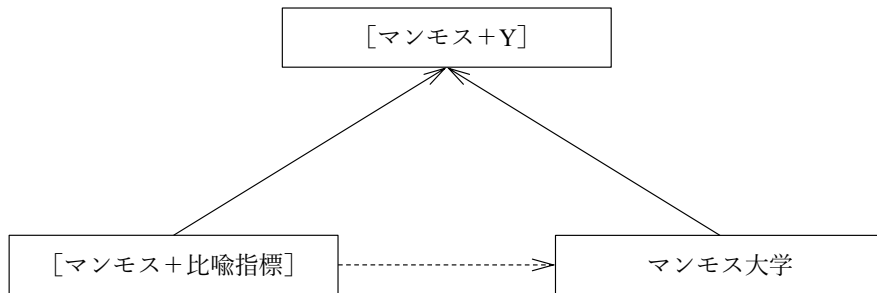


図3：派生語から複合語への拡張

これまで挙げている例がそうであるように、比喩的な「マンモス」を含む複合語のほとんどは NN 型複合名詞である。その点を踏まえると図3の構文スキーマはやや抽象度が高すぎるという批判を受けるかもしれない。しかし、レジスターの問題からか SHC では確認されなかったが、BCCWJ では確認された事例として次のようなものがある。

- (10) a. …今日行ったらちゃんと残っていました♪ (マンモスラッキー！)  
(OY03\_09167 3770)

- b. マンモス疲れましたが、収穫は多かった。  
(OY14\_14776 10280)

これらの事例では後項に形容動詞 (の語幹) や動詞が生起しており、後項は必ずしも名詞のみに限定されているわけではないことが分かる。したがって、図3の構文スキーマは、不当に抽象的であり、誤った予測に繋がるといった批判にはあたらないと考えられる。

#### 4. おわりに

本研究では、コーパス調査を通して竝木 (2013) の指摘を検証した。その結果、共時的調査から「マンモス+Y」という構文スキーマの存在を示唆する結果が得られ、通時的にもそれと矛盾しない結果が得られた。

なお、竝木 (2013: 48-49) は「マンモス」の他にも次のような事例の存在も指摘している。

- (11) a. 豆～：豆電球、豆台風  
b. ヒメ (姫)～：姫鏡台、ヒメユリ、ヒメリンゴ  
c. オニ (鬼)～：オニヒトデ、オニヤンマ、オニユリ  
d. 草～：草野球、草サッカー、草競馬

- e. 赤～：赤恥、赤裸
- (12) a. ～音痴：方向音痴、運動音痴、味覚音痴、経済音痴
- b. ～ソムリエ：野菜ソムリエ、タオルソムリエ、温泉ソムリエ
- c. ～難民：介護難民、ネットカフェ難民、お産難民
- d. ～マラソン：読書マラソン、禁煙マラソン
- e. ～甲子園：俳句甲子園、短歌甲子園、写真甲子園
- f. ～銀座：戸越銀座、上野銀座、谷中銀座

本アプローチがこれらに対しても同じく有効であるかどうかは今後の課題としたい。

## 参考文献

- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・田中牧郎・間淵洋子 (編)2023.『昭和・平成書き言葉コーパス』(中納言 2.7.2, データバージョン 2023.5) <https://clrd.ninjal.ac.jp/SHC/> (2025 年 10 月 5 日最終確認)
- 国立国語研究所. 2025.『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言 2.7.3, データバージョン形態論情報 2021.03, 分類語彙表情報 2025.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2025 年 10 月 5 日最終確認)
- 中村明. 1977.『比喩表現の理論と分類』東京: 秀英出版.
- 竝木崇康. 2013.「複合語と派生語」, 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム No.6』43-57, 東京: ひつじ書房.
- Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert, and Hüning, Matthias. 2014. Affixoids and constructional idioms. In Ronny Boogaart, Timothy Coleman and Gijsbert Rutten (eds.), *Extending the Scope of Construction Grammar*, 77-106. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Hüning, Matthias, and Booij, Geert. 2014. From compounding to derivation: The emergence of derivational affixes through “constructionalization”. *Folia Linguistica* 48(2): 579-604.
- Ishizaki, Yasuaki. 2012. A usage-based analysis of phrasal verbs in Early and Late Modern English. *English Language and Linguistics* 16(2): 241-260.
- Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Langacker, Ronald. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Ralli, Angela. 2020. Affixoids: An Intriguing Intermediate Category. In Livia Körtevelyessy and Pavol Štekauer (eds.), *Complex Words: Advances in Morphology*, 217-237. Cambridge: Cambridge University Press.
- R Core Team. 2025. *R: A Language and Environment for Statistical*. <https://www.R-project.org/>
- Stevens, Christopher. 2005. Revisiting the affixoid debate: On the grammaticalization of the word. In Torsten Leuschner, Tanja Mortelmans, and Sarah De Groodt (eds.), *Grammatikalisierung im Deutschen*, 71-83. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

## 接続助詞「と」の淵源

### —同時の意を表す「と等しく」はなぜ「に等しく」でなかったか—

陳 星宇（名古屋大学大学院生）

#### 1. はじめに

順接条件を表す接続助詞「と」の成立過程において、平安末期から現れた、同時の意を表す「と等しく」という連接形式が重要視されている（岡崎 1980、小林 1996、陳 印刷中）。陳（印刷中）では、この「と等しく」において「と」と「等しく」がそれぞれ変化しただけでなく、その変化は相互に関連しており、共に「と等しく」の固定化に帰着するということが観察されている。しかし、形容詞「等し」は「に」にも「と」にも後続する。にもかかわらず、同時の意を表す接続表現として、「に等しく」ではなく、「と等しく」が固定化した背景や要因はいまだ不明である。接続助詞「と」の源流を「と等しく」における「と」に遡るのであれば、その背景要因を究明しなければ、「と」の成立過程を明確にしたとは言えない。

そこで、本発表では、まず、平安時代において「等し」が取る「に」「と」が使い分けられていた可能性を考える。その使い分けを明確にするために、同時の意を表す「と等しく」以外の「等し」の用例を調査するほか、同じく「[比較対象]（が）[比較対象] {と/に} [比較述語]」という構文を持ち、比較対象の一致を表す「同じ」「似る」、及び、比較対象の不一致を表す「異なり」「劣る」「勝る」を併せて調査する。以下では、まず先行研究を概観し、観察の観点をまとめる（2.1 節）。その観点で「等し」などの比較述語を観察し、従来の観点の限界性を示す（2.1 節、2.2 節）。その上で、本発表の観点を説明し（3.1 節）、本発表の観点から比較述語における「に」「と」の使い分けを解明する（3.2 節）。最後に、同時の意を表す「と等しく」の様相を再度検討し、その位置づけを考え直す（4 節）。

#### 2. 従来の観点からの観察

##### 2.1 先行研究と観察の観点

平安時代の比較述語が取る格助詞「に」「と」について、先行研究は、それぞれの意味・用法と例文を列挙するものがほとんどであり（山田 1913:332,344、小田 2015:379,390）、「に」「と」の違いに言及していない。山田（1936）と鈴木（1975）は、比較述語を直接の考察対象とする論考ではないが、「に」「と」の違いを論じている。

山田（1936:431）では、「父とあがむ」においてあがめられる人は実際の「父」ではないとして、「と」は「状態の如き外的の変更」を示し、「相対的のもの」に使用すると述べている。それに対し、「親になる」の場合には、実際にそうなるとして、「に」は「性質の変化の如く専ら内面的の事情」を示し、「絶対的のもの」に使用すると述べている。山田（1936）は、変化を念頭におき、実際の変化の有無によって「に」「と」の使い分けを説明している。しかし、「等し」をはじめとした比較述語は、状態や性質を表し、いずれも「静的」な語である。そのため、変化を含まない比較述語を分析するにあたり、変化に基づいた観点をそのまま用いることには限界がある。鈴木（1975）も変化に注目する研究であるが、その用法分類では「ニ（ト）ナル」の前接部分が示されている。そこから、「実質的用法」<sup>1</sup>では、格助詞の前接部分は人物（太政大臣、親、大人）や事物（灰、酔ひ、くさはひ）を表す名詞であるのに対し、「形式的用法」では、数量（二三日、二）、程度（～程）、時間（二月、明後日）、

<sup>1</sup> 鈴木（1975）では「なる」が実際に「変わって生じる」という意味を表すかどうかを基準に、「実質的用法」「形式的用法」を分類している。

空間（坂本、身の上）を表す名詞であるという傾向があることが分かる。平安時代において「ニナル」は「実質的用法」にも「形式的用法」にも用いられるが、「トナル」は特殊の場合を除けば、殆ど実質的用法にしか用いられないという鈴木（1975）の指摘を踏まえると、「に」は、人物や事物を表す名詞にも、数量、程度、時間、空間を表す名詞にも後続するが、「と」は、ほとんど人物や事物を表す名詞のみに後続する、という使い分けが見出せる。

では、比較述語が取る「に」「と」の場合、このような相違が見られるであろうか。2.2 節では、この観点から格助詞の前接部分を見る。

## 2.2 格助詞の前接部分の様相

平安時代における「等し」「同じ」「似る」「異なり」「劣る」「勝る」の用例を調査した結果<sup>2</sup>、全ての比較述語に「に」の例があるが、「と」の例が複数あるのは「等し」「同じ」だけであった。「異なり」「劣る」「似る」には1件のみがそれぞれ存在する。「勝る」には「と」の例がない。そのため、「に」「と」の使い分けを探究するにあたり、以下では、「に」「と」両方の用例が複数ある「等し」「同じ」の様相を中心に見ていく。

「等し」と「同じ」の「に」「と」の直前に現れる要素の実例を観察すると、「等し」「同じ」とも、前述の観点のうち、人物と事物のみが見られ、数量、程度、時間、空間は見られなかった。「等し」は表1、「同じ」は表2の通りである。

表1 「に/と等し」の前接部分の実例と数量

助詞	人物	事物
に	合計：7 弥行、よからぬ子ども、如來、七夕 つめ、一条殿、三十三天の微妙の天 女、中納言殿	合計：5 むかしの故朝臣の仕うまつられし 手、御衣の裾、十方の恒河沙、桂の 裾、ありつる法の師の覚え
と	合計：21 わが君、人*5、侍従の君、かの侍従 の君、仲忠が祖、仲忠の朝臣、弥 行、藤中將、いぬ宮、われ、后*2、 思ふこといはでぞただにやみぬべき われ、遜位の帝、太上天皇、ただ 人、帝	合計：16 天、南、丈*2、棟、わが弾く手、涼 に賜ひつる琴、はし風（琴の名）、桂 の裾、後ろ、小桂、たとへくる露、 こと木ども、さ水、地、軒
合計	28	21

表2 「に/と同じ」の前接部分の実例と数量

助詞	人物	事物
に	合計：13 この監、大臣の君、まこと（実の 子）、白川の大員、西三条大臣、本院 の大員、枇杷大臣、九条殿、一条撰 政、これ（春宮大夫頼宗）、三ところ （他の三人の客人）、御供の人、涼	合計：5 ひざう（非常）、常、棚一つ、今、初 霜
と	合計：6 亡き人、大夫殿、かの人、このいぬ 宮、尚侍の殿、法師	合計：3 はじめのそへ歌、右大將のさま、今 の世のこと
合計	19	8

※「\*」に後続する数字はその例の件数を示す。

表1の「と」の「事物」の欄には「南」「後ろ」のような空間を表す名詞があるが、例（1）（2）に示すように、「南にある物（町や木）」「背丈」をそれぞれ指している。また、表2の

<sup>2</sup> 具体的な調査方法や検索条件を末尾の「使用データベース・テキスト」に示す。

「に」の「事物」の欄に「常」「今」のような時間を表す名詞があるが、例 (3) (4) に示すように、「常のこと」「今のもの（大海の摺裳、織物の唐衣など）」をそれぞれ指している。以上のことから、そのような時間や空間によって事物を指す例を「事物」に分類した。

- (1) 宮より北面、大きな山のほとり、山より下まで常磐の木、色を尽くしたり。町のほど、木の数、**南**と等し。（うつほ物語〔九〕新全集 p.397）
- (2) 御額髪のゆらゆらとこぼれかかりたまへるに、裾はやがて**後ろ**と等しく引かれゆきて、（狭衣物語 巻一〔二三〕新全集 p.57）
- (3) **常**に同じことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをばいかがはせむ。（20-源氏 1010\_00010 162160）
- (4) 女房の同じき大海の摺裳、織物の唐衣など、昔より**今**に同じやうなれども、これはいかにしたるぞとまで見えける。（栄花物語 巻第六 新全集 p.303）

表1と表2から、「等し」の場合にも、「同じ」の場合にも、人物、事物を表す例があり、数量、程度、時間、空間そのものを表す例がないことが分かる。つまり、「に」は、人物や事物を表す名詞にも、数量、程度、時間、空間を表す名詞にも後続するが、「と」は、ほとんど人物や事物を表す名詞のみに後続する、という鈴木（1975）で見られた使い分けは、比較述語においては見られないのである。

### 3. 本発表の観点からの観察

2節では、先行研究を検討し、その観点は比較述語における「に」「と」の問題を解決するにあたっては限界があることを示した。では、比較述語において「に」「と」はどのように使い分けられているのだろうか。この節では、新たな観点を導入する。

#### 3.1 観察の観点と用法分類

2.2節では、比較述語の中で、「と」の例が複数あるのは「等し」「同じ」だけであることが分かった。これは平安時代における「等し」が取る格助詞を研究するにあたり、「等し」のみを観察するのでは十分でなく、他の比較述語の中に位置付けて見ることの重要性を示唆している。

一方、「等し」と「同じ」の用例に「に」「と」の例が共に存在することは、「等し」と「同じ」自身の用法によって「に」「と」が使い分けられている可能性を示唆している。そのため、個々の比較述語自体の用法にも注目する必要がある。観察対象となる比較述語には形容詞、形容動詞、動詞がある。このような性質の異なる形式を比較するために、文中の修飾関係に注目して、「に」「と」に後続する各比較述語の全用例を3種類に分類した。以下、それぞれ用例に即して詳しく説明する。

例(5)では、比較対象として「十方の恒河沙」を「に」で標示し、「十方の恒河沙に等しき」の修飾によって「諸仏の国土」の数量（多さ）が示されている。例(6)～(10)も同じく比較述語を含む句によって後続部分が修飾されている。本発表では、このような、比較形式が後続部分を修飾する用法のうち、修飾先が体言である用法を「連体修飾用法」と呼ぶ。

- (5) 大光明を放ちて、周遍して王舎大城と此の三千大千世界と、十方の恒河沙**に等し**き諸佛の国土とを照耀したまふ。（20K 西金 0830\_01002 6760）
- (6) むらさきのゆゑに心をしめればふちに身なげん名やはをしけきとて、大臣の君**に同じ**かざしをまゐりたまふ。（20-源氏 1010\_00024 19680）
- (7) 花にあかぬ嘆きはいつもせしかども今日の今宵**に似る**時はなし（20-伊勢 0920\_00001 69240）
- (8) 起居のけはひたへがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露**にことならぬ**世を、何をむさぼる身の祈りにかと聞きたまふ。（20-源氏 1010\_00004 85200）

(9) すゝ虫におとらぬ音こそなかれけれ昔のあきを思ひやりつゝ (20W 後撰 0955\_18 018 20680)

(10) 「このごろの風にたぐへんには、さらにこれにまさる句ひあらじ」とめでたまふ。  
(20-源氏 1010\_00032 21610)

一方、例 (11) ～ (15) では、比較述語を含む句によって修飾された後続部分是用言である。本発表では、このような、後続部分を修飾する用法のうち、修飾先の後続部分が用言である用法を「連用修飾用法」と呼ぶ。

(11) これは、北の方の御私物。綾、錦、絹、綿、糸、縑など、棟と等しう積みて、取り納めぬる蔵なり。(うつほ物語「一三」新全集 p.415)

(12) 『いまだ三十の期におよばず』といふ詩を、さらにこと人に似ず誦じたまひし」など言へば、(20-枕草 1001\_00155 22990)

(13) いとどしう春雨かと思ゆるまで、軒の雪に異ならず濡らしそへたまふ。(20-源氏 1010\_00036 167940)

(14) いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らずいかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。(20-源氏 1010\_00015 44060)

(15) 親にまさりてあはれに、とざまかうざまにいたくよろしうなさむと思したる、限りなくうれしきこと。(20-落窪 0986\_00004 103640)

例 (5) ～ (15) と異なり、例 (16) ～ (18) では、比較述語は全て完結した文の述語である。また、例 (19) では「髪丈と等しくて」と「年十五歳より内なる」は並列関係にはあるが、修飾関係にはない。例 (20) では、「世の人に似ぬ」に接続助詞「を」がついており、それによって後続節との関係が表されている。例 (16) ～ (20) のような例では、比較述語が単に述語として機能することで一致している。本発表では、前述した 2 つの「修飾用法」と対比して、このような用法を「非修飾用法」と呼ぶ。

(16) 宮より北面、大きな山のほとり、山より下まで常磐の木、色を尽くしたり。町のほど、木の数、南と等し。(例 (1) の再掲)

(17) これかれも、さまざま劣らずしたまへれば、時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。(20-源氏 1010\_00039 227230)

(18) つれなさはうき世のつねになりゆくを忘れぬ人や人にことなるとあり。(20-源氏 1010\_00032 85100)

(19) 裕の袴着たる童、髪丈と等しくて、年十五歳より内なる、丈等しく姿同じき十人。  
(うつほ物語「一〇」新全集 p.399)

(20) 姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、(20-源氏 1010\_00009 31760)

### 3.2 格助詞の後続部分から見た用法別の様相

#### 3.2.1 「等し」と「等し」以外の対立

各比較述語における用法別の「に」「と」の用例数を表 3 に示す。

表 3 各比較述語における用法別の「に」「と」の用例数

比較述語	非修飾		連用修飾		連体修飾		合計
	と	に	と	に	と	に	
等し	9	7	14	3	14	2	49
同じ		6			9	12	27
似る		160	1	89		95	345
異なり		24		11	1	13	49



劣る	1	113		61		57	232
勝る		88		32		48	168
合計	10	398	15	196	24	227	870

※空欄は用例がないことを意味する（以下同じ）。

表3では「同じ」の「連用修飾用法」が空欄となっている。これは、調査範囲において「同じ」の「連用修飾用法」の用例が見出されなかったためである。「同じ」の「連用修飾用法」を除くと、全ての比較述語の全ての用法に「に」の例が見られる。一方、「と」の例となると、「勝る」には見られず、「似る」「異なり」「劣る」には以下に示す例(21)(22)(23)の各1件のみがそれぞれ存在する。この数はそれぞれの合計の用例数と比べると、極めて少ないと言える。

(21)「ただ今は、亡き人と異ならぬ御ありさまにてなむ。渡らせたまへるよしは、聞こえさせはべりぬ」と聞こゆ。(20-源氏 1010\_00039 165690)

(22)「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、(後略)(20-源氏 1010\_00022 125170)

(23)かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て<sup>3</sup>、春秋と咲くがをかしきなり。(20-枕草 1001\_00065 2050)

それに対し、「同じ」の「連体修飾用法」には「と」の例が9件と一定の用例がある。ただし、「と同じ」が修飾する主名詞は、表4に示すように、「やう」「さま」に偏っている(例(24)(25))。一方、「に同じ」の場合、例(26)のような、主名詞が「やう」の例もあるが、それに偏らず、人、もの、ことなどがあり、多様性に富む。このことから、「連体修飾用法」の場合、「と同じ」の使用は限られており、「に同じ」がより一般的な形式であると言える。

表4 「に」「と」別「同じ」で修飾される主名詞

助詞	修飾される主名詞
に	事、こと*2、心、かざし、大納言、ごと、色*2、轆轤ひきの御器、位、やう
と	やう*5、ほど、さま*2、口

(24)この歌はかくれたる所なんなき、されどはじめのそへ歌とおなじやうなればすこしさまをかへたるなるべし(20W 古今 0905\_00001 14660)

(25)法師と同じさまなる御有様なれど、(栄花物語 卷第二十二 新全集 p.40)

(26)女房の同じき大海の摺裳、織物の唐衣など、昔より今に同じやうなれども、これはいかにしたるぞとまで見えける。(例(4)の再掲)

一方、「等し」では、例(27)～(32)に示すように、全ての用法に渡って「と」が「に」と同じ構文環境下で用いられている。用例数から見ても、「と」のほうが多い。そのため、「等し」では、[比較対象]を「と」で標示する例がより一般的であると言える。

(27)【連体】大光明を放ちて、周遍して王舎大城と此の三千大千世界と、十方の恒河沙に等しき諸佛の國土とを照耀したまふ。(例(5)の再掲)

(28)【連体】天と等しき水、湛へて浸すとも、一筋流るべからず。(うつほ物語【一】新全集 p.379)

(29)【連用】おとども、「むかしより同じ所にて見たてまつり馴れたれば、よからぬ子

<sup>3</sup> 「かにひの花」について、『新全集』の注で「未詳。現在の岩<sup>がんび</sup>菲の花(なでしこ科)かと言うが、それなら藤に似ていない。ただ、春咲きと秋咲きとがある点はふさわしい」と述べている。これを踏まえると、例(23)において、似ているのは花の様子ではなく、花の咲く季節であると解釈できる。そのため、「似る」を含む句「藤の花といとよく似て」と後続用言「春秋と咲く」との間に修飾関係が認められ、「連用修飾用法」に分類した。

どもに等しくこそ思ひきこゆれ。…」(うつほ物語〔三九〕新全集 p.123)

(30)【連用】髪は少し色にて、さはらかなる下がりばなどあてやかにて、小桂と等しうぞ見ゆる。(うつほ物語 巻三〔一八三〕新全集 p.41)

(31)【非修飾】それを帝聞こしめして、(朱雀)「この遊ばす手むかしの故朝臣の仕うまつられし手に等しくなむありける。(うつほ物語〔三〇〕新全集 p.254)

(32)【非修飾】大将、次に横笛を声の出づる限り吹きたまふ。面白き折に合ひて、あはれすごう、これも世になく聞こゆ。(中納言は)聞き驚きたまひて、笛はむかしわれと等しうこそありしか。(うつほ物語〔二〇〕新全集 p.551)

以上のことから、比較述語において「等し」と「等し」以外の対立が見られる。「等し」では「に」「と」の混用が認められる一方、「と」がより一般的である。「等し」以外の比較述語では、「に」の例がより一般的であり、「と」の例があっても、数が極めて少ないか、限定された条件下で使われている。

### 3.2.2 「修飾用法」と「非修飾用法」の対立

比率から見ると、「等し」の各用法において「に」「と」の用例分布が異なっている。まず、「等し」の用法別の用例数を表5に示す。

表5 「等し」の用法別「に」「と」の用例数

助詞	連体修飾	連用修飾	非修飾
に	2 (12.5%)	3 (17.6%)	7 (43.8%)
と	14 (87.5%)	14 (82.4%)	9 (56.3%)
合計	16 (100%)	17 (100%)	16 (100%)

※ ( ) 内の数字は用例数の比率である。

表5では、「連体修飾用法」と「連用修飾用法」において「に」の占める割合はそれぞれ12.5%、17.6%であって大差が見られない。一方、「非修飾用法」になると、「に」の割合は43.8%となり、倍以上である。それと対照的に、「と」は「連体修飾用法」と「連用修飾用法」においてそれぞれ87.5%、82.4%を占めているが、「非修飾用法」になると、56.3%に過ぎない。また、「と」の「非修飾用法」の9例中、7例の出典が『うつほ物語』に集中しているが、「に」の場合は7例中、2例が『うつほ物語』である。この作品を除けば、「非修飾用法」における「に」の比率は71.4%に上る。つまり、「等し」の「修飾用法」と「非修飾用法」の間には、「に」「と」の比率の差が認められる。「等し」の〔比較対象〕の標示は、「修飾用法」において「と」の比率が顕著に高く、「非修飾用法」において「に」の比率が高い。

つまり、「等し」の場合、「修飾用法」と「非修飾用法」の対立が見られる。「に」は「非修飾用法」に偏り、「と」は「修飾用法」に顕著に偏る。

### 3.2.3 「等し」以外の比較述語における「と」の用例について

3.2.1 節では、「等し」以外の比較述語において少ないものの「と」の例が存在することを見た。この節では、そのような例外について説明を試みる。

後世では「と」が用いられるところに、時代を遡ってみると、「に」が用いられていたことが多くの研究で指摘されている。阪倉(1971:18-19)は、「同じ」について「に同じ」のように格助詞「に」を取るのが普通であるが、『古本説話集』に格助詞「と」を用いた例が見え、『徒然草』などには「に」「と」の両形が用いられ、その後「と同じ」が普通になったという。また、鈴木(1975:70)にも、上代から中古にかけて「ニナル」の勢力が「トナル」に侵食されたという記述があった。さらに、此島(1966:80-83)では、「さわさに」「つらつらに」「うらうらに」のような擬声・擬態語を受ける場合や、「雨に降りきや」「あきつ羽に

<sup>4</sup> 「と」の比率と「に」の比率を合わせて100%を超えているのは、四捨五入のためである。

にほへる衣」のような名詞を受けて状態的に下へ続ける場合、「桜花ふりにふるとも見る人」「ただひえにひえいりて」のような同一動詞を重ねる場合、といった複数の用法で本来「に」だったところが「と」に取って代わられたことが指摘されている。

以上のことを踏まえ、「同じ」「似る」「異なり」「劣る」における「と」の用例も、「に」から「と」への移行という大きな歴史的変化における一現象と位置付けられる。

#### 4. 「と等しく」の位置づけ

以上の使い分けを踏まえ、同時の意を表す「と等しく」の前史に議論を戻す。形容詞「等し」が「に」にも「と」にも後続するにもかかわらず、同時の意を表す定型表現が「に等しく」ではなく、「と等しく」であった背景要因について考える。

(33) 十七日の暁に、大弐の三位、「あからさまにまかでて、……立ちかへり参らむ」

とて、出で給ひぬ。暮るとひとしく参り給ひて、(讃岐典侍日記、上)

(岡崎 1980:2)

例(33)は先行論で、同時の意を表す「と等しく」の初出とされる例である。この例では、後続する動作(参り給ひて)が行われる時間が、「等しく」の節(暮るとひとしく)によって付加されている。つまり「連用修飾用法」に分類できる用例である。「等し」では、「と」が全体的に多い上に、「と」は「等し」の「修飾用法」に偏るため、例(33)の「等しく」は、「と」と組み合わさる確率が「に」より顕著に高い条件下にあると考えられる。

また、「等し」を比較述語の中に位置づけて見ると、「等し」だけが一般的に「と」に後続し、「同じ」などが一般的に「に」に後続するというこの時代の使用状況があった。これにより、同時の意を表す「と等しく」の特異性はさらに浮き彫りになる。今回の調査範囲では「に」「と」を取る「同じ」の「連用修飾用法」の用例が見つからなかったが、もし、そのような用例があったとしても、「等し」と同様の意味を表す場合、少なくとも平安時代において、前接するのは「と」ではなく、「に」の可能性が高い。そのため、「等し」だけが「と」と組み合わさる蓋然性を持っている。

#### 5. まとめと今後の課題

本発表は、形容詞「等し」は「に」にも「と」にも後続するにもかかわらず、同時の意を表すのに「に等しく」という形式がないという言語事実について、平安時代では「等し」の比較対象を標示する「に」「と」が使い分けられていた可能性を考えた。その使い分けを明確に把握するために、「等し」「同じ」「似る」「異なり」「劣る」「勝る」を調査した。調査の観点として、まず先行研究を検討し、「に」「と」の前接名詞の特徴を観点として用例の観察に用いたが、有意義な差異を見出すことができなかった。

そこで、新たな観点を導入し、観察した結果、次のような使い分けがあることを明確にした。まず、「等し」とそれ以外の対立が見られる。「等し」以外の比較述語では、「に」の例がより一般的であり、「等し」では「に」「と」が用法を問わず使われるが、「と」が全体的に多かった。さらに、「に」「と」を用いる「等し」では、「に」は「非修飾用法」に偏り、「と」は「修飾用法」に偏っている。この観察は、同時の意を表す接続表現として「に等しく」が成り立たなかったという史的事実の背景に説明を与えるだけでなく、「等し」を比較述語の中に位置付けて見ることで、順接条件を表す接続助詞「と」の成立における類語との相違、「と等しく」の特異性も確認できる。

しかし、「に」「と」の使い分けの一端が明らかになった一方、なぜ「等し」と「等し」以外、「修飾用法」と「非修飾用法」の間に対立が存在したのか、そのような対立について、資料の性質がどう関与しているのかなどの問題も現れた。全て今後の課題としたい。

使用データベース・テキスト

- ・「日本語歴史コーパス (CHJ)」で時代を「平安時代」に限定し、次の検索方法で検索（用例は目視で採取）：キー：語彙素="等しい" (2025/1/15 閲覧)、キー：語彙素="同じい"、"似る"、"異"、"劣る"、"勝る"；前方共起：書字形出現形="に"、"と"；キーから 5 語以内 (2025/7/24 閲覧) ※「等し」の用例は陳（投稿中）の資料を使用しているので、検索方法は他の比較述語と異なっている。※CHJ の底本：「新編日本古典文学全集」「古典選集本文 DB 正保版本「二十一代集」「翻刻註解<下>」
- ・「新編日本古典文学全集」小学館：ネットアドバンス「JapanKnowledge Lib」  
<https://japanknowledge.com/lib/search/basic/> 詳細（個別）検索、キー「等し」「斉し」「均し」(2023/12/29 閲覧)、「ひとし」(2025/3/29 閲覧)、「{に/と} 同」「{に/と} {異/こと}」(2025/5/26 閲覧)、「{に/と} {は/も} {異/こと}」(2025/7/28 閲覧)、「に似」(2025/7/21-22 閲覧)、「{に/と} {似/に}」「{に/と} {劣/おと}」(2025/7/22 閲覧)、「{に/と} {勝/まさ}」(2025/7/23 閲覧)、「{に/と} {えしも/は/はこよなく/も} {勝/まさ}」「{に/と} は {劣/おと}」(2025/7/27 閲覧)、「{に/と} {も/をさをさ} {劣/おと}」「{に/と} {いとうよう/いとよく/いとよくも/かは/こそ/ぞ/は/も/や} {似/に}」(2025/7/28 閲覧) ※「JapanKnowledge Lib」による、格助詞と比較述語の間に他の語が介在する用例の検索では、CHJ の検索結果を参考した。CHJ の調査では、各比較述語と格助詞との間の介在語は次のようである。ほとんど全ての比較述語が「は」「も」の介在語を持つため、全ての比較述語に対して検索した。「は」「も」以外の介在語について、2 件以上ある語を対象に検索した。全ての介在語を網羅的に検索していないが、検索対象外の介在語は少なく、本発表全体の結論に影響しないと考えられる。**【等し】**（合計 3 件）：「こそ」2、「いと」1；**【同じ】**（無）；**【似る】**（合計 76 件）：「いとうよう」5、「いとよく」6、「いとよくも」2、「いみじう」1、「か」1、「かは」4、「こそ」5、「こそいみじう」1、「ぞ」2、「ぞ、いとうよう」1、「なむ」1、「は」14、「も」29、「もいとよく」1、「もなどか」1、「や」2；**【異なり】**（合計 9 件）：「は」6、「はいと」1、「はなほ響き」1、「も」1；**【劣る】**（合計 44 件）：「いたう」1、「こそ」1、「さえぞ」1、「なほ」1、「は」10、「も」22、「もいたう」1、「や」1、「やは」1、「わがたもところ」1、「をさをさ」3、「我」1；**【勝る】**（合計 42 件）：「いくらも」1、「いますこし心寄せ」1、「いま一際」1、「えしも」2、「きりや千重」1、「さへもこそ」1、「は」16、「は、こよなく」1、「はあれこそ」1、「はいと多く」1、「はえ」1、「はこよなく」2、「は多く」1、「も」9、「もどう」1、「も数」1、「恋は」1

#### 参考文献

- 岡崎正継（1980）「順態接続助詞「と」の成立について」『国学院雑誌』81（3）pp.1-11  
 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院  
 此島正年（1966）『国語助詞の研究：助詞史の素描』桜楓社  
 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房  
 阪倉篤義（1971）『講座国語史 3 語彙史』大修館書店  
 鈴木泰（1975）「中古に於ける動詞「ナル」の用法と助詞「ニ・ト」の相関」『国語と国文学』52（2）pp.56-71  
 陳星宇（印刷中）「接続助詞「と」の成立における「と等しく」の固定化について」『名古屋大学国語国文学』118  
 山田孝雄（1913）『平安朝文法史』東京宝文館  
 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』株式会社宝文館

## 複合動詞「～ツクス」の通時的変遷

池田來未（神戸大学）

### 1. はじめに

現代語では、以下のような「ツクス」を後項にとる複合動詞（以下、「～ツクス」）が用いられる。

- (1) 皿にあったごはんを食べ尽くした。（作例）
- (2) 彼の著作を読み尽くした。（作例）

(1) は「皿にあったごはん」をすべて食べたこと、(2) は「彼の著作」という範囲限定があり、それらをすべて読んだことを表す。現代語において「～ツクス」は前項で示された動作の範囲を想定し、その範囲内に属するものの残りがなくなるまで、全てについて前項の動作を行うことを表す例が頻繁に用いられる。

一方、古代語では次のような「～ツクス」が存在する。

- (3) かしづかれたまへる御おぼえのほども、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば、  
(20・源氏 1010\_00014, 57870)

(3) は「語り尽くす」という動作が「限りなく」行われる、つまり限界が存在しない（くらい多い）ということを表している例と考えられる。同じ「～ツクス」形式であっても(3)は、(1) (2) とどういった違いがあるのだろうか。

本発表では、上代から近代の「～ツクス」の用例を調査し、「～ツクス」の基本的な意味特徴はどのようなものか、また(1) (2) と(3)のような違いはどのような条件によって生じるのかを検討した。調査の結果、「～ツクス」は基本的には前項動詞の動作・行為を徹底<sup>1</sup>的に行うことを表すが、対象範囲が明確であるか、網羅することを表す副詞を伴う場合には対象範囲の網羅（残余 0）を表すと結論づけた。

本発表では、まず第 1 章で概要を述べ、第 2 章で先行研究と問題の所在を確認する。第 3 章で調査資料・調査方法を示し、第 4 章で「～ツクス」の上代から近代までの調査結果を示す。さらに第 5 章で「～ツクス」の意味特徴について検討し、第 6 章でまとめを行う。

### 2. 先行研究と問題の所在

複合動詞「～ツクス」について扱った論考は現代語を対象としたものが主であり、渡辺・陳（1991）、陳（1992）、山崎（1995）、由本・今泉（2002）、由本（2005）、中島（2009）、杉村（2009）、玉城（2010）、関口（2014）、姫野（2018）等がある。以下、2 つのグループに分けて一部を紹介する<sup>2</sup>。

#### 2.1 A グループ:「～ツクス」の「残余 0(網羅)」を基本義とする説

渡辺・陳（1991）は、『「知りつくす」の場合の後項要素『つくす』は補助的に変わっているが、『全部、残りなく、すべて』という意味は単純動詞として使われる場合の『つくす』と変わりが無いようである』（p.20）のように、残余 0 になるよう網羅的に行為を行うことと同じ仕組みで説明できるとしている。また、山崎（1995）では、「～尽くす」について、「すべて、全部、すっかり、完全に」（p.86）といった語と共にしやすく、「『あらかじめ想定された対象の数量的な残余が無くなることによって、事態の終結を迎える』といった意味合いが強い」（p.86）といった指摘がなされている。姫野

<sup>1</sup> 「徹底」という語は、由本（2005）、玉城（2010）を参考にしている。以下同じ。

<sup>2</sup> 関口（2014）は「心理動詞」が完了・完遂を表す動詞と結合するかどうかを主として論じており、「つくす」の基本的な意味をどう解釈しているのかをこの論文から判断するのは困難である。ただ、「愛する」と「つくす」が共起した場合、「たとえ対象（相手）が消滅しても、『愛』は消滅していないと推測できる」（p.23）と言及しており、残余 0 でない用法をみとめているようである。

なお、「～ツクス」は統語的複合動詞か語彙的複合動詞かという観点からも注目を集めている（森山 1988、影山 1993、由本・今泉 2002、由本 2005 など）。ただ、古代語において統語的複合動詞・語彙的複合動詞の別を判断することが困難であるため、今回は統語的・語彙的の別については深く追及しない。

(2018)<sup>3</sup>では、「～きる」について論じる中で、「『～きる』と似たものに『～尽くす』や『～果たす』があるが、これらは、残余がなくなる、ゼロになるというほうに重点があり、文脈によってはマイナス評価の意味を持つことが多い」(pp.178-179)と指摘している。また中島(2009)は、「～つくす」の特徴として、常に目的が達成されること、行為・動作が徹底に行われること、最終段階で行為・動作の対象がなくなること、主体者の意志により行為が行われ、目標の到達は主体者の達成感に支えられるということが挙げられるという(pp.10-11)。杉村(2009)は、姫野(1999)を引きつつ、残余がなくなるという意味が「一尽くす」の基本的な意味であるとしている(p.85)。また、杉村(2009)は「一尽くす」に「行為の完遂」と「複数の事態」という2用法をみとめ、「冷え尽くす」「惚れ尽くす」「悩み尽くす」「疲れ尽くす」<sup>4</sup>のような例について、これらは「『消費が経済のあらゆる面で冷える』、『彼のあらゆる面に惚れる』、『あらゆることについて悩む』、『たくさんの疲れがたまった』といった複数の意味を持つ強調表現」(p.93)であると指摘している<sup>5</sup>。

これらの先行研究では、用語等いくつかの違いはあるものの、残余が0になることを基本的な意味と認定しているという点で共通している。

(1)(2)にも挙げたように、こと現代語においては、「～ツクス」の対象の残余が0になったことを表すと同時に、網羅的に行為を行ったことを表す例がよく用いられる。この点で、Aグループの説は「～ツクス」の意味的特徴を反映しているようにも思われる。しかし、少数ではあるが対象範囲や行為の達成時点が客観的に決定できない例は現代語にも存在し、それらの例をすべて残余0(網羅)にあてはめて説明できるのかという疑問が残る。

## 2.2 Bグループ:「～ツクス」の「残余0(網羅)」を基本義としない説

由本(2005)は「『V+尽くす』の意味には『何かを無くす』と『ある行為を徹底的に行う』という二種類があるように思われるが、だからといって『尽くす』に二種類を区別する必要はない」(p.273)とし、さらに「直観的にはV1が表わす事象の結果何かが無くなるという意味が第一義的であるように見えるが、本書では、自動詞をV1とした場合に生じる意味—すなわち、V1が表わす事象が『徹底的に行われた』—の方が『尽くす』の本質的意味」(p.277)であると指摘している。

また、玉城(2010)は「『しつくす』は前項要素にさしだされる出来事が〈徹底的〉であることを表現している」(p.10)とし、「前項要素が抽象的な活動を表わす場合は、はたらきかけの度合いが徹底的でその結果の状態が極みに達することを表現している」(p.11)という。

## 2.3 問題の所在と本研究の目的

以上のように、「～ツクス」の基本義をどう認定するかでAグループとBグループの大きく2説に分かれる。なお、管見の限りでは、Aグループに属する説のほうが多く見られるようである。

本研究は上代から近代にかけての通時的な調査を通して、各時代にどのような意味特徴を持つ例が存在するのかを確認する。そのうえで、先行研究のAとBどちらの説の蓋然性が高いのかを検討する。また、「～ツクス」に残余0を表す例とそうでない例が存在するとして、なぜそのような違いが生じるのかを検討する。

## 3. 調査資料・調査方法

調査には、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』(以下「CHJ」)を用い、検索ツールには「中納言」を使用した(詳細は稿末参照)。

短単位検索を用い、「キー」に「品詞-大分類-動詞 AND 活用形-大分類-連用形」、「後

<sup>3</sup> 姫野(1999)の復刊。

<sup>4</sup> 用例は杉村(2009:93)より。

<sup>5</sup> 杉村(2009)の「複数の事態」では複数の種類のものを網羅したという例も挙げられている。徐(2018:230)でも「飲み尽くす」に飲み物の種類に言及する例が多数存在することが指摘されている。

方共起 1」（キーから 1 語）に「語彙素-尽くす」を指定し、「検索対象-全て」とした<sup>6</sup>。

なお、CHJ からの用例を示す際には「原文前文脈」「原文キー」「原文後文脈」を示す。また、用例の後ろの括弧にサンプル ID と開始位置を示した。時代区分は CHJ に従う。また、見やすさのため発表者が傍線を付した箇所がある<sup>7</sup>。

また、中世については『抄物資料集成』の調査も行った（調査には索引を使用した）。

#### 4. 「～ツクス」調査結果

上代から近代の「～ツクス」の用例数は【表 1】の通りである（pmw を算出するため、ここでは抄物を除いた）。

【表 1 時代別「～ツクス」延べ語数・各時代総語数・pmw<sup>8</sup>（抄物除く）】

時代	延べ語数	各時代総語数	pmw
奈良	4	126117	31.72
平安	54	1083425	49.84
鎌倉	41	1152410	35.58
室町	15	367386	40.83
江戸	31	924346	33.54
明治	353	9565898	36.90
大正	146	5005342	29.17
昭和	11	407973	26.96

※室町時代に、次のように「ツクス」が連続して現れる例があった。「『はまのまさごハ、よミつくしつくすとも、」（40-虎明 1642\_05019, 17570）。これは「読み尽くす」「尽くし尽くす」が連続していると判断し、2 例とカウントした。

【表 1】から分かるように、「～ツクス」の用例は既に奈良時代から見られ、用例数が 4 と少ないものの、pmw では 31.72 という少なくない値を示す。そして平安時代には 54 例に増加し、pmw も 49.84 と調査した年代では最も大きい値を示す。その後も明治時代まで pmw は 30-40 の値を示し、大正・昭和時代になると若干値が低くなるものの、「～ツクス」は奈良時代から昭和時代にかけて用いられていることが分かる。

ここからは、実際の時代ごとの「～ツクス」の用例を見ていく。

##### 4.1 上代

上代には、「～ツクス」が計 4 例見られた。

(4) 大土採雖尽世中尽不得物恋在【大地】は取り尽くすとも世の中の尽くし得ぬもの

<sup>6</sup> 検索条件式は以下の通りである（バージョン 2024.03）。

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%")

AND 後方共起: 語彙素="尽くす" ON 1 WORDS FROM キー

WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

<sup>7</sup> また、補足的に「語彙素-尽くす」、「検索対象-全て」のみ指定した短単位検索を行ったため、その検索結果について一部言及する部分もある（バージョン 2025.03）。ただ、こちらのバージョンは語数表のデータが予稿集執筆時点で公開されていないこともあり、あくまで一部言及するに留める。

（検索条件式: 「キー: 語彙素="尽くす"」

WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"）

<sup>8</sup> 総語数については、国立国語研究所「語彙統計: バージョン 2024.03」<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/chj-wc.html>（2025 年 10 月 3 日閲覧）の「短単位語数表 csv データ（バージョン 2024.03）

（CHJ\_SUW\_WC\_202403.csv）」をもとに“freq2”の時代ごとの総語数を算出した。pmw は中俣（2021:97）を参考に、粗頻度/各時代の総語数\*1,000,000 として計算した。なお、pmw は小数点第 3 位を四捨五入した。

は恋にしありけり<sup>9)</sup>】(10・万葉 0759\_00011, 25550)

(4) は、は「大地」をすべて「採」するという状況を仮定している例である。ただ、ここでの「採り尽くす」はあくまで仮定の状況であり、ここでの「～ツクス」はこれに続く「恋」が「尽くし得ぬ」ものであるということを強調するために用いられていると考えられる。

(5) 進入倍支奥地毛不究尽之弓敗軍費粮弓還参来。【進み入るべき奥の地も究め尽さずして、軍を敗り粮を費して還り参来つ。】(10・宣命 0797\_40062, 630)

(5) の対象範囲は「進み入るべき奥の地」という具体的な場所として示されてはいるが、そこに至らず帰ってきたということを表す。

このように、(5) (6) のように前項が他動詞であり、その対象範囲が具体的に想定できる例は存在するものの、いずれも仮定あるいは否定で用いられている。

また、上代に見られる「～ツクス」は対象範囲が明確なものだけではない。

(6) 伎美能御代と加久左波奴安加吉許己呂乎須売良弊尔伎波米都久之弓都加倍久流於夜能都可佐等許等太弓氏佐豆気多麻敝流宇美【君の御代御代隠さはぬ明き心を皇辺に極め尽くして仕へ来る祖の職と言立てて】(10・万葉 0759\_00020, 56240)

(7) 朕一人乎昇賜比治賜部流厚恩乎母朕世尔波酬尽奉事難之。【朕一人を上げ賜ひ治め賜へる厚き恩をも、朕が世には酬い尽し奉る事難し。】(10・宣命 0797\_22025, 3180)

(6) (7) はそれぞれ「極める」「酬いる」を前項にとり、「明き心」「恩」を徹底的に極める、あるいは徹底的に酬いることを表すと考えられる。(4) (5) の目的語が具体物であるのに対して、(6) (7) の目的語となっている「明き心」「恩」は抽象的なものであり、その範囲が不明確である。

上代の時点で、対象範囲の限定が具体的な例が 2 例あったものの、仮定の状況あるいは否定文で用いられており、実際には残余 0 という状況の実現には至っていないようである。また、対象範囲がそもそも確定できない、抽象的な例も 2 例存在した<sup>10)</sup>。

## 4.2 中古

中古に至っても、上代のように対象範囲を決定することが困難な例や、対象範囲を確定できたとしてもその網羅(残余 0)は実現に至らない例が多い。さらに、前項に実質的な動作を表さない「する」がくる例も見られる。

(8) 所どころの御棧敷、心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物なり。(20・源氏 1010\_00009, 14630)

(9) おなじことの、おなじ白さなれど、しざま、人の心々見えつつしつくしたり。(20・紫式 1010\_00001, 63220)

(8) (9) は具体的な動作や行為を表すのではなく、その徹底ぶりを表すと考えられる。また、具体的な対象範囲が示されたうえで、実際にその網羅を表す例が少数ではあるが出現する。

(10) 浦伝ひのもの騒がしかりしほど、そこらの御願ども、みなはたし尽くしたまへれども、(20・源氏 1010\_00035, 57560)

(10) は「そこらの御願ども」と範囲を規定したうえで、「みな」という副詞で補い、それらがすべてかなったことを表すと考えられる。

## 4.3 中世

中世については、【表 1】のほか抄物の調査も行った。抄物では、「毛詩抄」に 9 例、

<sup>9)</sup> 【 】内には CHJ の「前文脈・キー後文脈」を示した(以下同様)。

<sup>10)</sup> そして、対象範囲が不明瞭という特徴は、複合動詞に限ったことではない。上代の「〇ツクス」(前項動詞を伴わず、単独で用いられている例)全 18 例のうち、肯定文で用いられている 14 例の多くが「心」「恋」といった範囲を規定するのが困難な抽象的なものが目的語となっていた(「心」9 例、「恋」3 例)。この場合、残余 0 という目標が達成されたかを客観的に判断することは困難である。



「蒙求抄」に 2 例、「四河入海」に 24 例が見られた。

中世には、「皆」のような副詞を伴い、対象範囲を網羅する〈完遂〉を表す例が複数見られるようになる。

- (11) 員ノ随兵ヲ率シテ既ニ戦カフ間、胡録ノ箭皆射尽シテ、可為キ方モ無カリケルニ、(30・今昔 1100\_17003, 1530)
- (12) 其後矢だねのある程射つくして、打物ぬいてたたかひけるが、敵あまたうちとり、(30・平家 1250\_09017, 5040)
- (13) Sōfō furufodoniyōyō fitcuijuomo cotogotocu cuitcucuxi, mata yaguiūni totte cacari, coreuomo curai fataxedomo, 【さうさうする程に漸う羊をも悉く食い尽くし、又野牛に取って掛かり、これをも食らい果たせども、】(40・天伊 1593\_00069, 1400)
- (14) 一本不枯柏ハ九朝ヲ閱盡ス (四河入海 23-4, p.21<sup>11</sup>)

(11) ~ (14) のように、前項が他動詞であり、さらに対象となる範囲が明確である場合には、その範囲を網羅した結果、範囲内の残余が 0 になったということを表す例も見られる。ただ、中世にも対象範囲が不明確な例や網羅や残余 0 の実現には至らない例も多く存在した。

- (15) 長月の初めのことなれば、霜枯れの草むらに、鳴き尽くしたる虫の声絶え絶え聞こえて、(30・とは 1306\_05001, 1660)
- (16) 一萬二萬作ケリトモエ云盡サヌ程ニ只ソト申ス (毛詩抄 17, p.42)

(15) は鳴くという動作を甚だしく行うことを表す例と考えられるが、範囲が不明であるうえ、動作を達成した時点を判断することも困難である。これは、徹底的に、たくさん鳴いているという意味であると考えられる。(16) は詩を大量に作っても言いつくすことができないという否定を表しており、残余 0 の状態は実現していない。

中世に至っても、対象範囲や行為の終点が明らかでない例が多い。ただ、明確な範囲の規定がある場合や副詞による修飾がある場合には、対象範囲の残余 0 と解釈できる例もあった。

#### 4.4 近世

近世以降も、対象範囲の残余 0 (網羅) を表す例と徹底を表す例が共に見られる。

- (17) たくはへの限りみな食尽し果は親子の衣類手道具。(53・人情 1836\_01001, 8850)
- (18) 引き合ひし手をなほ締めて、涙の限り泣きつくす (51・近松 1707\_14001, 8120)

(17) は「花廻志満台」の例であるが、「たくはへの限り」をすべて「食尽し」たことを表す。(18) は「泣く」という自動詞につき、たくさん、甚だしく泣いたことを表すと考えられる。

#### 4.5 近代

近代に至っても、範囲や終点の明らかでない、次のような例が存在する。

- (19) 一小隊の兵士を率て偵察に行き野となく山となく歩き盡しけるほどに (60P 読売 1895\_B3037, 4080)

(19) は、「野となく山となく」とあるように、範囲を限定せず徹底的に「歩」いたことを表すと考えられる。

また、(20) のように副詞によって残余 0 が示されている例も存在する。

- (20) 恩主の御剩餘なりと思ひてか、残りなく食ひ盡して再び悲しげに萎れ居たり、(60M 太陽 1895\_02040, 74360)

(20) は「残りなく」という副詞から、対象の残余が 0 になるまで「食」ったことが分かる。

<sup>11</sup> 二段になっているほうのページ数を示した。

## 5. 「～ツクス」の意味特徴

ここまで見てきたように、「～ツクス」は上代から近代にいたるまで前項動詞の動作・行為を徹底的に行うことを表す例が見られた。一方で、範囲の規定や副詞がある場合には対象範囲の残余 0（網羅）を表す例も見られた。

### 5.1 「～ツクス」が残余 0（網羅）を表す条件

ここからは「～ツクス」がどのような場合に対象の残余 0 を表すのか検討する<sup>12</sup>。

- (21) ここかしこに詣でなどするところには、このことを申しつくしつれば、いまはましてかたかるべき年齢になりゆくを（20・蜻蛉 0974\_00009, 34000）

「申しつくす」は「申す」程度の甚だしさ、つまり何回も継続的に「申し」ていたということを表す。そして、ここでは客体は変化しておらず、あくまで主体の「申す」という動作の前項で表される動作の徹底ぶりを表す。

次に、客体の変化を表すと考えられる例を見ていく。

- (22) 有国ふか入りしてたたかふほどに、矢だね皆射つくして、馬をも射させ、（30・平家 1250\_07007, 16490）

ここでは、「矢だね」という対象が明示され、さらに副詞「皆」によってそれが網羅されることが表されている。このように、中世から近代には、対象に直接変化をもたらす動詞が前項に来ており、さらに時には副詞を補うことで対象の残余 0 になることを表す例が複数存在した。ただ前述の通り、中世以降 (21) のような例がなくなったわけではなく、依然として前項動詞の徹底を表す形式として用いられている。

第 2 章で「～ツクス」の先行研究を A・B の 2 グループに分けて紹介したが、残余 0 を表す用法が、行為を徹底することを表す用法（範囲は客観的に決定することが難しい）に先行しているとしたら、歴史的には残余 0 を表す例が初期に多く、しだいに対象範囲が抽象的な用法へと拡大されていく、という方向性が想定されるのではないかと考えられる。しかし実際には、上代・中古時点で既に、対象範囲が不明確で残余 0 かどうかを確認できない例が多く存在した。ここから、「～ツクス」は対象の変化を含意しない、主体による動作・行為の徹底を表す意味が基本であって、範囲を規定する語句や副詞といった要素に支えられる形で、客体の変化を表しうのではないかと考える。

### 5.2 「ツクス」の自他

次に、「～ツクス」の自他対応に注目する。まずは後項である本動詞「 $\phi$ ツクス」について見ていきたい。

さて、『日本国語大辞典』第二版では「つく・す」を「『つきる（尽）』の他動詞形」（p.300）としている。また、釘貫（1996:275）の「表Ⅲ」でも「（1）他動化派生自→他」として「つく（尽）」「つくす」が挙げられている。

一方で、「ツク（ツキル）」と「ツクス」が自他対応していないという意見も存在する。現代語を対象とした調査を行った杉村（2010）は、「『尽くす』と『尽きる』は『直す』と『直る』、『残す』と『残る』などと違い、自他の対応をしているわけではない」（p.50）と述べている。また、杉村（2010）は注 1 で次のような指摘をしている。

「力を尽くす」と「力が尽きる」はいずれも自然な日本語であるが、「車を直す→車が直る」や「ご飯を残す→ご飯が残る」のように「行為→結果」の関係にあるわけではない。なお、「愛想を尽かす→愛想が尽きる」は自他の対応をしている（p.60）

このように、杉村は「ツキル」と「ツクス」は自他対応していないと指摘する。「ツ

<sup>12</sup> 以下の記述は、意味素性の組み合わせとして総合的な意味を分析することを提案している森山（1988）を参考にしている。なお、玉城（2010）も「しつくす」について「前項要素が他動詞で具体的な動作の場合、客体の数量や範囲は限定されていて与えられた数量や範囲すべてに動作が及んで客体がなくなれば、その動作は終了限界へ達する」（p.10）と指摘している。

ク（ツキル）・ツクス」の自他対応を考えるにあたり次の先行研究を参考にしたい。

青木（2010）は天野（1987）等の論考を引用しつつ「Ⅰ 有対他動詞」「Ⅱ 無対他動詞」「Ⅲ カス型動詞」の他動性を比較している。青木（2010）の説明を引用する。

Ⅰの有対他動詞は、対象の変化までが範囲として括られるが、Ⅱの無対他動詞は、対象の変化までは範囲として括られない。（中略）カス型動詞が表す動作とは、（中略）動作主側にのみ焦点をあてたものであり、従来の「他動詞」の枠組みとはいささか異なっているものと考えられる（p.119）

「～ツクス」については、もともと「ツク」という自動詞から派生したと考え、  
「Ⅰ有対他動詞」に該当するため、対象の変化も含意すると推測される。  
しかし、ここまで見てきた通り、「～ツクス」は客体の変化（残余 0）を必ずしも含意しない。ここから、他動詞「ツクス」は自動詞「ツク（ツキル）」に対応していたとしても、前掲の青木（2010）の「Ⅰ 有対他動詞」の特徴から逸脱した、特殊なものであると考えられる。

### 5.3 形態的特殊性

では、なぜ「～ツクス」は有対他動詞でありながら特殊な意味を持つのであろうか。  
前述のように、釘貫（1996）は「他動化派生」の例として「つく→つくす」を想定しているが（p.275）、これは「つく tsuku」に「-su」が付いた形である。一方で、釘貫（1996）が「表Ⅲ」に挙げた他動化派生の例のうち 2 音節のものは、次のようにほとんどが「-asu」を付加している。釘貫の「表Ⅲ」に挙げられている例の一部を挙げる。  
（23） ある（荒）—あらず、いづ（出）—いだす、かる（枯）—からす<sup>13</sup>

このように、第Ⅲ群動詞における 2 音節語の他動化派生のうち、「-asu」添加の形は 17 例存在する一方で、「-su」形式は「ふるす（古）」「つくす（尽）」「すぐす（過）」の 3 例にすぎない（釘貫 1996:275 より）。このように、「つくす」は他動化派生の中でも形態的に特殊な位置を占めるのではないだろうか。

ヤコブセン（1989）は形態論上の対立と意味的な分担があることを指摘し（p.219）、「無標識の方が意味的に『正常』の事態を表すのに対して、有標識の方が比較的『異常』な事態を表すのが普通である」（p.219）と指摘している。

釘貫の「表Ⅲ」において「-asu」形式が圧倒的に多いことから形態的に「-asu」が無標、「-su」が有標であると考えられる。そして、（23）で挙げられている「あらず」「いだす」「からす」は、対応する自動詞の表す状態への変化を含意しているのに対し、「ふるす」「つくす」「すぐす」は必ずしも主体による客体の積極的な変化を含意しないのではないだろうか。「古る」「過ぐ」といった時間経過は人間が意志的に操作できるものではなく、「尽くす」もここまで確認してきたように、必ずしも客体の変化を伴わなかった。「～ツクス」が有対他動詞でありながら客体の変化を問題にしないという特殊な性質を持つ背景には、このような形態的な差が影響しているのではないかと考えられる。

## 6. まとめ

ここまで、上代から近代の用例をもとに「～ツクス」の基本的な意味は前項動詞の徹底、程度の甚だしさであると結論づけた。「～ツクス」が対象の残余 0 を表すこともあるが、それは範囲限定が明確である、あるいは「皆」のような副詞が補われるといった場合にのみ生じるものであった。また、上代・中古といった初期の例はそのほとんどが客体ではなく主体の行為に焦点を当てたものであり、また（3）のように限界の存在しないことを明示的に示す例も存在した。この結果をうけ、本研究は先行研究の由本（2005）や玉城

<sup>13</sup> （23）は釘貫（1996:275）の「表Ⅲ」をもとにまとめた。なお、釘貫（1996:275）の「表Ⅲ」に挙げられている「(1)他動化派生」のうち、2 音節の自動詞が 23 例あり、「-asu」「-su」添加の他に「うく（穿）」—「うかつ」、 「おく（起）」—「おこす」、 「おふ（生）」—「おほす」がある。

(2010) の指摘するように、本研究では「〜ツクス」の基本的な意味は、残余 0 (客体変化) を含意せずあくまで主体の行為の甚だしさを表すものだと考える。

本研究は、現代語で一致した見解が見られなかった「〜ツクス」について、通時的調査から検討したという点で有意義であると思われる。ただ、「ツクス」が客体の変化を含意しないことに形態的な有標性が関わっているのではないかと提案したが、実際に形態的な差が意味的な差にどう影響しているのかまでは明らかにできていない。また「ツカス」や「〜キル」「〜ハタス」等他形式との比較も必要である。これらは今後の課題としたい。

#### 【調査資料】

国立国語研究所 (2024) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2024.03, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2024 年 7 月 31 日確認) (動詞連用形+ツクス)  
国立国語研究所 (2025) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2025.03, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2025 年 8 月 6 日確認) (ツクス)  
抄物 (「毛詩抄」「蒙求抄」「史記抄」「四河入海」) 岡見正雄・大塚光信編 (1971・1976) 『抄物資料集成』第 1・7・別巻、清文堂

#### 【参考文献】

青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』 (ひつじ研究叢書〈言語編〉第 90 巻) ひつじ書房  
天野みどり (1987) 「状態変化主体の他動詞文」『國語學』151, pp.1-14 (110-97)  
影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 (日本語研究叢書【第 2 期第 4 巻】) ひつじ書房  
釘貫亨 (1996) 『古代日本語の形態変化』 (研究叢書 193) 和泉書院  
杉村泰 (2009) 「コーパスを利用した複合動詞『一尽くす』の意味分析」『言語文化論集』31(1), pp.83-95  
杉村泰 (2010) 「コーパスを利用した複合動詞『一尽きる』の意味分析」『言語文化論集』31(2), pp.49-60  
関口美緒 (2014) 「完了・完遂の局面動詞との結合関係から分析した『心理動詞』のアスペクト」『言語と交流』17, pp.14-30  
玉城あゆみ (2010) 「『終了』を表す複合的な動詞について」『琉球大学留学生センター紀要 留学生教育』7, pp.1-15  
中島紀子 (2009) 「複合動詞に関する一考察—『〜つくす』の意味・用法—」『国文学踏査』21, pp. 1-12 (140-129)  
中俣尚己 (2021) 『『中納言』を活用したコーパス日本語研究入門』ひつじ書房  
日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001) 『日本国語大辞典』第二版 第 9 巻、小学館「つく・す【尽・竭・殫】」pp.300-301  
姫野昌子 (2018) 『新版 複合動詞の構造と意味用法』研究社 (姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 (ひつじ研究叢書〈言語編〉【第 16 巻】) ひつじ書房 の復刊)  
森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院  
山崎恵 (1995) 「終了の局面を取り立てる局面動詞について」窪田富男教授退官記念論文集編集世話人編『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』専門教育出版, pp.77-91  
由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語 モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 (ひつじ研究叢書〈言語編〉【第 40 巻】) 、ひつじ書房  
由本陽子・今泉志奈子 (2002) 「『V+尽くす』複合語について—統語的か、語彙的か—」『自然言語への理論的アプローチ—統語編—』 (言語文化共同研究プロジェクト 2001) pp.77-90  
渡辺義夫・陳軍 (1991) 「動作性からアスペクト性へ——局面動詞の一考察——」『福島大学教育学部論集人文科学部門』50, pp.11-26  
ウェスリー・M・ヤコブセン (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版, pp.213-248  
徐敏徹 (2018) 「『飲み倒す』とはどういう意味なのか : Google 検索を利用した日本語の低頻度複合動詞の分析」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3, pp.221-235, <https://repository.ninjal.ac.jp/records/1672> (2025 年 10 月 10 日閲覧)  
陳軍 (1992) 「アスペクト的な意味『終了』を表す局面動詞の一群について」『言文』39, pp.1-12

※本研究は JSPS 科研費 JP24K16081 の助成を受けたものです。

# 古代日本語における動詞基本形の捉え方 —不完成相か、完成相か、〈未来〉を表すのか—

ふくしま たけのぶ  
福嶋 健伸（実践女子大学）

## 1. 問題の所在—古代日本語の動詞基本形を、どのように捉えるべきか—

古代日本語の動詞基本形<sup>\*1</sup>は、不完成相を表すという説がある。

- (1) アスペクトの点では、ツ・ヌ形が完成相であるのに対して、はだかの形は不完成相である。  
(鈴木 (2009:457)、下線は福嶋)

一方で、当該の形式が、完成相を表すことを示唆する研究もある。

- (2) なお、あえて古代語動詞基本形について、形態論的にテンス・アスペクトを規定すれば、完成相非過去という現代語と同じ位置づけになることになろうが、形態論的に考えるためには、まずは形態分析が不可欠である。

(大木 (2009:31)、下線は福嶋)

大木 (2009:29) によると、「何を示せば事態の存在を描いたことになるのかということの範囲が古代語と現代語では若干異なっている」ということであり、その若干の異なりというのが、事態の成立まで含意するか否かである（古代語の動詞基本形は事態の成立まで含意する）。それ以外のアスペクト的な意味は、大差ないという説である。

鈴木 (2009)、大木 (2009)、共に、中古和文系資料を主たる調査資料としており、どちらも用例をもとにした帰納的方法により考察を進めている。しかし、それにもかかわらず、結論は正反対といえる。さらには、土岐 (2010:205) 等が「古代語の基本形はこれらの（福嶋注：ノダ構文等の）表現性すべてを含む未分化な表現形式として、現代語より遙かに雑多な用法的広がりをもつもの」と主張する。加えて、野村 (2016:8-12) では、「完成相現在」という概念が論理的に存在することを述べ、「具体的な動きを表す無標の「ス」は、「ひとまとまり性」を持っている（「完成相」的である）場合が多い。」（野村 (2016:12)）としながらも、「本稿（福嶋注：野村 (2016) のこと）自体はこの種の「ス」を完成相現在と規定しているわけではない。本稿では「ス」を「不完了相」とするだけである。」（野村 (2016) の注 6）と述べて、結論として、古代語の動詞基本形は、「不完成相」とは異なる概念である「不完了相」と主張している。

不完成相か、完成相か、未分化か、（完成相現在のように見えても）不完了相か。結局、どうなっているのかよく分からない。これは看過できない事態であり、今一度、当該形式の捉え方を考えてみる必要がある<sup>\*2</sup>。

## 2. 正反対の先行研究を対立させることなく整理する—「一般言語学的手法」—

\*1 動詞基本形（はだかの形ともいう）の範囲は、各研究によって微妙に異なっている。本発表では、文中と文末の別なく、他の形式が接続していない動詞の終止形と連体形を、動詞基本形と考えている。本発表では、一応、係り結びの例（連体形）も、動詞基本形に含めているが、データ上は別枠で処理をする。

\*2 なお、古代日本語の動詞基本形に関しては、仁科 (2014) が、「無標性」「無色性」という概念を用いて整理を行っている。他の形式との対立において分布が決まる側面を無標性とし、動詞基本形という形式自体が有する「動きの概念を表す」という側面を無色性とするのである。本発表は、この仁科 (2014) の考え方を踏まえた上で考察を進める。

仮に今、不完成相 (imperfective) という枠を設定し、その典型的なものとして、動作継続 (progressive) という枠を考えたとする。現代日本語で、この枠の中に入る形式は、～テイルだといえる。では、古代日本語では、どの形式が動作継続の枠に入るのか。一般的な回答としては、動詞基本形 (及び、金水 (2006) が指摘する～タリの一部) となるだろう。

このように、ある概念の枠 (ここでは動作継続) を設定して、その枠を通して、各言語の形式を見るという手法を、福嶋 (2025) では、「一般言語学的な手法」と呼んでいる。この手法で考えた場合、古代日本語において、不完成相の典型例ともいえる動作継続の枠に入ってくる主たる形式は、動詞基本形である。現代日本語では～テイルとなるところに、古代日本語では動詞基本形が出現しており、動詞基本形の分布が、古代日本語 (不完成相) と現代日本語 (完成相) とで正反対であるようにみえる。鈴木 (2009) 等の指摘は、この面白さを捉えようとしたものであり、一般言語学的な手法として「不完成相」の枠を設定して古代日本語をみた場合、動詞基本形は不完成相であるという鈴木 (2009) 等の指摘は、誤りとはいえないだろう。

一方で、今度は、一般言語学的な手法で、「ひとまとまり (完成相的)」の側面を捉えてみたい。分かりやすい例としては、「タクシス」の「継起的」な例があると思う (タクシスに関しては工藤 (1995・2025) 等参照)。まず、現代日本語の例で説明したい。

(3) 先生が教室に入る。始業のチャイムが[鳴る／鳴っている]。

「鳴る」という形 (動詞基本形) だと「先生が教室に入った後、チャイムが鳴った」と考えられる。一方、「鳴っている」という形 (～テイル) だと「入る」という出来事が生じた時点で、既に「鳴っている」わけであり、出来事は同時的である。完成相であれば継起的、不完成相<sup>3</sup>であれば同時的となり、アスペクトとタクシスは相関する。

このような「タクシスとして継起的」という枠を設定して、古代日本語をみるとどうなるか。以下に『土佐日記』 (小学館の新全集) の例を示す。

(4) 「幣を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。かく奉れれども、もはら風やま  
で、(略) 楫取、またいはく、「(略)」といふ。 (『土佐日記』p.47)

文脈上、明らかに「いふ」「奉る」「いふ」という順で、物語が継起的に展開している。このように、「タクシスとして継起的」という枠の中にも、古代日本語の動詞基本形は入ってくるのである。詳しくは次節で確認するが、当時の動詞基本形には、このような例が問題なく見られる。もし、当時の動詞基本形が現代日本語の～テイルに近いものであれば、「言っている」「奉っている」「言っている」のような解釈になり、継的に物語が進むことはないはずである (「タクシスとして継起的」の枠には入らないはずである)。

「タクシス」という用語こそ使用していないものの、このような、古代日本語の動詞基本形にみられる、現代日本語の～テイルとの異なり (さらには、現代日本語の動詞基本形との近さ) を捉えようとした研究が、大木 (2009) や野村 (2016) といえる (特に野村 (2016:6) は、『源氏』の場合は、よく知られているように、地の文は大体「～ス、～ス」と展開する。」と述べ、事実上、タクシスに注目している)。一般言語学的な手法として「タクシスとして継起的」という枠を設定して古代日本語をみた場合、動詞基本形は完成相的という

\*3 現代日本語の～テイルの場合、厳密には、継続相であるが、ここでは、「不完成相」「継続相」の違いが問題とならないので、このまま議論を進める。この点、福沢 (2015) の第5章の整理も参照のこと。

大木（2009）や野村（2016）の指摘も、また妥当といえる。

では、結局、古代日本語の動詞基本形は、どのように考えればよいのだろうか。次の 3. 節では、当時の実態を確認し、その後、4. 節で考察を進めたい。

### 3. 古代日本語の動詞基本形の実態—『土佐日記』の調査—

本節では、小学館の新編日本古典文学全集『土佐日記』（青谿書屋本）を調査した\*4。この資料を調査する理由は、青谿書屋本は、特別な事情により、紀貫之自筆本『土佐日記』の文言を、ある程度正確に保っていると思われるためである（橋本（1974）等参照）。

まず、動詞基本形のタクシスのイメージを見たい。当該資料の文末相当の箇所（翻刻で句点及び閉じかぎ括弧のある箇所）を抜き出したところ、全部で 501 例あった。このうち、～ヌ（33 例）や～ツ（4 例）等の例を除外し、動詞基本形だけを集めたところ、係り結びの例（18 例）を含めて、全部で 106 例あった（アリ・ヲリの例は除外した数である）。活用形と、当該例に新全集がどのような訳をあてているのかを示すと、次のようになる。

(5)			終止形 87 例		係り結び-連体形 18 例		連体形 1 例		合計 106 例	
現代語訳	スル／シタ	～テイル	75	6	3	12	1	1	0	0
	～デアル	その他	3	0	2	2	0	0	5	2

この 106 例のうち、当該例に、「スル／シタ」という訳があてられているものは、95 例（約 90 %）、「スル」の訳のものだけでも 88 例（約 83 %）あった。次の例のように、基本的には、動詞基本形は、動詞基本形で訳されていることが分かる（【 】内は現代語訳）。

- (6) 「まろ、この歌の返しせむ」といふ【言う】。おどろきて、「いとをかしきことかな。よみてむやは。よみつべくは、はやいへかし」といふ【言う】。

（『土佐日記』p.23）

この約 90 %（あるいは、約 83 %）の例の全てが、厳密な意味で完成相と解釈できるのかは分からない（その理由は後述）。しかし、～ヌや～ツの接続がなくても、物語は継起的に進んでいるのである。よって、当時の動詞基本形には、完成相的側面があるといえる。

また、動詞基本形が、～テイルで訳されている場合もある（全部で 4 例あり、全体の約 4 %。いずれも動作継続の場面である）。次のような例である。

- (7) その岩のもとに、波白くうち寄す【打ち寄せている】。（『土佐日記』p.35）

(7) のような例は～テイルの訳が自然だろう。ここでのポイントは、「当時、具体的な動きが継続している場面で、使用できる形式は、動詞基本形のみ」ということである（福沢（1997）等）。よって、数は少ないながらも、不完成相的側面があることも否定できない。

このように、古代日本語の実態を踏まえると、動詞基本形は、主として完成相的であるとも思えるが、一方で、「不完成相的ではない」とも言い切れない。このため、アスペクト的な観点から決着をつけることは、できないといえる。

次に、文中・文末における、全ての動詞基本形（係り結び-連体形を含む）を調査したところ、明確に〈未来〉と解釈できる例はなかった。この情報が重要だと思われるので、この点を踏まえて、当時の動詞基本形の捉え方を考えていきたい。

\*4 目視による調査後、国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』（短単位データ 1.3 / 長単位データ 1.3）<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku> にて、再度、確認した。

#### 4. 古代日本語の動詞基本形は〈現実〉を表している

これまで、古代日本語の動詞基本形は、テンス・アスペクトの観点から議論されることが多く、「～キ、～ケリ、～ツ、～ヌ、～タリ」等との対立が考察されてきた。完成相・不完成相・不完了相という用語も、全てアスペクトに関するものである。当該形式の記述に諸説入り乱れる原因は、この点（テンス・アスペクトの観点から議論している点）にあるように思える。しかし、福嶋（2025）で述べたように、古代日本語の体系では、～ム・～ムズとの対立というムードの観点も重要である。この点に着目する必要があるのではないか。

結論からいえば、古代日本語の動詞基本形は、～ム・～ムズとの対比において、〈現実（realis）〉を表していたとする考え方（尾上（2001）、小柳（2018）、吉田（2019）、福嶋（2025）等参照）が、妥当だと思う。当時は、動詞基本形が〈現実〉を表し、～ム・～ムズが接続することで、〈非現実（irrealis）〉を表すという体系だったと考えられる。

「古代日本語の動詞基本形は〈現実〉を表す」と捉えると、これまで見てきた状況が、次のように統一的に説明できる。

- (8) ①動作継続を表す→既に目の前で生じている動作を〈現実〉として表現しているのである。このため、当該形式が動作継続を表しているようにみえる。
- ②タクシスとして、継起・同時の両方を表す→〈現実〉を表す形式なので、そもそも完成相的かどうかに関与しない。このため、現代日本語で解釈する際、「ひとまとまり」として解釈できる場合もありうる。
- ③未分化な表現形式にみえる→〈現実〉を表す形式で、完成相的かどうかに関与しないので、アスペクト的な観点からみると未分化にみえる（当然、動きの概念そのものを表すような場合（無色性のレベル）は、いつの時代も、未分化ともいえる場合がある）。また、ノダ構文の一部もカバーしているようにもみえる。

アスペクトの観点から古代日本語の動詞基本形を捉えようとする、完成相とも不完成相ともとれるので混乱してしまう。これに対し、～ム・～ムズとの対立という観点から、〈現実〉を表すと捉えればよいというのが本発表の主張である。

ところで、『土佐日記』には、次のような例がある。

- (9) 船に帆上げなど、喜ぶ。 (『土佐日記』 p.38)

この例は、新全集の訳では「喜ぶ」になっているが、角川文庫『土佐日記』の訳では「喜んでいます」(p.70)となっている。現代日本語話者の感覚からすると、どちらなのか非常に気になる。しかし、当時の体系に即して考えると、動詞基本形は〈現実〉でありさえすればよいわけで、「喜ぶ」「喜んでゐる」の別を明確に意識する形式ではなかったのだと思う（現代日本語話者の感覚を当てはめては、いけないのだろう）。

ただし、〈現実〉を表すという考え方では、〈未来〉の例が説明できない（その他の例は説明できる）。このため、検討するべきは、当時の動詞基本形が〈未来〉を表す場合である。

#### 5. 古代日本語の動詞基本形は、基本的には〈未来〉を表さない

結論から述べれば、古代日本語の動詞基本形は、基本的には〈未来〉を表さない（あるいは非常に表しにくい）といえる。以下にその根拠を具体的に述べたい。

土岐（2010）は、終止形終止法の調査を行い、当時の動詞基本形が〈未来〉を表すことを積極的に主張するものである。しかし、その調査結果を見ると、『竹取物語』『伊勢



物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』（以上、岩波の旧大系）、『寝覚物語』（学燈社、1972）、『源氏物語』（岩波の新大系）を調査しても、動詞基本形が〈未来〉を表す例は、『落窪物語』に 8 例、『源氏物語』に、たったの 1 例というものである（岡部（2012）もこの問題点を指摘している）。『竹取物語』～『源氏物語』は、相当な分量であり、〈未来〉を表す場面も少なからずある。それで、『落窪物語』以外、『源氏物語』に 1 例しかないのであれば、古代日本語の動詞基本形が、〈未来〉を表すことの証拠ではなく、むしろ、〈未来〉を表さない（非常に表しにくい）ことの証拠なのではないだろうか。さらに、土岐（2010）の調査した『落窪物語』の底本は寛政六年（1794 年）刊記のある木活字本である。1794 年は、日本に開国を要求したペリーが生まれた年であり、幕末に近い。従って、この本に見られる特徴的な分布は、平安時代のものとは考えにくい。

土岐（2014）では、土岐（2010）とは、若干、資料の底本等を変え、『竹取物語』『伊勢物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』（以上、岩波の新大系）、『宇津保物語』（おうふうの『うつほ物語全』）、『大和物語』（岩波の旧大系）を資料に、動詞基本形の調査を行っている。土岐（2014）が指摘する、〈未来〉を表す、終止・連体異形活用語の 9 例の詳細は、『宇津保物語』の例が 1 例あること以外、分らない。土岐（2014:25）で注目すべきは、〈未来〉の用法が、終止・連体同形活用語も含めると、26 例もあるという報告である。しかし、土岐（2014:25）は、次の指摘もしている。

- (10) 終止・連体同形活用語も含めた B 未来用法は宇津保物語と落窪物語に集中しており、それ以外では、次の(23)の源氏の例(b1)が 1 例である。

『竹取物語』～『大和物語』は、かなりの分量である。それで、『宇津保物語』『落窪物語』以外、『源氏物語』に 1 例しかないのであれば、これは、『宇津保物語』『落窪物語』の問題として処理するべきであろう。

土岐（2014）が調査した『宇津保物語』と『落窪物語』の底本は、それぞれ、前田家十三行本と九条家本である。前田家十三行本は慶安三年（1650 年）頃の書写（中村（1969）等）、九条家本は、永正・天文頃（1504 年～ 1554 年）、または室町末期の書写とされており、中世末期の時期より前に遡ることはない（吉田（1986）等）。よって、いずれも、善本とはいえない。それぞれの伝本事情は、次の指摘の通りである。

- (11) 現存の『うつほ物語』の諸本は、全巻の書写年代が室町時代まで遡るものはない。しかも誤写・脱落・錯簡が多く、証本として信頼しうる状態ではない。

（新編日本古典文学全集『宇津保物語』の「凡例」より）

- (12) 『落窪物語』の伝本には善本はなく、古い写本もまったくない。古いといってもわずかに中世末期にかかるかと思われる程度のもので、大部分の写本は近世期のものである。平安朝に『源氏物語』に先立って成立したこの物語が室町時代や江戸時代にまで伝わるには、本文上に相当な書写上の変化を予想しなければならない。

（新編日本古典文学全集『落窪物語』の「解説」より）

もちろん、『宇津保物語』と『落窪物語』が古代日本語の実態を反映している場合もあると思う。しかし、これらの資料に偏って見られる用法であれば、『宇津保物語』と『落窪物語』の問題とするべきであって、古代日本語の分布を正確に反映しているとはいえない。これは、古い文献を扱う研究として、妥当な判断だと思う。

ところで、先の(10)で述べた、『源氏物語』の1例とは次のものである。

- (13) (源氏) 中々うき世のがれがたう思ふ給へられぬべければ、心づよう思給へなして、急ぎまかで侍 (福嶋部分訳：急いで退出致します)

(土岐 (2014:25) の(23)、下線も原文、「須磨」より)

このような意向を表す例は、大木 (1997・2009) も〈未来〉と考えるようである。しかし、仁科 (2014:60-63) は、この種の例が、一人称の行為に限定されること等に注目し、別様の把握 (福嶋注：時制以外の把握) の可能性を指摘する<sup>\*5</sup>。野村 (2016:15) も、当該の動作がほとんど始まっていることから、「ス」による未来は、どうも近未来に限られているようである。」とし、その制限を述べる。実は、土岐 (2010:194) も、「未来用法」について、尾上 (1997) の枠組みを踏まえ、「未生起の事柄が自らの意志的コントロールの下にあるものである場合、発話者にとって、その実現は確実性の高いものであり、現実事態構成の叙法である動詞基本形を拡張的に用いて表現することも可能である。」と指摘している。この土岐 (2010) の指摘から考えれば、意向を表す用例群を、「当時の動詞基本形は〈現実〉を表す」という記述の範囲内におさめることができるだろう。

残りの検討が必要な例は、時制的には〈未来〉とされる、大木 (2009) が想定と呼ぶ次のような例である ((14)と(15)は、大木 (2009) の 14 と 16。源氏は小学館の旧全集、古今は新大系の例である。下線も原文にあり)。

- (14) いとをかしうやうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つくれ (源氏・若紫)

- (15) 枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ (古今・春下)

研究の立場の違いと思われるが、本発表では、(14)は、典型的な「モノ・モコソ」の例として処理し、動詞基本形の例とは考えない。また、(15)も、「コソ 已然形」と考え、動詞基本形の例とは考えない。さらに、(15)の和歌の詞書に、「桜の花の、御溝水に散りて流れるを見て、よめる」(p.41、下線は福嶋)とあることから、「散って水上に流れている花びらを「水の泡」と表現する。」(平沢 (1990:31))、「水面に落ちた段階で花びらと知覚されなくて、泡のようになって流れてゆくと言っている」(片桐 (2019:562-563))と解釈できる (花びらが、これから、泡になるわけではない)。よって、本発表では、この例を〈未来〉の例とも考えていない (むしろ〈現実〉の例である)。以上のことから、この(14)や(15)をもとに、一般的な動詞基本形は〈未来〉も表す (だから、テンスとして中立なのだ) という議論は展開できないと思う (なお、大木 (2009) の想定例は、(14)と(15)以外、『落窪物語』(小学館の旧全集)からの挙例 (2例) であり、資料的に問題がある)。

古代日本語の資料には、〈未来〉を表す場面は少なからずあり、そこには、主に〜ム・〜ムズが分布している (〜ムを未来の助動詞とする文法書もある。詳しくは井島 (2009) 等参照)。このことを考えあわせると、「〜ム・〜ムズが〈非現実〉を表す (このため〈未来〉に分布している)」「動詞基本形が〈現実〉を表す (このため〈現在〉に分布している)」と捉えた方がよいだろう。

ところで、現代日本語の場合、運動動詞の時制表現が、基本的に次のように整理できる点は、多くの研究に共通している (町田 (1989)、須田 (2010)、仁田 (2019)、工藤 (2025)、

\*5 時制以外の概念との関係でいえば、高山 (2021:42) が、「現実性の強い《未来》と、非現実性の強い《未来》」という考え方を示している。

福嶋（2025）等）。

(16)	未来	現在	過去
	動詞基本形(スル)	～テイル	～タ

厳密に言えば、現代日本語の動詞基本形や～タにも、「打球が、伸びる、伸びる」「あつ、お金があつた」のような、〈現在〉を表しているようにも思える例がある。しかし、これは、「特殊な条件下における用法」というものであって、このような例があるからといって、(16)の整理が根本から覆ることはないだろう。

同様に、古代日本語の動詞基本形に、〈未来〉を表しているように見える例があっても、限られた条件下での例ならば、別途、処理をすればよい。「～ム・～ムズが〈非現実〉、動詞基本形が〈現実〉」という対立が根本から覆ることはないように思う。

## 6. 古代日本語の体系から現代日本語の体系へ—1000年以上にわたる変遷を見通す—

本発表のように考えると、古代日本語から現代日本語までの体系の変遷が見通しやすくなる。福嶋（2025）で指摘したように、両言語の中間地点ともいえる、中世末期日本語の体系を間に挟むと分かりやすい。1000 年以上にわたる体系の変遷は、次のように示すことができるのである（以下、福嶋（2025）の第 11 章をもとにしている）。

### (17) 日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷

	非現実の一部	現実の一部	
	未来	現在	過去
古代日本語	～ム・～ムズ	ス	～タリ    ～ケリ    ～キ
中世末期日本語	～ウ・～ウズ(ル)	スル    ～テイル	～タ
現代日本語	スル	～テイル	～タ

※動詞基本形は「ス」「スル」で表記する。

中世末期日本語では、～テイルという形式が台頭してくるが、存在動詞「イル」の意味が比較的強く残っており、「西もんに立っている」（『虎明本』中 p.424）のような存在文的な例に、分布が偏る（全ての動詞に義務的に接続するわけではない）。また、～タリの影響が完全に消滅したわけでもなく、「又あの目のくるとしたもにたよ（「似ている」の意）」（『虎明本』上 p.179）のような、文末で現在の状態を表す～タも存在する。このため、「～タの有無によって、〈過去〉と〈非過去〉の対立が表現される」というシステムは、まだ、確立していない。動詞基本形にも、「雨もふらぬにかさをさひて歩くは」（『虎明本』下 p.77）のような動作継続と解釈できる例が多数存在する（「歩いている」のような、動きのある動作継続の～テイルの例は、当時、ほとんどない）。よって、「～テイルと動詞基本形が、〈状態（継続的）〉と〈非状態（完成的）〉の対立を成す」というシステムも、まだ、確立していない。〈未来〉の領域には、「この学者を殺さうことは本意無い」（『天草伊曾保』p.433）のように、（～ム・～ムズの後継の形式である）～ウ・～ウズ(ル)が数多く分布している。このような中世末期日本語の体系は、古代日本語と現代日本語の中間的な姿であるといえ、説得力があるものだと思う。

現代日本語に近づくにつれ、～テイルは、存在文的な意味から発達し、全ての運動動詞に接続できる、義務的な状態化形式となる。～テイルと動詞基本形が、〈状態（継続的）〉と〈非状態（完成的）〉の対立を成すようになるわけである（①【現代日本語のアスペクト

体系の確立』)。

～テイルが状態化形式として成立すると、〈現在〉の領域を全てカバーできるようになる。そうすると、「似ている」等が広く分布するようになり、「似た」等で〈現在〉を表すことがなくなる。～タが〈過去〉の領域のみに分布することになり、「～タの有無によって、〈過去〉と〈非過去〉の対立が表現される」というシステムが確立する。運動動詞の場合に限っていえば、「動詞基本形は〈未来〉、～テイルは〈現在〉、～タは〈過去〉」というシステムが確立する (②【現代日本語のテンス体系の確立】)。

また、～テイルと動詞基本形が、〈状態 (継続的)〉と〈非状態 (完成的)〉の対立を成すようになると、動詞基本形は、ひとまとまりの完成的な運動を表すようになり、〈現在〉には分布しにくくなって、〈未来〉に分布するようになる。〈未来〉とは、〈非現実〉の領域の一部である。無標の形式である動詞基本形が、そのままの形で、〈非現実〉の領域を表すようになると、「～ウ・～ウズ (ル) の有無によって、〈現実〉と〈非現実〉の対立が表現される」というシステムが崩壊する。ここにおいて、古代日本語の～ム・～ムズから継続していた、有標の形式で〈非現実〉を表し、無標の形式で〈現実〉を表すという対立が崩れる (③-1【古代日本語から続いていたムード体系の崩壊】)。現代日本語にも、～ダロウ等の形式があるが、これらの形式の表す意味は、〈非現実〉よりもずっと狭いものとなる (③-2【新しいモダリティ体系の台頭】)。

これが、日本語におけるテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷である。

この①～③は切り離すことができない体系的な変化である。動詞基本形が何と対立しているのかを押さえた上で、「～テイルの発達」と「～ウ・～ウズ (ル) (／～ム・～ムズ) の減少」を関連させて捉えるという、これまでになかった発想で考えることにより、1000年以上にわたる変遷を見通せる視点が得られるというわけである。

本発表では、古代日本語の動詞基本形をめぐる論争に、一応の決着をつけ、その上で、古代日本語から現代日本語までの変遷を見通した。また、本発表の主張は、これまで、共に、中古和文資料とされてきた作品群の中にも、底本の情報に大きな差があり、この差に注目しないと、正確な記述ができないことを意味している。

【引用文献】井島正博 (2009) 「近代文典におけるいわゆる推量助動詞」『日本語学論集』5/大木一夫 (1997) 「古代日本語における動詞終止の文と表現意図」『日本語の歴史地理構造』明治書院/大木一夫 (2009) 「古代日本語動詞基本形の時間的意味」『国語と国文学』86-11/尾上圭介 (1997) 「国語学と認知言語学の対話Ⅱ」『月刊言語』26-13/尾上圭介 (2001) 『文法と意味Ⅰ』くろしお出版/岡部嘉幸 (2012) 「書評」土岐留美江著『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』『日本語の研究』8-2/片桐洋一 (2019) 『古今和歌集全評釈 (上)』講談社学術文庫/金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房/工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房/工藤真由美 (2025) 『文と時間』ひつじ書房/小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』くろしお出版/鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房/須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房/高山善行 (2021) 『日本語文法史の視界』ひつじ書房/土岐留美江 (2010) 『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房/土岐留美江 (2014) 「動詞基本形終止文の表す意味」『日本語文法』14-02/中村忠行 (1969) 「前田家十三行本『宇津保物語』その他」『宇津保物語研究会会報』2/仁科明 (2014) 「「無色性」と「無標性」」『日本語文法』14-2/仁田義雄 (2019) 「「する」が未来を表す場合」『日本語のテンス・アスペクト研究を問直す 1「する」の世界』ひつじ書房/野村剛史 (2016) 「古代日本語動詞のアスペクト・テンス体系」『国語国文』85-11/橋本不美男 (1974) 『原典をめざして』笠間書院/平沢竜介 (1990) 「古今集」の春の部、散る桜の歌群の構造」『国文白百合』21/福沢将樹 (1997) 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティー」『国語学』191/福沢将樹 (2015) 『ナラトロジーの言語学』ひつじ書房/福岡健伸 (2025) 『中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系』三省堂/町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク/吉田幸一 (1986) 『おちくほ』古典文庫/吉田永弘 (2019) 『転換する日本語文法』和泉書院/[中世末期日本語の資料]『大蔵虎明本狂言集の研究』上中下巻 表現社 (略『虎明本』) /『文禄二年 耶蘇会板伊曾保物語』京都大学国文学会 (略『天草伊曾保』) ※副題は省略。 ※本研究は JSPS 科研費 19K00631 の助成を受けたものです。

## [移動領域]補語の助詞標示の変遷—非制御的な移動動詞を中心に—

山下大希（名古屋大学大学院生）\*

### 1. 問題の所在

以下の(1)～(3)の動詞はどれも「移動」を表す動詞でヲ格補語が「移動の経路」を表すという共通性を持つ。この「移動の経路」を「広義経路」と呼んでおく。なお、(1)～(3)の分類は加藤(2006)に基づく。

移動

ヲ格

(1) のぞみ号が新横浜駅を通過する。[通過点] : 移動行為の範囲 >>> 移動域(極小)

(2) 永代橋を渡る。[移動経路]: 移動行為の範囲 = 移動域

(3) 校庭を走る。[移動領域]: 移動行為の範囲 < 移動域

古代日本語の場合、上記の(1)[通過点]・(2)[移動経路]はヲ格で標示されていたが、(3)[移動領域]はニ格で標示されていたことが指摘されている(松本 2020)。なお、[通過点]・[移動経路]は移動する経路の境界線(＝有境界性)が明確である——起点・着点が明確である点で、領域の内部の移動を意味する[移動領域]とは性質を異にする(加藤 2006)。つまり、古代日本語の段階では、有境界性が明確な「経路」にのみヲ標示がなされていた。

松本(2020)によれば、[移動領域]のうち、「走る、歩く、駆ける」などの制御的な移動動詞の場合は鎌倉期から室町期にかけてヲ標示が拡張し、確立した。他方、「流れる、さ迷う、漂う」などの非制御的な移動動詞の場合は室町期においてもニ格標示のみ見える、とされる。

なお、本発表での[土制御性]は「動作主が意図的に事象を制御可能か否か」という意味である(影山(1993)及び三宅(1996)における“CONTROL”の意味的規定に準じる)。

現代語に話を戻すと、(4)に示すように非制御的な移動動詞の[移動領域]補語もまた助詞ヲで標示される。すなわち、室町期以降のどこかの時点で、非制御的な動詞の場合にもヲ標示が拡張したと見えるが、いつ・どのように拡張したのかは詳らかでない。

(4) 桃が川を流れる。/ 太郎が森をさ迷う。/ 流木が海を漂う。

さらに、現代語の助詞ヲ標示は述語動詞の[土制御性]が重要な役割を果たすとされることもあり、そのような前提のもとでは(4)の助詞ヲ標示は例外的とされる(三宅 1996)。しかし今見たように、少なくとも室町期までは(4)のような例外は見えなかった。このようなある種の例外がどのようにして発生したのかを分析することは、現代語共時態の分析にも資するところが大きいと考えられる。以下、「経路」における助詞標示の変遷を「非制御的な移動動詞」を中心に分析していく。

### 2. 「経路」における助詞ヲ標示の拡張

---

\* [yama421shita@icloud.com](mailto:yama421shita@icloud.com)

## 2.1. 概略

本研究の主題に移る前に、大まかに、松本(2020)によりつつ、中古～中世における「経路」補語の助詞標示の変遷を確認しておく。表 1 には併せて本発表で仮定する助詞標示の変遷を示す。上代～中世の状況に関しては、松本(2020)に基づいて示し、近世以降は、本発表での調査に基づく。以下、特段の理由がなければ、[通過点]・[移動経路]の有境界性が明確な2つを「狭義経路」と呼び、[移動領域]とは分ける。以下に見るように、本発表の対象とする非制御的な移動動詞の[移動領域]補語へのヲ標示は近代になって拡張し、確立する。

表 1	狭義経路	移動領域(制御的)	移動領域(非制御的)
上代～中古	ヲ	ニ	ニ
中世(鎌倉)	ヲ	ニ→ヲ	ニ
中世(室町)	ヲ	ヲ	ニ
近世	ヲ	ヲ	ニ(→ヲ)
近代	ヲ	ヲ	ニ→ヲ
現代	ヲ	ヲ	ヲ(ニ)

## 2.2. 中古から中世にかけての「経路」の助詞標示

### 2.2.1. 中古

中古においては、有境界性が明確な[通過点]・[移動経路]の用法に限って、助詞ヲ標示がなされていた(松本 2020)。以下の「経路のみを承ける動詞」は、「通る、越ゆ、過ぐ、渡る、上る、行く、下る、帰る」、「移動領域と経路を承ける動詞」は、「歩く、走る」、「移動領域のみ承ける動詞」は、「駆ける、漂ふ、流る、さまよふ」である(松本 2020 : pp. 20-21)<sup>1</sup>。以下、松本(2020)の整理を引用する(p. 28、表 7)。

	を	に	より	へ	係助詞副助詞	無助詞
経路のみを承ける動詞	経路	着点	経路 着点	着点	経路 着点	経路
移動領域と経路を承ける動詞		移動領域 起点	移動領域 起点		移動領域 着点	移動領域、経路
移動領域のみ承ける動詞		移動領域	移動領域			

加藤(2006)は、現代語におけるヲ格補語の用法を分析する中で、他動詞の直接目的語を標示する「対象格」と「広義経路」とが、[通過点]をハブとして連続的に関係づけられることを指摘している。例えば、(5)の「第三ゲート」は、「突破」の対象であると同時に、「突破」によって通過される場所でもある(加藤 2006 : 177-178)。

(5) 第三ゲートを突破する。(加藤 2006 : 146、例(41))

このような性質は、[通過点]が「有境界性」を明確にもつという特徴に由来する。すなわち、始点と終点が明確であるために、対象として把握されやすいのである(加藤 2006 : 177-

<sup>1</sup> 松本(2020)の「経路」は、[通過点]・[移動経路]の双方を含む。

178)。「移動経路」についても同様であり、この意味で、有境界性の明確なものは「対象性」を帯びるといえる。さらに、「家を離れる」などの「離点」もまた、同様の性質を有すると考えられる(加藤 2006: 177)。このことから、中古語において助詞ヲが標示されたのは、加藤の論述を踏まえると、「有境界性」が明確な場所補語の場合、すなわち他動詞の直接目的語を標示する対象格と「対象性」という意味的な連続性をもつ場合に限られていた。

### 2.2.2. 中世

松本(2020)によれば、「歩く、走る、駆ける」は、鎌倉、室町期にかけて、狭義の「経路」のみならず[移動領域]にも助詞ヲ標示が拡張した。鎌倉期には、ニ格とヲ格が[移動領域]補語の標示に使用されているが、室町期に至って、[移動領域]の標示に助詞ニが使用されることはなくなり、助詞ヲのみで標示されるようになる。松本は、次のように考察する。

「を」が進出した「歩く」「走る」「駆ける」は、移動の様態を表す動詞であると言える。これらの動詞は、移動行為そのものを言い表す場合には、様態が背景化され、経路を明示することができる。そのため、もっぱら経路を表す「を」とも共起し、その「を」が移動領域の標示をも担うようになったと考えられる。一方、「さまよふ」「漂ふ」「流る」は、着点を自ら決定することのない統御不能な移動動詞であると言える。そのため、着点にたどり着くための経路を取ることもなく、経路を表す「を」と共起することもない。(p. 30)

つまり、制御(=統御)的な移動動詞は、着点を自ら決定し得るために、[移動経路]として把握され、そこからヲ標示が可能になり、最終的に[移動領域]そのものの助詞ヲ標示が可能になった、という道筋である。

さらに、先の加藤(2006)を踏まえると[移動領域]は有境界性が不明確であり、その意味でヲ格項は「対象」として把握されづらい。他方、制御的な移動動詞に限定される点では、他動詞の直接目的語標示である「対象格」の用法と共通性を持つとも言える。つまり、この段階の[移動領域]は、動詞の[+制御性]という他動詞の意味との連続性と「狭義経路格」との意味的連続性に基づいて助詞ヲ標示が行われていたと言える。言い換えると、この段階の[移動領域]の助詞ヲ標示は、「対象格」との関連性を持つ。他方で、次に見る非制御的移動動詞の[移動領域]補語へのヲ標示は、「対象格」との関連性を持たない。

## 3. 非制御的移動動詞における[移動領域]補語の助詞標示変遷

### 3.1. 概略

松本(2020)では、非制御的な移動動詞「流れる、さ迷う、漂う」は、室町期に至っても[移動領域]が助詞ニで標示されているという観察が示されていた。本発表では、「日本語歴史コーパス(CHJ)」と「昭和・平成書き言葉均衡コーパス(SHC)」を用いて、この三語の助詞標示の変遷を観察する。検索にあたって、短単位で「語彙素」としてそれぞれ「流れる、さ迷う、漂う」をキーとした。検索結果を目視で確認し、助詞標示を確認した。なお、「てくる、ていく」などの格体制に変化を与えるテ形を承接する場合や複合動詞などは除いている。以下、初出例と用例数が増大する年代を示す。

- (6) **流れる**：19 世紀末からヲ標示が急速に拡張(※初出例は 18c 末の下記)  
 (初出例) 其氷ノ下ヲ水ノ流レルヤウニ外へハアラハサズニ (52-遠鏡 1793\_00212)
- (7) **さ迷う**：20 世紀前半～中盤にヲ標示が拡張(※初出例は 19c 末の下記)  
 (初出例) 偶には神明邊を逍遙て見ると (60M 太陽 1895\_10029)
- (8) **漂う**：20 世紀後半～現在にかけてヲ標示が拡張(※初出例は 20c 初頭の下記)  
 (初出例) 香ばしい栗の香は爐を廻つて一室を漂よふなつかしい栗の匂 (60M 女世 1909\_16054)

### 3.2. 調査概要

先に見たように、「流れる」は他二語と比較して、[移動領域]への助詞ヲ標示が早期に許容されている。ただし、ニ標示をヲ標示が上回るのは、CHJ 範囲内では 19 世紀末になってからである。以下、1870 年以降に限定して、[移動領域]への助詞標示がニでなされるか、ヲでなされるかを確認する。1870 年以降に限定するのは、CHJ の範囲内では、「さ迷う」「漂う」は、1890 年以降が初出であり、「流れる」に関しても (6) の例に加えて『遠鏡』中にもう 1 例ヲ標示が見えるのみで、次に確認されるのは 1870 年に至ってからであるためである。

表 2～4 の見方を説明しておく。[移動領域]が助詞ニで標示される場合は「ニ」、助詞ヲで標示される場合は「ヲ」としてそれぞれ区別した。「全」は、[移動領域]補語を取らない場合も含めた総例数を示す。なお、「1930-1939」「1940-1949」の区分は、CHJ と SHC で年代が重なるため、「CHJ|SHC」として用例数を示した。また、各行では、その時期において多数を占める助詞標示に網掛けを施している。

論述の都合上、表 3・表 4 から概観する。表 3「さ迷う」の場合、1890 年頃にヲ標示の初出が見え、その後 1900 年頃からヲ標示が増加傾向にあり、1950 年以降にはヲ標示が主流となる。他方、表 4「漂う」は 1900 年頃にヲ標示の初出が見えるが、1989 年までの間、ニ標示を上回ることとはなく、[移動領域]補語への助詞ヲ標示は極めて遅れて確立する。表 2「流れる」については、他の二語よりも早く、1890 年頃にはニ標示をヲ標示が大きく上回る。すなわち、「流れる→さ迷う→漂う」の順に、[移動領域]補語への助詞ヲ標示が拡張していったと考えられる。なぜこの順に拡張していったのかについては、4 節で改めて考察する。

ただし、表 2「流れる」に関しては、1939 年までは明らかにヲ標示がニ標示を上回っているのに対し、1940 年代以降は、逆にニ標示がヲ標示を上回っている。この変化については、何らかの説明を与える必要がある。詳細は論じえないが、その要因として述語の形態的特徴に着目する。表 5・表 6 に示すように、1940 年以降、[移動領域]がニ標示される例では、ヲ標示される例に比べて、述語が「シテイル」形で現れる割合が高い。この点が、1940 年代以降にニ標示が優勢となる一因であると考えたい。現代日本語においては、「\*池に鴨が泳ぐ／池に鴨が泳いでいる」のように、「スル」形では不適格な場所ニ格が、「シテイル」形の場合には許容されることが知られている (野村 1994、福嶋 2006)。すなわち、このような「存在様態」の「シテイル」の存在が、1940 年以降に[移動領域]補語へのニ標示が増加した一因である可能性を示唆する。



表2「流れる」<sup>2</sup>

	ニ	ヲ	全
1870-1879	4	2	26
1880-1889	2	3	60
1890-1899	10	28	235
1900-1909	24	43	358
1910-1919	7	24	204
1920-1929	19	27	202
1930-1939	16 [2][14]	39 [1][38]	190 [23][167]
1940-1949	37 [2][35]	41 [13][28]	280 [70][210]
1950-1959	39	26	200
1960-1969	30	18	191
1970-1979	22	23	193
1980-1989	54	61	593

表3「さ迷う」

	ニ	ヲ	全
1870-1879	0	0	0
1880-1889	0	0	0
1890-1899	4	1	6
1900-1909	2	7	14
1910-1919	3	1	9
1920-1929	6	7	15
1930-1939	5 [2][3]	7 [1][6]	13 [4][9]
1940-1949	3 [0][3]	2 [0][2]	6 [0][7]
1950-1959	1	5	12
1960-1969	0	9	11
1970-1979	1	9	16
1980-1989	1	20	33

表4「漂う」

	ニ	ヲ	全
1870-1879	1	0	4
1880-1889	13	0	15
1890-1899	16	0	25
1900-1909	34	1	36
1910-1919	37	1	55
1920-1929	26	1	37
1930-1939	37 [5][32]	1 [0][1]	55 [8][47]
1940-1949	56 [8][48]	1 [0][1]	89 [11][78]
1950-1959	32	1	48
1960-1969	20	1	44
1970-1979	25	4	53
1980-1989	48	5	111

表5. 「ニ+流れる」の「シテイル」形の割合

	シテイル形	全体	割合
1870-1879	0	26	0%
1880-1889	0	2	0%
1890-1899	0	10	0%
1900-1909	0	24	0%
1910-1919	3	7	42%
1920-1929	2	19	10%
1930-1939	4 [1][3]	16 [2][14]	25%
1940-1949	22 [1][21]	37 [2][35]	59.5%
1950-1950	24	39	61.5%
1960-1969	18	29	62%
1970-1979	12	22	54%
1980-1989	25	54	46%

表6. 「ヲ+流れる」の「シテイル」形の割合

	シテイル形	全体	割合
1870-1879	0	2	0%
1880-1889	0	3	0%
1890-1899	0	28	0%
1900-1909	7	43	16%
1910-1919	8	24	33%
1920-1929	1	27	3.7%
1930-1939	16 [0][16]	39 [1][38]	41%
1940-1949	15 [7][8]	41 [13][28]	36.6%
1950-1950	12	26	46.2%
1960-1969	3	18	16%
1970-1979	7	23	30%
1980-1989	21	61	34.4%

#### 4. 考察：拡大の要因

##### 4.1. 「ヲ格補語の経路性」の影響

3 節では、「流れる→さ迷う→漂う」の順に、[移動領域]ヲ標示が拡張していったことを確認した。特に「流れる」は、18 世紀末には既に[移動領域]と判断される例が見える点で「さ迷う、漂う」よりも極めて早い。では、なぜ、「流れる」が他二語に先行したか。

松本(2020：注 15)では、「流れる」について、鎌倉期に起点「より」が1例、室町期に起点「から」が2例、着点「へ」が1例見られることが報告されており、そのうえで、「流れる」という移動には一方向性があり、それが前面に出た結果として「経路」として捉えられ、起点や着点と共に起るようになったと説明する。松本(2020：注 15)の指摘するように、中世期には既に「流れる」の経路補語に有境界性を持つ用法が存在している。

(9) 夜の御殿に参りたれば、御帳の中より血流れたり。(30-宇治 1220\_06009)

<sup>2</sup> なお、「流れる」は[移動経路]か[移動領域]かの区別がつきがたいため、ニ・ヲの場合双方とも「広義経路格」と判断される場合には用例としてとった。

(10) 山のいもが川へながれて、それがうなぎに成と申(40-虎明 1642\_04016)

ただし、1 節で確認したように室町期には「流れる」の補語に対するヲ標示は見えない。本発表の調査範囲内では(11)がヲ標示の初出例であり、文脈的に「果(て)」が明示されていることから、この「板敷山の北を」は[移動経路]の用法であると判断可能である。この「狭義経路」から派生して、(6)に示したような[移動領域]へと拡張したのだと考えられる。

(11) 板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入 (51-芭蕉 1694-01033)

つまり、「流れる」の[移動領域]へのヲ標示は「経路性」を基にして拡張したと見え、これが「流れる」の経路補語へのヲ標示が他二語に先行した理由であると考えられる。

#### 4.2. 「ガ格補語の有生性」の影響

このように 19 世紀末に「流れる」において[移動領域]へのヲ標示が拡張・確立する中で、「さ迷う」の[移動領域]もヲ標示がなされるようになる。他方、「漂う」はヲ標示も少しずつ見えるが、ニ標示が調査範囲内では常に優勢である。では、この「さ迷う」と「漂う」の差は何か。本発表では、主語の「有生性」における差が影響を与えている可能性を考えたい。

「さ迷う」のガ格には、基本的には有情物が現れる。大雑把な調査になるが、調査範囲内での「さ迷う」のガ格項目を確認しておくと、「有情物：非情物=86：11」であった<sup>3</sup>。ここで、中世時点での「経路」の助詞ヲ標示の特徴を再確認しておくと、[移動領域]は、[+制御性]という他動詞との意味的な共通性と、[通過点]・[移動経路]との意味的な連続性によってヲ標示が許容されていた、と見得る。

「さ迷う」の助詞ヲ標示が「漂う」に比較して先行したことは、既に「流れる」において非制御的な移動動詞の[移動領域]補語に助詞ヲ標示が可能になりつつあったという背景と共に、「さ迷う」のガ格項が基本的に「有情物」であることにより、「走る、歩く」などの制御的な移動動詞の[移動領域]補語の助詞ヲ標示とも類推されやすかったことが影響していると考えられる。

#### 4.3. [移動領域]そのものへの助詞ヲ標示の拡張

「漂う」のヲ格補語は「経路性」も持たず、またガ格補語には「有生性」の制約がない。即ち、「漂う」の場合は、既存の「対象格」や「狭義経路格」との関連が希薄であり、その[移動領域]へヲ標示が拡張される契機がない。表 7 に三語の意味の比較を示そう。着目するのは、「ヲ格補語の経路性」と「ガ格補語の有生性」である。

---

<sup>3</sup> 「さまよう(さ迷う・彷徨う・徘徊)」の語釈として『日本国語大辞典 第二版』(小学館)には「(1)気持ちが定まらなかったり迷ったりして、あたりを歩き回る。(略)。(2)はっきとした目的もなく、あちこちを歩く。(略)。(3)ある場所にはっきりと固定しないで、あちこち動く。(略)。(4)気持ち、決心などが定まらないでいる。」があげられる。(3)は「樹間の霏が暫く乱れて雲の如く小迷ふ」(小栗風葉、「青春」、1905~1906)のように「雲や霏などがただよう」といった意味があるとされる。このような場合、「非情物」がガ格に立つが、他の用法は「有情物」ないし「〈有情物〉の気持ち/心」がガ格に立つと言える。

表 7	流れる	さ迷う	漂う
ヲ格補語の経路性	+	-	-
ガ格補語の有生性	-	+	-

このように、「漂う」は中世までの用法との関連性を持たないため、「漂う」にヲ標示がなされるには、既存の用法と連続性をもつ「流れる」「さ迷う」など、他の非制御的移動動詞における〔移動領域〕補語への助詞ヲ標示の拡張を待たねばならなかったと考えられる。したがって、「漂う」への助詞ヲ標示の拡張は、「流れる」や「さ迷う」に比して遅れたと見ることができる。視点を変えれば、現代語においては「経路性」や「有生性」といった制約によらず、「助詞ヲ＝移動領域」という図式が完成しつつあるといえる。

## 5. まとめ

本発表では次のような助詞ヲ標示拡張の過程——とくに③以降の過程を示した。

(12) 「広義経路」における助詞ヲ標示の拡張過程

① 中世以前：〔通過点〕・〔移動経路〕のヲ標示(松本 2020)

② 鎌倉～室町：制御的動詞の〔移動領域〕のヲ標示(松本 2020)

③ 近世 (17c 末)：非制御的動詞「流れる」の〔移動経路〕にヲ標示

④ 近代 (19c 末)：同「流れる」の〔移動領域〕へ急速に拡張

⑤ 近代 (20c 前～中)：有情主語を取る非制御的動詞「さ迷う」の〔移動領域〕へ拡張

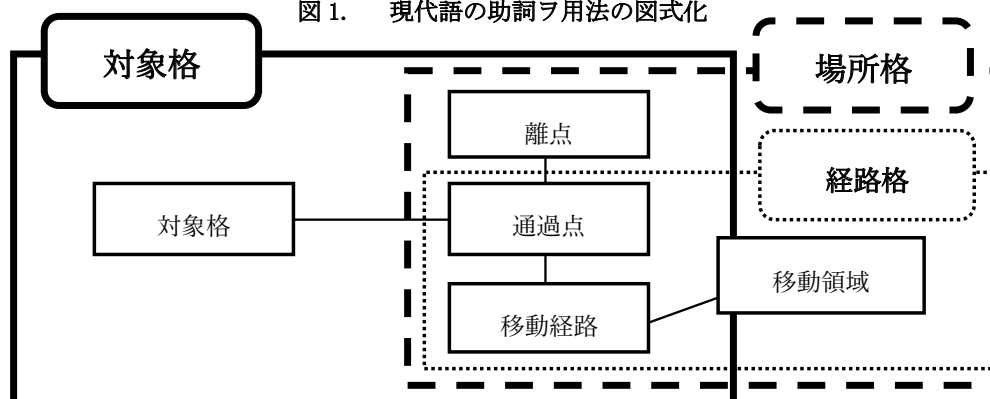
⑥ 近代～現代：非制御的動詞「漂う」の〔移動領域〕へ拡張

助詞ヲの用法は、歴史的に徐々にずれ、現代語においてはもはや「対象格」との関連性を持たない用法まで出現している(⑥の段階)。このような変化の過程を俯瞰すると、非常におおまかではあるが、次のような体系的把握が可能である。すなわち、中古におけるヲ格補語の体系が「対象格」中心のシステムであったとすれば、現代語では「対格」と「場所格(経路格+離格)」という二つのシステムが併存し、その重なる部分に〔移動経路〕や〔起点〕といった用法が位置づけられることになる。<sup>4</sup>

冒頭に述べた三宅 (1996) の指摘する「例外」は、このような用法間の緩やかな連続性に基づいて生じたものと、通時的には理解される。このような通時的展開は、共時的な位置づけと必ずしも一致する必要はないが、共時的分析を裏づける一つの傍証として位置づけることができる。

<sup>4</sup> 近代期には「腹を立(た)つ」などの「ヲ+自動詞」の用法が消滅していったことが指摘されている(鈴木 1985)。他方で、本発表で扱った移動動詞は、同時代に「ヲ+自動詞」の用法が拡張していったという点で興味深い。また、「吹雪の中を遭難者を搜索する」のようないわゆる「状況ヲ」の用法も 19 世紀後半～20 世紀前半になって目立つ(発表者調査：cf. 山下 2025)。「移動領域」を伴う動詞群は、佐藤 (2025 : p. 25) でいうところの「B 群」、すなわち、ヲともデとも共起する移動動詞である。この動詞群は、奥田 (1983) の「移動動作を様態という観点からとらえている」(p. 141) ものとほぼ重なる。つまり、デ格とヲ格が重なる領域にある移動動詞群であるといえる。「状況ヲ」の確立という観点からもこの時期は興味深い。

図 1. 現代語の助詞ヲ用法の図式化



### 【使用コーパス】

国立国語研究所(2025)『日本語歴史コーパス』(2025年7月31日確認)

小木曾智信(他)編(2023)『昭和・平成書き言葉コーパス』(2025年7月31日確認)

### 【参考文献】

小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・間淵洋子編(2024)『『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開』『情報処理学会論文誌』65-2

奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房  
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

加藤重広(2006)「対象格と場所格の連続性—格助詞試論(2)」『北海道大学文学研究科紀要』118.

佐藤友哉(2025)「経路を表す「を」格の対象性」『清泉女学院短期大学研究紀要』43.

鈴木英夫(1985)「「ヲ+自動詞」の消長について」『國語と國文学』62-5.

野村剛史(1994)「上代語のリ・タリについて」『國語國文』63-1.

福嶋健伸(2006)「動詞の格体制と～テイルについて—小説データを用いた二格句の分析—」矢澤真人・橋本修(編)『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』ひつじ書房.

松本昂大(2020)「中古和文における移動動詞の経路、移動領域の標示」『日本語の研究』16-3.

三宅知宏(1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110.

山下大希(2025)「日本語史における[状況ヲ]の確立メカニズム」全国大学国語国文学会、令和7年度夏季第131回大会、於二松学舎大学.

### 謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125(受給者：山下大希)の財政支援を受けたものです。

## 1. 本発表の目的

現代語のノダに見られる諸用法の中で、しばしば典型として挙げられるのが「事情」や「説明」を表すといわれるノダ文であり、その中でも、「昨日は学校を休みました。風邪をひいたんです」のように「原因・理由」を提示するノダ文が代表例とされることが多い。しかしノダ文が「～ハ～ダ」という名詞文に準ずる構造を基盤として成立したと考えると<sup>1</sup>、「原因・理由」の提示がノダの中心義になっているのは奇妙なようにも思える。時間的・空間的に隔たった2つの事態を「学校を休んだのは、風邪をひいたのだ」とノダで結ぶのは、典型的な「主題-解説」構造としては違和感を覚えるためである。

本発表では、ノダ文の定着期である近世期（江戸語）のノダの用法を観察し、現代語のノダ文の代表例と言われている「原因・理由」の提示は、当時としては一般的でなかったことを明らかにし、近代語からその提示が広がった契機について仮説を述べる。

## 2. 先行研究

文法概説書では、現代語ノダの中心的な用法を「事情」や「関係・関連づけ」といった用語で示しつつ、さらに下位分類として「原因・理由」を表す場合と「言い換え」を表す場合を挙げることが多い<sup>2</sup>。幸松(2012)でも、現代語ノダの用法を著した際には、「事情」を表すノダの下位分類としてこの2つを分けて記述していた。

(1) 「僕が出る！」叫んで、亘は受話器に飛びついた。昨日と同じように、一発怒鳴ってやろうと思ったのだ。（幸松 2012:35）

(2) ここのシステムは恐ろしく単純で、その枠の外に出るとすぐに排除されてしまう。つまり、簡単に殺されてしまうのだ。（幸松 2012:40）

(1)は「怒鳴ってやろうと思った」という感情が湧き、その後で「受話器に飛びついた」という行動に移ったのであって、両者は因果関係にある。対して(2)は「すぐに排除されてしまう」と抽象的な表現をしておいて、「つまり」という接続詞で繋ぎ、「簡単に殺されてしまう」と、「排除」が意味するところを具体的に述べ直している。このとき「排除される」ことと「殺される」ことは同一事態の言い換えである。

<sup>1</sup> 本発表では、ノダ文の構造について、田野村(1990:1)の次の言説にしたがう。「(中略)「雨が降ったのだ」という文は、名詞を述語とする主題-解説型の文「～は～だ」の解説の位置(つまり、「～だ」の位置)に、述語を中心とする「雨が降った」という表現が現れたものだとする視点である。「雨が降ったのだ」という文の背後には、ことばの形では表現されていないにせよ、「～は」という主題(例えば、「地面が濡れているのは」という主題)が常に潜んでいる。つまり、「雨が降ったのだ」という文は、次のような構造を持つものと考えられるわけである。「地面が濡レテイルノハ(=主題)、雨が降ったのだ(=解説)」」。なお同様の把握は、田野村(1990)以前にも、山口(1975:16)、寺村(1984:307)においても示されている。

<sup>2</sup> 例として、庵(2001:246)では、ノダの「関連づけ」を表す用法の下位分類としてノダが「理由」を表す場合(「昨日は学校を休みました。熱があったんです」と「言い換え」(「昨日大学を卒業した。今日からは学生ではないのだ」)を表す場合に分けている。日本語記述文法研究会編(2003:199)では、「提示の「のだ」」の「関係づけ」の用法として、「事情の提示」と「換言の提示」を挙げている。

一方で、従来のノダ文研究では「A. B ノダ」に見られる A と B の関係の類型として「原因・理由」関係や「言い換え」関係が言及されることがあったとしても、それは A と B に見られる様々な関係性のひとつとして捉えられており、A と B が時間的・空間的に隔たった 2 事態なのか、同一事態の言い換えなのかという点が特に重要視されていたとは言えない<sup>3</sup>。

こうした中、A と B が同一事態か否かがノダの意味を考える上で重要であると明言した先行研究としては、野村(2019)がある<sup>4</sup>。野村(2019:291)では、古語における「活用語連体形+ナリ」形式は、現代語の「連体形+ノダ」文に対応しているとして以下を示している。

(3) 右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなり。

(4) 外で音がしているのは雨が降っているのだ。(野村 2019 : 291 [図式 1]の一部)

野村(2019:291-293)によれば、古語ナリ文と現代語ノダ文は、どちらも原型として「A は B である」という主部-述部構造を持つとされ、このとき主部である A の方に、より「表面的・感覚的・知覚的な事態解釈」が表れ、述部である B の方に「内奥的・裏面的(事情的)な事態解釈」が示されるという。上例でいうと、主部「右近の司の宿直奏の声聞こゆる」「外で音がする」は、それぞれ知覚的に捉えた事態解釈であり、述部「丑になりぬる」「雨が降っている」が、その事情的な事態解釈になっている。

野村(2019)は、こうした古語ナリ文と現代語ノダ文の重なりを踏まえ、『源氏物語』の中古ナリ文の特徴を明らかにすることによって現代語ノダ文研究における「ノダの中心義は何か」という問いかけに示唆を与えようとしたものであるが、その議論の中で、中古ナリ文には「原因・理由」を直接に表す文がほとんど見当たらないという指摘をしている。中古ナリ文は、上述(3)「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなり」のように同一事態の再解釈でなければならず(これを野村(2019)では「一事態制約」と呼んでいる)、中古ナリ文で「原因・理由」を表す際には、下例(5)のように「～～理由句～～ナリ」型になる場合が多いという。述部は文脈上で既に与えられた事態を繰り返すので、情報が重複的になるという特徴がある。

(5) 内裏より御使あり。三位の位<sup>贈りたまふ</sup>よし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるが、あかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと、<sup>贈らせたまふ</sup>なりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。(野村 2019:298) (※下線、□の付与は発表者による。□は重複部分を表す)

この野村(2019)の指摘を受けて、本研究では、近世期の資料を対象に用法調査を行い、近世ノダにおいて「原因・理由」の提示用法があるのかどうかを確認した。これまで幸松(2020,2024)では、近世期のノダが「事情のノダ」であるのかどうかに重点を置いて用法を

<sup>3</sup> 例として田野村(1990)では、ノダ文の基本用法として「背後の事情」を表す用法を挙げて、目立つ類型をさらに7つ列挙している。1つ目に「原因・理由」関係、4つ目に「言い換え・要約」関係が挙げられている。奥田(1990)では、ノダ文による《説明》の関係として「つけたし的」「ひきだしの」の2つに分類し、さらに下位分類として A と B の関係別に 14 種を挙げている。その中に「理由」「原因」「動機」「根拠」や「具体化・精密化・いいかえ」がある。

<sup>4</sup> 野村(2019)での主張は野村(2015)を踏まえたものであるが、本発表では、中古ナリの調査を通して現代語ノダの用法分析に示唆を与える通時的な視点が示されているという理由で、野村(2019)を参照する。

分析してきたが、それにとどまらず、ノダによって繋がれる事態と事態が、時間的・空間的に隔たった 2 事態による因果関係なのか、もしくは同一事態の言い換えであるのかという切り口から見直し、近世ノダで「原因・理由」の提示はどのように表れていたのかを明らかにしようとするものである。

### 3. 調査と分析

#### 3.1 用例の収集

本研究では、コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用して『日本語歴史コーパス』江戸時代編の人情本（コア、非コア）、洒落本（コア、江戸刊行本のみ）から抽出した、肯定文末のノダを対象としている。ノダカラ、ノダケド等の従属節述語におけるノダ、文末に現れる推量のノダロウは除外している。「この本は私のだ」のように明らかにモノ準体文と判定できる例は除いているが、判然としない例<sup>5</sup>は残した。最終的に得られたノダ文は 223 例である。

#### 3.2 「原因・理由」のノダ

本研究で対象とした近世期ノダ文 223 例の用法を分類すると、「疑問詞疑問文のノダ」が 127 例、聞き手がなすべき行為を示している「当為のノダ」が 10 例見られた。それらを除いた平叙文としてのノダを見ると、ほぼ「事情のノダ」であると判断できそうな例であり、これが 86 例見られた<sup>6</sup>。この 86 例を対象に、ノダが「原因・理由」を表しているのか、「言い換え」を表しているのかを判断しようとした。事態の解釈によって、どちらとも言えそうな例、截然と区別し難い例が存在するものの、いったんは「原因・理由」が 56 例、「言い換え」が 30 例と分けた。

この「原因・理由」であると判定できる 56 例中、実に 46 例が「A. B 理由句 A ノダ」という、文中に理由句を含むタイプであった<sup>7</sup>。

- (6) 長「米八さ<sup>°</sup>んを案じて此御屋敷へも一所においでか  
丹「なにノ<sup>ゝ</sup>そふいふ訳じやあねへが。米八にすこし頼んだことがあつて来たのだ。そんなことよりおめへはまあ。どふしてここへ逃て来た。(春色梅児与美 三編巻の七 1833)
- (7) 伝「こうおめへそう腹を立物じやあねへ。畢竟はおめへの為を思ふからいふのだ。なに是が他人で見なせへ。(恋の花染 初編上 1832)

現代語であれば、(どうして来たのかと問われて)「頼んだことがあったんだ」と述べるなり、(腹を立てるな、と言っておいで)「お前のことを思っているんだ」と述べるなど、「A. B ノダ」という形で「原因・理由」を直接提示することが可能である。ところが近世期ノダでは、後述する条件がない限り、「A. B 理由句 A ノダ」型が選ばれている。このとき(6)(7)の述部は前提なので、当該ノダ文では、理由句の方に話題の焦点が当たっている。述部が重複的であるほど、[焦点(新情報の理由句)-前提(旧情報の述部)]という情報的

<sup>5</sup> 判断に迷う具体例としては、後述する(20)も「あれは、かごをかき習うの(者)だ」と読めなくもない。

<sup>6</sup> このうち、現代語の「発見のノダ」と同様の例ではないかと思われる文が 4 例見られたが、事情を推論するノダ文と連続的であるので、いったん「事情のノダ」に入れておく。

<sup>7</sup> 本発表では～テ、～カラなど理由を表している句を、野村(2019)にならって「理由句」と呼ぶ。

な特徴が明確になるが、実際は述部の情報の重複の具合には様々な程度が見られる。  
(6)(7)は述部に新情報が見られない例であったが、下例のように情報を補ったり、表現を若干言い換えたりすることも多い。

(8) おれの方でもおめへの仕方が餘りだと腹の立てゐるはりあいであつて手を揚たのだから勘忍しなせへ（中略）私が身を板しばりにして取らふとした心いきが怖しいからつい腹を立てたのだ（花廻志満台 二編卷之下 1836）

(9) 強「これさ／＼静にするがいいはな。姉弟喧嘩も久しいもんだあ。自己あ巨細理はしらねへが。お前の災難に逢た事も聞。亦姉さんが何所へか懸合に往といふ事も。些ばかり聞たが。夫につけちやあ自己も助太刀を仕様と思つて。途中から無理に連れて帰つたのだあ（花廻志満台 四編卷之上 1838）

(8)では、腹を立てたこと自体は発話現場における前提であるが、それに意図性がなかったことが述部の「つい」で足されている。(9)は、頼んだ用を済まらず帰ってきた姉に対して、なぜ何もせずに帰ってきたのかと弟が責めている場面である。その姉弟喧嘩に割って入った話し手が、「助太刀をしようと思つて（お前の姉を）途中から無理に連れて帰つたのだ」と発話している。話し手が連れて帰つたことは発話現場において自明のことではあるが、「途中から」「無理に」といった過程の様子が述部で補足されている。

この変種として、理由に当たる内容が発話現場で与えられていて、それを「(ソレ)ダカラ」で受ける「A. B. (ソレ)ダカラ A ノダ」型も見られる。

(10) 吉「ゑゑもうよくべら／＼喋つて 詮が強いなふ 夫だから其様な目に逢んだ わたしの言通り金なんぞを持って歩行せへ仕ねへけりやあ 些とも間違はありやあ仕ねへ。（花廻志満台 四編卷之上 1838）

(10)は、追い剥ぎにあった人を見舞っているという状況であり、「そのような目にあう」ことは発話現場で共有されている前提である。下線を付した聞き手の態度を「それだから」で指示しつつ、追い剥ぎにあった理由としてあげつらっている。単純化すると、「最近、ひどい目にあってばかりいる。なんでこうなるのだろう」という人に対して「お前がアホだからこうなるんだ」と言えば、先に述べた「B 理由句 A ノダ」型になり、「お前はアホだな。(それ)だからこうなるんだ」と言えば、「B. (ソレ)ダカラ A ノダ」型になる。

一方、A と B が同一事態ではないのにもかかわらず、「A. B ノダ」が許容されている例が 10 例ほど見られた。これは 2 つのタイプに分けられる。

(11) 美「其気でのろけられちやあ事だね しかし無理はないのさ 程がよくつて男が宜てお金が有といふもんだからね 相替らず御盛かゑ といはれてお楽は両眼に少し涙をうかめらく「いいゑ  
美「どうしたのだゑ 又喧嘩でもしたのだね（春色江戸紫 二編上巻 1864）

(12) 房「ざまあ見たがゑ 何だ御大そうな 疼いなんのと言掛りはよすが宜 いやになりんこちりんこだぜ。(いやになりんこたうじのはやりことば) お菊は稍有乳をおさへて起なほり「それじやあ今しがたお言のは 皆啞で もう先頃から私が否に成てお在のだね（春色連理の梅 四編卷之十二 1858）



(11)はお楽という芸妓が仲間のお美代と会話している場面である。波線を付した部分、お楽が涙を浮かべている様子を見て、お美代が「(恋人の惣次郎と) 喧嘩でもしたのだね」と述べている。このとき A に当たる事態は「涙を浮かべている」、B は「喧嘩をした」であるため、B のノダは、「原因・理由」の直接提示ではある。ただし、話し手が自身の知識を事情として提示しているノダではなく、相手の様子から事情を推論し、把握しようとしているノダである。(12)は、波線を付した部分、相手の悪態を聞いて「さっき言ったのは皆嘘で、前々から私のことが嫌になっていたのだね」と述べている。A は「現在、目の前で悪態をついている」、B は「前々から嫌になっていた」という関係であり「原因・理由」の直接的な提示ではあるが、やはり事情提示ではなく、事情把握である。

次に、同一事態ではないにもかかわらず、「A. B ノダ」型が見られるもう一つのタイプとしては、B が「出来事」でない場合がある。

(13) よね「はいさ酒でも無理にまいらずはとこせへておきますは とすこし鼻であしらひ膝からどんと居る 藤は余程酒がまはりし風情すこし調子高に  
藤「をい米八さん今日はどふぞその突かかり口上は一条抜てもらはふよ 突掛てよけりやあとふから此方で突かかるのだ」(春色梅児与美 二編巻の四 1832)

(14) 幸 なんのまあそんな気の弱ひ事をいはずに。縁と時節のすへをまつがいい。たださへ苦界のつらひ身のうへ。煩つちやあ。尚更みじめを見るのだ。(花街寿々女 1826)

(13)の A と B は「行為要求」(抜いてもらおう)とその「理由」である。(14)の A と B は「当為的判断」(待つがいい)とその「根拠」である。そもそもノダ文で行為要求や当為判断を受けることができないため、こうした場合は「A. B 理由句 A ノダ」型には合わない。現代語のノダであれば、(14)を「時期を待つがいい。わずらっては尚更みじめを見るから、そうするがいいのだ」と言えそうであるが、近世期ノダは動詞を受けるものがほとんどで、形容詞に接続するノダは限定的であった(幸松 2024)<sup>8</sup>。

以上、ノダが「原因・理由」の直接提示をしているように見えるケースとして 2 種類を挙げた。前者は発話現場の状況から話し手が事情を把握しようと発話されたノダであり、推論の文であった。後者はノダによって事情を述べられる対象が出来事の文ではなかった。どちらのケースも、A と B が出来事間の関係ではないという点で共通している。こうした場合は「一事態制約」には当てはまらないのであろう。

### 3.3 「言い換え」のノダ

A と B が同一事態の「言い換え」関係であれば、「A. B ノダ」が現れる。

(15) 里風 あれ／＼みさつせへ。田中のほうから。三まいの早かごがくるが。いまじぶんなぞあねへに。いそがせるだろうの  
花咲 ほんに何者だろうの こいつはげせねへはへといふうち。早かごは土手のきはまできたり。また田中のほうへ。かづきもどす

<sup>8</sup> 幸松(2024:95)では、近世期資料に見られるノダ系表現 586 例を対象に、ノダに接続する語の品詞情報を調べている。その結果 532 例が動詞接続であり、これは全体の 94%を占める。近代語資料による同様の調査では、動詞接続が 917 例中 738 例であり、全体に占める割合が 80%に落ちるので、動詞接続に偏るのは近世ノダの特徴と言えるであろう。

友次郎 あれみさつせへ。かつぎもどすぜ へへきこへた。あれはたしかかごをかき習ふのだ (総籬 1787)

- (16) 治「ふむ そうかの 時に此処等の歌妓は直にはなし合がわかるだらうの  
たき「あれ もう標緻が能と聞たものだから 左様いふ多性ものだよ ゑゑ 好ねへ  
治「なにそうじゃあねへが 只きくのだあな (花廻志満台 二編巻之下 1836)

(15)では駕籠かきの奇妙な動き(田中の方からやって来て、また田中の方へ担ぎ戻す)を見た話し手が「ああ、わかった。あれは駕籠かきを習っているのだ」と述べている。発話現場で共有されている事態を「あれは」と指示した上で、述部でその解釈を提示している。(16)では、標緻がいいと聞いて急に関心を示すなど多情な男だと指摘されて「ただ聞いているのだ」と述べている。これらは、野村(2019)が中古ナリの例として挙げた「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなり」のように、発話現場で共有されている事態であるAに「表面的・感覚的・知覚的な事態解釈」が表れ、ノダ文であるBに「内奥的・裏面的(事情的)な事態解釈」が示される例と言える。

### 3.4 カラダ

3.2では、近世ノダによって「原因・理由」提示をする際には「A. B理由句 Aノダ」型が選好されていたことを見たが、「原因・理由」提示の方法としてはノダの他にカラダもある。本稿の(6)(7)では「米八にすこし頼んだことがあつて来たのだ」「畢竟はおめへの為を思ふからいふのだ」というノダ文を挙げたが、「米八にすこし頼んだことがあつたからだ」「畢竟はおめへの為を思ふからだ」とカラダ文を用いて表現する可能性はあったのかを確認するため、近世カラダによる「原因・理由」提示についても併せて調査を行った。

同資料を用いて、接続助詞「から」を含む文を抽出したところ、1959 例が得られた<sup>9</sup>。「から…」で言いさしている文、前件と後件の倒置によって「から」で終止している文ではなく、ある事態が発話場で前提となっていて、その「原因・理由」を提示するためにカラダを用いている文を確認したところ、9 例のみが認められた。以下に2 例を挙げる。

- (17) はる「それでもおまはん一と頻りは。恋ゝてお在じやあないか  
強「これさまた人をいちめるよ ありやあ全体おまへが悪いからだ  
はる「なぜ／＼。何の私知りますものか (花廻志満台 三編巻之下 1837)

- (18) 仇(中略)下においたる猪口を干顔をしかめて「ああつめてへ  
増「それ見なあんまりながいからだあな (春色辰巳園 初編巻二 1833)

このように、カラダによる「原因・理由」の直接表示が確認できたものの、2000 例近い「から」を含む文のうち 10 例にも満たないということ、1700 年代の作品には見られず、1830 年代以降の人情本のみに見られるということで、カラダの定着はノダよりさらに遅れていた可能性がある。そうであるとしたら、カラダの前段階として、迂回的な方法であっても「A. B理由句 Aノダ」を使用する必要性があったとしても不思議ではない。

<sup>9</sup> 検索条件として「品詞」を「接続助詞」に指定、かつ「語彙素」を「から」に指定して文を収集した。1962 例が抽出できたが、目視で確認した結果、格助詞「から」が 1 例、接続詞「だから」が 2 例紛れていることが発見されたので、接続助詞「から」文としては 1959 例が抽出できた。

#### 4. 調査のまとめ、用法変遷への仮説

以上、近世期ノダのうち、「事情のノダ」と判断できるノダ文を、「原因・理由」の提示であるのか、「言い換え」の提示であるのかという視点、すなわち、時間的・空間的に隔たる2事態を因果的な関係にあるとして結びつけているのか、同一事態を別の表現で述べ直しているのか、という視点で精査した。「Bノダ」という形で直接提示できるのは「言い換え」のノダであり、「原因・理由」のノダの方は、出来事間の関係を繋ぐ場合は、原則として文中に理由句を含む形で表現していた。つまり、「どうして来たんだ？」と聞かれて「用があったんだ」という述べ方は難しく、「{用があって／用があったから}来たんだ」型の述べ方が好まれていたのではないかと、ということである。これは、野村(2019)が中古ナリで確認した状況と軌を一にしており、どちらも「主題-解説」構造を基盤としている以上、2つの異なる事態を直接的に結びつけるということが難しかったのではないかと、いう事情が垣間見える。

ところが近代以降になると、ノダによる「理由・原因」の直接提示はそれほど珍しいものではなくなっていく。

(19) 殺した理由を云へと云ふのか。(短い間)仕方がない。矢張云つてしまはう。母は俺にとつて繼母だったから、それで俺は憎かつたのだ。(雑誌『太陽』戯曲「生さんとすれば」)

(19)は近世ノダ文に見られなかった「繼母を殺した。憎かつたのだ」型の述べ方になっている。「繼母だったから」という理由句が現れているが、これが「原因・理由」の焦点になってはおらず、文全体が「原因・理由」の提示になっている。

では、何が契機となってノダの「一事態制約」が崩れたのだろうか。今回の調査を通して明らかになった近代語の様相から、いくつかの仮説が考えられる。

まずは、「一事態制約」といっても<述部が完全に旧情報、理由句だけが新情報>では、述部を述べる意味がない。そのため、実際にはさまざまな程度で情報を足した用例が見られたということは前述のとおりである。現代語で言えば、「あれ？どうして来たの？」と聞かれて「用があったから、仕事をキャンセルして来たんだ」と述べる場合、述語事態の成立は前提となっているが、「仕事をキャンセルして」という状況語的な成分が足されていて、新情報が混じっている。このような使用を媒介として、徐々に全体が新情報のノダ文が現れるようになったという可能性もある。さらに、本調査の結果からは、事情を把握したり、その内容を聞き手に確認要求する場合には、「原因・理由」の直接提示が可能であった。近世期には「のだね」(事情把握-確認要求)と「のだ」(事情提示)と、形式によって用法が分化していたのが、徐々に「のだ」によっても事情把握が行われるようになっていく。形式と用法の合一をきっかけに、「のだね」という確認要求だからこそできた「原因・理由」の直接提示が「のだ」全体に拡張された可能性も考えられる。

さらに、「一事態制約」を突き崩すきっかけを作ったのではないかと考えられるもう一つの仮説がある。近世期には、準体助詞ノに断定の助動詞相当の終助詞サが接続したノサという形式がノダと同程度の頻度で広く用いられていたことは、すでに幸松(2020)、幸松(2024)などで述べた。近世ノサというのは、近世ノダと、出自としては似た構成要素を持ちながらも用法の上では差異があり、聞き手が知らない(と話し手が想定している)情報を提示するために用いられているように思える例が多い。

同資料から抽出したノサ文 162 例には「一事態制約」が見られず、以下のような「A。B ノサ」が現れ得る。

(20) (店屋が寂れた、という話で) 知らねへやつらが見て悪く評判をしたのさ (甲斐新話 1775)

ノサ文は、聞き手が知らない情報を披瀝するために用いられていた終助詞サ文であったと思われ、中古ナリ文や近世ノダ文とは違って、名詞文構造を基本にしていない。ノサ文が〔主題-解説〕構造を基本としていないことは、前提を必要とせずに発話し得たことや、ノサが名詞述語にも後接できた（～であるのさ）ことによって裏付けられる（幸松 2020）。(20)においては「知らない奴らが悪く評判をした」という事実を披瀝するためにノサが用いられているのであって、前後文脈との関係によって、このノサ文が「原因・理由」の提示になっているとも言える、という方が事実に近いのかもしれない。

この近世ノサの用法は、近代に入ってからノダに移し替えられていったと見られるが（幸松 2020）、このノサとノダとの合流こそが、近代ノダの「一事態制約」からの解放をもたらすきっかけとなったという可能性も考えられる。すなわち、1700 年代から「一事態制約」に縛られることなく(20)のような文を許容していたノサがノダに置き替わったことで、「(店屋が寂れたのは) 知らない奴らが悪く評判をしたのだ」というノダが当たり前になるようになった、ということである。

今後は、近世末から近代にかけての資料を中心に用例の量を増やして、さらに精緻に分析を進める予定である。

〔引用文献〕

- 庵功雄 (2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク  
奥田靖雄 (1990)「説明 (その 1) ーのだ、のである、のですー」『ことばの科学』4 むぎ書房  
田野村忠温 (1990)『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』(復刊 和泉書院 2002 年)  
寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版  
日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版  
野村剛史 (2015)「中古の連体形ナリ ー『源氏物語』を中心にー」『国語国文』84 巻,1 号, pp.35-56  
野村剛史 (2019)「ノダ文の通時態と共時態」『認知言語学を拓く (成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書)』くろしお出版  
山口佳也 (1975)「「のだ」の文について」『国文学研究』56 pp.12-24  
幸松英恵 (2012)「「ノダ」文による《説明の構造》」東京大学 総合文化研究科 未公開 博士論文  
幸松英恵 (2020)「事情を表わさないノダはどこから来たのかー近世後期資料に見るノダ系表現の様相ー」『東京外国語大学 国際日本学研究』ブレ創刊号 pp.162-178  
幸松英恵 (2024)「ノダ文の通時的研究 ー「事情を表わさない用法」を中心にー」『東京外国語大学 国際日本学研究』4 号 pp.92-110

〔使用コーパス〕

- 国立国語研究所 (2005)『太陽コーパスー雑誌『太陽』日本語データベースー』(2021 年 11 月 24 日確認)  
国立国語研究所 (2019)『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』(2019 年 11 月 21 日確認)  
国立国語研究所 (2019)『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』(2019 年 11 月 21 日確認)

# 日本語において抽象格と形態格を区別する意義—無助詞の分析—

坂本瑞生（東北大学大学院生）<sup>1</sup>・山下大希（名古屋大学大学院生）<sup>2</sup>

## 1. 日本語における無助詞項

現代日本語共通語では、格助詞を伴わない「無助詞」形式の名詞句が現れる場合がある。無助詞の分布制限については先行研究に一定の蓄積がある。まず、名詞句が主題であると解釈できる場合は、ほとんど常に無助詞が許される(丹羽(1989))。

- (1) a. 太郎 {が/Ø} 来たよ
- b. そのコップ {を/Ø} 持ってきて
- c. このコート {で/Ø} 太郎がよく練習してたよ
- d. あの子 {と/Ø} 太郎は昔つきあってたんだって
- e. この桃 {から/Ø} 桃太郎が生まれたんだよ

((1c-e)は丹羽(1989: 42)より引用)

名詞句が非主題の場合、後置詞句（デ・ト・カラ等）は無助詞と交替できない(=2))。「ヲ」格項は基本的に無助詞を許す一方で(=3))、「ガ」格項は非対格自動詞主語の場合に限って無助詞を許す(=4), (5))。まとめると、内項を表示する格助詞「ガ」「ヲ」は無助詞を許す。

- (2) a. 太郎がよくコート {で/\*Ø} 練習してたよ
- b. 太郎が花子 {と/\*Ø} 昔つきあってたんだって
- c. 桃太郎って桃 {から/\*Ø} 生まれたんだよ (丹羽(1989: 42))
- (3) a. 子供達が本 {を/Ø} 読むの見たことない
- b. この近くにタバコ {を/Ø} 売ってる店ありませんか? (影山(1993: 56))
- (4) a. 顔にご飯粒 {が/Ø} ついているの知ってる? [非対格自動詞]
- b. 交通事故 {が/Ø} 起こるところ見たことある? [非対格自動詞] (ibid.)
- (5) a. 子供たち {が/\*Ø} 騒ぐの見たことない。 [非能格自動詞]
- b. 患者 {が/\*Ø} あばれたの知ってますか? [非能格自動詞] (ibid.)

ただし、非動詞述語の「ガ」格項は内項であるにもかかわらず無助詞を許さない。

- (6) a. 太郎 {が/\*Ø} 学生だ [名詞述語]
- b. 花 {が/\*Ø} きれいだ [形容詞述語]

以上をまとめると、無助詞の分布について次の記述的整理が得られることになる。

- (7) a. 主題の場合、無助詞が可能である
- b. 非主題の場合、動詞述語の直接内項に限って、無助詞が可能である。

本発表は、(7)に対して、格付与の統語論的メカニズムに基づいて原理的説明を与える。

<sup>1</sup> mizuki.sakamoto.p7@dc.tohoku.ac.jp

<sup>2</sup> yama421shita@icloud.com

## 2. 仮定と提案

本発表は格付与の統語的メカニズムについて理論的提案を行い、その帰結として(7)のパラダイムに原理的説明を与える。本節では、生成統語論の枠組みにおける格付与メカニズムについて概観するとともに、形態格と抽象格を区別するという本論の提案を導入する。

### 2.1. 提案：形態格と抽象格

ドイツ語のように格標示にかかわる形態変化が豊かな言語では、名詞句は適切な格標示を受けなければならない。(8)の例では、「その男(Mann)/学生(Student)」が主語である(8a)では冠詞が主格 *der* に、目的語である(8b)では対格 *den* に形態変化している。

- (8) a. **Der Mann/Student** hat den Lehrer gesehen  
the<sub>NOM</sub> man/student<sub>NOM</sub> has the<sub>ACC</sub> teacher seen  
‘The man/student has seen the teacher.’ (その男/学生はその先生を見た)
- b. Der Lehrer hat **den Mann/Studenten** gesehen  
the<sub>NOM</sub> teacher has the<sub>ACC</sub> man/student seen  
‘The teacher has seen the man/student.’ (その先生はその男/学生を見た)
- (Haegeman (1994: 158))

形態的な格標示をほとんど欠く英語においても、形態的には空の抽象格が構造的に与えられると考えることで同様の分析が行われる。名詞句が(形態／抽象)格を持たなければならないという制約は(9)の格フィルター(Case Filter)として定式化される<sup>3</sup>。

- (9) Case Filter: \*NP if NP has phonetic content and has no Case. (Chomsky (1981: 49))

日本語は格助詞によって形態的に格を標示する言語であり、その意味で格助詞は形態格標識であると言える。このように考えた場合、無助詞名詞句は形態格を欠くために格フィルター違反を引き起こすことが予想されるが、実際には(7)の環境ならば、形態格を欠いても非文法性を生じない。これは何故なのだろうか。本発表では、日本語にはドイツ語のような形態格(格助詞)のほかに、統語構造に応じて与えられる音形を持たない抽象格が存在していると考えerことでこの問題に解答を与える<sup>4</sup>。

- (10) 提案：日本語は形態格(格助詞)と抽象格の両方を有する

以下、形態格を「ガ格」「ヲ格」、抽象格を[NOM][ACC]と呼び分けることにする。

(10)の提案の下で、名詞句は形態格または抽象格を持つことで格フィルターを満たすこ

<sup>3</sup> 格フィルターに抽象格と形態格の両方を含める考えについては三原(1994: 31-35)を参照。

<sup>4</sup> 形態格と抽象格を区別するという考えは Kuroda (1988)の議論に基づいている。なお、国語学の文脈でも同様の着想が見て取れる。青木(1992)では、格助詞(＝形態格)の機能として、与えられていない格を付与する「格付与」と、既に決定された格を確認する「格確認」の二種が立てられる。「格確認」の場合には、述語の「統括機能」によって格が決定するとされる。この「統括機能」は、本文でいうところの「抽象格」に機能としては等しい。

とになる。そのため、抽象格を持つ名詞句は形態格を持たずとも適切に認可され得るために無助詞を許す。他方、抽象格を持たない名詞句は形態格が必須であり、無助詞を許さない。このパラダイムは以下の表のようにまとめられる。

(11)

抽象格と形態格		形態格	
		あり	なし
抽象格	あり	a. 脱落可能な NP+Part	b. 無助詞
	なし	c. 脱落不能な NP+Part	d. 不適格

以下では、(11)のパラダイムによって(7)の記述の一般化を導き出せることを示していく。

## 2.2. 格付与メカニズムの技術的細部

(11)からの無助詞の分布を予測するためには、抽象格がどのような環境で与えられるかが明示的である必要がある。そこで、抽象格付与に関する理論的想定を以下に導入しよう。

まず、標準的な生成統語論の枠組みに準じて、[NOM]は TP 指定部、[ACC]は VP 補部にある名詞句に付与されると仮定する(Chomsky (1981))。

[NOM]の付与は TP 指定部で行われるが、この TP 指定部という位置は同時に主題素性 [TOP]の認可位置でもあったと考える(三宅(1995, 1996, 2011))。そのため、[NOM]付与は実質的に主題項に付与されることになる。非主題の主語/外項は vP 指定部の基底生成位置に留まり、その位置で形態格「ガ」を付与される。

[ACC]の付与に関して、[ACC]付与できるのは[+V]素性を持つ語彙範疇、すなわち動詞 V と後置詞 P に限られる(Chomsky (1981))。したがって名詞述語や形容詞述語は格付与子になれない。この仮定は英語の次の例から正当化される。(12a)と(12b)は意味的に等価であるにもかかわらず、後者は非文である。動詞述語 *envy* は[ACC]付与子になって目的語を認可できる一方、形容詞述語 *envious* は格付与子になれないのである。そのため、非動詞述語では(12c)のように of-挿入規則によって代替的に格フィルターを満たす必要がある。

- (12) a. Poirot envies Miss Marple.  
b. \*Poirot is envious Miss Marple.  
c. Poirot is envious of Miss Marple. (Haegeman (1994: 173))

以上をまとめると、我々は以下 2 点を抽象格付与のメカニズムとして仮定することになる。

- (13) a. [NOM]は TP 指定部で主題名詞句に与えられる  
b. [ACC]は VP 補部に与えられる。非動詞述語補部には[ACC]は付与されない。

形態格については、フェーズ理論(Chomsky (2001, 2008))を前提に以下の規則を仮定する。

- (14) a. CP phase の転送領域(=TP)にある NP に「ガ」格を付与する  
b. v\*P phase の転送領域(=VP)にある NP に「ヲ」格を付与する

## 2.3. TP 指定部における主格と主題：(7a)の導出

前節では、[NOM]の付与について以下の仮定を導入した。

(15) [NOM]は TP 指定部で主題名詞句に与えられる (= (13a))

この仮定により、[NOM]を与えられるのは主題である名詞句に限られる。換言すると、非主題の名詞句は[NOM]を与えられないために（他の抽象格を受け取らない限り）無助詞を許さない。他方、主題である名詞句は[NOM]を付与されるために、抽象格によって格フィルターを満たす。そのため、形態格付与は随意的となり、無助詞が許されることになる。以上、[NOM]付与についての仮定(15)から、無助詞の分布についての記述の一般化(7a)を導き出せることを論じた<sup>5</sup>。

## 2.4. 2つの「非対格性」：(7b)の導出

本発表は、日本語において形態格と抽象格を区別することを提案する。これによって、いわゆる「非対格性(unaccusativity)」もまた「形態格の非対格性」と「抽象格の非対格性」の2種が認められることになる<sup>6</sup>。つまり、形態格「ヲ」の付与の有無と、抽象格[ACC]の付与の有無を別個に考えることが求められる。以下ではこの点を明確化することで、動詞述語内項が助詞脱落を出来るという(7b)の記述が理論的に予測可能であることを示す。

前節での仮定より、形態格は v\*P 環境(=他動詞・非能格自動詞)では「ヲ」格を付与し、vP 環境(=非対格自動詞・非動詞述語)では「ヲ」格を付与しない(=CP phase で「ガ」格を内項に付与する)。他方、抽象格[ACC]は、[+V]述語の補部には付与され、[-V]述語の補部には付与されない。このことを整理すると、内項の格付与体系は以下の通りになる。

(16)

2つの非対格性		形態格	
		対格付与有 (v*P phase)	対格付与無 (non-phase)
抽象格	対格付与有 ([+V])	a. 他動詞内項	b. いわゆる非対格自動詞
	対格付与無 ([-V])	c. ---	d. 非動詞述語

この整理のもとでは、いわゆる「非対格自動詞」の非対格性は「形態格を付与しない」ということによる非対格性と理解されることになり、抽象格の面では[ACC]を付与する格付与子として振舞うことになる。他方、抽象格の点での非対格性は述語品詞に対応する<sup>7</sup>。

<sup>5</sup> 本論では形態格と抽象格を独立して付与されるものとする。そのため、「ヲ」格標示された名詞句が同時に[NOM]付与される、といった格付与パターンも問題ない。(1b-e)の派生では、非主語名詞句が TP 指定部の位置で [NOM]付与されて無助詞が認可される。

<sup>6</sup> 非対格性の仮説に基づく「非能格／非対格自動詞」の区別は影山(1993, 1996)や三宅(2017)を参照。同様の着想は三上(1953)の「能動詞／所動詞」の区別にも認められる。

<sup>7</sup> 形態格「ヲ」は v\*P phase の存在に依拠している。v\*が外項へ意味役割付与をすることを踏まえると、「ヲ」格付与は外項への意味役割付与を必ず伴うことになる。換言すると、日本語では、いわゆる「ブルツィオの一般化」は形態格付与に関して成立することになる。



以上の枠組みでは、「内項の無助詞が許される」ことは「内項に抽象格[ACC]が付与される」ことに等しい。これは、述語が[+V]素性を持つ場合に該当する。したがって、本論の提案のもとでは、動詞述語の直接内項は無助詞を許す(=抽象格を付与される)一方、非動詞述語の直接内項は無助詞を許さない(=抽象格を付与されない)ことを説明できる。他動詞・非対格自動詞・非動詞述語の内項の格付与パターンをそれぞれ以下に示そう。下線部が形態格「ヲ」の付与領域、波線部が形態格「ガ」の付与領域である。(17c)の名詞述語「学生(だ)」は[-V]であるために[ACC]を付与せず、したがって無助詞を許さないのである。

(17) a. [CP [TP [NP 子供たちが] [VP [本{を/∅}] 読む]] の] 見たことない (= (3))

[ACC]

b. [CP [TP [VP 顔に[ご飯粒{が/∅}] 知っている]] の] 知ってる? (= (4))

[ACC]

c. [CP [TP [NP [太郎{が/∅}] 学生]] だ]] (= (6a))

以上、本論の提案から導かれる 2 つの非対格性によって(7b)が導かれることを示した。

### 3. 更なる帰結

前節では、日本語において形態格と抽象格を区別するべきだという主張を提起し、その区別に基づいて無助詞の分布についての記述的一般化(7)を導出できるを見た。特に(7b)の導出に際して、「形態格の非対格性」と「抽象格の非対格性」を区別するという観点から説明を与えた。この 2 つの非対格性から得られる予測は以下の通りにまとめられる。

(18) [+V]要素の投射の補部は無助詞を許す

(18)は①投射主要部が[+V]であることと、②項が補部に生起していること、の 2 つの要件から成り立っている。したがって、いずれかの条件が満たされない場合には無助詞が許されないことが予測される。以下、この予測を確かめることで、本論の分析に支持を与える。

#### 3.1. 投射の主要部が[+V]ではない場合

まずは、1 つ目の条件「投射の主要部が[+V]である」を満たさない事例を 2 つ確認する。第一に、属格「ノ」が原則脱落できないという事実を挙げることができる。

(19) a. 山田 {の/\*∅} 本 / b. 山田 {の/\*∅} 親戚

この事実は、本論の枠組みにおいて次のように説明できる。句全体は名詞の投射である名詞句を構成しており、主要部は N である。これは[-V]の投射であるので、いかなる抽象格も付与しない。他方、名詞句が仮にフェーズ DP (あるいは n\*P) を形成して形態格付与領域を構成するとすると、形態格「ノ」を付与することはできる。したがって、形態格「ノ」が付与される場合に限って、属格要素は格フィルターを満たすことができる。換言すると、属格要素は無助詞を許さないのである。これは経験的事実と合致する。

第二の事例として、付帯状況をあらわす「A を B に」構文を挙げよう (cf. 村木(1983)、寺村(1983)、西垣内(2019))。この構文における「ヲ」格もまた無助詞を許さない。

(20) 地図{を/\*∅}たよりに駅を目指した

「A を B に」が B を主要部とする名詞句を構成するとすると、(20)は概略、次のような統語構造を持つと考えることができる。下線部は主節 v\*P の「ヲ」格付与領域である。

(21) [CP [TP [v\*P [VP [NP 地図{を/\*Ø} 頼りに] 駅を 目指し-]] -た]

この構造において「地図(を)」は抽象格[ACC]を付与されない。したがって、形態格によって格フィルターを満たす必要があり、無助詞を許さないことが予測される。

以上の分析では、「A を B に」のヲ格は主節 v\*P phase によって付与されていると考えている。この分析から、主節述部が non-phase である場合、当該構文は格付与を適切に行えないために非文法性を生じるという予測を導くことができる。そしてその予測の通り、「A を B に」の主節動詞が non-phase の非対格動詞である場合、当該構文は非文法的になる<sup>8,9</sup>。

(22) a. 地図をたよりに、タカシがその家を見つけた

b. ?? 地図をたよりに、その家が見つかった (西垣内(2019: 44))

以上、「投射の主要部が[+V]である」を満たさない事例において無助詞が許されないことを示した。

### 3.2. 項が補部に生起していない場合

続いて、2つ目の条件「項が補部に生起している」を満たさない事例を2つ取り上げて検討する。まず二重目的語構文を検討しよう。事実として、二重目的語構文における間接目的語の「ニ」格名詞句は無助詞を許さない。

(23) a. 山田、橋本{に/\*Ø} 1万円{を/Ø} 渡したらしいよ

b. 山田、1万円{を/Ø} 橋本{に/\*Ø} 渡したらしいよ

c. 直人{に/\*Ø} お金をあげる ((23c)は三原・平岩(2006: 209)より引用)

この事実は次のように説明できる。標準的な統語分析に基づけば、間接目的語は VP の指定部、直接目的語は VP の補部に基底生成される(cf. Larson (1988), 三原(2004))<sup>10</sup>。

---

<sup>8</sup> 寺村(1983)は以下の例を挙げて、「A を B に」構文は主節動詞が「意図的な行為」をあらわすという条件があることを論じており、ここでの観察と同趣旨の指摘と言える。

(i) \* 空気の乾燥を原因に、火事が急速に拡がった (寺村(1983: 46))

<sup>9</sup> ただし、B にあたる名詞が出来事と出来事、または出来事と個体の関係を表すような名詞である場合、非対格動詞の制限が解除される。

(i) a. 住民の通報をきっかけに、警察が犯人の居場所をつきとめた

b. 住民の通報をきっかけに、犯人の居場所が判明した (西垣内(2019: 44))

この種の文に対して西垣内は異なる統語構造を提案しており、この統語構造の違いがヲ格付与に関与していると考えられる。この点についての詳細な議論は今後の課題としたい。

<sup>10</sup> 三宅(2011)は、S 構造複合語は姉妹関係にある要素間において成立するという前提のもとに、以下の観察を示して、二重目的語構文では直接目的語が VP 補部であると論じている。

(i) a. 入賞者に[記念品贈呈]の際...

b. \* 記念品を[入賞者贈呈]の際... (三宅(2011: 152))

(24) [CP [TP 山田(は) [v\*P [VP 橋本(に) 1万円(を) 渡し-]] -た]]

[ACC]

この構造において、[ACC]はVP補部にある直接目的語に付与される。他方、間接目的語は抽象格を付与されない。したがって、直接目的語は助詞脱落を許す一方で、間接目的語は無助詞を許さないという事実が正しく予測される。

VP指定部に位置する項が無助詞を許さないというパラダイムは、認識動詞構文にも認められる。認識動詞構文とは、思考・知覚をあらわす主節動詞の埋め込み節主語が「ヲ」格で標示される構文である。

(25) 山田は[橋本を天才だと]思った (cf. 山田は[橋本が天才だと]思った)

三原(2022)は認識動詞構文の「ヲ」が脱落できないという観察を提示している。

(26) a. 私は局長の行動{を/\*Ø}不審に思ったんですね

b. 直人は旧友の好意{を/\*Ø}ありがたく感じたらしいぞ (三原(2022: 15))

三原は、これらの観察を「ヲ」が格助詞ではなく後置詞であると仮定することによって(アドホックに)説明している。しかし、本論の枠組みのもとでは二重目的語の間接目的語とパラレルな分析を行うことができる。

認識動詞構文の構造については、三原(2022)ほか標準的な生成統語論の分析に沿って、VP指定部に基底生成されると考え、(27)の構造を想定する。この構造は、*pro*の位置を顕在的な名詞句で埋めることが可能であることから支持される。

(27) [CP [TP 山田は[v\*P [VP 橋本を [CP *pro* 天才だと]思-]] -た]]

(28) 山田は田中を[彼の方こそが間違っている]と思っている (三原(2022: 94))

ここで認識動詞構文の「ヲ」格項はVP指定部に位置しており、補部に位置しているわけではないという点に注意されたい。この構造のために、「ヲ」格項は抽象格[ACC]を付与されず、格フィルター違反を免れるためには形態格「ヲ」を必ず付与されている必要がある。したがって、無助詞が許されないという事実が正しく説明される。

以上、本論の提案から導出される内項の無助詞に関する予測(18)を手引きにして、①属格「ノ」格項、②付帯状況の「ヲ」格項、③二重目的語構文の間接目的語「ニ」格項、④認識動詞構文の「ヲ」格項、が無助詞を許さない事実と統一的な説明を与えた。

#### 4. 結論

本論は、無助詞分布の一般化(29)に対し、格付与の観点から統一的な説明を与えた。本論の枠組みの中心は、形態格と抽象格を区別して考える(30)の提案である。

(29) a. 主題の場合、無助詞が可能である

b. 非主題の場合、動詞述語の直接内項に限って、無助詞が可能である。

(30) 提案：日本語は形態格(格助詞)と抽象格の両方を有する

この提案の下で、「[+V]要素の投射の補部は無助詞を許す」という新たな一般化の整理も行い、その経験的妥当性についても論じた。以上の議論により、格助詞という明示的な格標識を持つ日本語においても、それとは独立に抽象格を区別することの意義を示した。

## 参考文献

- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論一言語と認知の接点』くろしお出版
- 寺村秀夫(1983)「「付帯状況」表現の成立の条件―「XヲYニ……スル」という文型をめぐる―」『日本語学』2(10), 38-46.
- 西垣内泰介(2019)「「地図をたよりに」の構造と派生」『日本語文法』19(1), 37-53.
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語国文』58(10), 38-57.
- 三上章(1953)『現代語法序説―シンタクスの試み』刀江書院
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』
- 三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
- 三原健一(2022)『日本語構文大全第Ⅱ巻 提示機能から見る文法』くろしお出版
- 三原健一・平岩健(2006)『新・日本語の統語構造』松柏社
- 三宅知宏(1995)「日本語の屈折要素と句構造」『日本学報』14, 65-77.
- 三宅知宏(1996)「日本語の主題素性の照合と句構造」『現代日本語研究』3, 17-34.
- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェース』くろしお出版
- 三宅知宏(2017)「日本語動詞における「制御性（意図性）」をめぐる一語彙的意味構造と統語構造―」森山卓郎・三宅知宏（編）『語彙論的統語論の新展開』117-134, くろしお出版
- 村木新次郎(1983)「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」渡辺実（編）『副用語の研究』267-292, 明治書院
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris Publication.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, Cambridge, MA MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) "On phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by R. Freidin, C. P. Otero and M. L. Zubizarreta, 133-166, Cambridge, MA: MIT Press.
- Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory* (Second Edition), Oxford, UK & Cambridge, USA: Blackwell.
- Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese," *Linguistic Investigations* 12(1), 1-47.
- Larson, Richard K. (1988) "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19(3), 335-391.

## 謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114（受給者：坂本瑞生）、及び、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125(受給者：山下大希)の財政支援を受けたものです。

数量形容詞“多い”と“少ない”の非対称性  
—肯定・否定極性形容詞のスケール構造の違いに基づいて—  
包雅梅（華東理工大学）

## 1. 問題提起

(1)が示すように数量を表す形容詞の“多い／少ない”は単独で連体修飾しにくいことがしばしば研究されてきた（仁田 1980, 寺村 1991, 今井 2012, 佐野 2016, 田中 2018, 包 2025 など）。一方で, “少ない”が連体修飾する実例は“多い”よりも多く, 比較的名詞を修飾しやすいという現象も見られる。(2)は“少ない”が連体修飾する実例である。中東 (1996), 王 (2011), 朱 (2012), 服部 (2002), 佐野 (2017) など両者の非対称性を指摘している。朱 (2012) は『朝日新聞 (1999-2001) CD-ROM』のデータで用例を収集し, “少ない”が単独で装定する例は 90 例, “多い”は 4 例あるという結果を挙げている。

- (1) a. \*多い人が庭に集まっている。 (仁田 1980)  
b. \*そのプロジェクトには多い予算が配分された。 (今井 2012)  
c. \*きのう電車事故があつて, 少ない人がけがをしました。 (寺村 1991)  
d. \*アフリカには少ない資源がある。 (今井 2012)
- (2) a. 優先株の発行価格を高めに設定できるようにして, 少ない株数で多くの資本を注入できることにした。  
b. 逆に米国企業は水に溶けない樹脂製の粒で実験していたため, 少ない水できれいに流す技術を培ってこなかったという。  
c. 少ない投資で銀行業ができるため、異業種からもインターネット専門銀行をつくって新規参入する働きが相次いでいる。 (いずれも朱 2012)

BCCWJ で検索した結果によれば, “多い”が単独で連体修飾する例がほとんど見られないのに対して, “少ない”の単独で連体修飾する例は 308 例確認された。被修飾名詞が「数」である 12 例, 「量である」12 例, 「額」である 10 例, 「数字」4 例を計算すると, 346 例ある。このように, 本発表では“多い”と“少ない”が非対称性を示す理由を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究とその問題点

中東 (1996) は比較基準を伴う場合“少しの”が用いられず, “少ない”は比較を表す意味特徴を有するのに対し“少しの”はそれを有しない。(3)を挙げ, それらはいずれも“以前よりも, 通常よりも, いつもよりも”などの比較の基準を含んだ表現である。一方, “多くの”

が比較の意味特徴を持つため、比較基準を伴っても、“多い”が装定しにくいことを指摘している。しかし、包（2025）で指摘されているように、“多い／少ない”と“多くの／少しの”による連体修飾の機能がそもそも異なるため、“少ない”が“少しの”の替わりにそれが現れない文脈で使われるため、“少ない”のほうが装定用法の例が多いと考えない。

- (3) a. 少ない量でたくましく洗う  
b. 少ない煙でゴキブリを駆除  
c. 少ない材料でおいしい料理をつくる  
d. 少ない投資で確実な利益と事業拡大  
e. 少ない緑を大切に  
f. 少ない資源を無駄なく有効に活用しよう (いずれも中東 1996)

王（2011）は中東（1996）とは類似する説を提示している。(4)のような“基準値を下回る”という意味を表す場合は、“少しの”は数量詞の性質を持ち、比較基準を前提としないため、生起できず、“少ない”が用いられると説明している。

- (4) スモールビジネスにとって、少ない資本をやりくりして、ビジネスを展開して、資本を蓄積してさらなる発展を期すにはこの資本回転率を速めることがもっとも大事なことだ。(王 2011)

“少ない”が“基準値を下回る”場合に用いられるとする点は本発表とも一致するが、“基準値を下回る”の定義をさらに明確する必要がある。つまり、“多い／少ない”はいずれも段階形容詞であり、比較基準・対象を必要とするからこそ、連体修飾しにくいと考えられてきた。ただし、“少ない”が“少しの”の代替として用いられていると考えない限り、“基準値を下回る”場合に用いられるという意味的特性が、連体修飾のしやすさとどのように関連しているかを、別の観点で検討する必要がある。

本発表では、否定極性形容詞である“少ない”が、比較基準や対象が存在しない場合でも意味を表しうることを、そしてそれが連体修飾しやすさと関係することを議論する。

### 3. 否定極性形容詞としての“少ない”

包（2025）は“多い／少ない”と類義語である“夥しい／わずかだ”の違いについて、類義語のほうは無段階形容詞／有界の段階形容詞であるため、比較基準や対象がなくても“夥しい／わずかだ”の意味が表せ、連体修飾時には描写的機能が働くとして述べている。“多い／少ない”の使用制限に関して、両者が同じ非有界の段階形容詞に基づいて説明している。その立場では、両者の非対称性を十分に説明することはできない。

“少ない”と“多い”の違いに関して、中島（2023）の議論は示唆的である。

中島（2023）は、位相空間論の近傍という概念を「tall-short, wide-narrow」のような極性形容詞の意味分析に応用している。その結論として、ある対象  $x$  について定まる尺度上の点  $dx$  を境に、尺度は否定極性形容詞の指定する半開区間 $[0, dx)$ と肯定極性形容詞の規定する半開区間 $[dx, \infty)$ に分割されるということを提示している。

そこで、否定極性の度合いとなる近傍は、どの対象に対しても点  $0$  の近傍になっており、常に「short, narrow」という意味を含んでいる。一方、肯定極性の度合いとなる近傍の点は、対象ごとに異なっており、それだけでは「tall, wide」という意味はなく中立的(neutral)で、基準と比べることによって、あるいは、他の肯定極性の度合いと比べることによって、初めて「tall, wide」という意味が出てくる。

本発表では、“多い／少ない”のスケール構造の違いに基づき、“少ない”がその類義語類と類似し、比較基準や対象がなくても“少ない”の意味を表す場合があること、またその意味表出は文構造に依拠するところもあることを論じる。論拠として、主に次の3点を提示する。

- (5) a. “多い”と“少ない”は連用修飾用法においても異なる性質を示す。
- b. “少ない”は連体修飾位置で自動詞の主語や他動詞の目的語の数量を直接表すことができない。
- c. “少ない”が連体修飾する名詞はいくつかの語に集中しており、現れる文にはパターンが見られる。

### 3.1. “多い”と“少ない”の連用修飾用法

数量詞の研究では、日本語は、連体修飾より連用修飾で先行名詞句の数量を表すのが無標である。また、数量詞の連用修飾文の成立には制限があり、“ガ格／ヲ格”以外の格では成立しにくいと指摘されている（神尾 1977、加藤 1997、羽鳥 2002、岩田 2006、など）。つまり、日本語は数量詞の連用修飾で自動詞の主語と他動詞の目的語の数量を表すのが無標である。

数量形容詞の連用修飾用法を調べた結果、“多い”と“少ない”が異なる性質を示すことが分かった。“多い”の場合は連用修飾で、自動詞の主語と他動詞の目的語の数量を表す。一方、“少ない”は連用修飾で先行名詞句の数量を表せない。

BCCWJ で“多い／少ない（語彙素、連用形）＋動詞”で検索し、“多いは 3079 例確認され、その大半は(6)のように存在と結びつく意味を表す動詞と共起している。一方、“少ない”は 56 例しかなく、そのうち 30 例は(7)のように“見積もる”と共起する例であった。

- (6) a. 寿地区には外国人が多く住んでいる。

- b. 調べてみると、その牧草地に生えていたクローバー（シロツメクサ）には、卵胞ホルモンがあまりにも多く含まれていたことがわかったのだった。
- c. 周辺は早稲田大学理工学部、戸山高校をはじめ学校が多く集まる文教地域である。
- d. 建物の内外装に石を多く使っているがすべて国産品である。（いずれも BCCWJ）

(7) 内装費は少なく見積もっても千五百万円はかかる。 (BCCWJ)

また，“少ない”も“使う”と共起する例は1例ある。(6d)と対照的に考察すると，(8)において“少ない”は先行名詞の数量を表していないのが分かる。

(8) 簡単にいえば，旧来の経済システムは豊富な人的資源を少なく使うために，少ない自然資源をふんだんに使おうとしている。

加藤（1997）はそのものの数量を存在数量と呼び、存在数量を表す数量詞を存在数量詞とし、そうでないものを一括して非存在数量詞と名付けている。非存在数量詞が連用修飾する場合、動作量を表すと指摘している。

本発表では，“多い”が存在数量詞と同様に，連用修飾用法で中立的に先行名詞句の数量を表すことができるが，“少ない”はそうした用法を持たず，「より少なく」といった相対的な意味しか表さないことを議論する。

### 3.2. “少ない”の連体修飾用法

“少ない”が“多い”より連体修飾する実例が多いが，連体修飾用法で被修飾名詞の数量を表すことになるかかという，そうではない。まず，“少ない”と共起する名詞を考察する。“少ない”と共起する名詞の頻度表を作ると表1になる。被修飾名詞が“時間、金額、数、量、額”である例が多いことが見られる。

被修飾名詞	例文数	割合
時間	15	4.34%
金額	13	3.76%
数	12	3.47%
量	12	3.47%
額	10	2.89%
チャンス	9	2.60%
人数	7	2.02%



力	6	1.73%
資本	6	1.73%
回数	5	1.45%
予算	5	1.45%
資金	5	1.45%
労力	5	1.45%
数字	4	1.16%
物	4	1.16%
費用	4	1.16%
負担	4	1.16%
<b>合計</b>	<b>126</b>	<b>36.42%</b>
<b>その他</b>	<b>220</b>	<b>63.58%</b>

表1 “少ない”と共起する名詞

さらに、“人数、回数、株数”などの“～数”の複合語は43例ある。“摂取量、演算量、情報量”などの“～量”の複合語は7例ある。“～額”の複合語は3例ある。同類の名詞をまとめて考察すると、被修飾名詞が“数、量、額”及びその複合語である例は100例あり、被修飾名詞がいくつか集中しているのが見られる。

また、“少ない”は(1c,d)のような被修飾名詞そのものの数量が問題にされている例に生起できない。実例を分析すると、“少ない”が自動詞の主語あるいは他動詞の目的語を修飾する例はそれぞれ9例と51例あるが、それらの文では動詞や文構造に特徴が見られる。例えば、(9a)は(1c)と異なり、削り落とされた陸地が少なかったという意味を表すのではない。(9b)も“そもそも少ししかない雪をたくさん融かした”の意味で、“少しの雪／雪を少し融かした”の意味ではない。

- (9) a. 豪雨でできた河と岩の間にある少ない陸地が削り落とされ、少数のシマウマの群れがおしくらまんじゅうしながら…
- b. 札幌で一番寒い時期である1月下旬に雨が降った。それも結構な量が降って、少ない雪をかなり融かした。(いずれもBCCWJ)

本発表では、被修飾名詞の数量はすでに確定しており、“少ない”は被修飾名詞そのものの数量を表すのではなく、その類義語類と同様に描写的に用いられていることを議論する。

### 3.3. “少ない”の意味表出とその文構造

“少ない”が連体修飾する例文の文構造には特徴があり、その特徴が“少ない”の意味表出につながる。

“少ない”は「少ない+N+ながら／でも」、「少ない+N+助動詞+が／けど」といった後件とは逆接的な従属節に現れることが多く、43 例あった。加えて、“多い-少ない”と同様に、“大きい-小さい”“長い-短い”でも否定極性側の“小さい”“短い”のほうがこうした構文に現れる例が多いことが確認できた。

まず、「キー：形容詞、連体形；後接：名詞+ながら」で検索し、66 例ある。そのうち、キーが“短い”のは 9 例あり一番多く、“小さい”のは 7 例あり 2 番目多い。その次は“少ない”で 4 例ある。その例を(10)で示している。それに対し、キーが“長い／大きい”である例はない。

(10) a. 少ない出番ながら好印象を与えた。

b. その熱意が買われ、小さい役ながらも子役とリポーター役を二役もらえた。

c. 短い時間ながら話を聞いてくれた。 (いずれも BCCWJ)

また、BCCWJで「キー：形容詞-連体形；後接：名詞+で+も」で検索し、合計 710 例ある。そのうち、キーが“小さい”である例は 41 例で、2 番目に多い。キーが“短い”である例は 34 例で、4 番目に多い。“少ない”のほうは 28 例ある。

それから、「少ない+N+ {だ／だった／です／でした／である} + {が／けど}」と「少ない+N+では+アル+が」のような逆接する例も 11 例見られる。そこで、「キー：形容詞（連体形）；後接：名詞+助動詞+助詞-接続助詞-けど・が(書字形出現形)」及び「キー：{小さい／大きい／短い／長い}（語彙素）+N+で+は+アル（語彙素読み）」で検索を行った。その結果を表 2 でまとめて示している。

	キー+N+ながら			キー+N+でも			キー+N+助動詞+が・けど キー+N+では+アル+が		
キー	少ない	小さい	短い	少ない	小さい	短い	少ない	小さい	短い
例文数	4	7	9	28	39	31	11	26	47
キー		大きい	長い		大きい	長い		大きい	長い
例文数		0	0		7	6		5	20

表 2 逆接構文に現れる用例数

さらに、“少ない”が単独で装定する例のうち、(11)のような「少ない+N+で～」という構文が 114 文で一番多い。そのうち、後接文脈は「動詞可能形／～ことができる／～こ

とが可能である」を含む例は 40 例ある。それらの文は前件と後件とは対照的になり、前述の逆接タイプの文とは類似すると考えられる。

(11) a. 2B 鉛筆は少ない力で濃い字が書ける。

b. 少ない材料で大きな水圧に耐えることができる合理的な形だ。

c. 少ない宣伝広告費で顧客に認知してもらうことが可能となるからだ。

(いずれも BCCWJ)

このように、“少ない”が後件とは意味的に逆接関係をなす従属節に現れやすい傾向がある。本発表では、この構文的特性が“少ない”の意味表出と深く関係していると考ええる。

つまり、否定極性形容詞である“少ない”の度合いとなる近傍は、いずれの対象に対しても点 0 の近傍になり、それ自体だけでも“少ない”という意味を表しうる。この場合、“少ない”は被修飾名詞そのものの数量を表すのではなく、類義語類と同様に描写的な機能を果たしていると考えられる。さらに、“少ない”が連体修飾する文に見られる構文的特徴が、“少ない”の意味表出を支える要因である。

#### 参考文献

今井忍 (2012) 「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのかー＜存在＞の意味成分に基づく再検討ー」『日本語・日本文化』38 : 53-80.

岩田一成 (2006) 「日本語数量詞の諸相: 数量詞の位置と意味の関係を中心に」博士論文 大阪大学.

加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』(26) :31-64.

神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタクスー日本語の変形をめぐる論議への一資料ー」『言語』6.9: 83-91. 大修館書店.

佐野由紀子 (2016) 「多い」の使用条件について」『日本語文法』16 巻 2 号, pp.77-93, 日本語文法学会.

佐野由紀子 (2017) 「多寡を表す形容詞と存在表現について」『語彙論的統語論の新展開』pp.33-45, くろしお出版.

中東靖恵 (1996) 「不定数量形容詞「多い」「少ない」の意味論的・統語論的考察」『ことばの研究 8』 pp.54-67.

中島信夫 (2023) 「位相空間における形容詞の意味 I—極性形容詞 (polar adjective) の場合—」『甲南大学紀要 文学編』第 173 号, 73-80.

田中秀毅 (2018) 「「多い」の装定用法と述定用法について」『摂大人文学』25, pp.51-73, 摂南大学.

- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお.
- 仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院.
- 羽鳥百合子（2002）「日本語の数量詞遊離—用例にみる機能的特性」『川村学園女子大学研究紀要』13-1.13-32.
- 服部匡（2002）「多寡を表す述語の特性について」『日本語学と言語学』pp.61-74,明治書院.
- 王淑琴（2011）「A-い」と「A-くの」の名詞修飾用法の特徴」『政大日本研究』第八号,pp.69-97, 国立政治大学.
- 朱鵬霄（2012）「日本語の『多寡形容詞』の統語的特徴の分析—コーパスに基づく実証的研究—」『日語学習与研究』5,pp.8-15.
- 包雅梅（2025）『現代日本語の数量を表す形容詞の研究』ひつじ書房.

#### 謝辞

本研究は、中央高校基本科研業務費専項資金（the Fundamental Research Funds for the Central Universities）JKS02242205（受給者：包雅梅）の財政支援を受けたものです。

# 話し言葉における否定ていねい形の選択メカニズム —一般化線形混合モデルによる検討—

李 依格（大阪大学大学院生）

## 1. はじめに

日本語の否定ていねい形には、「～ません」と「～ないです」という2つの形式が存在する。たとえば、動詞の「行く」については、「行きません」と「行かないです」がその否定ていねい形にあたる。否定ていねい形の選択に関しては、これまでに複数の要因が指摘されている。本研究は、話し言葉に焦点をあて、従来の研究で指摘されてきた複数の要因および話し手の個人差をモデリングに組み込んで、否定ていねい形の選択メカニズムを明らかにすることを目的としている。

## 2. 先行研究

「～ません」と「～ないです」の選択について、従来指摘されてきた言語内的要因・言語外的要因を整理しておく。

言語内的要因については、すべての品詞に関わる要因として、前接要素、後続要素、引用節、時制があげられる。前接要素に関しては、イ形容詞、名詞では「～ないです」が使われやすく（野田 2004; 田口 2009）、田野村（1994）が指摘した「存在表現」でも「～ないです」が使われやすい（野田 2004）。後続要素に関しては、言い切りの形式では「～ません」が使われやすく、終助詞または接続助詞が後続している場合は「～ないです」が使われやすい（田野村 1994; 野田 2004; 小林 2005; 川口 2014 など）。引用節に関しては、引用節外では「～ないです」が使われやすい（小林 2005; 川口 2014）。時制に関しては、Yamada（2019）では、過去形では「～ないです」が使われやすいという結果が得られたが、その影響が小さいことも指摘されている。

言語外的要因は、ジャンルに関する要因と話し手の属性に関する要因が指摘されている。ジャンルに関する要因は、場の改まり度（坂野 2012）、対話の双方向性/対話的か否か（落合 2012; 李ほか 2023）、談話状況（石川 2020b）が指摘されている。話し手の属性に関する要因は、話し手の世代/年齢（石川 2020a; 石川 2020b; 李ほか 2023）、話し手の性別（福島・上原 2003）が指摘されている。

先行研究を踏まえ、検討の余地がある課題は2点あげられる。第1に、複数の要因が同時に働く中で、重要性の高い要因と重要性の低い要因が不明瞭である。要因の重要性に関して指摘がみられたのは、Yamada（2019）と李ほか（2023）のみであった。それぞれ一般化線形混合モデルと分類木分析を用いて相応の指摘をしている。Yamada（2019）は言語内的要因を中心に検討し、接尾辞「-yoo」がもっとも影響力の強い要因と指摘し

ている。李ほか（2023）は言語外的要因を検討し、「対話的か否か」が決め手であることを指摘している。複数の要因の重要性を明らかにするために、言語内的要因・言語外的要因を同時に分析に組み込んで検討する必要があると思われる。

第2に、個人差についての検討が不十分である。先行研究では記述統計の手法を取った研究がほとんどで、多変量解析やモデリングのような統計的な検討を行った研究は、石川（2020b）、Yamada（2019）および李ほか（2023）のみであった。しかし、いずれも、全体的な傾向と異なる個人が存在するかどうかというような個人差を検討しなかった。そこで、個人差も分析に入れて検討する必要があるだろう。

### 3. 本研究の分析に投入する要因

本研究では、一般化線形混合モデル（Generalized linear mixed model）を用いて分析を行う。モデリングでは、7つの固定効果と1つのランダム効果でモデルを構築する。具体的には、固定効果は、(1) 前接要素、(2) 後続要素、(3) 時制、(4) 引用節、(5) ジャンル、(6) 話し手の性別、(7) 話し手の世代、という7つで、ランダム効果は個々の話し手である。従属変数は、否定でいい形を選択である。

## 4. 使用するデータ

### 4.1 データの抽出

本研究では、話し言葉に限定して研究を進める。落合（2012）と李ほか（2023）の指摘に関連して、独話のデータと対話のデータの両方を扱う。独話のデータは、『日本語話し言葉コーパス』の音声タイプが「独話・学会」「独話・模擬」のデータを使用する。対話のデータは、『日本語日常会話コーパス』のデータを使用する。データ抽出の際に、中納言の短単位検索を利用して抽出を行った。

### 4.2 データのタグ付け

表1（次ページ）に、本研究の言語内的要因の各水準および例を示している。後続要素については、終助詞、または接続助詞が後続する用例を「後続要素あり」とした。言い切りの形で終止する用例を「後続要素なし」とした。引用節については、本研究では、「と」「(っ) て」「という」「(っ) ていう」「とゆう」「(っ) てゆう」「つう」「とか」「みたいな」「なんて」を引用標識として判定し、これらの引用標識が後続するものを「引用節内」として判定し、それ以外は「引用節外」とした。

言語外的要因については、ジャンルに「学会講演」「模擬講演」「日常会話」という3つの水準を設けた。『日本語話し言葉コーパス』の「独話・学会」「独話・模擬」を、それぞれ「学会講演」「模擬講演」とし、『日本語日常会話コーパス』のデータを、一括し

て「日常会話」とした。話し手の性別には、「男性」「女性」という 2 つの水準を設けた。話し手の世代には、「1920～1940 年代」「1950～1960 年代」「1970～1980 年代」という、話し手の生年代に基づいた 3 つの水準を設けた。

表 1 本研究の言語内的要因の各水準および例

言語内的要因	水準	例
前接要素	一般動詞	食べ {ません/ないです}
	存在表現	(非存在を表すもの) 時間 (が/は) {ありません/ないです}
		(非存在に由来するもの) ～するしか {ありません/ないです}
	その他	(イ形容詞) 高く {ありません/ないです}
		(ナ形容詞) きれいでは {ありません/ないです}
		(名詞) 冗談では {ありません/ないです}
後続要素	あり	(ほかの文型) ～するまでも {ありません/ないです}
		～しように {ありません/ないです}
	なし	
引用節	内	わかりません {ね/よ/か/よね/が/けど/から/ので}
		わかりません {ね/よ/か/よね/が/けど/から/ので}
	外	引用標識がないもの
時制	過去	食べ {ませんでした/なかったです}
	非過去	食べ {ません/食べないです}

#### 4.3 データのクリーニング

本研究では、「～ません」と「～ないです」の対立を持つデータのみを分析に用いる。この基準で、下記 4 点を分析から除外した。

- (1) 「～ませず」「～ませぬ」「～ましようず」などの「～ません」の古い形式。
- (2) 「～なくです」のような「～ないです」の形式と一致しないもの。
- (3) 「～ないです」の形を取らないもの。具体的には、「ごさいません」「いたしません」「申しません」「すみません/すいません」などである。
- (4) 「～ません」の形を取らないもの。「とてつもない」「もったいない」「半端ない」などである。

また、前接要素と話し手の世代のタグ付けで、下記 (5) (6) を分析から除外した。

- (5) 前接要素が判断できないもの。具体的には、「動詞+たい/ない」の否定でいいい形、「もう頑張るっきゃありません」のような用例である。
- (6) 2 つのコーパスの一方のみにある世代のデータおよび世代に欠損があるデータ。前者には、1910 年代・1990～2010 年代の話し手のデータがある。

最終的に分析に用いたのは、「～ません」7,047 例、「～ないです」2,688 例、計 9,735 例であった。

## 5. モデリング

本研究では、固定効果が多いため、モデルの解釈しやすさを優先し、交互作用をモデリングに入れずに、主効果のみを考慮してモデルを構築した。モデリングの際に、ダミーコーディング (dummy coding) を用いて、ロジット関数を使用した。モデリングの手順として、まずはすべての要因を独立変数として投入し、フルモデルを作った。その後、フルモデルの式から、独立変数の一つずつ抜いて、赤池情報量基準 (AIC) を基準に、フルモデルと比較した。AIC は、モデルの予測の良さを重視するモデル選択基準で、小さいほどよい (久保 2012, p.76)。その結果、削除すべき独立変数がなかった。モデル式は下記のとおりである。

$$\text{logit}(P(Y=\text{ないです})) = \beta_{\text{切片}} + \beta_{\text{前接要素}} \mathbf{x}_{\text{前接要素}} + \beta_{\text{後続要素}} \mathbf{x}_{\text{後続要素}} + \beta_{\text{時制}} \mathbf{x}_{\text{時制}} + \beta_{\text{引用節}} \mathbf{x}_{\text{引用節}} + \beta_{\text{ジャンル}} \mathbf{x}_{\text{ジャンル}} + \beta_{\text{性別}} \mathbf{x}_{\text{性別}} + \beta_{\text{世代}} \mathbf{x}_{\text{世代}} + \text{個人差項}$$

また、このモデルについてブートストラップ法による検討も試みた。回数を 1000 回に指定し、モデルの固定効果の回帰係数について検証した。その結果、すべての回帰係数の信頼区間が 0 を跨いでいなかった。そのため、すべての固定効果を保留した。なお、混同行列 (confusion matrix) を用いてモデルの予測結果を評価した結果、モデルの予測の正当率は、89.7%であった。

## 6. 結果

### 6.1 固定効果

表 2 に、本研究のモデルにおける固定効果の回帰係数の推定値、標準誤差、z 値および有意確率  $p$  を示している。表 2 にない水準は、モデルのベースラインの基準に設定されており、モデルの結果に表示されない。回帰係数における負の符号は、ベースライン基準より、従属変数の 0 に設定されている形式 (～ません) に偏っていることを表す。



表 2 本研究のモデルにおける固定効果

		回帰係数	標準誤差	z 値	有意確率 <i>p</i>
	切片	-1.751	0.170	-10.296	<.001 ***
前接要素	一般動詞	-1.586	0.098	-16.207	<.001 ***
	その他	1.114	0.118	9.419	<.001 ***
後続要素	あり	2.038	0.095	21.396	<.001 ***
引用節	内	-1.987	0.178	-11.182	<.001 ***
時制	過去	-0.330	0.128	-2.588	<.01 **
ジャンル	日常会話	2.552	0.176	14.498	<.001 ***
	学会講演	-2.121	0.158	-13.386	<.001 ***
性別	女性	-0.314	0.136	-2.310	<.05 *
世代	1920～1940 年代	-0.652	0.171	-3.799	<.001 ***
	1970～1980 年代	0.498	0.140	3.562	<.001 ***

ダミーコーディングでの回帰係数は、その水準とベースライン水準の差を示している。しかし、各変数のスケールが異なるため、回帰係数で各変数の影響力を横断的に比較することができない。そのため、このモデルにおける各固定効果の推定周辺平均 (Estimated Marginal Means) を計算し、各固定効果の影響力を評価する。計算の際に、emmeans 関数を用いて、「weights = “proportional”」を指定した。変数内の各水準の差の大きい順に各変数を並べたものが、図 1 (次ページ) である。図 1 は、各水準の推定周辺平均の値を示しており、縦軸は、「～ないです」が選ばれる確率を表している。

## 6.2 ランダム効果

本研究のモデルの AIC は、6404.6 であった。ランダム効果がモデルに与える影響をみるために、モデルのランダム効果を削って固定効果のみのモデルを作った。その結果、AIC の値は 7073.3 と大幅に増加した。これは、ランダム効果がモデルの予測の良さに大きく寄与していることの証であろう。

## 7. 考察

本研究の分析結果は、次の 4 点にまとめられる。

第 1 に、ジャンルおよび前接要素の影響が大きい。ジャンルについては、「～ないです」が選ばれる確率は、「学会講演」「模擬講演」「日常会話」の順に高くなる。このことは、計画性に関連している可能性が高い。「学会講演」では予稿の内容に沿って発話するのに対し、「模擬講演」はテーマだけが決まっており、計画性がより低い発話と思

われる。一方、日常会話は、計画性がもっとも低いジャンルと思われる。したがって、計画性が低いと、「～ないです」が選ばれる確率が高くなると言えよう。

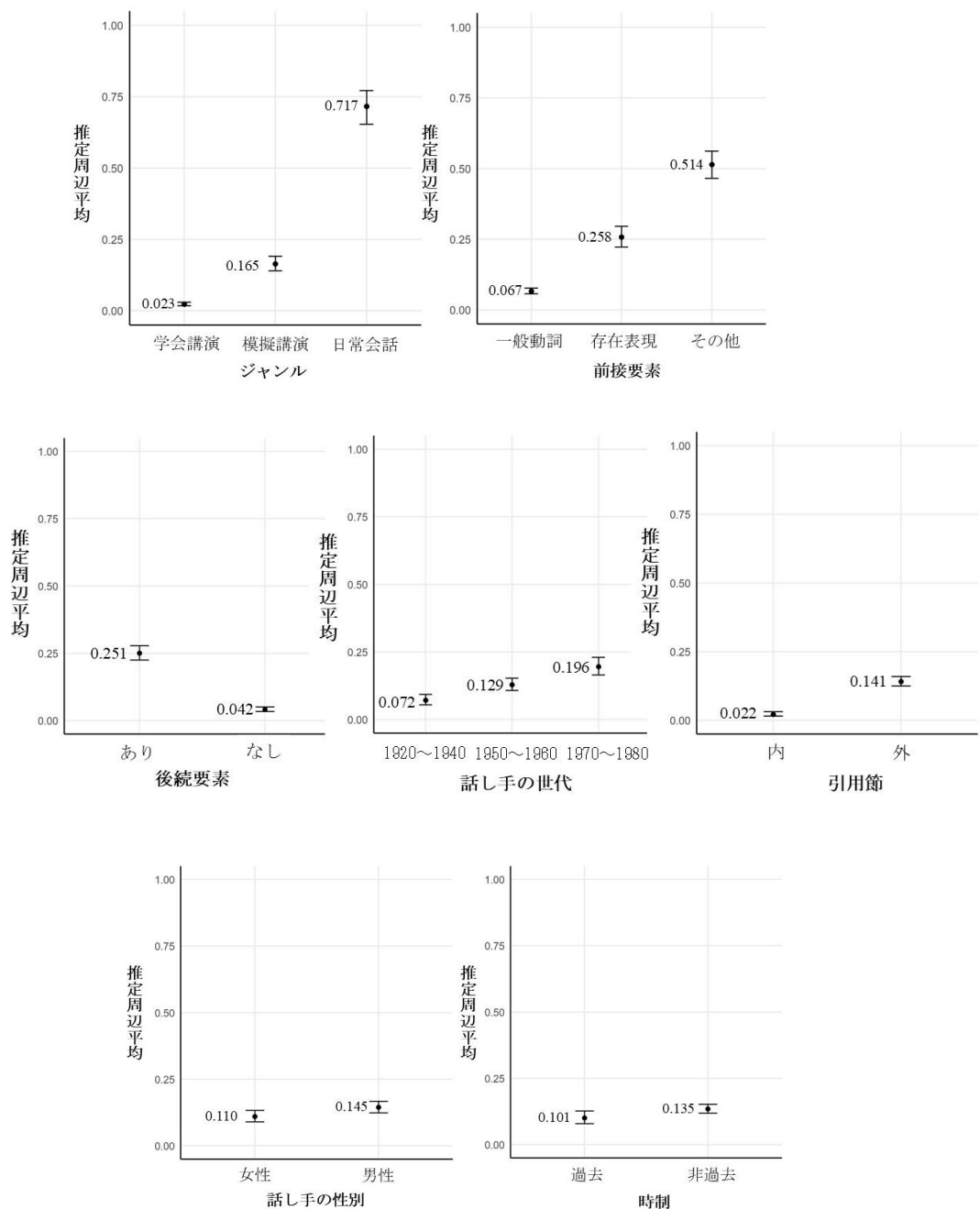


図1 本研究における固定効果の推定周辺平均および信頼区間

前接要素については、「～ないです」が選ばれる確率は、「一般動詞」「存在表現」「その他」の順に高くなる。これは、前接要素と否定ていねい形との結びつきの強さに関連している可能性がある。前接要素と否定ていねい形の間に「は」を入れられるかどうかで、下記の(1)(2)を作った。

- (1) a. そんな複雑な話、私には {＊わかりはません/わかりはしません}。  
b. そんな複雑な話、私には {＊わからはない/わかりはしない}。
- (2) a. この方法、わるくはありません。  
b. この方法、わるくはないです。

(1) は本研究の「一般動詞」にあたる例で、「は」を入れられない。(2) は「その他」にあたる例で、「は」を入れられる。「存在表現」については、否定ていねい形の1つの形式が「ないです」という独立した形式に固定されているため、ここでは例を示さない。

「～ないです」は、「～ません」より出現時期が遅く、新しい形式とされている。(2) のような例では、前接要素と否定ていねい形の結びつきが弱いいため、古い形式が新しい形式に取って代わられやすい可能性がある。一方、(1) のような例では、前接要素と否定ていねい形の結びつきが強いため、古い形式が新しい形式に取って代わられにくいと考えられる。

第2に、後続要素、世代および引用節は中程度の影響要因だった。後続要素については、田野村(1994)をはじめとした多くの先行研究の指摘を裏付ける。世代については、「～ないです」は「～ません」より新しく出現した形式であるため、若い世代ほど、「～ないです」を選択しやすいことが考えられる。引用節については、小林(2005)と川口(2014, p.144-145)の指摘を裏付ける。

第3に、時制と話し手の性別による影響は、ほかの変数より弱かった。時制については、先行研究の中でも有力な要因になっていない。小林(2005)では、過去形と非過去形に差がみられなかったため、一緒に扱われている。Yamada(2019)は、時制はほかの変数より影響が弱い要因と報告している。話し手の性別については、先行研究ではみられなかったりみられなかったりする。石川(2020a)および李ほか(2023)では性差がみられなかったが、石川(2020b)では性差がみられた。本研究の結果からみると、時制と話し手の性別は、頑健な影響要因ではないと言えよう。

第4に、個人差による影響が大きい。ランダム効果の出力と元データを合わせてみると、全体の使用傾向からずれている話し手を特定できる。たとえば、ジャンルによる全体の使用傾向として、学会講演では「～ません」の選択率が高く、日常会話では「～ないです」の選択率が高かった。しかし、学会講演に収録されたIDが278の話し手は、「～ません」が1回、「～ないです」が7回あった。日常会話に収録されたIDがK004の話し手は、「～ません」が40回、「～ないです」が24回であった。

## 8. まとめ

本研究では、一般化線形混合モデルを用いて、話し言葉における否定ていねい形の選択メカニズムの解明を試みた。その結果、(1) ジャンル・前接要素の影響が大きいこと、(2) 後続要素・話し手の世代・引用節は中程度の影響要因であること、(3) 時制・話し手の性別の影響は、ほかの要因より弱く、頑健な影響要因ではないこと、(4) ランダム効果がモデルの予測の良さに大きく寄与していること、という4点が分かった。

## 参考文献

- 石川慎一郎 (2020a) 「第 15 章 発話における丁寧体否定文の使用」 迫田久美子・石川 慎一郎・李在鎬 (編) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』 pp.185-204, くろしお出版.
- 石川慎一郎 (2020b) 「日本語自然対話における丁寧体否定形「ナイデス」「マセン」の選択—BTSJ コーパスを用いた検証—」 『統計数理研究所共同研究リポート』 435, pp.1-18.
- 落合智子 (2012) 「書きことばに現れる「ません」と「ないです」」 『国文目白』 51, pp.14-22.
- 川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』 くろしお出版.
- 久保拓弥 (2012) 『データ解析のための統計モデリング入門』 岩波書店.
- 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」 『日本語教育』 125, pp.9-17.
- 田口愛葉 (2005) 「丁寧体の否定形式「～マセン」と「～ナイデス」」 『信大日本語教育研究』 5, pp.18-35.
- 田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査—「～ません」と「～ないです」—」 『大阪外国語大学論集』 11, pp.51-66.
- 野田春美 (2004) 「否定ていねい形「ません」と「ないです」の使用に関わる要因—用例調査と若年層アンケート調査に基づいて—」 『計量国語学』 24-5, pp.228-244.
- 坂野永理 (2012) 「コーパスを使った述語否定形「ません」と「ないです」の使用実態調査」 『留学生教育』 17, pp.133-140.
- 福島悦子・上原聡 (2003) 「日本語の丁寧体否定辞二形式に関する通時的研究—テキスト分析によるケーススタディ—」 『国際文化研究科論集』 11, pp.79-89.
- 李依格・張佩霞・玉岡賀津雄 (2023) 「話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因」 『日本語文法』 23-2, pp.87-102.
- Yamada Akitaka (2019) A Quantitative Approach to Addressee-Honorific Markers: Identification of Crucial Independent Variables and Prototypes, *Mathematical Linguistics* 32(3), pp. 117-132.

## 談話戦略としての認識の是正

### ーカラの文末用法の分析ー

孫思琦（総合研究大学院大学大学院生）・井戸美里（国立国語研究所）・窪田悠介（国立国語研究所）

#### 1. はじめに

- 接続助詞カラは典型的な原因・理由を表す接続表現とされているが、文末に来ると、原因・理由を表すと考えにくい場合がある。

(1) [原因・理由を表さない文末のカラ]

(A はしばらく彼の自慢話が続く)

B: もうノロケはいいカラ。

(発言小町掲示板)

- 白川（2009）や前田（2009）などの先行研究では、カラが理由を表すか否かを調べるために「どうして？」テストが提示され、その答えになり得るかどうかで原因・理由の有無を客観的に判定できるとしている。
- (1) の場合、「どうして怒ったか」と問われたとき、「もうノロケはいいカラ」と答えるのは不自然であるため、この場合のカラ発話は原因・理由を表すものではないと判断できる。
- 本発表では、このように原因・理由を示さない文末カラを分析対象とする。そして、このような文末カラは先行文脈との関係によって三つのタイプに分けられることを指摘する。そのうち特に「認識の是正」に関わる二用法に注目し、その背後にある原理について Question Under Discussion 理論(QUD; Roberts 1996/2012)に基づいて一般化して示す。

#### 2. 先行研究とその問題点

- 文末のカラに関して、代表的な先行研究には白川（1995, 2009）や横森（2006, 2011）がある。
- 白川（2009）は、原因・理由を示さない文末カラの本質的な談話機能を、聞き手の行為を可能にしたり促進したりする情報を提示することでそれまで実行できなかった行為を可能にする点にあると説明している。

(2) 耕作：金、貸してくれヨ。五千円。

英一：ないね。

耕作：三千円。

英一：（空っぽの箱を開けて見せて）ホラ、借りたいのは、俺の方や。

耕作：倍にして返すカラさ。デートなんだ。

（市川森一『夢帰行』P11，白川 2009：54 より）

- 白川によると、文末カラは「金、貸してくれヨ」という依頼を相手に受け入れさせるために提示されており、「倍にして返す」という新情報を導入することで、実現しにくかった依頼の可能性を高める役割を果たしている。
- 横森（2011）は、さらに理由を明示しない文末カラには、(3)に見るような「認識の是正」機能があることを指摘する。

(3) B：（出し抜けに）あたしちょっと、十一月と十二月さ、

A：うん。

B：先輩と一緒に住むカラ。

A：は？

（横森 2011：63，一部修正）

- この文末カラでは、B が A に共有されていない新たな認識を提示し、既存の想定（B は一人暮らしを続ける）を修正しようとしている。横森はこれを「認識の是正」用法と分類し、白川の「行為の促進」と対比している。
- しかし、「認識の是正」と思われる文脈であっても文末カラを用いることができない (4) のような例があることから、文末カラには単なる「認識の是正」以上の制約が課されていると考えられる。
  - (4)では、上司の認識を部下が訂正する場面であるが、このような上下関係がある場合に文末カラは不自然になりやすい（定延 2019）

(4) 上司：明日は、10:00 に出発だったよね？

a. 部下：いや、明日は 9:30 出発です。

b. ??部下：いや、明日は 9:30 出発ですカラ。

- 本研究では、以上の先行研究をふまえ、(2)や(3)に現れる文末カラの用法を、談話管理機能に関わるものとして考え、文末カラを共起する談話標識に基づいて分類する。その中でも一部の文末カラが、談話展開についてのある種の逸脱的な行為を標識する機能を持つことを、Questions Under Discussion (QUD) を用いて一般化して示す。さらにこの分析は、従来の「行為の促進」や「認識の是正」では十分に説明できなかった事例も自然に捉えられることを指摘する。

### 3. 文末のカラのタイプ

#### 3.1. 談話標識 (DMs) との共起性テスト

- 文末カラの意味機能を観察するために、文末カラがどのような文脈で使用されているのかを、談話標識 (Discourse Markers, DMs) との共起関係に基づいて分類する。

- 談話標識は、発話間の論理的関係や話し手の意図を標示する機能を担っているため（小野寺 2024）、文末カラと DM の共起関係を調べることで、文末カラが用いられた文の談話的特徴を捉えることができる。
- ここでは、文末カラを「補足型」「訂正型（1・2）」「転換型」の三つに分類して示す。

### 3.2. 「補足型」と「訂正型」

- 文末カラは、DM との共起から大きく二つに分けられる。
  - 補足型：「ちなみに」と共起しやすく、話し手が談話の流れを受けたうえで、聞き手の理解を前提としながら念押し的に情報を加える。（→（5））
  - 訂正型：「いや」と共起しやすく、聞き手の発話に含まれる認識の誤りを指摘し、それを訂正しようとする意図が見られる。（→（6））

#### （5）〔補足型〕

（母が出ていく）

母：行ってきます。カバンに水筒入れておいたカラな。

子供：うん、ありがとう。

#### （6）〔訂正型〕

（お料理を助けようとする兄に対して）

弟：兄貴、邪魔するなら座っててよ。

兄：何を。食べるなら働けて言うだろ。

弟：オムライスに小麦粉はいらないカラ。

兄：これ小麦粉なのか。

- 訂正型は、その否定の対象や性質によってさらに細分でき、この違いは副詞の共起傾向にも表れる。
  - 訂正-1 型：「そもそも」と相性がよい。「そもそも」は、「現状のあれこれを順にたぐっていった出発点に立ち返る」「この話題の根源に立ち返る」という意味をもつ（森田 1989）。そのため、相手の誤解を根本から正す場面で用いられる文末カラと特に相性が良い。（→（6'））
  - 訂正-2 型：「とにかく」と相性が良い。「とにかく」には会話をまとめ（中道 1991）、強引に自分の発話内容を優先させる機能があるため（グループ・ジャマシイ 2023）、誤解訂正ではなく自分の立場を強調する場面に適している。（7）のように、相手の説得を遮断して自らの主張を繰り返す場合には自然に用いられるが、（6）のように新たな情報を導入して誤解を訂正する場面では馴染みにくい。

#### （6'）〔訂正-1 型〕

（（6）と同じ文脈で）弟：そもそもオムライスに小麦粉はいらないカラ。

(7) [訂正-2 型]

(友達の執拗な誘いに対して)

早江：とにかく行かないカラ。図書室で本借りるの。

健太：お前じゃなきや意味ねえんだよ。

- なお、「そもそも」と「とにかく」との共起傾向は、訂正型の文末カラの一定の傾向を捉えることができるものの、訂正型全体を網羅するものではなく、訂正型の文末カラの談話的性質を明確に捉えるための操作的な分類にすぎない。
- 一方、すべてのカラ発話において明示的な DM との共起が観察されるわけではない。実際に (8) のような用例では、「いや」「そもそも」「とにかく」などの DM が文頭に現れず、形式的には共起が確認されないケースも存在している。

(8) (A と B は A が泳げるか否かをめぐって論争している)

A：泳げないじゃん。

B：泳げるし。

A：あれは泳げるって言わない。

B：ちゃんと 25 メートル泳いでたじゃん。

A：だから、あれは溺れそうになって暴れたら 25 メートル進んだだけ。ほんと、負けず嫌いなんだカラ！

(フジテレビ「プロポーズ大作戦」第 11 話)

- (8) の「負けず嫌いなんだカラ」は、「泳げる／泳げない」という命題を否定するのではなく、性格的傾向を持ち出して評価の対象をずらしつつ認識を修正している。このため、命題レベルに直接働く「いや」「そもそも」といった DM は共起しにくい。
- 一方で、このカラ発話は DM を伴わずとも談話を巻き戻し、性格要因に基づいて再評価を促す「逆行的応答」として機能しており、以下で示す文脈の逸脱や談話の再構築を標識する装置としての分析と整合している。

### 3.3. 「転換型」

- この型の最大の特徴は、談話の連続性を意図的に断ち切り、前触れなく新たな情報を導入するという点にある。( (3) を再掲)

(3) [転換型]

B：(出し抜けに) あたしちょっと、十一月と十二月さ、

A：うん。

B：先輩と一緒に住むことにしたカラ。

A：は？

(横森 2011 : 63, 一部修正、再掲)



### 3.4. まとめ

- 分類の結果、文末カラ発話は「補足型」「訂正型（1・2）」「転換型」の三種に分けられた。これらの類型は、先行研究で指摘されてきた機能と対応しており、白川（2009）の「行為の促進」は「補足型」に、横森（2011）の「認識の是正」は「訂正型」と「転換型」にそれぞれ対応する。表1に、その特徴と共起する談話標識を示す。

表1. DM 共起テストによる文末カラの分類

	DM 共起テストの条件	談話機能の特徴
補足型	「ちなみに」と共起可能	先行発話に情報を補う
訂正-1 型	「いや」「そもそも」と共起しやすい	相手の誤認識を訂正する
訂正-2 型	「いや」「とにかく」と共起しやすい	無視された主張を全面に押し出す
転換型	「ちなみに」とも「いや」とも共起不可能	相手の予測を裏切る情報を提示して新たな展開を図る

- 「訂正型」および「転換型」においては、話し手が聞き手の認識や想定に対して積極的に介入し、談話の方向性を主導する傾向が顕著であるため、ここでは横森（2011）にならない、この両者を「認識の是正」を行う文末カラと呼ぶことにする。

## 4. 分析

### 4.1. 分析の背景：QUD 理論の仮説

- ここでは、「認識の是正」を行う文末カラの背後の原理を明らかにするために、Question Under Discussion (QUD; Roberts 1996/2012) の理論を援用する。
- QUD 理論では、談話は参加者間で共有される問い（＝検討中の問題）を中核として構成され、各発話はその時点で成立している QUD に対する応答として機能することが要請される（→ (9)）。この枠組みに依拠することで、文末カラがどのような問いに応答し、いかなる認識の再構築や話題の転換を図っているのかを、構造的に分析することができる。

(9) [談話のデフォルトな流れ]

A: 明日どこに行く? (QUD1)

B: 昭和記念公園に行こうか? (QUD1 の応答)

A: いいね。着いたらまず何をする? (QUD2)

B: パークトレインに乗るのはどう? (QUD2 の応答)

### 4.2. 本発表の提案

- 「認識の是正」用法に見られる文末カラは、談話が順行的に進む通常のパターンからしばしば逸脱する。

(10) [訂正-1 型]

(A が 6:00 出発の資料を見ながら)

A: 明日ディズニー楽しみだね。(QUD1)

B: そうだね。

A: 朝、どこかでモーニング食べようか？(QUD2)

B: は？何言ってるの？明日 6:00 出発だカラね。

- この例では、話者 B は直前の Q2 (モーニングの提案) には直接に答えず、「6 時出発」というすでに共有されていたはずの前提に遡って訂正を行っている。この訂正は、B の観点で自明だった情報が、聞き手によって共有されていないことを契機に再浮上したものであり、順行的な応答構造からの逸脱を伴う。

(11) 「訂正-2 型」

A: 明日の試合、出るの？(QUD1)

B: もちろん出るよ。

A: ほんと？補欠じゃないの？(QUD2)

B: いや、出るカラ。

- (11) では、すでに「出る」と回答済みにもかかわらず、その応答が無視・軽視されたことを「異常」と捉え、再度同じ応答を提示して談話の進行を遮断している。直前の QUD (補欠かどうか) には直接に応じず、最初の QUD (出るのか) に立ち戻って答え直す点で逆行的である。
- このように、「訂正型」の文末カラでは、いずれも談話の直近の QUD には応答しておらず、話者の観点ですでに解決済み／共有済みとみなされていた命題が、聞き手の発話との齟齬によって再浮上し、それに応じた再提示・訂正が行われるという共通の特徴を持つ。
- 一方、「転換型」と呼べる文末カラは、上記の訂正型とは異なる条件で生起する。

(12) [転換型]

夫: また長い一週間終わったね。今週もお疲れ！

妻: あ、そうだ。私、来週全部出張になったカラ。

夫: は！？聞いてないよ！

- この例では、直前の発話は夫婦間の労いに関するものであり、「来週も一緒に過ごす」という暗黙の前提がそこに含まれている。しかし妻の発話は、それとは無関係に、「来週すべて出張」という新情報を唐突に導入している。ここでは、すでに共有・解決済みの命題の訂正というよりも、これまで談話の中で問題化されてこなかった知識に対して、話者が新たに焦点を当て、それによって唐突に談話の方向性そのものを転換させている点でやはり、順行的な応答構造からの逸脱が見られる。
- このような文末カラの観察に基づき、本研究では仮説 (13) を提案する：

(13) 「認識の是正」用法としての文末カラは、談話の直近の QUD に直接的な応答となっておらず、話者がすでに自明・既知と見なしていた命題と、聞き手の理解・談話の進行との間に齟齬を検出した場合に生起する。

- この齟齬が、すでに共有・解決済みとされた命題に関わる場合は「訂正型」として、暗黙の前提や焦点外の命題に関わる場合は「転換型」として現れ、いずれも談話の構造に逸脱的な変化（逆行または転換）を引き起こす。

#### 4.3. 文末カラの特殊性

- このように文末カラは、発話が会話の流れを強制的に「巻き戻す」ことを明示し、聞き手に対して事態把握と会話進展の双方を同時に修正させる談話機能をもつ。こうした強制的表現は談話上の主導権を握る者にのみ許されるため、対等な関係や話し手が目上の場合に限って容認されやすい。このように考えると、(4) が不自然になることが自然に捉えられる。また、部下が事態の緊急性を感知して越権的に上司の認識を適時的に修正する場合には、(4') のような用例が受容されやすくなるのも自然である。

(4) 上司：明日は 10:00 に出発で間違いないな？ 9:50 までには正面玄関に降りて来るんだぞ。

部下：いや、明日は 9:30 出発ですカラ。

- 定延 (2019) は、文末カラ発話が自然に用いられるには上位者に与えられた「権利」のサポートが必要であり、それは「いま、ここにある現実を語る」という基本状態から一時的に離脱できる特権的行為だと説明する。
- ただし、この説明だけでは、なぜカラ発話が特に「権利」を要するのか、またカラを使わない発話（「いや、明日は 9:30 出発です」）との差異を説明できない。
- 本発表では、文末カラの特殊性は、会話を直前の流れに従わせず、談話の再構築を強いる点にあると考える。このような文末カラの強い強制性のため、文末カラは (14b) の「はずだ」のような婉曲的な認識修正表現とは両立しない。

(14) [ゼミ生同士の会話]

A：明日の 10 時のゼミの発表準備はできている？

a. B：できてるよ。ただ明日のゼミは 11 時からだカラ。

b. B：できてるよ。ただ明日のゼミは 11 時からのはずだよ。

c. #B：できてるよ。ただ明日のゼミは 11 時からのはずだカラ。

#### 5. 結論

- 本発表は、原因・理由を表さない文末カラを談話標識との共起性に基づき、「補足型」「訂正型 (1・2)」「転換型」に分類する。このうち「訂正型 (1・2)」と「転

換型」に見られる「認識の是正」用法の文末カラは、談話の直近の QUD に対する直接的な応答となっておらず、話者がすでに自明・既知とみなしていた命題と、聞き手の理解・談話の進行との間に齟齬を検出したときに生起する。その際、談話の先行段階に遡って命題の修正を行うか、あるいは焦点化されていなかった前提を新たに導入して談話の流れ自体を転換させるといった、強制的な再構築操作が働く点に特徴がある。

## 参考文献

- 小野寺典子 (2024) 『談話標識へのアプローチ-研究分野・方法論・分析例-』 ひつじ書房  
グループ・ジャマシイ (編) (2023) 『日本語文型辞典 (改訂版)』 くろしお出版  
白川博之 (1995) 「理由を表さない「カラ」」 『複文の研究 (上)』 くろしお出版,  
pp. 189-219.  
白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版  
定延利之 (2019) 『文節の文法』 大修館書店  
中道真木男 (1991) 「第四部 副詞の用法分類-基準と実例-」 『副詞の意味と用法』 国立国  
語研究所  
前田直子 (2009) 『日本語の複文-条件文と原因・理由文の記述的研究-』 くろしお出版  
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店  
横森大輔 (2006) 「接続助詞の文末用法をもたらす要因-相互行為における参与者の認知  
の観点から」 『言語科学論集』 Vol. 12, pp. 57-76.  
横森大輔 (2011) 「自然発話の文法における逸脱と秩序: カラ節単独発話の分析から」  
『言語科学論集』 Vol. 17, pp. 49-75.  
Roberts, C. (1996/2012) Information structure in discourse. *Semantics and Pragmatics*  
6:1-69

## データ出典

テレビドラマ: 「プロポーズ大作戦」 フジテレビ, 2007

# 非情物主語における再帰的使役表現の成立可能性

## —所有傾斜制約の再検討—

黄 銘君（北海道大学大学院生）

### 1. はじめに

以下の(1)のような再帰的使役表現は、主語と目的語の間に所有関係が認められる点で、典型的な使役文とは異なる性質を持つ。この種の表現は『目を輝かせる』型の使役表現(本多 1997)、「使役表現の再帰構文」(片山 2005)、「再帰構造の使役文」(早津 2016)などと呼ばれてきた。

(1) 女の子は目を輝かせて話した。 (作例)

(1)のような再帰的使役表現のように、従来の研究では有情主語を中心に議論されてきた。

しかし、本多(1997)は次のような非情物主語の例にも注目している。

(2) 白い機体を輝かせて特別機が到着した。 (本多 1997)

本多(1997)は、非情物には所有傾斜を直接適用できず、仮に準用するとしても「身体部位・排泄物」に限られるとした。本研究はこの制約を再検討し、非情物主語を「準有情物」として捉えることで、非情物を主語とする再帰的使役表現の新たな成立可能性を提示する。

### 2. 先行研究および本研究の立場

角田(1990, 1991, 2009)は、所有関係を分離可能な所有と分離不可能な所有の間に中間段階を想定し、「身体部位→属性→衣類→親族→愛玩動物→作品→その他の所有物」という階層的な所有傾斜として示した。角田の分類では、「手、足、頭、髪」といった身体部位に加えて、「汗」など排泄物も第一階層に含まれる。また、身長、体重、性質、意識といった要素は「属性」に、衣服、帽子、メガネなどは「衣類」の階層に含まれる。

本多(1997)は所有傾斜を「目を輝かせる」型の使役表現に適用し、有情主語では「身体部位」「属性」「衣類」といった上位カテゴリーが許容されやすいとされる。具体的には、以下のよう

に分類される。  
[身体部位・排泄物]→(長い)髪をなびかせて、目を輝かせて…目に涙をにじませながら…など

[属性]→声を震わせる、言葉を詰まらせるなど

[衣類・着用物]→赤いリボンをひらひらさせながら、眼鏡をきらりと光らせて…など

一方で、非情物主語については、本多は「大漁旗」の例を「身体部位・排泄物」に相当するものと説明している。そして、非情物は所有傾斜を限定的にしか適用できないとした。

(3) 罰罰丸を先頭に、汽笛を鳴らし、大漁旗をはためかせて出港していった。 (本多 1997)

(4) 夜中に飛行機が低空で爆音を轟かせて飛び去った。 (PB12\_00221)

しかし、本研究では、(3)は「衣類」に、(4)は「属性」に対応させることが可能であると考え

る。つまり、非情物主語の使役においても「所有傾斜」を準用できる余地がある。

さらに重要なのは「再帰性」<sup>1</sup>の観点である。本多はこの点に注目しなかったが、本研究では、有情主語の使役（「投手は眼鏡を光らせながら投球モーションに入った」）と非情主語の使役（「白い機体を輝かせて特別機が到着した」）の双方を広義の再帰的使役として捉えることができると主張する。ただし、非情物の場合には潜在的な行為主体の存在を前提とするため、周辺の再帰性として位置付けられる。

### 3. 周辺の再帰的使役表現

黄(2025)は早津(2016)などの議論を踏まえ、再帰的使役表現を形態的・意味的・統語的側面から次のように捉え直している。

(A) 形態的には接辞「(さ)せる」による生産的な使役形であり、構文上は「X が Y を(Vi)-(さ)せる」の形をとる。

(B) 意味的には使役事態の二重性が生じない。行為者の動作や状態変化のみを表す。

(C) 統語的には項を増加させず、二項構造のままである。また、Y(を格目的語)はX(主語)の部分・側面に限られる。

(5) 子供たちが目を輝かせて話を聞いている。 (黄 2025)

通常、主語と目的語の間に所有関係が存在する(5)のような例は典型的な再帰的使役表現<sup>2</sup>として捉えられる。こうした表現は主に有情物主語を中心に観察されるが、次の例は非情物主語であるにもかかわらず、(A)(B)(C)の条件をすべて満たしていると考えられる。

(6) マークは素早くアクセルを踏み、その力強い車はタイヤをきしませながら飛び出した。  
(LBd9\_00137)

(6)において、主語「車」と目的語「タイヤ」の関係は身体部位に準ずる関係として解釈できる。これは有情主語の場合の「人-身体部位」に対応し、非情物主語においても再帰的使役表現が成立し得ることを示している。すなわち、(6)では潜在的な行為主体である運転者がアクセルを踏むという動作が背景化され、車自体がみずから動いているかのように描写されている。この点において、非情物主語は「準有情物」として再帰的使役の枠組みに含まれると位置付けられる。

ただし、(5)と(6)はいずれも所有関係に基づいているものの、事態における参与関係に差異が見られる。(5)では「子供」と「目」という二つの参加者のみで成り立ち、働きかけの源と帰着点はいずれも同一主体「子供/子供の目」に属している。(6)では「車」と「タイヤ」に加えて、車を操作する行為主体「マーク」が潜在的に関与している。

---

<sup>1</sup> 再帰性については、「働きかけが動作主に戻ってくることによって、その動作が終結を見るといった現象」とする仁田(1982)の定義が伝統的である。本稿では、所有関係と関連づけ、主体との分離可能性に着目することで、非情物を主語とする再帰的使役表現を考察する。

<sup>2</sup> 黄(2025)で論じているように、同じ使役の二重性を持たない二項構造であり、形態上は同じ「A が B を(Vi)-(さ)せる」の形をとるが、所有関係が存在しないため、「彼女の面白い話が子供たちの目をますます輝かせた。」のような例は再帰的使役表現にはならない。

すなわち、(6)の働きかけの源は車自体ではなく、行為主体の「マーク」であり、その働きかけが「車」を媒介として「タイヤ」に及んでいる。このように、非情物主語における再帰性は行為主体の存在を前提としつつ、それを背景化することで成立しているため、再帰性は周辺のものとして捉えられる。

### 3.1 所有傾斜制約の再検討

本節では、本多(1997)による所有傾斜の制約を概観し、これを非情物主語の事例にどのように適用し得るかを考察する。本多(1997)は角田(1990, 1991)が提唱した所有傾斜の概念を導入し、「有情主語をもつ「せる」は身体性と密接に結びつき、目的語が主語との関係から離れるにつれて文の許容度が下がると論じている。

先行研究では、所有傾斜は「身体部位」「属性」「衣類」の三つのカテゴリーにおいて再帰的使役表現が成立しやすいとされる。他方、「作品」などの階層では、着用物として解釈できない限り容認されず、さらに(8)のように「その他の所有物」に属する場合は不自然とされる。

(7) \*ついに仕上げた彫刻を夕日に輝かせながら、彼は満ち足りた表情で家路についた。

(8) \*新築の豪邸の白壁を朝日に輝かせて、彼は駅へと歩いて行った。 (本多 1997)

本研究は「身体部位」「属性」「衣類」の三つの階層に焦点を絞り、それ以外の階層は議論の対象から除外する。

次に、本多が指摘する非情物の場合の適用範囲を確認する。本多は、非情物における所有傾斜の適用は第一類「身体部位・排泄物」に限られるとし、次の例を提示している。

(9) 罰罰丸を先頭に、汽笛を鳴らし、大漁旗をはためかせて出港していった。 (= (3))

ただし、本稿では「大漁旗」は船に付属する装飾物にあたり、衣類に相当する第三類にも含め得ると考える。

### 3.2 準所有傾斜の仮定

BCCWJ のデータから得られた次の例は非情物主語においても、所有傾斜に相当する関係が見られることを示している。

(10) T字路左側からつややかな黒い車両がタイヤを軋ませて... (LBk9\_00118)

(11) トラックが一台、轟音を響かせて近くの交差点を横切り、見えなくなる。

(LBj9\_00020)

(12) 車はミニチュアの星条旗をなびかせて走った。

(PM31\_00205)

(10)では主語「車両」と目的語「タイヤ」が構成体と構成要素の関係にあり、有情主語における「人—身体部位」との比喩的対応が想定される。(11)の「轟音」は機体の性能・属性に起因する現象であり、「人—属性」と平行的に捉えられる。(12)の「星条旗」は車両に付属する装飾的要素として解釈され、有情主語の場合に観察される「衣類」に相当するものとみなされる。

以上のように、非情物主語においても身体部分に準ずる関係・属性・付属物といった対応関係が観察される。したがって、有情物主語に基づく所有傾斜の枠組みを拡張した準所有傾斜を仮定しうる。

#### 4. 非情物主語における再帰的使役表現の分類

準所有傾斜の仮定を検証するため、BCCWJの用例に基づき、非情物主語による再帰的使役表現を構成要素、性能・属性、付属物の三つの類型に分類して検討する。

##### 4.1 構成要素<sup>3</sup>

本類型は主語と目的語が構成体と構成要素の関係にあり、目的語が主語から分離不可能または分離可能性の低い構成要素として解釈される場合を指す。これは、有情主語の「人—身体部位」に平行するものである。

(13) ひんやりした海からの微風が車内を吹き抜け、彼の首をそっと抱く。バスはスプリングをはずませながら、軽やかに疾走した。(LBk9\_00118)

(14) 鈴蘭が戸惑いながらも睡蓮の隣に座った途端、車は猛然とリヤタイヤを滑らせながら発進していた。(PB59\_00293)

(15) 飛行機はつばさをしならせて、星雲の中心にすいこまれるようにして高度を下げている。(LBIn\_00029)

(13) は「バースプリング」、(14) は「車—リヤタイヤ」、(15) は「飛行機—翼」といずれも機械の部品が目的語となる。操縦者の操作が背景化され、機械が自ら運行しているかのように描かれるため、周辺の再帰性が成立していると解釈できる。

(16) 大木は枝を茂らせていて、空に残ったわずかな明かりさえもさえぎる。(PB2n\_00083)

(17) 毎年春になると、地の果てのようなその谷で、その花はつばみを開かせる...(LBr2\_00048)

さらに、(16)、(17)において、「大木」、「花」という植物は通常は意図性を持たない非情物として扱われるが、擬人化表現として扱う場合、準有情物として、そのものの自然な状態を表すことができる。意図性のない主体にも準有情性が付与され得ることを示している。

##### 4.2 性能

本類型は目的語が主語の性能・性質として解釈され、主語と分離不可能な特性の表出を示す場合である。有情主語の「人—属性」（声を震わせるなど）に対応すると考えられる。

(18) 長くて低い船体のシガレットボートがエンジン音を響かせて、左手数メートルのところにやってきた。(PB49\_00556)

(19) 大型の冷凍車はエンジン音を響かせ、排気ガスの中に少年を残して行ってしまった。(LBd9\_00033)

(20) ロケットはごう音を鳴りひびかせながらぐんぐんと上昇していきます。(LBg4\_00024)

(18)～(20)の例に見られる「エンジン音」「ごう音」は、乗り物の作動に随伴して生じる知覚的特性であり、一見すると排泄物のようなものとして捉えられるが、これらは主体の内在的特性

---

<sup>3</sup> 本稿でいう「構成要素」は有情物主語における「身体部位」に準ずる関係を指す。



が顕在化した随伴物<sup>4</sup>と解釈される。ここでは操縦者の存在は背景化され、音響的描写が前景化することによって、乗り物という非情物があたかも自らの属性を働かせるかのように表現される。このような場合は、人が自らの声や表情といった属性を用いる場合と比喩的に対応し、非情物においても周縁的な再帰性を成立させる。

さらに、この「性能」類型は聴覚的な情報に限定されるものではない。たとえば(21)～(23)では、料理、デザートや樹木といった主体が「香ばしい匂い」を薫らせる・漂わせるといった形で嗅覚的属性を顕在化させている。ここでも、匂い<sup>5</sup>は主体と切り離しにくい性質として表出しており音と同様に再帰的な解釈が可能である。また、(24)の「時計が赤い数字を輝かせる」では、視覚的刺激が主体の性能の表出として機能している。このように、「性能」類型は聴覚のみならず、嗅覚や視覚といった複数の感覚領域に広がって用いられる。

(21) フライ、シチュー、炒め物、焼肉が香ばしい匂いを大気に薫らせ、 …

(LBq2\_00063)

(22) 定番の土台、メレンゲに、フランスを連想させるパニラをふんだんに香らせたカスタードとシャンティを混ぜた口溶けのよいクリームを合わせ、 …

(PB4n\_00146)

(23) 樹木はその香ばしい匂いをふんだんにあたり一面に漂わせ、 多くの峡谷や凹地の深い日蔭で、…

(LBo2\_00089)

(24) 側卓の時計が赤い数字を輝かせていた。

(LBt9\_00045)

一方で、触覚や味覚に関わる用例はほとんど観察されない。これは音や匂い、光といった特性が外界に自然に顕在化しやすいのに対し、触覚や味覚は基本的に対象物への直接的な働きかけを前提とするためである。再帰的使役表現は通常、主体の意図的操作を伴わないものとして成立するため、非情物において、触覚や味覚を「自ら働きかける性能」として表すことが困難である。その結果、これらの感覚領域は性能の表出として定型化しにくいと考えられる。

#### 4.3 付属物<sup>6</sup>

本類型は目的語が主語に装着される付属要素（装飾や掲揚物など）であり、一時的に分離可能だが、付着した後、主語の一部として機能的・象徴的に結び付けられる場合を表す。有情主語側の「衣類」に対応する。

---

<sup>4</sup> この用語については加藤(2003)を参照。加藤(2003)は「音」のような五感の対象となるものを「随伴物を表す名詞」と呼んでいる。

<sup>5</sup> BCCWJ から抽出した検索例のうち、以下のように非情物が集合名詞として現れる場合は本研究の分析対象から除外した。

「ジョカン寺脇の公安局が真っ黒に焼け爛れ、 きな臭い匂いを漂わせていたのだ。 (PB22\_00099)

<sup>6</sup> ここでいう「付属物」は、主体に一時的に装着される外的要素を指し、物理的には分離可能である点で「身体部位」とは区別され、衣類のように着用や接触を通じて主体と結び付けられることで、有情主語における「衣類」と準ずる関係にあると考えられる。

(25) 数え切れないほどの、アパートメント・ビルの窓という窓から星条旗が垂れ下がり、車はミニチュアの星条旗をなびかせて走った。(PM31\_00205)

(26) 罰罰丸を先頭に、汽笛を鳴らし、大漁旗をはためかせて出港していった。(= (3))

(25) は「車—星条旗」、(26) は「船—大漁旗」の関係であり、いずれも象徴的・装飾的な付属物が事態描写の中で前景化される。付属物は物理的には主語と分離可能であるが、叙述上は主語の外的表象として機能し、その結果として準所有関係が成立する。

以上の検討から、非情物主語による再帰的使役表現は、有情主語における所有傾斜に即して、「構成要素」、「性能／属性」、「付属物」の三類型に整理でき、それぞれが有情主語側の身体部位・属性・衣類に平行的対応を示すことが確認された。

これらの三類型に共通するのは、潜在的行為主体の背景化や擬人化的効果を通じて、主語の内在的構成要素・性質・付属物が準所有関係として前景化される点である。したがって、非情物主語の使役も擬人化表現や操縦者の行為の背景化を介して準有情物として解釈することができる。部品・性能・付属物といった要素は、主体と切り離しがたい特性として再帰性の枠組みに組み込まれ、周辺のながらも再帰性を帯びる生産的な使役構文として解釈できる。

なお、前節で提案した準所有傾斜の妥当性を裏づけるとともに、非情物主語が周辺の再帰性のもとで再帰的使役の体系に位置付けられることを示す。

以上の議論を整理するため、有情主語における所有傾斜と非情物主語における準所有傾斜の対応関係を表1に示す。

表1 本稿における所有傾斜と準所有傾斜の対応関係

類型	典型的な再帰的使役 (有情主語)	準所有傾斜	用例	周辺の再帰的使役 の成立条件
身体部位	目を輝かせて… 顔を赤らませて	身体部位 に準ずる 関係	大木は枝を茂らせて… 花はつぼみを開かせる	擬人化によって主体 に準有情性が付与さ れる。
			バスはスプリングをはず ませながら…	
属性	声を震わせて…	性能	トラックが轟音を響かせ て… 焼肉が香ばしい匂いを大 気に薫らせ…	
衣類・着 用物	スカートをひらひら させて…	付属物	車は旗をなびかせて…	

## 5. 擬人化しやすさの要件

これまでの考察をまとめてみると、無情物であるにもかかわらず、周辺の再帰的使役が擬人化しやすい要件には主に以下の三点がある。

- (i) 主体が乗り物であり、自ら動く存在として描かれること。(操縦者が背景化)

(ii) 主体が植物であり、成長や変化を示すこと。

(iii) 主体が食べ物であり、香りなどの感覚的特性を自然に外化すること（行為主体が潜在化）

これらはいずれも、無情物でありながら、その内在的特性を主体的に顕在化させる存在と解釈だれる点で共通しており、擬人化的解釈の要件を備えている。

この傾向は、存在動詞「ある」「いる」の使い分けにおいても裏付けられる。伝統的には「いる」が有情物に、「ある」が無情物に対応するとされるが、実際には無情物であっても「いる」が用いられる場合がある。

(27) 停留所にバスがいる。 (PB39\_00128)

(28) 今回も歩いてのぼるつもりだったのだが、ちょうどバスがいたので、つい乗ってしまった。 (OY13\_06003)

ここでの「バスがいる」は、単なる物体としての存在ではなく、利用可能な主体＝「人を運んでくれる存在」として場に現れていることを示す。運転手の存在は背景化されつつも潜在的に前提されており、その結果、バスが有情物のように「いる」で表されるのである。一方で、運行を停止して放置されたバスや「古びたバス」の場合には「ある」が選択され、「いる」は不自然となる。

このように、非情物に「いる」が適用される場合は、その背後に潜在的な行為主体が想定されることが擬人化の動機となっている。これは、第4節で見た非情物主語の再帰的使役と同様に、語用論的操作を介して行為主体を潜在化させることで成立しているといえる。

(29) ひんやりした海からの微風が車内を吹き抜け、彼の首をそっと抱く。バスはスプリングをはずませながら、軽やかに疾走した。 (= (13))

(30) 定番の土台、メレンゲに、フランスを連想させるバニラをふんだんに香らせたカスタードとシャンティを混ぜた口溶けのよいクリームを合わせ、... (= (22))

(31) 大木は枝を茂らせていて、 空に残ったわずかな明かりさえもさえぎる。 (= (16))

これらの例が示すように、再帰的使役において、乗り物・植物・食べ物といった主体は自らの内部要素や特性が背後の操縦者・行為者の存在を潜在化させつつ、あたかも主体自身によって作動しているかのように表現される描写を通して、有情的な解釈を誘発しやすい。言い換えれば、非情物であっても、行為主体の潜在化と知覚的特性の前景化（音・匂い・光など）を介することによって、「準有情物」として解釈され得るのである。その結果、こうした主体においては周辺のながらも再帰性が成立し、従来の有情と無情の対立的区分では説明しきれない中間的領域の存在が浮かび上がる。

## 6. おわりに

本研究の結論は以下の2点に要約される。

第一に、「白い機体を輝かせて特別機が到着した」のような非情物主語の例を操縦者の関与を背景化することで、「準有情物」として解釈することができる。この場合、擬人化が成立するための条件は(i)～(iii)のように整理できる（第5節参照）。さらに、潜在的な行為主体の存在が背

景化されていることと同時に、主体の内部要素や密接な特性が前景化されることが周縁的な再帰性の成立を支える重要な要件となる。

第二に、本研究は従来の「所有傾斜」を拡張し、有情物と非情物の連続性のなかで再帰的使役表現を位置づけた。

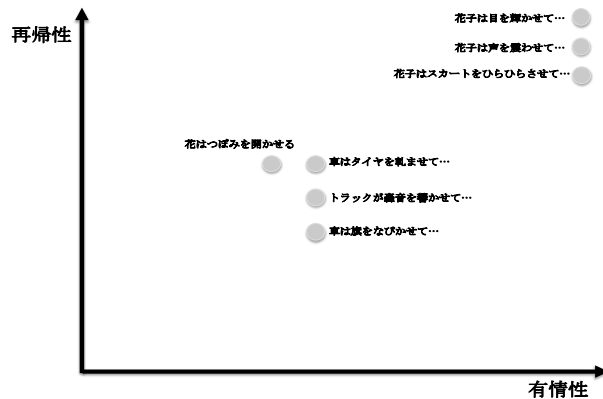


図1 有情性の連続性における再帰的使役表現の位置づけ

有情物においては「身体部位→属性→衣類」という三層が想定されてきたが、非情物の場合にはこれに対応して「構成要素→性能→付属物」という準所有傾斜が成立する。すなわち、非情物主語は擬人化の効果を背景化することで「準有情物」として解釈可能となり、両者を連続的に捉える枠組みが示された。

## 参考文献

- 片山きよみ(2005)「日本語他動詞の再帰的用法について」『熊本大学言語学論集』巻4, 熊本大学文学部言語学研究室
- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 黄銘君(2025)「再帰的使役表現の類型について—動詞の有対性の観点から—」『日本語学研究』第85輯, 145-167, 韓国日本語学会
- 角田太作(1990)「所有者敬語と所有傾斜」『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集』, 15-27, くろしお出版
- 角田太作(1991, 2009)『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語』, くろしお出版
- 仁田義雄(1982)「再帰動詞, 再帰用法—Lexico-syntaxの姿勢から—」, 『日本語教育』47号(初出) 仁田義雄 (2010)『語彙論的統語論の観点から』, 120-131, ひつじ書房。
- 早津恵美子(2016)『現代日本語の使役文』ひつじ書房
- 本多啓(1997)「「目を輝かせる」型の使役表現について」『駿河台大学論叢』(14), 33-57, 駿河台大学

## 用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

# 現代日本語の尺度的累加量化詞について — 類推・添加・最低条件用法の再考 —

大島デイヴィッド義和 (名古屋大学)

davidyo@nagoya-u.jp

## 1 はじめに

- 日本語には「極限のとりたて助詞」と呼ばれる表現が複数存在し、その機能や分布の相違が研究の対象とされてきた。

- (1) a. ついにケン家族に {さえ/まで/も/すら/#でも} 見放された。  
b. カラスは腐肉 {さえ/まで/も/すら/でも} 食べる。

- 通言語的な意味研究においては *even*、サエの類は尺度的累加量化詞 (scalar-additive quantifier)、あるいは尺度的累加焦点代替小辞 (scalar-additive focus-alternative particle) のように呼ばれる。
- 本発表では、特にサエとマデに着目する。
  - モ、スラ、デモに関しては、統語的分布や使用域に違いはあるものの、これらが「極限の助詞」として用いられる場合には、サエ (およびその変異形デサエ) と同義であると考え。
  - 一方、マデ (およびその変異形マデモ) の意味は、サエと異なる (いわゆる「添加」と「類推」の対立)。本発表では、形式意味論の枠組みを用いて両助詞の意味記述を行う。
  - 加えて、条件節に現れるいわゆる「最低条件」用法のサエ (「～サエ～バ」構文) の意味についても考察する。

## 2 サエとマデの分布上の差異

- サエ・マデは相互可換的な場合もあるが、そうでない場合もある (中西 1995、沼田 2009、日本語記述文法研究会 2009 など)。

- (2) a. ついにケン家族に {さえ/まで} 見放された。  
b. 前沢さんは、ヘリコプター {さえ/まで} 持っている。
- (3) サエ > マデ
- a. ケンは私の依頼をはっきりと断った。その顔には嘲笑 {さえ/??まで} 浮かんでいた。  
b. 入院したヒロシの様子を見に行ったが、重篤な状態で、顔を見ることさえ {さえ/??まで} 断られた。
- (4) マデ > サエ
- a. ケンは、快く泊めてくれたばかりか、立派な朝食 {??さえ/まで} 振る舞ってくれた。  
b. ヒロシは松葉杖で階段を降りようとして転落し、左足 {??さえ/まで} 骨折してしまった。
- サエは文中の否定に対して必ず広いスコープを取る。マデは狭いスコープを取りやすい (この場合しばしばハを伴う) が、一定の条件下では広いスコープも取りうる。
    - この差異については、本発表ではあつかわない。
- (5) 当然、子どものケンカで警察 {#さえ/まで (は)} 来なかった。 (NOT > EVEN; 井戸 2017:4 より)

一部改変)

- (6) マコトはイオリにお茶 {さえ/??まで} 出さなかった。(EVEN > NOT)
- (7) 親にまで話さない。(沼田 2009:169)
- a. ≈ 「親を含めて誰にも話さない」 (EVEN > NOT)
- b. ≈ 「他の人には話すが、親には話さない」 (NOT > EVEN)

### 3 先行研究における見解

- 現代語において、マデは「添加」、サエは「類推」の意味を持つとされる (此島 1966、高山 2003、Shirane 2005、小田 2015)。

	類推	添加
平安・鎌倉	<i>dani</i>	<i>sawe</i>
室町	<i>sae</i>	<i>sae</i>
江戸以降	<i>sae</i>	<i>made(-mo)</i>

表 1 サエ・マデの機能の変遷

- 『『まで』は実際の事の積み重ねによる事態の進展や状況の程度に注目する文脈で使われ、逆に『さえ』はそれが問題にならない、あるいはできない文脈で使われる傾向にある。』 (沼田 2009:169)

### 4 類推的尺度累加量化詞: *even* とサエ

#### 4.1 *even*/サエの基本的意味

- 副詞 *even* の意味を巡っては、Karttunen & Peters (1979) をはじめとして多くの先行研究が存在する。
- 本発表では、*even*/サエは以下のような前提を伝達すると想定する (**p** = 基礎命題 [prejacent proposition])。

- (8) *even*/サエの前提
- a. **p** の代替命題のうち、**p** によって含意されず、なおかつ真であるものが少なくとも 1 つ存在する。[累加前提 (additive presupposition)]
- b. **p** は、その代替命題のうち **p** によって含意されずなおかつ真であることが会話参加者双方にとって既知であるもののどれよりも顕著性 (意外性) が大幅に高い。[弱い全称的尺度前提 (weak universal scalar presupposition)]
- c. **p** の顕著性がある程度高い。[「絶対的顕著性」前提 (“absolute noteworthiness” presupposition)]
- (9) *even(p)/sae(p)* の意味 [**CG** = common ground (共有知識)、**NW** = noteworthiness (顕著性)]:
- a. 前景の意味 (断定): *p*
- b. 前提:  $\lambda w_1 [\exists q [q \in \text{Alt}(p) \wedge q \not\subseteq p \wedge q(w_1)] \wedge \forall q [q \in \text{Alt}(p) \wedge q \not\subseteq p \wedge \text{CG}(q) \rightarrow \text{NW}(p) \gg \text{NW}(q)] \wedge \text{NW}(p) > \theta]$
- (10) チェスシナリオ
- a. Zepeda はリーグ戦式のチェスの大会で Lopez、Mendez、Nunez、Ortiz、Perez と対局し

た。Zepeda は Lopez より強く、Mendez とは同じくらいの実力である。Zepeda は Nunez より弱く、Nunez は Ortiz より弱く、さらに Ortiz は Perez より弱い。

- b.  $L <_{\text{strong}} \{Z, M\} <_{\text{strong}} N <_{\text{strong}} O <_{\text{strong}} P$
- (11) Zepeda **even** beat [Perez]<sub>F</sub>. / Zepeda は Perez にさえ勝った。
- a. Zepeda が Perez 以外の誰かに勝った。[累加前提]
- b. 「Zepeda が Perez に勝った」は、その代替命題のうち真であることが既知であるもののどれよりも顕著性が大幅に高い。[弱い全称的尺度前提]
- c. Zepeda が Perez に勝ったことは顕著性が高い。[「絶対的顕著性」前提]
- (12) Zepeda は大健闘だ。初日と 2 日目には、Lopez、Mendez、Nunez と対局し、いずれも勝利を収めた。
- a. 3 日目には、Perez にさえ勝った。{ただし、Ortiz には負けた。 / Ortiz との最終戦も期待が持てる。}
- b. 3 日目には、Ortiz にさえ勝った。{ただし、Perez には負けた。 / Perez との最終戦も期待が持てる。}
- (13) A: Zepeda が Nunez に勝ったの? すごいな。  
B: それどころか Perez に {さえ/まで/も} 勝ったよ。  
C: (新着テキストメッセージを見て) おっ! Ortiz に {#さえ/まで/も} 勝った。
- (14) Zepeda は Lopez に勝った。そして Mendez に {#さえ/も} 勝った。

- 焦点代替量化詞の伝達する意味において、一般に「基礎命題によって含意される代替命題」の真偽は無関係のものとして排除される (Beaver & Clark 2008:73; ただし、4.2.1 節で例外的なケースを見る)。
  - ー たとえば (15B') でサエ・モノの使用が不自然なのは、「クルーザーを持っていること」が「クルーザーとヘリコプターを持っていること」に含意されるために、累加前提が充足されないことに起因すると理解できる。

- (15) A: 前沢さんはクルーザーを持っているのか。すごいな。  
B: あの人はヘリコプター {さえ/も/?} 持っているよ。  
B': あの人はクルーザーとヘリコプター {#さえ/#も/?} 持っているよ。
- (16) A: 前沢さんはレクサスを持っているのか。すごいな。  
B: あの人はクルーザーとヘリコプター {さえ/も/?} 持っているよ。

## 4.2 累加前提が「免除」されるケース

### 4.2.1 代替命題群に含意的序列が成立する場合

- (17)/(18) のような例では、(8a) の意味での累加前提は充足されていないにもかかわらず *even*/サエが使用できる。

- (17) A: Did John read some of the books?  
B: John **even** read all of the books.

(Greenberg 2016:13, Wagner 2014 からの引用)

- (18) その機体はとても速かった。音速の壁さえ超えた。

- このようなケースでは、代替命題群に含意的序列が成立し、「顕著性がより低い代替命題」は、必然的に基礎命題によって含意される。
- この条件が成立する場合には、*even*/サエの累加前提が、「基礎命題によって含意される代替命題」によっても充足可能となるように緩和されると考えられる。

(19) *even*/サエの例外的な前提 #1 (被含意代替命題による充足)

- p** の代替命題のうち、**p** 以外に真であるものが少なくとも 1 つ存在する。
- p** は、その代替命題のうち真であることが会話参加者双方にとって既知であるもののどれよりも顕著性が大幅に高い。
- p** の顕著性がある程度高い。

- 「基礎命題によって含意される代替命題の包含 (非排除)」は、*even* およびサエの場合には起こるが、その他の焦点代替量子化子の場合には必ずしも起こらない。

(20) A: Did John read some of the books?

B: ??John read all of the books, **too**.

(21) The aircraft was fast. It {*even*/??**also**} broke the sound barrier.

#### 4.2.2 代替命題群に相互的排除関係が成立する場合

- (22a,b) のような例においても、(8a) の意味での累加前提は充足されていない。
  - これらの英文はサエでは訳しにくい。

(22) a. (Is Mary a faculty member? —) Yes. She is **even** [an associate professor]<sub>F</sub>.

b. (Did Hasiba win a medal? —) Yes. She won **even** the [gold]<sub>F</sub> medal.

(Lahiri 2008:361 より一部改変)

- このようなケースでは、代替命題群が相互排他的である (准教授であれば講師ではありえないし、金メダルと銀メダルを両方取することはできない)。
- Lahiri (2008) は、この条件が成立する場合には *even* の前提は、(23) のような反実仮想的なものに読み替えられると提案している。
  - 日本語のサエの場合には、同様の現象は起こらない。

(23) *even* の例外的な前提 #2 (反実仮想的な充足)

- p** の代替命題のうち、**p** が仮に成立しなかった場合には替わりに成立したであろうものが少なくとも 1 つ存在する。
- p** は、その代替命題のうち **p** が仮に成立しなかった場合には替わりに成立した可能性があることが会話参加者にとって既知であるもののどれよりも、顕著性が大幅に高い。
- p** の顕著性がある程度高い。

## 5 添加的尺度的累加量化詞: マデ (と *even*)

### 5.1 マデの意味

- マデは以下のような前提を持つと提案する。



(24) マデの前提

- a. **p** の代替命題のうち、**p** によって含意されず、なおかつ真であるものが少なくとも 1 つ存在する。
- b. **p** の代替命題のうち、**p** によって含意されずなおかつ真であることが会話参加者双方にとって既知であるものすべての連言を  $Q (= q_1 \text{ かつ } q_2 \text{ かつ } \dots \text{ かつ } q_n)$  とした場合、「**p** かつ  $Q$ 」の顕著性が  $Q$  の顕著性と比べて大幅に高い。
- c. 「**p** かつ  $Q$ 」の顕著性がある程度高い。

(25) ヒロシは、天丼を食べ、うどんを食べ、さらにぜんざいまで食べた。

- a. ヒロシはぜんざい以外に何かを食べた。
- b. 「ヒロシが(ぜんざい&(天丼&うどん))を食べた」の顕著性は「ヒロシが(天丼&うどん)を食べた」の顕著性よりも大幅に高い。
- c. 「ヒロシが(ぜんざい&(天丼&うどん))を食べた」の顕著性が高い。

● **made(p)** の前提は、**sae(p)** のそれと異なり、 $p$  単体の顕著性が比較的低くても充足されうる。

● サエは命題単体の顕著性、マデは「連言の顕著性」を強調するのにそれぞれ適している。

(26) a. ケンは、快く泊めてくれたばかりか、立派な朝食 {??さえ/まで} 振る舞ってくれた。

- b. ヒロシは松葉杖で階段を降りようとして転落し、左足 {??さえ/まで} 骨折してしまった。

(27) (『雪国』の方が『坊っちゃん』より読むのが難しいという認識が共有されている。)

- a. ヒロシは 3 日間の休みのあいだに『坊っちゃん』を読み終わったのか、すごいな。— それどころか、『雪国』{?さえ/まで} 読んだよ。
- b. ヒロシは 3 日間の休みのあいだに『雪国』を読み終わったのか、すごいな。— それどころか、『坊っちゃん』{#さえ/まで} 読んだよ。
- c. ヒロシはまだ小学生なのに『坊っちゃん』を読んだことがあるのか、すごいな。— それどころか、『雪国』{さえ/?まで} 読んだことがあるよ。
- d. ヒロシはまだ小学生なのに『雪国』を読んだことがあるのか、すごいな。— それどころか、『坊っちゃん』{#さえ/?まで} 読んだことがあるよ。

● 4.2.1 節で、**sae(p)** の累加前提は、代替命題に含意的序列が成立する場合に限っては、 $p$  に含意される代替命題によっても充足されうることを見た。

● このような「累加前提の緩和」が **made(p)** には起こらない(つまり、この点においてマデは英語の *too* 等の仲間である)と想定すれば、(28a,b) におけるマデの不自然性が説明できる。

(28) a. ケンは私の依頼をはっきりと断った。その顔には嘲笑 {さえ/?まで} 浮かんでいた。

- b. 入院したヒロシの様子を見に行ったが、重篤な状態で、顔を見ることさえ {さえ/?まで} 断られた。

– (28a) の解釈に関わる代替命題は「非友好的だった」のようなものであり、これは「嘲笑が浮かんでいた」によって(実質的に)含意される。したがって、サエの(緩和された)累加前提は充足されるが、マデの累加前提は充足されない。

– (28b) の解釈に関わる代替命題は「会話をすることを断られた」のようなものであり、これは「顔を見ることを断られた」によって(実質的に)含意される。したがって、サエの(緩和された)累加

前提は充足されるが、マデの累加前提は充足されない。

## 5.2 添加的な *even*

- Kay (1990) は、英語の *even* に、基礎命題が成立することの顕著性ではなく「基礎命題が既に想起されている他の命題に加えて成立すること」の顕著性を表す特殊な用法があることを指摘している。

- (29) a. George drank a little wine, a little brandy, a little rum, a little calvados, and **even** a little armagnac.  
b. George drank a little rum, a little wine, a little armagnac, a little calvados, and **even** a little brandy.

(Kay 1990:71–72)

- (30) Mary got a full fellowship from State University and they're **even** paying her way to travel to the school. (Kay 1990:74 より一部改変)

- 英語の *even* は、類推解釈の他に、(選言的顕著性を伝達する) 添加解釈を許容すると考えられる (cf. 室町期のサエ)。

- (31) ジョージはワインを飲み、ブランデーを飲み、ラムを飲み、カルバドスを飲み、さらにはアルマニャック {まで/??さえ} 飲んだ。
- (32) メアリーは州立大学からフルフェローシップを獲得し、大学への旅費 {まで/??さえ} 負担してもらえることになった。

## 6 サエの「最低条件」用法

- サエには条件節 (条件文の前件) に限って現れる用法があり、これは「最低条件」用法と呼ばれる (沼田 2009:174–179)。

- (33) a. 水さえあれば、生き延びられる。  
b. ケンさえ手伝いに来てくれたら、夕方までに仕事が終わる。

- 主節 (後件) は望ましい自体を表すものに限られる。

- (34) マリさえ来たら、{なごやかな雰囲気になる/#ぎすぎすした雰囲気になってしまう}。

- 何が「最低」なのか？ 前件の内容は、必ずしも比較対象となる諸々の十分条件の中で、
  - 最も弱いもの (代替的な十分条件を含意しないもの) とは限らないし、
  - 最も望ましさの度合いが低いものとも限らないし、
  - 最も顕著性が低いものとも限らない。

- (35) (アキラ、リョウ、ケン、マリが明日手伝いに来ることになっていたが、ケンとマリは風邪をひいてしまった。)

だいじょうぶ。アキラとリョウさえ手伝いに来てくれたら、仕事は夕方までに終わる。実際のところ、4人のうち1人 {が/だけでも} 手伝いに来てくれたら、仕事は夕方までに終わる。

- (36) (B は明日、名古屋から大阪に行く予定がある。)

- A: 事故の影響で、明日は東海道新幹線は運休かもしれない。
- B: 近鉄さえ運行してれば問題ないよ。新幹線の方が便利だけど。[「近鉄が運行していること」の望ましさが「新幹線が運行していること」と比べて低い。]
- B': 近鉄さえ運行してれば問題ないよ。もともと近鉄で行くつもりだったし。[「近鉄が運行していること」の望ましさの方が高い。]
- (37) A: ホテルの近くには、コンビニはないけどスーパーがあるって。
- B: それはよかった。スーパーさえあればパンも牛乳も買える。[「スーパーがあること」が「コンビニがあること」より顕著性が低いという含みはない。]
- 前件命題は、比較対象となる十分条件のうちもっとも「実現性 (expectedness)」が高いものでなければならぬ。
    - 「最低条件」でなく「最高 (実現性) 条件」用法。
- (38) a. カオルとタクマが手伝いに来てくれる可能性はそれぞれ 50% 程度。(2 人とも来る、あるいは 2 人とも来ない可能性もある。)
- b. カオルが手伝いに来てくれる可能性は 70% 程度、タクマが手伝いに来てくれる可能性は 15% 程度。(2 人とも来る、あるいは 2 人とも来ない可能性もある。)
- (39) a. 明日は、カオルさえ手伝いに来てくれれば、仕事は夕方までに終わるね。  
(38a): ? / (38b): √
- b. 明日は、タクマさえ手伝いに来てくれれば、仕事は夕方までに終わるね。  
(38a): ? / (38b): #
- (40) A: 明日は、アキラ {が/だけでも/さえ} 手伝いに来てくれれば、仕事は夕方までに終わるね。
- B: うん。
- A: それに、リョウ {が/だけでも/#さえ} 手伝いに来てくれれば、やはり仕事は夕方までに終わる。
- B: そうだね。
- A: 2 人とも来てくれたら、午前中に終わるかもしれない。
- B: そうなるといいね。
- (41) 「[...X サエ ... バ]<sub>p</sub>、q」の前提
- a. **p** の代替命題のうち、**p** によって含意されず、なおかつ **q** の十分条件となるものがあるが少なくとも 1 つ存在する。
- b. **p** は、その代替命題のうち **p** によって含意されずなおかつ **q** の十分条件となるものが会話参加者双方にとって既知であるもののどれよりも実現性が大幅に高い。
- c. **q** は望ましい。(q の望ましさがある程度高い。)
- (42) アキラさえ手伝いに来てくれたら、間に合う。[Exp = expectedness (実現性)]
- a. 前景的意味 (断定):  $\lambda w_1[\text{if}(\mathbf{a-come})(\mathbf{we-make-it})(w_1)]$
- b. 前提:  $\lambda w_1[\exists r[[r \in \text{Alt}(\mathbf{a-come}) \wedge \mathbf{a-come} \not\subseteq r \wedge \text{if}(r)(\mathbf{we-make-it})(w_1)] \wedge \forall r[[r \in \text{Alt}(\mathbf{a-come}) \wedge \mathbf{a-come} \not\subseteq r \wedge \text{CG}(\lambda w_2[\text{if}(r)(\mathbf{we-make-it})(w_2)])]] \rightarrow \text{Exp}(\mathbf{a-come}) \gg \text{Exp}(r)] \wedge \text{Desirability}(\mathbf{we-make-it}) > \theta]$
- 前件の内容は、真であることが既知 (実現確率 100%) であってもいいし、偽であることが既知 (実現確

率 0%) であってもよい (これはサエの有無とは独立に日本語の条件文に広く当てはまる性質である)。

- (43) A: アキラが来てくれたよ。  
B: それはよかった。アキラ {さえ/が} いれば、今日中に仕事が終わる。
- (44) 野球シナリオ: タイタンズはリーグ優勝を惜しくも逃した。3 日前に行われた最後から 2 番目の試合では、最下位のジャガーズから序盤に 5 点のリードを奪うも、逆転サヨナラ負けを喫した。そして昨日の最終戦で、勝率で並んでいたドルフィンズに 6 対 1 で敗れた。
- a. 3 日前の試合に (さえ) 勝っていたら、優勝できたのに。  
b. 昨日の試合に (??さえ) 勝っていたら、優勝できたのに。
- 前件が偽であっても構わないことから、「実現性 (expectedness)」は実現確率とは同一視できない。
    - 前件が偽であること (実現確率が 0% であること) が既知である場合、前件およびその代替命題の「実現性」は、どれだけ実現に近かったか (どれだけ惜しかったか) によって判断される (“almost-happenedness”)
- (45) a. 現実世界は「負け/負け」世界。  
b. 「勝ち/負け」世界群は「負け/勝ち」世界群 (および「勝ち/勝ち」世界群) よりも現実世界に近い。⇒ 「勝ち/負け」世界のうち、現実世界に最も類似しているものは、「負け/勝ち」世界のうち現実世界に最も類似しているものよりも、現実世界により近い。
- (46) For any  $c$  and  $g$ ,  $\llbracket \text{Exp}(p) > \text{Exp}(q) \rrbracket^{c,g} = 1$  iff:
- a. in the case that  $\llbracket \text{CG}(\neg p) \rrbracket^{c,g} = 1$ , for all worlds  $w$ , if  $\llbracket q(w_1) \rrbracket^{c,g[w/w_1]} = 1$ , then there is a world  $w'$  such that (i)  $\llbracket p(w_1) \rrbracket^{c,g[w'/w_1]} = 1$  and (ii)  $w'$  is more similar to each world in the modal base relative to  $c$  than  $w$  is;
- b. otherwise,  $\llbracket \text{Prob}(p) > \text{Prob}(q) \rrbracket^{c,g} = 1$ .

## References

Beaver, David I. & Brady Z. Clark (2008) *Sense and sensitivity: How focus determines meaning*. Wiley-Blackwell; Greenberg, Yael (2016) A novel problem for the likelihood-based semantics of *even*. *Semantics and Pragmatics* 9(2); 井戸 美里 (2017) とりたて詞の統語と意味から見る日本語否定極性表現の研究. 筑波大学博士論文; Karttunen, Lauri & Peters, Stanley (1979) Conventional implicature. In Oh, Choon-Kyu & Dinneen, David A. (eds) *Presupposition*. Academic Press; Kay, Paul (1990) *Even*. *Linguistics and Philosophy* 13; 此島 正年 (1966) 国語助詞の研究: 助詞史の素描. 桜楓社; Lahiri, Utpal (2008) The semantics and pragmatics of some scalar expressions in Spanish. *International Journal of Basque Linguistics and Philology* 42; 中西 久実子 (1995) モとマデとサエ・スラ. 宮島達男, 仁田義雄 (編), 類義表現の文法 (上). くろしお出版; 沼田 善子 (2009) 現代日本語とりたて詞の研究. ひつじ書房; 小田 勝 (2015) 実例詳解古典文法総覧. 和泉書院; Shirane, Haruo (2005) *Classical Japanese: A grammar*. Columbia University Press; 高山 善行 (2003) 極限のとりたての歴史的変化. 沼田善子・野田尚史 (編), 日本語のとりたて: 現代語と歴史的変化・地理的変異. くろしお出版; Wagner, Michael (2014) *Even and the syntax of focus sensitivity*. A paper presented at the Workshop on Focus Sensitive Expressions from a Cross-Linguistic Perspective, Bar Ilan University.

# 不明確項指示用法の不定語と指示詞の照応について

松本優(名古屋大学大学院生)

matsumoto.yu.f4@s.mail.nagoya-u.ac.jp

## 1. はじめに

現代日本語の指示詞の用法には大きく現場指示用法(=(1))と文脈指示用法<sup>1</sup>(=(2))が存在する(佐久間 1951、三上 1955 等)。(1)は「これ」で指示する対象が話し手の発話の場であり、(2)は先行する文中で指示対象が明示的である(指示対象点線)。

- (1) 「これを上げましょうか。」私は烏帽子を脱いで栄吉の頭にかぶせてやった。

(川端康成『伊豆の踊子』: 藤本 2021、p.137)

- (2) 「あきつれば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べた。何のためか知らぬ。「その歌はね、茶店で聞きましたよ」

(夏目漱石『草枕』: 藤本 2021、p.138)

このうち、(2) のような文脈上で指示詞が先行詞となる名詞句と照応する文脈指示用法では、指示詞が指示する名詞句の特徴によりコソア系<sup>2</sup>で使い分けられることがわかっている。堤(2012)は、文脈指示用法においてコ(・ア)とソの言い換えについて以下の仮説を立て、データの分析から概ね正しいという結論を出している。

- (3) a. コノは Ws に登録された対象を指す。

- b. ソノ<sup>3</sup>は Wp に登録された対象を指す。

(堤 2012、p.116)

ここで、Ws と Wp は話者が名詞句を指示する場合に心内で捉える「場」であり、Wp 内の要素はすべて変項であるのに対して Ws 内の要素はそうではない。つまり、ソで指示される語句は話者にとって一度は変項として解釈されている。

堤 (2012) が示す(3)の仮説に従うと、(4)のように先行詞として指示詞が指示する名詞句が不定である場合には、現実世界に常に指示する対象が想定されえないということから(5)が予測できる。

- (4) 隣の部屋で何かがゴソゴソ動いている。それが生き物かどうか分からない。

(岡崎 2010、p.225)

---

<sup>1</sup> 現場指示用法と文脈指示用法については、金水(1999)では「直示/非直示」、田窪(2010)では「眼前指示/非眼前指示」という用語が用いられている。本発表では、指示詞が指示している対象の同定に言語的先行文脈が必要かという基準で「現場指示/文脈指示」を用いる。

<sup>2</sup> 現代語指示詞のみを扱う本発表では、「現代語の'系'は指示代名詞・指示副詞を含んだものであり、指示代名詞または指示副詞のみで各グループが構成される古代語については'一系列'」(岡崎 2010 : p.18)という記述に倣い、指示詞の前項要素について「系」という用語を用いる。

<sup>3</sup> 堤(2012)の枠組みでは、主に後項要素がノ形の指示連体詞について分析している。本論では、先行研究で例として示されている(4)も踏まえて、指示代名詞も分析の対象に入れる。

(5) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞はソ系指示詞である。

本発表では、コーパスを用いた事例調査によって、この予測の妥当性について検討する。以下、2 節では本論での予測(5)を導く背景の整理を行う。3 節では不定語と指示詞の照応関係について事例調査を行い、その結果について考察する。4 節では 3 節の結果に基づき(5)の予測が妥当であるか検討する。

## 2. 背景の整理

本発表では、(5)の予測の妥当性を検証する。この仮説の検証にあたって、(4)のように使用される不定語の解釈、また堤(2012)の仮説を援用し、仮説から導かれる予測を明確にする。

### 2.1. 不定語

1 節(4)で見た「何か」を含む不定を表す語句全体について、尾上(1983)は「いわば空欄としてその実質を持たないというような特異な語性をもつ」(p.405)と述べる。基本的に名詞句は世界の対象物を指しその情報を聞き手に伝えるという役割を持つが、「何か」等はその実質を持たず、伝達上有効な働きをなし得ないと思われるためである。

この不定を表す語句について、先行研究では何を「不定語」とするか揺れがある。本発表では(6)(7)のような尾上(1983)の「不明確項指示用法」の不定語を対象とする。

(6)は「「何か」という部分が「不明のあるもの」という意味で何やら名詞一語のように感じられ」(尾上 1983 : p.415)、(7)に至っては格助詞が下接しているために「もはや「何か」が名詞相当になりおおせている」(尾上 1983 : p.415)と説明される。

(6) ベランダから何かぶらさがっている。 (尾上 1983, p.414)

(7) 何かがまちがっていますよ。 (尾上 1983, p.414)

以降、「不明確項指示用法の不定語」を単に「不定語」と呼ぶ。

### 2.2. 文脈指示用法におけるコ・ア／ソの言い換え

本発表で対象とする、不定語と指示詞の照応という言語現象において、堤(2012)の考え方を援用する。堤(2012)は、文脈指示用法における指示詞について、高橋(1956)の「場面」と「場」の考え方を援用し、コ・アとソがどのように言い換えられるか分析している。

高橋(1956)は、我々を取り巻く外的世界を「場面」、我々が心の中に作り上げる世界を「場」とし<sup>4</sup>、「言語體系に組み入れられるものは「場」であって「場面」ではない」(p.54)と述べる。言語的な素材が話し手から聞き手にわたるとき、「場面」に存在する素材は「場」を経

---

<sup>4</sup> これは、心理学の用語に即して「話し手と聞き手と素材の緊張関係」(p.53)である「客観的立場における場面」を「場面」、「話し手(または聞き手)の意識における自分と相手と x(=いわゆる素材)との緊張関係」(p.53)である「主體的立場における場面」を「場」と言い換えたものである。

て発言に現れる。指示詞については、話し手が自分に近づけて素材について話したときコ系が使用され、聞き手に近づけた場合ソ系が使用されると説明される。

堤(2012)は、この「場」についてさらに Ws と Wp という段階を想定しそれぞれ「場面」から格納される要素が異なると述べる。さらに「場面」は Wo とされ、外的世界から心的領域には Ws、Wp、Wo の 3 つがあるとする。これらの性質をまとめると(8)のように述べられ、聞き手の意味解釈を関連させて可視化すると図 1 のようになる。

(8) Ws, Wp

- a. Ws は話者が外界や文脈から構築する世界である。(∴ Ws ≠ Wo)
- b. Wp は Ws と Wo との中間的な存在(interface)である。
- c. Wp 内の要素を介して Ws 内の要素を指示することを間接指示といい、Wp 内の要素を介さずに Ws 内の要素を指示することを直接指示という。
- d. Wp 内の要素は全て変項である。Ws 内の要素は全て変項ではない。
- e. 意味解釈は、Ws, Wp 内の要素のいずれかを用いてなされる。
- f. Ws 内から意味解釈に選び出される要素を指示的、Wp 内から選び出される要素を非指示的と呼ぶ。

(堤 2012, p.113)

堤(2012)によれば、この 3 つの領域に基づき、名詞句を指示するときには、(i) Wo から直接 Ws に登録される、(ii) Wo から Wp へ登録された後 Ws へ登録される、(iii) Wo から Wp に登録されるが Ws への登録が拒否される、という 3 つのパターンがあると論じる。そして、文

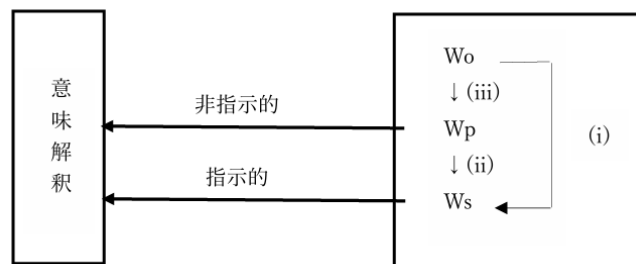


図 1 (堤 2012 に加筆)

脈指示におけるコ系・ア系とソ系の違いとして、コ系・ア系は Ws に登録された対象を指し、ソ系は Wp に登録された対象を指すと予測を立てる(p.116)。

Wp 内の要素はすべて変項であり、Ws 内の要素はすべて変項でない(= (8d))。変項を導入する必要があるものの典型は固有名詞であり、指示対象がある特定の事物を指示することができない名詞句の場合は Wp 内の要素が用いられる。(9)は「嵐」という固有名詞が用いられ、この場合は上記の(i) Wo→Ws の過程を辿り Wp には登録されない。そのため、ソ系ではなくコ系が用いられる。一方で、(10)では「(太郎がトヨタで売っている)車」はそれを継続して売っていると考えられるため具体的な内容には日々の変化があると考えられる。そのため、「(太郎がトヨタで売っている)車」を変項 x と置いたまま指示することになり、過程としては(iii) Wo→Wp となる。

- (9) 嵐が解散するそうです。この/\*そのグループはやっぱり歴史に残る偉大なアイドルでしたよね。

(堤 2012 をもとにした作例)

- (10) 太郎はトヨタで車を売っているが、その/\*この車には保険をかけなければなら  
ない。(堤 2021、p.127)

## 2.3. 予測

以上、本発表で対象とする不定語の概要と、文脈指示用法における指示詞の言い換えにつ  
いて前提を確認した。このうち、以降の議論で重要となる点をまとめると以下のようになる。

- (11) a. 不定語は「空欄」としてその実質を持たないという性質を持つ。  
b. 変項となる要素が登録される Wp の対象を指すとき、その指示詞はソ系指示詞  
である。

(11a)に再解釈を施すと、不定語は基本的に話者にとって変項として置かれる名詞句であ  
ると思われる。これにより、(4)のように不定語をソ系指示詞が指示している用例として  
確認できたものをコ系指示詞に置き換えることはできないと考えられる。

- (4') 隣の部屋で何かがゴソゴソ動いている。それ/\*これが生き物かどうか分からな  
い。(岡崎 2010、p.225 に加筆)

以上のことから、本発表では以下(12)を予測する。以降では、コーパスに基づく実例調査  
によってこの予測を検証していく。

- (12) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞はソ系指示詞である。

## 3. 用例の観察

### 3.1. 調査の対象

本節では、不定語と指示詞が文脈上で照応関係にある場合の指示詞の特徴を考えるにあ  
たって、文脈上に出現した不定語と指示詞が同一の対象を表している場合の用例を収集し、  
実例観察によって検討する。用例データは『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』  
(山崎編(2014))を、『中納言』(国立国語研究所(2025))を用いて検索することによって採  
取する。用例採取の際には、キーに不定語とされる「何か」「誰か」「どこか」<sup>5</sup>、共起条件に指  
示詞を設定した<sup>6</sup>。対象とした指示詞は前接要素コ系・ソ系・ア系と後項要素レ・ー・コ(指

---

<sup>5</sup> 益岡・田窪(1992)が「疑問語」(本論での「不定語」)として挙げた7例(だれか、どれか、な  
にか、どこか、どちらか、いつか、なぜか)からコーパス検索を行い用例数が多い上位3つを対  
象とした。

<sup>6</sup> 代表として「何かーそれ」の検索式を以下に示す。

キー: (語彙素="何" AND 品詞 LIKE "代名詞%")

AND 後方共起: (語彙素="か" AND 品詞 LIKE "助詞-副助詞%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="其れ" AND 品詞 LIKE "代名詞%") WITHIN 10 WORDS FROM キー

WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="0" AND

tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND

endOfLine="CRLF"



示代名詞)・ーノ(指示連体詞)である<sup>7</sup>。

形式上不定語に一致しているものの、用例数に計上しないものの代表<sup>8</sup>について説明する。  
(13)のような、尾上(1983)の不明確項指示用法の不定語と同じ形式のものである。

(13)ただ、こんな仕合せを与えて下さった…先生に、何かご迷惑がかかったら、それは  
とても辛いことです。(辻邦生『時の扉』:LBa9\_00064,65610)

(13)での「何か」は、尾上(1983)が「それが何であるか特定できないが」という意味で後続部分に対して注釈挿入句的に働いている」(p.415)と述べる「疑問用法<疑タイプ>」であると考えられる。挿入句であるために格助詞が後接することはなく<sup>9</sup>、述語の項にはならない。(13)で「それ」が指示しているのは名詞句「ご迷惑」であるとする。

### 3.2. 調査結果

指示詞と不定語が同一の対象を指示していると認められる用例の数を表1に示す。

	ーレ形			ーノ形			ーコ形		
	これ	それ	あれ	この	その	あの	ここ	そこ	あそこ
何か	17	231	6	3	51	0	0	13	0
誰か	0	9	0	0	30	2	0	2	0
どこか	0	13	0	0	9	0	0	10	0

表1 指示詞と不定語が同一の対象を指示する用例数

不定語と同一の対象を指示する場合にはソ系指示詞が用いられることが多く、全体の9割以上を占めている。それぞれの項目から照応されている典型的な例を以下に挙げる。

(14) (「何かーそれ」)ビールを呑み、煙草を喫ってメモを執り、客と雑談をしながら、  
強く何かを感じていた。それが何だかわからない。

(風間一輝『男たちは北へ』:LBd9\_00033,97720)

(15) (「何かーその」)「何の病気？」と浩二は聞いた。ヤンが何か答えたが、浩二には  
その病名がわからなかった。(永倉萬治『ラスト・ワルツ』:LBf9\_00069,63390)

<sup>7</sup> 指示連体詞の場合は、庵(2007)が述べるように「この/その」全体で先行詞と照応する「指定指示」と「こ/そ」の部分で照応する「代行指示」がある。本調査ではどちらの場合も同一の対象を指していると判断されれば用例数に数えた。

(i) 昨日友達とすしを食べた。この/そのすしはなかなかの味だった。(指定指示)

(ii) 昨日友達とすしを食べた。この/その味はなかなか良かった。(代行指示)

(庵 2007、p.145 に加筆)

<sup>8</sup> 例示の副助詞「でも」と同義とされる「か何か」(森山 1998)や、フィラーとして用いられているものに関しても、目視で取り除いている。

<sup>9</sup> ただし、不明確項指示用法の不定語であっても格助詞の省略により形式上格助詞が後接しないことは十分有り得る。そのため、本調査では後方共起条件に格助詞を設定することは行わなかった。

(16) (「何かーそこ」)だが、新城喬子の孤独の性質は、もっと違う何かである。そこに  
この作品の新鮮味もある。

(中島誠『宮部みゆきが読まれる理由』:PB29\_00258,14860)

(17) (「誰かーそれ」)ここでもしだれかが殺されるとしたら、それは間違いなく五百崎  
だった。

(松井今朝子『家、家にあらず』:LBt9\_00259,81050)

(18) (「誰かーその」)誰かの悪口を言うと、テキメンにその人が現れる。

(青木雨彦『ことわざ雨彦流』:LBe0\_00005,46220)

(19) (「誰かーそこ」)あなたがこれまでに引きつけた誰かがウイルスに感染して、そ  
こから届いています。

(「Yahoo!知恵袋」:OC02\_00307,3120)

(20) (「どこかーそれ」)どこかでつまづいては、それから先の勉強はとてみたいへ  
んになり、

(小宮山博仁『わが子を算数大好きに変える本』:LBj3\_00113,76220)

(21) (「どこかーその」)世界のどこかで紛争が起こると、必ずその国から政治亡命者が  
入ってきます。

(高見幸子『日本再生のルール・ブック』:PB35\_00199,86950)

(22) (「どこかーそこ」)しかし、植物は動けませんし、カイメンもホヤもフジツボも、  
一度どこかにくっつくと、そこで一生を送ります。

(長谷川真理子『オスとメス=性の不思議』:LBh4\_00020,41150)

2節で立てた予測(12)は、以下の通りであり、上記の例はこの予測と合致している。

(12) (再掲) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞は基本的にソ系指示詞  
である。

しかし、表1ではコ系・ア系ともに用例数が確認できる。これは一見上記予測の反例である  
かのように見えるが、表1でのコ系・ア系指示詞の用例の大半は不定語と照応関係にある  
とは言えず、したがって実のところこれらの例は反例とはならない。

まず、ア系指示詞の用例についてである。(23)のようなア系指示詞の文脈指示用法につい  
て、金水(1999)は「一般に、アの文脈照応用法(=文脈指示用法)と呼ばれるものは、すべて  
この記憶指示用法である」(p.72、加筆)と述べる。つまり、ア系指示詞には本質的に文脈指  
示用法が確認できず、文脈指示用法と見られるものもこの記憶指示用法であるとする。

(23) きのう、山田さんに会いました。あの人、変わった人ですね。(金水 1999、p.72)

実際に、表1の用例中のア系指示詞の8例を見たところ、文脈上に先行詞が出現してい  
るとはいえ以下のようにすべてが記憶内の要素を指示していると判断できるものであった。  
(24)の例では「彼が胸をドーンとたたいてなにか言った(という記憶)」、(25)の例では「(記  
憶の中の)誰か」を同時に参照していると考えられる。

(24) (「何かーあれ」)彼は胸をドーンとたたいてなにか言ったんですけど、あれは任し  
ておけて言ったんでしょうね。

(安野光雅『空想書房』:LBg9\_00162,50950)

(25) (「誰かーあの」)誰かを好きになったら、「あの人は今、何をしているのかしら。

(山田邦子『邦子の「しあわせ」哲学』:PB37\_00019,36350)

続いて、コ系指示詞の例を確認する。まず表 1 で取り出した不定語と指示詞が同一の事物を指している用例 20 例のうち 15 例<sup>10</sup>は(26)のように発話された現実世界の外的な場面にある対象を指している現場指示用法の例と考えられる。

(26) (「何かーこれ」) マリアは机の上に置いてある箱から、何かを取りだした。「これ、  
持っておきなさい」 (落合ゆかり『黄昏の放課後』: LBn9\_00156,28570)

残りの 5 例のうち 1 例は(27)であり、先行詞も照応詞も不定語である「なにか」である。この例は、形態的に一致しているために照応関係にあると考えられ、つまりコ系指示詞と先行詞が照応関係にあるわけではないと考えられる。

(27) (「何かーこの」) なにかを求めてーこのなにかには、なにを代入してもいい。

(白田雅之・高橋満『日本とインド交流の歴史』: LBh3\_00062,23100)

以上で見てきた用例以外の残り 4 例<sup>11</sup>について、以下にすべての例を示す。項目としてはすべて「何かーこれ」の例である。(28)の例を観察すると、不定語である先行詞「何か」をコ系指示詞で照応しているというよりかは、前文脈の内容全体を指していると考えられる。

(28) a. 大家さんが我々を集めて何か言うとなれば、これはどう考えても月々のものの  
ことだと思う (清水義範『実業之日本社』: LBi9\_00083,54650)

b. ドイツ人管理職が何か提案する。これが日本人社員にとっては、実情にあわないようにみえたり、意図がよくわからない。

(大島慎子『ドイツおいしい物語』: LBk3\_00077,18370)

c. アウトバーンのモーベン・ビックというチェーン店で何か喰う羽目になる。ところが、これがそれほど悪くもないのだから困るんじや。

(島村菜津『スローフードな人生!』: LBr5\_00046,20470)

d. ニーチェの言葉をここでいくつか追加して引用しておこう。『何かを烙きつけるとするのは、これを記憶に残すためである。苦痛を与えてやまないものだけが記憶に残る』 (清真人『《想像の人間》としてのニーチェ』: PB51\_00117,47950)

(12)の予測に照らして考えると、一見(28)の 4 例は予測の反例であるかのように思えるが、これらの例において指示詞の照応先は不定語そのものではなく「大家さんが我々を集めて何か言う(こと)」や「ドイツ人管理職が何か提案する(こと)」、「アウトバーンのモーベン・ビックというチェーン店で何か喰う羽目になる(こと)」、「何かを烙きつけるという(こと)」であると見ることができる。つまり、先行詞となる事態に不定語が含まれているが、不定語

---

<sup>10</sup> 以下の 1 例は、用例(20)のように視点の異なりが見られないため現場指示と文脈指示の判断がつきにくい用例であったが、その場面に「ノアがこっちを向いて言ったこと(音声)」は存在していると考えられるため現場指示と判断した。

(i) ノアがこっちを向いて何か言った。ヌオンが英語でこれを通訳した。

(船戸与一『週刊文春』: PM21\_00494,8170)

<sup>11</sup> (28d)の例は翻訳文相当であり、コ系指示詞「これ」を許容しない母語話者も確認できた。

という名詞句自体と照応関係にあるということではないためコ系指示詞の使用も可能となると考えられる。

#### 4. おわりに

以上の調査結果から、不定語と照応関係にある指示詞は原則ソ系であった。また、極めてまれに不定語がコ系指示詞で照応されている例も見つかったが、それらは不定語を直接照応しているわけではないためコ系も使用可能になっていると考えられる。

以上から、不定語を指示する指示詞はソ系であるという実態が明らかになった。この結果は、本論の予測が妥当であることを示す。

(29) 不定語と指示詞が照応関係にあるとき、その指示詞はソ系指示詞である。

さらに、この結果は(循環的にはなるが)堤(2012)の仮説の傍証ともなる。また、不定語の側から見れば、本論は不定語の特徴の一端を明らかにした記述ともいえる。尾上(1983)は不定語「何か」を「名詞相当になりおせている」(p.415)と述べているが、本論で指示詞の文脈指示用法において先行詞となる場合はソ系指示詞でのみ指示されることがわかった。少数の例外も存在するが、この結果は不定語が一般的な名詞句とは異なる名詞句であることを示唆している。つまり、不明確項指示用法の不定語は、基本的に変項を含む名詞句として解釈されるものであり、このこともまた、本研究によって改めて検証されたことになる。

#### 調査対象

国立国語研究所(2025)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03)<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>(2025年7月22日確認)

#### 参考文献

- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版。  
岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房。  
尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』pp.404-431, 明治書院。  
金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4), pp.67-91。  
佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法(改訂版)』厚生閣。  
田窪行則(2010)『日本語の構造』くろしお出版。  
高橋太郎(1956)「場面」と「場」『国語国文』25(9), pp.53-61。  
堤良一(2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版。  
藤本真理子(2021)「日本語指示詞の指示の変容－聞き手の存在と結びついた「そ」－」野田尚史・小田勝編『日本語の歴史的対照文法』pp.137-156, 和泉書院。  
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版。  
三上章(1955)『現代語法新説』刀江書院。  
森山卓郎(1998)「例示の副助詞「でも」と文末制約」『日本語科学』pp.86-100。

# 結果相を表すテアル文における動作主 —動作主不在説の検討—

新山聖也（筑波大学非常勤研究員）

## 1. はじめに

### 1.1 本発表の概要

テアル文には、(1a) のように、他動詞の目的語がガ格で標示されるパターンが存在する。そして、(1a) のようなテアル文の分析においては、見えない動作主（ゼロの動作主）が存在するものとして扱う影山（1996）や竹沢（2000）、Miyagawa and Babyonyshev（2004）等の立場（動作主存在説）と、動作主が存在しないものとして扱う近藤（2018）や漆原（2021）等の立場（動作主不在説）が存在する<sup>1</sup>。

- (1) a. 窓が開けてある。
- b. 太郎が窓を開けてある。

この発表では、動作主の有無について明示的に議論している影山（1996）と近藤（2018）を取り上げ、(1a) のようなテアル文における動作主の有無について論じる。特に、影山（1996）に対する近藤（2018）の反論を検討し、近藤（2018）の主張する動作主不在説が支持されないことを主張する。

### 1.2 本発表の目的

本発表の目的は、テアル文における動作主の有無を明らかにすることで、結果相と動作主の関係を整理することである。新山（2025）は、(2) のような、結果相の「{可能／受動} + テイル」において、動作主の顕在化は抑制されるが、ゼロの動作主が存在するという趣旨の議論を行っている。

- (2) a. 歯が丁寧に磨けている。 (新山 2025: 80)
- b. 着物が雑に畳まれている。 (新山 2025: 83)

テアル文の動作主不在説が正しいとすれば、あくまで新山（2025）の議論は、結果相のテイル文と動作主の関係を整理したに過ぎないことになる。一方、動作主存在説が正しいとすれば、結果相のテイル文とテアル文において、「結果相の文において、顕在的には生起できない動作主が統語構造上で存在している」という一般化が成り立つことになる。

本発表は生成統語論の枠組みから議論を行う。ただし、本発表の議論は、「結果相の文において動作主はどの程度背景化されるのか」という形で言い換えることもでき、特定の理論的立場に貢献することよりも、動作主と結果相の関係を捉えることに主眼を置く。

<sup>1</sup> ただし、漆原（2021）は、テアル文に動作主が生起しないことを根拠として、i のような例文を提示しており、見えない動作主の有無について議論する影山（1996）や近藤（2018）と前提を共有しているわけではない。

- i a. 車が太郎によって駐車場に止められる。
- b. \*車が太郎によって駐車場に止めてある。 (漆原 2021 : 251)

## 2. 動作主存在説の概要

2 節では、動作主存在説を概観する。まず、影山（1996）は、脱使役化自動詞との比較において、テアル文における動作主の有無について論じている。脱使役化自動詞とは、意味的には動作主が存在が想定されるが、統語構造には動作主が生起しない自動詞を指す。

(3) および (4) のように、テアル文と脱使役化自動詞では、「わざと」や「～ために」、「丁寧に」のような動作主指向副詞との共起に差が見られる。

- (3) a. 廃屋に見せるために、わざと窓が壊してある。  
b. 箱に品物がていねいに詰めてある。  
c. プライバシーを守るために、意図的に名前が隠してある。
- (4) a. \*わざと、壁にグロテスクな絵が掛かっている。  
b. \*プライバシーを守るために、生け垣が植わっている。  
c. \*箱にていねいに品物が詰まっている。 (影山 1996 : 187)

影山（1996）はこの観察を根拠として、テアル文には統語構造上に動作主が存在する一方で、脱使役化自動詞には統語構造上に動作主が存在しないものと主張している。

竹沢（2000）や Miyagawa and Babyonyshev（2004）も、直接的に影山（1996）の議論を参照しているわけではないが、統語構造上に他動詞の外項（動作主）である PRO が生起する構造を仮定しており、動作主が存在することを前提とする立場を取っている。ここでは、Miyagawa and Babyonyshev（2004）の提案する統語構造を (5) に示す。(5a) は、「窓が開けてある」、(5b) は「太郎が窓を開けてある」の構造である。(5a) においては、他動詞「開ける」の統語構造に外項（動作主）と内項（対象）が生起し、外項はゼロ代名詞である PRO として生起するものと仮定されている<sup>2</sup>。

- (5) a. [TP [VP[IP 窓<sub>i</sub>-ガ [IP PRO<sub>j</sub> [VP t<sub>j</sub> [VP t<sub>i</sub> 開けテ]v]I]]アル]T]  
b. [TP 太郎<sub>j</sub>-ガ [VP[TP t<sub>j</sub> [VP t<sub>j</sub> [VP 窓-ヲ 開けテ]v]T]アル]T]

(Miyagawa and Babyonyshev 2004 : 163 一部改変)

## 3. 動作主不在説の概要

### 3.1 場面描写性による分類

続いて、3 節では、動作主不在説の立場を取る近藤（2018）の議論を概観する。

前提として、益岡（1984, 1987）では (6a) のようなテアル文を A 型、(6b) のようなテアル文を B 型と呼ぶ。A 型テアル文は他動詞の目的語が主語となるパターンで、受動型とされる。B 型テアル文は、動作主がそのまま主語となるパターンで、能動型とされる。

- (6) a. 崩した古材や板が積み上げてあった。(松本清張『投影』)

<sup>2</sup> なお、(5a) の構造においては、内項が TP まで上昇しない構造が仮定されている。これは、i のように、内項が主語となるテアル文において、内項が自分と同一指示関係を持ってない（内項が主語性を十分に持たない）という観察を反映したものである。

i \*花子<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の先生に紹介してある。(Miyagawa and Babyonyshev 2004 : 172)

b. 水曜日はお勤めが休みだと聞いたから、私は一日中、身を明けてあるのだよ。(柴田翔「立ち盡す明日」)(益岡 1984 : 123 下線は発表者による)

また、益岡は A 型テアル文を「場面描写文(場面描写表現)」であると述べている。近藤(2018)は、これを踏まえ、場面描写性によって A 型テアル文と B 型テアル文を分類することを提案している。近藤(2018)は場面描写性を(7)のように定義している。

- (7) 場面描写とは、ある時間・空間における場面を五感でとらえたままに言語化することである。(近藤 2018 : 12)

場面描写性による分類の意義は、(8)と(9)の違いを捉えられる点にある。(8)と(9)は、いずれも、内項がガ格で標示されるが、(8)のように場面描写性を持つテアル文は A 型テアル文、(9)のように場面描写性を持たないテアル文は、B 型テアル文に分類される。

- (8) a. 壁に絵がかけてある。(A 型)  
 b. 窓が開けてある。(A 型) (近藤 2018 : 7)
- (9) a. ベストメンバーが選んである。(B 型)  
 b. 予定が組んである。(B 型) (近藤 2018 : 7)

近藤(2018)は、先行文脈の情報をできるだけ排除した「青天の霹靂文脈」によるテストを用いて、場面描写性の有無を測っている。具体的には、(10)のように「あなたが今いる場所の様子を教えてください」という質問の返答として適切となる文が A 型テアル文、不適切になるものが B 型テアル文とされている。

- (10) 「あなたが今いる場所の様子を教えてください」という質問の返答として

#### A 型テアル文

- a. 壁にピカソの絵がかけてある。  
 b. (この寒いのに) 窓が開けてある。

#### B 型テアル文

- c. #壁にピカソの絵をかけてある。  
 d. #机の上にプレゼントを置いてある。  
 e. #電気屋に修理が頼んである。  
 f. #専門家が雇ってある。(近藤 2018 : 18-19 抜粋)

近藤(2018)では、A 型テアル文と B 型テアル文の違いが、テアル文の意味解釈とも関係しているものとされている。すなわち、(10a,b)の A 型テアル文は結果状態を表す継続相(結果相)を表し、(10c-f)は効力の持続を表すパーフェクト相を表すものとされる。

### 3.2 A 型テアル文と B 型テアル文の統語構造と動作主の有無

以上を踏まえ、近藤(2018)は、A 型テアル文と B 型テアル文が、異なる統語構造を持つと主張している。(11)に、近藤(2018)の提案する統語構造を示す。(11)では、動詞の構造として内項が生起する VP と外項が生起する vP を仮定し、「動詞+テアル」において動詞とアルがそれぞれ VP と vP (v<sub>asp</sub>P) を派生するという補文構造が想定されている。B 型テアル文における内項の格標示としてガとヲの両方が想定されていることから、近藤

(2018) では、格標示ではなく、場面描写性の違いを捉えることを重視している<sup>3</sup>。

(11) a. A 型テアル文

[TP[<sub>vasp</sub>P[VP[VP 窓-ガ 開けテ]ar] <sub>vasp</sub>]u]

b. B 型テアル文

[TP[<sub>vasp</sub>P[VP[VP {太郎-ガ/pro} [VP 窓- {ヲ/ガ} 開けテ]v]ar] <sub>vasp</sub>]u]

(近藤 2018 : 113-115 を参照して作成)

本発表において重要な点は、A 型テアル文には他動詞の動作主が統語構造上に存在しないものとしているのに対し、B 型テアル文には他動詞の動作主が存在する点である。この点について、近藤 (2018) は、テアル文に動作主が存在すると主張する影山 (1996) に対する反論を行っている。根拠としては、「青天の霹靂文脈」テストにおいて (12) のような動作主指向副詞と共起するテアル文が成立しないという観察が提示されている。

(12) (あなたの居る場所の様子を教えてください。)

- a. #部屋にアクセントをつけるため、壁に絵がかけてある。
- b. #空気を入れ替えるため、窓が開けてある。
- c. #わざと壁にグロテスクな絵が掛けてある。

(近藤 2018 : 105)

つまり、近藤 (2018) は、動作主指向副詞が共起するテアル文はパーフェクト相を表す B 型テアル文であるため、A 型テアル文には動作主が存在しないと論じている。近藤 (2018) におけるテアル文の分類は、表 1 のようにまとめられる。

表 1 近藤 (2018) におけるテアル文の分類

	意味	場面描写性の有無	動作主の有無
A 型テアル文	結果状態を表す継続相 (結果相)	場面描写性あり	動作主が存在しない
B 型テアル文	効力の持続を表すパーフェクト相	場面描写性なし	動作主が存在する

<sup>3</sup> (11) の構造の根拠として、近藤 (2018) は尊敬語化に基づく主語性の問題も議論している。B 型テアル文においては、尊敬語化が可能であり、ii a では動作主である社長が、ii b では見えない動作主が、それぞれ敬意の対象となる。よって、B 型テアル文においては、動作主が顕在的に存在する場合も、見えない場合も、動作主が主語であるとみなされる。

一方、i の A 型テアル文においてはそもそも尊敬語化が不可能であり、他動詞の目的語は敬意の対象とならず、ゼロの動作主が敬意の対象となることもできない。このように、近藤 (2018) は、尊敬語化に関する観察から、A 型テアル文が主語を持たない文であると主張する。

- i
  - a. \*椅子に先生が縛りつけておありになる。
  - b. \*社長が閉じ込めておありになる。
- ii
  - a. 社長が会長を呼んでおありになる。
  - b. 会長が呼んでおありになる。

(近藤 2018 : 74-75)

本発表では、このような違いを、結果状態から過程が逆算可能であるか否かに由来するものとする (5 節参照)。すなわち、結果状態から、動作主が敬意の対象であるかを判別できないため、A 型テアル文が不自然になるものとする。なお、テアル文の主語性に関しては、Miyagawa and Babyonyshev (2004) にも議論がある。



#### 4. 動作主不在説の批判的検討

4 節では、以上のような近藤（2018）の主張が持つ問題点について検討を行う。

##### 4.1 動作主指向副詞の生起可能性

4.1 節では、動作主指向副詞の生起可能性について再検証を行う。前提として、近藤（2018）の指摘する通り、「わざと」などの副詞と共起するテアル文は、「青天の霹靂文脈」においては不適格である。しかし、影山（1996）においては、動作主指向副詞として、様態副詞である「丁寧に」等も取り上げられていた。更に、(13) のように、「器用に」「雑に」「乱暴に」なども動作主指向副詞であると考えられる。このように、近藤（2018）の事実観察は、動作主指向副詞の中での一部に限られており、問題がある。

- (13) a. 子供がおもちゃを {丁寧に/器用に/雑に/乱暴に} 箱に入れた。  
b. おもちゃが {\*丁寧に/\*器用に/\*雑に/\*乱暴に} 箱に入っている。

まず、(14) のように、「丁寧に」や「雑に」等の動作主指向副詞は「青天の霹靂文脈」であっても生起可能である。近藤（2018）の議論に従うのであれば、「青天の霹靂文脈」において成立するテアル文は、A 型テアル文と認定することが可能であり、A 型テアル文にも動作主指向副詞が生起可能であることがわかる。

- (14) 「あなたが今いる場所の様子を教えてください」という質問の返答として  
a. 皿の上に料理が丁寧に盛り付けてある。  
b. 機材のケーブルが器用にまとめている。  
c. 本棚に雑誌類が雑に押し込んである。  
d. 引き出しの中に書類が乱暴に突っ込んである。

次に、近藤（2018）では取り上げられていないが、知覚動詞の補部への生起も、近藤（2018）の認定する A 型テアル文か否かを測るテストになる。上山（2007）では、知覚動詞の補部には、現象描写文（description）しか生起できないとされている。現象描写文は「ある時間・空間における場面を五感でとらえたままに言語化する」点で場面描写性を持ち、知覚動詞の補部に生起するテアル文は、A 型テアル文と認定できる<sup>4</sup>。(15) のように「丁寧に」等の様態を表す動作主指向副詞と共起するテアル文は知覚動詞の補部に生起可能である。このような観察も、A 型テアル文に動作主指向副詞が生起できることを示しており、A 型テアル文に動作主が存在する可能性を示唆する。

- (15) a. [皿の上に料理が丁寧に盛り付けてある]のを見かけた。

<sup>4</sup> 近藤（2018）は、A 型テアル文を「場面描写文」ととし、現象描写文とは区別している。実際、A 型テアル文は i のように有題文として生起可能であることから、無題文であることを前提とする現象描写文とは認定されないものもある。

i 床の間には花が飾ってある。（近藤 2018 : 16）

このように、場面描写文は現象描写文より広い範囲を表している。逆に言えば、少なくとも現象描写文である場合には、場面描写文であるという関係が成立する。

- b. [機材のケーブルが器用にまとめてあるの]を見かけた。
- c. [本棚に雑誌類が雑に押し込んであるの]を見かけた。
- d. [引き出しの中に書類が乱暴に突っ込んであるの]を見かけた。

最後に、実例を確認する。(16) は食ブログのレビュー、(17) は Twitter (現 X) のポストである。いずれも、投稿に写真が添付されており、写真に映った様子を描写する文である。そして、いずれも「丁寧に」や「雑に」という動作主指向副詞と共起している。

(16) 1～2 分で到着。早い！白ごはん、漬物、冷奴、味噌汁。中皿にハンバーグ、サラダ、フライドポテト、ソーセージが丁寧に盛り付けてある<sup>5</sup>。

(17) ローソン 100 の新作おにぎり、もはや「おにぎり」とすら書いてなくて最高ナゲットのようなものが米の中に雑に押し込んである<sup>6</sup>

近藤 (2018) では、A 型テアル文が動作主指向副詞と共起できないことを根拠に、A 型テアル文には動作主が存在しないと主張されていた。一方、以上の事実観察から、A 型テアル文であっても動作主指向副詞と共起可能であることがわかる。よって、近藤 (2018) の認定する A 型テアル文の統語構造にも、動作主は存在するものと考えられる。

#### 4.2 テアル文の意味と動作主指向副詞の共起

また、表 1 にまとめた通り、A 型テアル文は結果相を表し、B 型テアル文はパーフェクト相を表す。この事実は、(18) のように、共起可能な時間副詞から確認できる。つまり、(18a) のように、パーフェクト相を表す B 型テアル文においては主節がル形であっても過去の副詞と共起可能であるが、結果相を表す A 型テアル文においては過去の副詞とは共起できず、現在の副詞とのみ共起可能である。この事実は、A 型テアル文が現在の結果状態を表すのに対し、B 型テアル文がパーフェクトを表すことを示している<sup>7</sup>。

- (18) a. 昨日論文を送ってある。(B 型)
- b. \*サイドボードの上に昨日人形が飾ってある。(A 型)
- c. サイドボードの上にいま人形が飾ってある。(A 型) (近藤 2018 : 26)

表 1 を踏まえると、動作主指向副詞と共起するテアル文が B 型テアル文であるという近藤 (2018) の主張は、動作主指向副詞と共起するテアル文がパーフェクト相を表すという帰結をもたらす。しかしながら、テアル文が「～ために」や「わざと」と共起したとしても、共起できる時間副詞は特に変化しない。

- (19) a. 空気を入れ替えるため、{いま/\*昨日} 窓が開けてある。
- b. {いま/\*昨日} わざと壁にグロテスクな絵が掛けてある。

以上の観察から、動作主指向副詞と共起するテアル文が、パーフェクト相であるとは考

<sup>5</sup> <https://tabelog.com/osaka/A2701/A270407/27053988/dtlrvwlst/B491658498/>

(2025 年 10 月 10 日最終閲覧)

<sup>6</sup> <https://x.com/xxxlililxxx/status/971191870742085632> (2025 年 10 月 10 日最終閲覧)

<sup>7</sup> 益岡 (1984) では、過去の副詞の生起に関して、B 型の下位分類である B<sub>1</sub> 型と B<sub>2</sub> 型で差が見られることを指摘している。よって、B 型の振る舞いも一様であるとは言えない。

えにくい。よって、やはり、動作主指向副詞の有無は、近藤（2018）の認定する A 型テアル文と B 型テアル文の分類とは、無関係であると考えられる。つまり、A 型テアル文であっても、動作主指向副詞とは共起可能であり、動作主が統語構造上に存在することになる。

## 5. 結果状態と過程

では、「わざと」という動作主指向副詞が「青天の霹靂文脈」とはなじまないという近藤（2018）の観察は、何を捉えたものだったのだろうか。本発表では、結果状態から過程が逆算可能であるか否かという違いを捉えていたものだと考える。つまり、「わざと」や「～ために」という動作主の意図が、結果状態をみただけでは逆算できないため、「青天の霹靂文脈」とはなじまなかったのだろう<sup>8</sup>。一方、「丁寧に」「器用に」「乱暴に」「雑に」のような動作主指向副詞は仁田（2002）において様態の副詞と分類される副詞群であり、結果は含意されないが、結果から様態が連想されやすい。この違いが、「青天の霹靂文脈」となじまない「わざと」等と「青天の霹靂文脈」に生起可能な「丁寧に」の違いであると考えられる。

結果表現の選択について実験を行った副島（2024）では、テアル文は特に変化の過程を意識する場合に用いられるとされる。また、渡辺（2023）では、存在表現の選択において、テアル文の選択には意志性が関与するとされる。これらの議論を総合すると、結果相を表すテアル文は、結果状態を述べるとともに、結果状態が成立する過程や動作主の関与を述べる文であると言えるだろう<sup>9</sup>。よって、基本的には、テアル文が結果相を表す場合も、動作主の存在は意識され、統語構造上にも動作主が存在するものと考えられる。

## 6. まとめ

本発表では、動作主不在説の妥当性について検討し、(20a) の主張を行った。すなわち、影山（1996）や竹沢（2000）、Miyagawa and Babyonyshev（2004）において想定されているように、結果相を表すテアル文にも、動作主は存在すると考えられる。

そして、新山（2025）の議論と (20a) の議論を踏まえると、(20b) のような一般化が可能となる。(20b) は、「{可能/受動} + テイル」においても顕在的な動作主が抑制されるものの、動作主指向副詞との共起可能であることを踏まえた結論である。

- (20) a. 結果相を表すテアル文も含めて、テアル文の統語構造上に動作主が存在すると捉える動作主存在説の立場が妥当である。

<sup>8</sup> 森山卓郎氏から、「絵がわざと斜めにかけてある」のような文であれば、「青天の霹靂文脈」であっても成立するのではないかと指摘を受けた。この場合は、「斜めにかかった絵」という情報から、意図が読み取りやすくなった結果、「わざと」が使えるようになったと考えられる。

<sup>9</sup> 副島（2024）では、変化の過程を意識しない場合には、サレテイルや「自動詞+テイル」が用いられやすいと述べられている。

- b. 結果相を表す文において、顕在的な動作主は生起できないが、見えない動作主が統語構造上に存在する。

## 参考文献

- 上山あゆみ（2007）「文の構造と判断論」長谷川信子（編）『日本語の主文現象』 pp.113-144, ひつじ書房.
- 漆原朗子（2021）「「テアル構文」とその周辺に関する覚書」岡部玲子・八島純・窪田悠介・磯野達也（編）『言語研究の楽しさと楽しみ』 pp.243-254, 開拓社.
- 影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版.
- 近藤かをり（2018）『テアル構文の統合的研究：主語性、格配列、および文法化をめぐる』南山大学博士論文.
- 副島健作（2024）「音声言語における結果表現の使い分け：過程の知覚はどう影響するか」『社会言語科学』 27-1, pp.127-142.
- 竹沢幸一（2000）「アルの統語的二面性：be/have との比較に基づく日本語のいくつかの構文の統語的解体の試み」『東アジア言語文化の統合的研究 平成 9-11 年度筑波大学学内プロジェクト報告書』 pp.76-100.
- 新山聖也（2025）「現代標準語における統語的逆使役と結果相」『日本語文法』 25-1, pp.71-87.
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 益岡隆志（1984）「「-てある」構文の文法」『言語研究』 86, pp.122-138.
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版.
- 渡辺誠治（2023）『現代日本語の存在を表す諸表現：「アル」「イル」「テイル」「テアル」』日中言語文化出版社.
- Miyagawa, Shigeru and Maria Babyonyshev（2004）The EPP, unaccusativity, and the resultative constructions in Japanese, *Scientific Approaches to Language*. 3, pp.159-185.

## 「さすがに」の意味・機能の細分化について

周 世超（三重大大学特任講師）

### 1 はじめに

評価の副詞「さすが」には、「さすが」「さすがに」「さすがは」「さすがの」「さすがだ」の五つの形式が見られる。「さすが」「さすがは」「さすがだ」は、いずれもおおむね肯定的な評価を示す。一方、「さすがの」には、「さすがの一手」のように行動の評価を表す用法と、「さすがの私も疲れた」のように能力の限界を表す用法がある。「さすがに」は、「さすがにないと思う」「さすがに頭がいい」「さすがに疲れた」「さすがに寒い」など、さまざまな文脈で用いられ、その意味と機能はさきわめて多様である。従来の研究では、こうした多様性を一括して論じる傾向が見られる。本発表では、「さすがに」を研究対象として位置づけ、BCCWJ および朝日新聞クロスサーチから抽出した実例をもとに、「さすがに」が担う意味的・機能的差異を精査し、その用法を体系的に整理することを目的とする。

### 2 先行研究の問題点と本発表の立場

「さすがに」に関する研究は、渡辺(1997)、周(2017, 2019, 2023)などが挙げられる。渡辺(1997)では、現代語における「さすが」の基本的用法を、(一)「A はさすがに a だ」、(二)「A も B にはさすがに  $\bar{a}(b)$  だ」、(三)「さすがの A も B には  $\bar{a}(b)$  だ」の三つに整理している。このうちモデル(三)は「さすがの」のみを対象とするものであり、それ以外の表現は区別されず、「さすがに」も(一)と(二)に含まれる。アルファベットの対応関係で示すと、A は一定の素質や力量を備え、その結果として a という状態に至る。B は A に対抗する状況を表し、b はその素質・力量に基づく当然の帰結である。

渡辺(1997)に基づけば、「さすがに」には主として二つの用法がある。第一は、素質や力量の持ち主が、その能力にふさわしい結果を示す場合である。例えば、「彼は経験豊富な医者だけあって、さすがに判断が早い」のように、A(彼)の力量に基づき、予想どおり a(判断が早い)であることを示す。第二は、素質や力量の持ち主であっても、ある相手や状況に及ばない場合である。例えば、「彼もさすがに疲れには勝てなかった」のように、A(彼)の高い能力を前提としつつ、B(疲れ)に及ばず  $\bar{a}$ (勝てなかった)という結果に至ることを表す。たしかに「さすがに」には、ある素質や力量に基づく当然の帰結という意味が含まれており、その結果は概ね、(1) 順当に実現した場合と(2) そうでない場合とに大別できる。しかし、近年の用例には、渡辺(1997)の示した二分法では捉えきれないものも見られる。

- (1) プロアマ名人戦では4年前、昨年と2度対戦し、いずれもやられた。さすがに3連敗となると、ゆゆしき事態だ。名人は立ち上がりからアグレッシブにいった。(朝日夕刊「芝野名人、過激に仕掛け連敗止めた 逆コミのハンディ克服、三度目の正直 第17回プロアマ囲碁名人戦」2024年03月25日)
- (2) ただ、もし外資企業の傘下に入れば、従業員の雇用や取引先など広い範囲で影響が出る可能性がある。「日本の小売りトップの企業であり、さすがに拒否するのではないか」(金融関係者)との見方も強い。(朝日 2024年08月21日)

例(1)(2)には、「当然の帰結」と呼べる結果は存在しない。例(1)は「～となると」という今後の事態を前提とした推量的用法であり、例(2)は「～ではないか」という発話者の予測を示している。このことから、「さすがに」の現代的用法には、従来の「当然の帰結」には収

まりきらない多様な機能が見られ、新たな下位分類による再整理が求められる。

また、発表者自身も周（2017, 2019, 2023）において、「さすがに」について継続的に検討を行ってきた。周（2017）では、「さすが」の諸表現を単文と複文に分け、それぞれにおいてどのような形式で現れるのかを明らかにし、さらに各場合における評価性の在り方を考察している。

さらに、周（2019）は、「さすが」と「さすがに」の役割分担に着目し、「さすが」を肯定的評価を示す形式として位置づける一方、「さすがに」を「予想通り」の意味を表すものとして整理している。このような整理は、両者を区別するうえで有効であるが、「さすがに」にも評価的な用法が存在することは、以下の用例から確認できる。

(3) 卓球はクロスに打つ方が簡単で、反射的にクロスを使いたくなるもの。徹底してストレートを打てた2人は、さすがにレベルが高い。(朝日 2024 年 08 月 13 日)

(4) さすがに環境関係の担当課だけあって、みんな生き物を見つける目が鋭い。(朝日 2024 年 10 月 24 日)

例(3)(4)の場合、「さすがに」は「レベルが高い」「目が鋭い」といった評価的形容詞と結びつき、話者が自身の経験に基づいて対象を評価していると考えられる。そのため、これらの用例を単に「予想通り」を表すものとみなすことは認めがたい。

さらに、周（2023）は、動詞述語を修飾する場合の「さすがに」について、修飾される動詞の特徴に基づき、その使用条件を検討している。その結果、「さすがに」が文脈において「対立」を要請する傾向をもつことを指摘し、これにより「さすがに」の核心的意味は「対立」にあると述べている。ただし、具体的な意味の区分については言及されていない。

以上のように、これまでの研究はいずれも示唆に富むものであるが、実際の使用例を精査すると、渡辺（1997）のいう「当然の帰結」、周（2019）のいう「予想通り」、あるいは周（2023）のいう「対立」だけでは十分に説明しきれない意味的差異が確認される。

そこで本発表では、BCCWJ および朝日新聞クロスサーチから抽出した「さすがに」の用例<sup>1</sup>を対象とし、その意味を「予想」「評価」「対立」などの要素を含むものと捉える。具体的な文脈においては、これら複数の意味のうち、ある特定の意味が前景化し、他の意味が背景化すると考えられる。本発表では、用例観察の結果に基づき、帰結用法、評価用法、判断用法、予測用法、対比用法の五つに細分化して捉えることを提案する。以下では、それぞれの意味用法について検討する。

### 3 帰結用法

本発表でいう「帰結用法」とは、「予想どおりの結果となった」という状況によって生じた変化を表すものである<sup>2</sup>。そして「さすがに」の帰結用法は、心理の帰結、行動の帰結、状況の帰結と自然の帰結の四つに分けられる。

まず、感情動詞、感覚動詞、思考動詞の過去形と意味関係を結んでいる場合、心理の帰結を表している。下記の例(5)～(8)はその裏付けである。

(5) 真夜中過ぎ、道路に立って部屋を見上げていた男と目が合ったときには、さすがに泣きそうになりました、と恵里は言った。(三雲岳斗『少女ノイズ』2007<sup>3</sup>)

<sup>1</sup> 本発表は、BCCWJ から抽出した 3,070 例、朝日新聞（2015 年から 2024 年）の 10 年間にわたる 2,747 例、発表者独自に収集した 5,138 例、合計 10,955 例を研究対象とする。

<sup>2</sup> 「帰結用法」とは、渡辺（1997）の考察から「帰結」という語を借用したものであり、周（2019）でいう「予想どおり」を反映した用法である。

<sup>3</sup> 本発表における用例の出典は、現代日本語書き言葉均衡コーパスから抽出したものについては「BCCWJ

- (6) 7月には、再び左上腕を骨折。さすがにへこみました。(朝日 2024 年 11 月 13 日)  
(7) いっしょうけんめい走ったので、さすがにつかれた。(BCCWJ 書籍)  
(8) AI (人工知能) を巡る議論がかまびすしい。さすがに冷や水を浴びせたくなくなってきた。(朝日 2024 年 01 月 13 日)

例(5)～(8)の場合、「さすがに」はいずれも心理的变化を表す述語と結びついている。例(5)の「泣きそうになりました」は驚きや恐怖といった感情の表出、例(6)の「へこみました」は落胆という感情の表出を示す。例(7)の「つかれた」は身体的感覚の変化を通じた心理的变化を表し、例(8)の「冷や水を浴びせたくなくなってきた」は思考動詞に近い形で心情の変化を示している。これらはいずれも、状況の推移に伴って予想どおりの心理的变化が生じたことを表しており、「さすがに」が心理の帰結を示す用法である。

また、「さすがに」が動作動詞と結びつく場合には、行動の帰結<sup>4</sup>を表す。

- (9) 「小学校を出たらすぐ入門する」と言い出したときは、さすがに祖父が止めたという。(朝日 2024 年 02 月 01 日)  
(10) 続いて頭、胸、股間と、当て身と蹴りを続けざまに繰り出した。さすがに奥田も後退する。(三好京三『琥珀の技 三船十段物語』1985)  
(11) 地元で生まれ育ったリウカ・ザフィアさん(71)は「私は孫もいるおばあちゃん。マッチングアプリはさすがに使っていない」と笑う一方、「若いときは紙の地図を見て運転していた。伝統的な生活に戻っただけよ」と話す。(朝日新聞 2024 年 10 月 03 日)  
(12) さすがに他人の撮影現場には割り込まないですけどね」(朝日 2024 年 11 月 29 日)

例(9)～(12)の場合、「さすがに」は動作動詞と意味関係を結んでいる。例(9)(10)は、それぞれ「止める」「後退する」という予測された行動が実際に行われたことを示しており、行動の帰結を表す。一方、例(11)(12)はそれぞれ「使っていない」「割り込まない」という予測された行動をあえて取らなかったことを示しており、行動抑制の帰結を表している。

さらに、「さすがに」は状況の帰結を表す場合もある。状況の帰結とは、具体的な心理変化や動作の発生を伴わず、状況全体が予想通りの変化を遂げたことを示すものである。

- (13) 駅周辺はイベントで終日にぎわった。(中略) 一方、農地に囲まれた同駅には課題もある。タクシー運転手の男性は「今日はさすがに人がいるが、なにせ田舎のことなので……」。(朝日朝刊 2024 年 03 月 17 日)  
(14) 開幕まで500日を切った昨年11月末ごろから、各国もさすがに煮詰まってきた。(朝日 2024 年 04 月 13 日)  
(15) さすがに、その後、自民内でも慎重論が相次ぎ、反対会派も含めた「全会派の参加」をめざす方向に転じたようだが、「改憲ありき」で突き進めば禍根を残すだけだろう。(朝日 2024 年 06 月 12 日)

例(13)～(15)の場合、「さすがに」は状況の帰結を表している。例(13)では、イベントが開催されているため駅周辺に人がいるという、状況として当然の変化が述べられており、例(14)では、万博の開幕が近づいているため各国の準備が「煮詰まってきた」という予想どおりの進展が示されている。さらに、例(15)では、情勢の変化を受けて自民党内で慎重論が相次ぎ方向転換したという、政治的状況の自然な推移が表されている。これらはいずれも、主体の動作や感情ではなく、状況全体の変化を描く点で「状況の帰結」を示す用法である。

書籍」と表記し、発表者が独自に収集したものについては、作者名・書籍名・年代を明記する。

<sup>4</sup> 本発表でいう行動の帰結とは、予測された行動が実際に行われた場合、あるいは行われなかった場合を指す。

さらに、自然現象を表す動詞と意味関係を結ぶ場合、「さすがに」は自然の帰結を表す。この用法では、人間の意志や感情とは無関係に、時間の経過や季節の移り変わりなどによって生じる自然な変化が、予測どおりの結果として描かれる。

(16) 立冬を過ぎて、さすがに朝晩は冷え込んできた。空も澄んできた。(朝日 2024 年 11 月 19 日)

(17) 十一月も半ばになって、さすがに蝶や蜻蛉を見かけることが少なくなってきた。(朝日 2024 年 11 月 12 日)

(18) 「さすがに千年前の式部の建物は残っていません。でも、当時の空気感があります」と執事長の町田亨宣さん(46)は話す。(朝日朝刊 2024 年 10 月 19 日)

例(16)では、立冬を過ぎたために朝晩が冷え込んできたという季節的变化が述べられ、例(17)では、十一月も半ばになったことで蝶や蜻蛉を見かけなくなったという自然の推移が示されている。また、例(18)では、千年という長い年月を経た結果、式部の建物が残っていないという当然の帰結が示されており、これも自然の経過に基づく変化を表している。これらはいずれも、人間の行為や判断によらず、自然の必然的な成り行きを示す「自然の帰結」である。

以上のように、「さすがに」の帰結用法は、心理の帰結・行動の帰結・状況の帰結・自然の帰結の四種類に分けられる。これらに共通するのは、いずれも出来事や変化が「予想どおりになった」という当然の帰結を示している点である。すなわち、「さすがに」は、話者の予測や常識に照らして想定された結果が現実生じたことを示す際に用いられ、「予想どおりになった」という意味が前景化し、他の評価的・感情的な意味は背景化するのが特徴である。

#### 4 評価用法

「さすがに」には、評価を表す用法<sup>5</sup>もある。この用法は、人物などを評価する場合、状況全体を評価する場合、あるいは特定の行動を評価する場合に分けられる。

(19) 徹底してストレートを打てた2人は、さすがにレベルが高い。(朝日朝刊「(加藤美優の目) 4年後、対等に戦うためには 卓球 パリ五輪」2024 年 08 月 13 日)

(20) <山口監督(湘)> 「首位はさすがに抜け目ない相手だった。前半が勉強になって、後半にやるべきことを表現してくれた」(朝日 2024 年 10 月 20 日)

(21) 「さすがに世界に一本しかない傘だ。」(吉村達也『観音信仰殺人事件』1997)

例(19)では、卓球選手2人の技術水準の高さに対する人物評価が示されている。例(20)では、「首位は抜け目ない相手だった」という発言から、相手チームの実力や戦略性に対する状況評価が表されている。さらに、例(21)では、「世界に一本しかない傘」という特異な対象に対して価値を認める対象評価がなされている。これらはいずれも、「さすがに」が話し手の感嘆や肯定的な評価を含意する用法である。

また、「だけのことはある」「だけあって」という文型と共起する場合、「さすがに」は人物などへの評価を表している。

(22) 妙にうまい絵だった。アスファルトに絵を描いたりする子供は今時ちょっと珍しいのではないかと。さすがにおじいちゃん子を自称するだけのことはある。(五十嵐貴久『土井徹先生の診療事件簿』2008)

<sup>5</sup> 本発表でいう「評価用法」は、渡辺(1997)のモデル(一)に当てはまり、話し手の評価的判断を伴う点において、他の用法とは区別されるものである。



(23) この短期間でここまで伸びるとは、流石に神童と呼ばれただけのことはある。(井上堅二『バカとテストと召喚獣 02』2007)

(24) 柳田は、さすがに高級官僚の出身だけあって、万事にそつがなかった。(井沢元彦『GEN『源氏物語』秘録』1995)

例(22)では、「おじいちゃん子を自称するだけのことはある」と述べることで、その子どもの絵のうまさが家庭的背景に裏づけられたものであることを評価している。例(23)では、「神童と呼ばれただけのことはある」として、卓越した成長ぶりを肯定的に評価している。さらに、例(24)では、「高級官僚の出身だけあって」という句が、柳田の有能さや立ち振る舞いの的確さを裏づける形で用いられている。これらの例に共通するのは、「さすがに」が社会的評価や期待に即した人物像を強調し、その卓越性を認める機能を果たしている点である。

また、行動を評価する用法も見られる。この場合の「さすがに」は、行動や判断に対して話し手が妥当性や度合いなどを評価する働きを持つ。

(25) 佐藤は「△6 四歩も考えたけれど、さすがに渋すぎると思って」。(朝日 2024 年 11 月 24 日)

(26) これらは市民らを「元気づける」ことを目的に掲げた事業だ。観光産業などの下支えにもなるし、いちがいに批判できないという意見もある。とはいえ、さすがにやり過ぎではないか。(朝日 2024 年 04 月 25 日)

(27) 白 3 2 に黒 3 4 はさすがに澄ましすぎか。黒 3 3 とハネたのは白 A なら黒 3 5 のつもり。張は激しく白 3 4 から 3 6 を選ぶ。(朝日 2024 年 03 月 01 日)

例(25)では、「渋すぎる」と述べることで、慎重すぎる手を避けた判断を評価しており、行動に対する妥当性の判断が示されている。例(26)では、「やり過ぎではないか」との発言から、行為の度合いに対する否定的評価が表されている。さらに、例(27)では、「澄ましすぎか」との表現によって、囲碁の一手に対する技術的・感覚的な評価が示されている。これらの例はいずれも、「さすがに」が行動や判断の程度をめぐる話し手の評価的立場を明示する用法である。

また、状況の評価する用法もある。この場合の「さすがに」は、出来事や環境などの状況全体に対して、話し手がその程度や異常さを評価する働きを持つ。

(28) こまめに水分を取るようにしているが、自宅を訪れた 50 代の長女には「さすがに暑すぎ」と、指摘されたという。(朝日 2024 年 06 月 27 日)

(29) 北海道の空も広がったが、今の時期の日没は午後 4 時ごろ。さすがに日が短すぎる。(朝日朝刊「(さがん記写) 順位では測れぬ美 / 佐賀県」2024 年 11 月 17 日)

(30) リハーサルをのぞいても、これはさすがにヤバいぞという感じでした。(朝日 2024 年 03 月 27 日)

例(28)では、長女の発言「さすがに暑すぎ」が示すように、気温の高さという状況が常識的な許容範囲を超えていると評価されている。例(29)では、「日短すぎる」という表現によって、季節的な日照時間の短さが実感的・対比的に評価されている。さらに、例(30)では、「これはさすがにヤバいぞ」という発話によって、予想を超えた状況の異常さや切迫感が評価的に表現されている。これらの例はいずれも、状況の程度や変化に対する話し手の感覚的・主観的な評価を示す「状況の評価」の用法である。

以上のように、「さすがに」の評価用法は、人物・行動・状況といった多様な対象に対して話し手の主観的判断を示すものである。これらに共通するのは、予測や期待に照らして「優れている」「度を超えている」などの評価的判断が前景化している点である。すなわち、「さすがに」は、対象の性質や行為の程度を常識的基準と比較し、その結果を肯定的または

否定的に評価する機能を担っている。

## 5 判断用法

また、「さすがに」には、話者の判断を示す用法がある。この用法では、明確なプラス・マイナスの評価を伴わず、話者の常識や一般的知識に基づいた判断を表す。ここには、常識的判断を示す場合と、否定表現を伴って判断を限定的に述べる場合がある。

(31) 金 さすがにその日のうちに退社とはいかないわけだ。(朝日 2024 年 09 月 28 日)

(32) さすがに、古くから一般的だったとは言えません。戦時中の短歌雑誌に「ごく短い感想」の意味で「瞬感」が使われていますが、まれな例です。(朝日 2024 年 06 月 22 日)

(33) 「ズキニー」という語形はさすがに少数派です。(朝日 2024 年 02 月 24 日)

例(31)～(33)は、社会的・経験的常識に基づく判断を示しており、例(31)では「その日のうちに退社とはいかない」、例(32)では「一般的だったとは言えない」、例(33)では「少数派です」といったように、現実的な見通しや分布を常識的に判断している。

一方、次の例(34)～(36)は、否定形を伴うことで、想定される可能性を控えめに否定している。

(34) さすがに「軟らかくなった雪対策」までは万全ではなかった。(朝日 2024 年 03 月 06 日)

(35) 金 さすがに刑事責任は問われないんだね。(朝日 2024 年 05 月 18 日)

(36) 「カレーうどんって、だしがはねるでしょ。大きい器だとあまりその心配がない。あと、器を逆さにすると稲むらに見える。さすがに逆さにする人はいないけどね」(朝日 2024 年 05 月 06 日)

例(34)では「そこまでは万全ではなかった」、例(35)では「刑事責任までは問われない」、例(36)では「逆さにする人はいない」と述べられており、いずれも「完全に不可能」と断定するのではなく、常識的範囲での限定的な否定を行っている。これらは、話者が現実的、常識的な観点から判断の程度を調整して表す「限定的判断」の用法といえる。

以上のように、「さすがに」の判断用法は、話者が自らの常識や経験に基づいて状況を現実的に見極める際に用いられるものである。ここでは、他の用法のような感情的・評価的な側面は背景化し、「常識的に考えればそう（あるいはそうではない）」という合理的判断の意味が前景化している。すなわち、「さすがに」はこの用法において、社会的・経験的知識に裏づけられた妥当な判断や、可能性を限定的に否定する際の語用的指標として機能している。

## 6 予測用法

さらに、「さすがに」には、予測そのものを示す用法がある。予測用法は、「当然の帰結」とまではいかず、推測や可能性を表すモダリティと共に、話者の予測的判断を示すものである。そのため、結果としての変化を表す帰結用法とは区別される。この予測用法はさらに、行動の予想と状況の予想の二つに分けられる。

まず、行動の予想を表す用法として、以下の例(37)～(39)が挙げられる。これらの例では、話者が他者の行動や反応を予測して述べており、「さすがに」がその判断の根拠となる常識を示している。

(37) 「日本の小売りトップの企業であり、さすがに拒否するのではないか」(金融関係者)との見方も強い。(朝日 2024 年 08 月 21 日)

(38) 「さすがに今度水没したら、この部分は持ちこたえられないのでは」。(朝日 2024 年 10 月 23 日)

(39) さすがに相手をにらみつけてギラギラすることはありませんが、頻繁に対戦表を見て自分を鼓舞するのです。(朝日 2024 年 05 月 17 日)

例(37)では、「拒否するのではないか」と述べることで、大企業としての立場や判断基準を踏まえた行動予想が示されている。例(38)では、「持ちこたえられないのでは」との発話により、状況に応じた人為的対応の限界を見込んだ行動の予測が表されている。さらに、例(39)では、「にらみつけてギラギラすることはありませんが」と述べることで、社会的場面における行動の抑制が予測され、行動の常識的範囲を示している。これらはいずれも、「さすがに」が行動の可能性や制約を予測的に判断する機能を果たす用法である。

次に、状況の予想を表す用法として、以下の例(40)～(42)が挙げられる。これらの例では、話者が将来の状況や社会的な状態について推測的に述べており、「さすがに」がその判断の根拠となる常識的・経験的知識を示している。

(40) いかに除菌志向の社会でも「認知の障害を持つ者は、予防拘禁して隔離しろ」とまて言う人は、さすがにいないでしょう。(朝日 2024 年 01 月 24 日)

(41) 引退するんだったら振り飛車をやってからにしようと。さすがにそんな絶望はもっと先だと思っていましたけど……」(朝日 2024 年 03 月 23 日)

(42) さすがに10年後の福井県に私は存在しないと思っているので、その頃にはこうなつて欲しいという願いを込めて書かせていただきます。まさにローカルネタ。(朝日 2024 年 04 月 18 日)

例(40)では、「いかに除菌志向の社会でも…と言う人はいないでしょう」と述べることで、社会常識から見て極端な主張は現れないだろうという状況予想が表されている。例(41)では、「そんな絶望はもっと先だと思っていましたけど」と述べることで、予想より早く訪れた事態への驚きを示し、未来に対する予測のずれが語られている。さらに、例(42)では、「10年後の福井県に私は存在しないと思っている」と述べることで、時間の経過に基づく自己の不在という未来状況を予測している。これらの例はいずれも、話者が現実的・常識的な観点から将来の状況を推測する「状況の予想」の用法にあたる。

以上のように、「さすがに」の予測用法は、話者が常識的知識や経験に基づいて、行動や状況の展開を推測する際に用いられるものである。この用法では、「予想どおりの結果」という既定の事実を述べる帰結用法とは異なり、「こうなるだろう」「そうはならないだろう」という予測そのものが前景化している点に特徴がある。すなわち、「さすがに」はこの用法において、話者の現実的判断や社会的常識に裏づけられた予測的モダリティとして機能している。

## 7 対比用法

最後に、「さすがに」には対比用法が見られる。構文的には、「さすがに」は逆接構文の中で前件を受け、後件における限定や例外を示す位置に置かれることが多く、文全体に対比構造を形成する役割を担っている。この用法では、明示的または暗示的な比較対象が存在し、「さすがに」に本来的に含まれる「評価」や「予想通り」といった意味が背景化し、「対比」の意味が前景化する点に特徴がある。下記の例(43)～(45)はその裏付けである。

(43) 有坂の家は広くて何でも揃っていたが、さすがにホットケーキの材料までは置いていなかったんだ。(BCCWJ 書籍)

(44) 東京は、まだ初冬の感じだったが、さすがに秋田は、もう、冬の盛りだった。(BCCWJ

書籍)

- (45) あいにくの小雨だったが、船舶部品メーカーの社員、角田（すみだ）航太さん（35）は「雨でも壊れないんです。台風はさすがに無理ですが」。（朝日 2024 年 05 月 31 日）

例(43)では、「何でも揃っていたが、ホットケーキの材料までは置いていなかった」という逆接構文の中で、「さすがに」が前件の豊かさを受け、後件でその限界を示しており、豊かさと不足の対比が表されている。例(44)では、「東京」と「秋田」という二つの地域を比較し、季節の進行の違いを際立たせる構文的対比が形成されている。さらに、例(45)では、「雨でも壊れない」と「台風では無理」という逆接的關係の中で、「さすがに」が条件の限界を示している。これらの例はいずれも、「さすがに」が逆接構文や対比的文脈の中で、程度差や限界を明示し、文全体に対照的な意味関係を形成する機能を担っている。

## 8 まとめ

本発表では、「さすがに」の意味の細分化を試み、「さすがに」には帰結用法、評価用法、判断用法、予測用法、対比用法という五つの用法があることを明らかにした。

- ① 帰結用法では、心理・行動・状況・自然の変化が表され、「予想どおりになった」という当然の帰結が前景化する。
- ② 評価用法では、人物・行動・状況を常識的基準と比較し、優劣や度合いに対する評価が前景化する。
- ③ 判断用法では、感情や評価を背景化し、常識にもとづく合理的判断が前景化する。
- ④ 予測用法では、推量表現と共起し、「こうなるだろう／そうはならないだろう」という予測そのものが前景化する。
- ⑤ 対比用法では、逆接構文の中で前件を受け、程度差や限界を示す対比が前景化する。

また、これらの各用法がいつの時代に生じたのか、さらにどの用法が時代によって典型化あるいは衰退したのかを明らかにし、「さすがに」の意味変化と機能拡張の歴史的過程を考察することを、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 周世超 (2017) 『『さすが』の意味・機能に関する考察』『鹿児島国際大学大学院学術論集』 9: 33-42.
- 周世超 (2019) 『『さすが』と『さすがに』の役割分担について』『日本語文法』 19(2): 83-99. 日本語文法学会.
- 周世超 (2023) 『『さすがに』の意味・用法と使用条件について—動詞述語を修飾する場合を中心に—』『日中言語対照研究』 25: 61-75.
- 渡辺実 (1997) 「難語『さすが』の共時態と通時態」『上智大学国文学科紀要』 14: 3-30.

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP25K22978 の助成を受けたものである。

# 動詞「終わる」の意味拡張と構文の変化

上田地平（関西大学大学院生）

## 1 はじめに

現代日本語において、動詞「終わる」は「仕事が終わる」のように「続いていた物事が先のなくなる状態になること」を表すのを基本的な語義とし、時間的・空間的な展開に着目する。一方そうした展開の意味を持たず、「終わる」が性質的な意味を担う場合がある。

『三省堂国語辞典第八版』では(1)の④のような「だめになる」という語義が示されており、これには(2a)のような例文があげられている。一方で、X(旧 twitter)で確認される用例<sup>1</sup>である(2b)は発話者にとって手立てのない「どうしようもない状態」であることを表しており、「だめになる」という語義の説明では不十分となる。加えて、(2a)では主格に相当する名詞句(このデザイン)が現れているが、(2b)ではそれが現れずタ形単独で使用されていることも特徴的である。

(1) 終わる：①そこまでになる。それより先がなくなる。②全部できた状態になる。かたづく。③その結果になる。④だめになる。 (『三省堂国語辞典第八版』2022)

(2) a. このデザインは終わっている。 (『三省堂国語辞典第八版』2022)

b. あーもうこれ晩に届くやつだ。終わった。 (2022/10/13/@lxxmomoxxl)

本発表は、動詞「終わる」の(2b)のような文における主格が現れない用法について記述を行い、「終わる」自身の意味拡張や構文的特徴との関係を明らかにする。その上で当該用法におけるタ形「終わった」に意味・統語的機能の変化を認め、タ形感動詞「しまった」「やった」などとの類似性から、「終わった」に感動詞化の契機があることを主張する。

本発表は次の手順で論述を行う。2節では「終わる」の意味拡張を辿り、「終わる」自体に主格の顕在を必要としない用法が獲得されることを確認する。3節では用例採集調査をもとに「終わる」の用法ごとの特徴を述べる。4節で主格の顕在を必要としない用法におけるタ形「終わった」の特徴を記述し、感動詞化の契機があることを論じる。

## 2 「終わる」の意味拡張

### 2.1 拡張の流れ

まずは動詞「終わる」が辿る意味拡張を確認する。『三省堂国語辞典』の記述において(1)に示した「だめになる」という性質的な意味が確認されるのは2014年刊の『三省堂国語辞典第七版』からであるが、『現代用語の基礎知識1981年版』を見ると(3)に示すように「終

---

<sup>1</sup> これ以降、Xから引用する用例は日付とアカウント名を記載して示す。

わる」を語彙資源とした「おわってる」が立項されていることが確認できる。また『日本俗語大辞典』では(4)に示すように「おわってる」を立項し、1997年の用例を挙げている。このことから、「終わる」の性質的な意味は、「終わる」が表す変化が達成された後の状態に着目する、アスペクト的に結果継続を表すテイル形が先行して表すようになったと考えられ、その用法は1980年代に定着し2000年代以降に国語辞典で採用されたことが窺える。

- (3) おわってる：もうだめだ。手がつけられない。「おわった」は、「どうでもいい」とか「やーめた」の意味になる。ていねいに「もうおわりました」ともいう<sup>2</sup>。

(『現代用語の基礎知識 1981 年版』)

- (4) おわってる (終わってる)：[連語] もうだめだ。どうしようもない。最悪の状況とそこから生じる結果を指して言う。若者語。(中略) ◇『朝日新聞』(1997年10月27日朝刊)「チョーバンビー、マジ終わってない？」 (『日本俗語大辞典』2003)

本来の意味で「終わる」を使用する場合、時間的・空間的な展開や動作性を持つ事物を表す名詞句が主格として要求されるが、性質的な意味を表す場合にはそうした制限がない。そのため、具体的な事物を主格名詞句として述べ立てる(5a)(5b)のような用法や(5c)のように発話者が望ましくない状況にあることを表す用法、それが主格の顕在なく表される(5d)のような用法までもが見られる。なお、Xで確認できる範囲では(5d)のような用例は他の用法の例よりも出現時期が遅れていた。

- (5) a. PC 設備おわってる。もう使いたくない。。。 (2007/07/23/@nananako)  
b. ITmedia に俺の写真のってる人生おワタ＼(^o^)/ (2007/04/13/@ksaito)  
c. おきったー。なんという遅刻。これは終わった。 (2007/07/04/@nakajo\_k)  
d. 会場に着くの多分5分前。終わった… (2009/09/13/@ramuzi)

## 2.2 主格の非顕在

動詞「終わる」は工藤(1995)の述べる「主体変化動詞」に属し、主体を表す項(主格)を伴って初めて成立するものであるが、意味拡張の結果、主格の顕在を必要としなくなった。ここで起きているのは文脈により元の語句を補うことができる通常の省略とは異なり、そもそも主格を明示することが困難である。潜在的に格成分を読み取ることは可能であっても、それを実際に使用される形で文中に表すことはできず、むしろ主格が現れないことが基本と考えられる。

次の例を考えたい。試験を受けた後、結果が開示される前に「結果が最悪になるだろう」

---

<sup>2</sup> ここで「やーめた」「どうでもいい」という意味で「おわった」が取り上げられているが、本発表で問題とする「終わった」の用法は2000年代以降に確認され「どうしようもない」といった意味を表す。そのため、『現代用語の基礎知識 1981 年版』の記述における「おわった」とは別の意味・用法と捉える。

という見込みのもと使用されたものである。

(6) 今日の中間テストマジ終わった～😓😓徹夜で勉強すればよかった～😓

(2020/10/13/@rapidfairyyy)

こうした文において「終わる」の直前に現れる名詞句はおよそ無助詞であることがほとんどだが、あえて助詞を補って考える場合、「中間テストは」とすることは比較的容認されるものの、「中間テストが」というようにガ格で表示することは許されない。この文の「終わった」が示す、ガ格で表されるべき「だめになった」主体を想定するならば「これから開示される試験の結果」となるだろう。しかしながら、この場面で「結果終わった」や「テストの点数終わった」などということは不可能である。

別の例を挙げる。「いかようにもできない」ことを表すために「終わる」が用いられている例である。

(7) a. なーんもやる気でない終わってる(:3\_ヽ)\_ (2024/07/10/@gaugau\_72)

b. なんかもっちゃ洗濯物に白いのついてるって思ったけど多分レシート洗った 終わった。  
(2024/07/10/@loxiris)

発話者が自身の状況について述べているため、ここで「終わってる」「終わった」の前に補われ得るのは一人称と考えられる。しかし先ほどと同様に、「私は」と示すことはできるものの、「私が」というように主格を明示させることは叶わない。また、これらの例で「だめになる」物事は発話者を含んだ状況を指すだろうが、「状況が」や「この場が」などというのはやはり不自然である。ただ、今回のように想定される「終わる」の主体が「発話者を含む状況」である場合は、「すべて」「人生」「何もかも」といった、意味の上であらゆる物事を含む表現であればガ格として現れる可能性がある。しかしこうした表現を補うと元の文の意図とは一致しなくなる。あくまで個別具体的な名詞句では表現できない「何か」が「終わる」と言える。

先に挙げた(6)においても、「これから悪い結果が返ってくる」ことを憂いて「終わった」と言うのであれば、「これから発話者が陥る状況」を指しているといえるかもしれない。しかしその状況が指す範囲は「すべて」や「人生」ほど広くないためにこれらの表現は共起し得ず、またこの場面に相応しい「発話者が想定する範囲でのすべて」を表す特定の名詞句が想定できないために、結果として文中に主格名詞句が現れないのではないだろうか。このような、「発話者が今まさに直面している事態を起点とし、そこから自己に関わる帰結として想定される一連の事態の範囲」を仮に発話者の「想定領域」と呼称すると、(6)(7)のような文に現れる「終わる」は「発話者の想定領域が破綻したこと」を表す用法を持つと言える。(6)の場合だと、「直面している事態＝試験を受け終えたという状況」から「帰結として想定される事態＝結果の開示やその後の予定」までが一連の流れとして発話者の

想定領域を構成し、それが破綻すること、つまり望ましくない状況になったことを表している。

以上を踏まえると、意味拡張によって「だめになる」という性質的意味を獲得した「終わる」は発話者を取り巻く状況全体（想定領域）に対しても使用できるようになったことがわかる。この用法において潜在的な格成分を読み取ることはできるものの、基本的に主格は現れない。また、あえて語句を補った場合において元の文の意図とは一致しなくなる。

ここまです踏まえて、次節では「終わる」の用法を「仕事が終わる」のような本来の用法（A）と意味拡張によって獲得した用法（B）とに大別し、拡張用法をさらに具体的な主体について述べ立てるもの（B1）と、主格を補うことができない「想定領域」を示すもの（B2）とで分類した上で調査を行う。

### 3 用例採集調査

「終わる」の用法のうち、(2) に示したようなものは口語・俗語としての側面が強く、2000 年代以降に広く定着したものと予想されるため、調査には X の提供する「高度な検索」機能を用いた。「終わる」の持つ語形のうち、アスペクト<sup>3</sup>・テンス・肯否によって対立するものを対象に、2024 年の用例を採集した<sup>4</sup>。本発表は「終わる」が単独で用いられることに着目するため、主節に現れる用例と主節以外の用例とを分け、各語形 100 件ずつ採集することとした。なお、「食べ終わる」のように複合動詞を構成するものや「仕事を終わる」のように明確にヲ格を伴うものは調査対象外とした。また、bot による投稿や単なるニュース記事の引用など用例として適さないものも除外した。

表 1・表 2 に示した結果は、各語形の実際の用例数と、X の検索結果画面にて用例を 100 件採集するために遡った投稿時間をもとにした、各語形の 1 分間あたりの出現頻度とを分類ごとに示したものである。

表 1・表 2 から、時間的展開を問題としない用法 B のうち、具体的な主体について述べる用法 B1 はテル形に、主格が明示されない用法 B2 は主節のタ形に大きく偏っていることがわかる。加えて、用法 B2 のタ形における「主節以外」として採集した用例は、すべて働きとして主節と等価である引用節のものであったほか、主節に現れた 12 件のうち 10 件が単独で使用されるものであった。以下は用法 B2 として集計した用例である。「終わる (8)」「終わってる (9)」「終わった (10)」「終わってた (11)」を示す。それぞれの用例番号で“a”とするのが主節の用例、“b”が主節以外の用例である。

---

<sup>3</sup> アスペクト形式で対象となるのはテイル・テイタ・テイナイ・テイナカッタだが、X という調査資料の性質上、短縮形であるテル・テタ・テナイ・テナカッタが頻出する。また実際に短縮形・非短縮形それぞれを集計したところ、両者に傾向の差は見られなかったため、本発表では短縮形の結果を示すこととする。

<sup>4</sup> 検索には以下のようなコマンドを使用した。“mm-dd”としたところに日付を入れ、50 件ごとに変更した。(終わる or おわる or オワル)until:2024-mm-dd\_11:15:59\_JST since:2024-mm-dd



- (8) a. 今縮毛矯正してるから地震きたら終わる (2024/08/10/@ningning\_totto)  
 b. 会食恐怖症とか社会で終わるやつやん。 (2024/07/10/@C\_COMMANDO2015\_)
- (9) a. 暑いし腹の調子は悪いしで終わってる (2024/07/10/@hisago\_9020)  
 b. メイクしようかと思ったけどだるすぎて終わってるからいいや 多分これやったら体力尽きる (2024/07/08/@bakayarou\_don)
- (10) a. 車で送ってもらったら靴間違えたオワッタ…黒指定なのにピンク… (2024/08/10/@Ametas2ji)  
 b. 昨夜は緊急地震速報が聞こえた瞬間、ガチでこれはもうダメだ終わった…と思った (2024/08/10/@koba\_22sz\_LL)
- (11) a. 前の仕事だとワンオペあったから雨降ると終わってた (2024/07/10/@we1ch\_96)  
 b. 病児保育フル活用してなんとか回してるけど、病児保育取りにくい地域だったら終わってたし、病児保育行かせるのも心苦しいし、毎日自転車操業な気分。 (2024/08/10/@FJ17669085)

表 1「終わる」各語形の用例数と出現頻度（主節）

語形	A		B1		B2		判別不可		合計	時間 (分)
	数	頻度	数	頻度	数	頻度	数	頻度		
ル	62	1.9	25	0.8	8	0.3	5	0.2	100	32
テル	12	0.5	<b>75</b>	<b>3.1</b>	12	0.5	1	0.0	100	24
タ	77	9.6	9	1.1	<b>12</b>	<b>1.5</b>	2	0.3	100	8
テタ	83	1.1	11	0.2	6	0.1	0	0.0	100	73
ナイ	96	1.1	1	0.0	0	0.0	3	0.0	100	89
テナイ	88	0.6	11	0.1	1	0.0	0	0.0	100	154
ナカッタ	99	0.1	0	0.0	0	0.0	1	0.0	100	1355
テナカッタ	91	0.1	5	0.0	1	0.0	3	0.0	100	1622

表 2「終わる」各語形の用例数と出現頻度（主節以外）

語形	A		B1		B2		判別不可		合計	時間 (分)
	数	頻度	数	頻度	数	頻度	数	頻度		
ル	93	7.8	2	0.2	3	0.3	2	0.2	100	12
テル	36	4.0	62	6.9	1	0.1	1	0.1	100	9
タ	94	11.8	2	0.3	4	0.5	0	0.0	100	8
テタ	69	0.4	26	0.1	1	0.0	4	0.0	100	186
ナイ	97	1.0	2	0.0	0	0.0	1	0.0	100	97
テナイ	96	0.7	22	0.0	1	0.0	1	0.0	100	135
ナカッタ	98	0.1	0	0.0	0	0.0	2	0.0	100	1412
テナカッタ	92	0.0	3	0.0	1	0.0	4	0.0	100	4678

2.3 節で見たように、用法 B2 は「終わる」自身が性質的意味を獲得したことに起因するものであるため、タ形以外の語形においてもこの用法で使用することは可能である。しかし実際には、用法 B2 の出現は主節のタ形に偏り、さらに単独で現れることがほとんどであった。加えて、「終わった」が使用される場面では「どうしようもない」「残念だ」といった発話者の否定的な心的態度が表れているように思える。これらを踏まえ、次節ではタ形「終わった」に焦点を置き、その構文的特徴を記述する。

## 4 構文的特徴

### 4.1 タ形による単独使用

前節に見た結果から、用法 B2 におけるタ形「終わった」が「主節以外で使用しがたい」という構文的な制限を受けることが窺える。今一度、当該用法のタ形の例を挙げる。

- (12)a. クーラのリモコンない……終わった (2024/07/10/@pita\_Fly)  
b. 車で送ってもらったら靴間違えたオワツタ…黒指定なのにピンク… (2024/08/10/@Ametas2ji)

これらの例に共通するのは、タ形である「終わった」が典型的な過去時制を表していないことにある。実際、これらの例に「先週」や「昨日」といった過去を表す語を共起させた場合には容認度が下がる。その文の意図するところを解釈することは可能でも、実際に使用される表現とは考え難い。

- (13)a. ??昨日クーラーのリモコンなかった。終わった。  
b. ?先週靴間違えた。終わった。

多くの先行研究で指摘されるように、タ形は発話時直前や発話現場で起こった出来事に対して使用される場合がある。工藤 (1995) はタ形の派生用法である「現在パーフェクト」を発話時現在と切り離すことができないものとし、「発話の現場で、話し手が直接〈知覚〉した出来事」をこの用法に含めた。また井上 (2001) は目の前で実現した出来事に対して「シタ」を用いるためには、出来事が実現された経過（少なくともその一端）を具体的な形で把握していなければならない」と指摘している。

- (14)a. (お湯が沸くのを今か今かと待っていたところ、目の前でお湯が沸騰状態に達した) よし、沸いた。/??よし、沸いてる。  
b. (コンロにかけていたお湯がいつのまにか沸騰状態にある (沸騰した瞬間は見えない)) お、沸いた。/お、沸いてる。  
c. (給湯室の前を通ったら、誰が沸かしたかはわからないが、やかんの中のお湯が沸騰状態にある) あれ、お湯が沸いてる。/??あれ、お湯が沸いた。 (井上 2001:106)

発話現場において、出来事が実現したその瞬間を捉えられるのはタ形のみである。本発表で問題とする「終わった」もまさに発話現場において発話者が出来事を知覚した際に現れる表現と言える。用法 B2 におけるタ形は典型的な「過去」を表さず発話時点と結びつけられ、「知覚」や「発見」といったムード性を帯びることとなる。

「過去」を表さない以上、主節の出来事に対する時間的先行性をタ形が備える従属節では使用が不適當であり、また「知覚」や「発見」は感情・感覚表出を伴うものであるため、これらのムードを担うタ形は主節以外で現れることがなく、言い切りでの使用が多くなる。このことと、意味拡張によって生まれた「主格が顕在しない」という制限とによって、統語的に他の要素との関係を薄めた当該用法の「終わった」は必然的に単独での使用が促されることになる。

## 4.2 「終わった」の感動詞化

ここまで、動詞「終わる」が意味拡張によって主格の顕在がない用法を獲得し、それがタ形の性質に支えられて文中に単独で現れることを述べた。本節では、こうして成立した単独の「終わった」が、「しまった」や「やった」などの感動詞化した動詞タ形と共通の特徴を有するものであることを主張する。

感動詞は、それ自体に意味や統語的機能を持たずそのみで文をなすものであり、典型的には発話者の発話時点における心的態度の表出を担う。またある語彙項目が感動詞化するという現象については、「統語的、意味的な特徴づけを持つものが転用され」たものとして（田窪 2005）、あるいは「慣用・定型表現が独立性を持つに至り、意味機能の上で感動詞との同質性を得」たもの（仁科 2022）などと説明される。元の語の意味や文法的特徴・統語的機能が希薄化するとともに、発話者の発話時点における心的態度を前面に表すひとまとまりの形式として独立したとき、その表現は感動詞化したものとみなせるだろう。

「しまった」「やった」などはまさにこうした転成を経たものと理解される。田村（2015）は動詞「しまう」から「しまった」が独立するプロセスを論じ、変化過程において「（て）しまう」が限界達成というアスペクトを経由した「モダリティ形式として機能語的役割を果たしていた」のが、「しまった」のように「統語的な自立性を高め、モダリティとしての性質を強化し、談話レベルにおける独立語として使用されるようになった」と述べている。元の語である動詞「しまう」の意味が希薄化し、感動詞として独立した例と言える。

ここで着目したいのは、「しまった」がその成立過程において「（て）しまう」というモダリティ形式として機能していた点である。つまりは動詞「しまう」から感動詞「しまった」に至るまでに、用法として性質の意味を備える段階があり、それを表出することに特化する形で感動詞「しまった」が成立している。

性質の意味を備えるという点で、本発表における「終わった」も「しまった」と同様の枠組みで捉えられるものである。「終わった」の持つ、必須項である主格を顕在させず単独で使用されやすいという統語的特徴や発話現場と関わるひとまとまりの形式であるという

点には感動詞化の契機が見られるだろう。これは「終わる」が工藤（1995）の「主体変化動詞」に属し、結果状態を生む動詞であるために性質的意味を獲得することと、ムード性を担うタ形の性質によって支えられるものと考えられる。勿論、2.2 節で述べたように、「終わった」は発話者の想定領域に着目するものであり、顕在はしないものの「想定領域」が「終わった」という構造を持つため、完全に統語的に独立し心的態度の表出のみを担っているとは言い難く、感動詞化が完了した表現ではない。あくまで「感動詞的用法」に留まった段階である。とはいえ、動詞タ形がその意味・統語的特徴を希薄化させ、感動詞的用法を獲得、あるいは感動詞として独立する枠組みを想定した際には、その前段階として性質的意味を備えると考えられる。換言するならば、結果状態を生み、性質的意味を獲得する動詞は感動詞化の動機に晒される可能性があると言えるだろう。

## 5 おわりに

動詞「終わる」は、自身の意味拡張で性質的意味を備え、それにより発話者が望ましくない事態にあることを主格の顕在なく表す用法を誕生させた。この用法はタ形での運用を好み、「主格を顕在させない」と「タ形がムード性に関わる」と共に支えられ、単独での出現が促された。この変化は感動詞と共通の特徴を得る動きであり、動詞タ形の感動詞化現象として捉えられる。

本発表は、辞書記述・用例採集調査から、「終わる」の意味拡張とそれに伴う構文的特徴の変化を捉え、タ形「終わった」に感動詞化の契機があることを指摘した。本発表で述べた変化は「結果状態が生じる動詞であること」と「タ形であること」が影響し感動詞的用法を得るというものであり、感動詞化現象のいち類型として捉えられるものである。

## 参考文献

- 井上優（2001）「現代日本語の「タ」―主文末の「…タ」の意味について」『「た」の言語学』ひつじ書房
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
- 田窪行則（2005）「感動詞の言語学的位置づけ」『月刊言語』34-11, 大修館書店
- 田村敏広（2015）「補助動詞「(て)しまう」と感嘆詞「しまった」の意味分析と拡張メカニズムの考察」『認知言語学論考』12, ひつじ書房
- 仁科陽江（2022）「感動詞化のメカニズムについての対照研究」『感動詞研究の展開』ひつじ書房
- 米川明彦編（2003）『日本俗語大辞典』東京堂出版
- 『三省堂国語辞典第八版』三省堂, 2022 年
- 『現代用語の基礎知識 1981 年版』自由国民社版

# 「はといえば／はというと」はいつ使われるのか

張 明 (川村学園女子大学)

## 1. はじめに

日本語には多様な提題標識が存在する。「は」はその典型であるが、引用形式を用いた「といえば／というと／といったら」も挙げられる。主題を表す「は」は言うまでもなく、「といえば／というと／といったら」に関しても、岩男 (2016) (2019) をはじめ、多くの研究が行われてきた。さらに、次の (1) のように、両者の合成形式である「はといえば／はというと」も広く用いられている。

- (1) わたしは文科系の科目は好きだし得意なのですが、理科系の科目はというと、全くだめなんです。  
(『改訂版 どんな時どう使う日本語表現文型 500』p. 136)

しかし、「はといえば／はというと」を主要な対象とする研究はこれまで見当たらない。文型辞典においても、(1) の出典である『どんな時どう使う 日本語表現文型 500』を除き、ほとんど取り上げられていないのが現状である。「はといえば／はというと」はどのように用いられるのか。単独の「は」や「といえば／というと」が存在するにもかかわらず、合成形式として「はといえば／はというと」が選択される理由は何か。「は」や「といえば／というと」とは異なる特徴を持っているのか。本発表は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所) から収集した実例を用い、「は」「といえば／というと」との比較を通じて、「はといえば／はというと」の使用実態や意味用法を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

管見の限り、「はといえば／はというと」を主たる対象とした研究論文は存在しないが、それに関する記述は岩男 (2016) および日本語記述文法研究会編 (2009) に確認できる。

岩男 (2016) は「といえば／というと／といったら」に関する考察であるが、その中で「はといえば／はというと」について次のように言及している。

- (2) 「というと」「といえば」の2標識は、言語的な先行詞が存在しない限り、名詞句を主題として提示することが不可能であった。そのため、先行詞が存在しない事物を「というと」「といえば」で提示するためには、それを補う必要から言語的な先行詞を必要としない提題助詞「は」を伴った形で用いられるものと考えられるのである。  
(岩男 2016 : 197)

「といえば／というと」は主題として提示するために言語的な先行詞を必要とするのに対し、「はといえば／はというと」はそれを必要としないということが (2) から示唆される。果たして「はといえば／はというと」は言語的な先行詞を必要としないのだろうか。この点については4節で検討する。

また、日本語記述文法研究会編 (2009) では、主題を表す「といえば」類の周辺として、「は (どうか) といえば」「は (どうか) というと」が取り上げられ、「あるものを対比的に取り上げるのに用いられる」(p. 249) と指摘されている。『改訂版 どんな時どう使う日本語表現文型 500』においても、「あることを対比的に話題として取り上げる言い方。前の文と対立的なことを言いたいときに使う。」(p. 136) と説明されている。果たして「はといえば／はというと」は「対比」を表しているのだろうか。この点については5節で検討する。

### 3. 調査資料

本発表は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いて、「はといえば／はというと」の用例を収集し、その使用実態を観察する。そのうえで、意味用法を明らかにする。コーパス検索アプリケーションの「中納言」を使い、BCCWJ(中納言バージョン2.7.0。検索日2023年3月3日)を検索した。短単位検索モードを用い、「キーの条件を指定しない」にチェックを入れ、キーから後方の1語に「語彙素＝「は」」、後方の2語に「語彙素＝“と”」、後方の3語に「語彙素＝“言う”」、後方の4語にそれぞれ「語彙素＝“ば”」「語彙素＝“と”」「語彙素＝“た”」AND 発音形出現形＝“タラ”という条件を指定して検索を行った。その結果、「はといえば」は365例、「はというと」は252例、「はといったら」は次の1例が得られた。

- (3) 相馬さんと、いっぺんに、こんなことになってしもたんは、元はというたら、安田さんの浮気事件が、あったからで。  
(PB59\_00359 3270 『志織のめざめ』)<sup>1</sup>

「はといったら」は現代語においてほとんど用いられていないため、本発表は「はといえば」365例および「はというと」252例を対象として考察を行う。

### 4. 言語的な先行詞を必要としないのか

4節では、「はといえば／はというと」が言語的な先行詞を必要とするかどうかについて検討する。本発表は岩男(2016)とは異なり、「はといえば／はというと」も言語的な先行詞を必要とし、この点で「といえば／というと」と共通していると主張する。

岩男(2016)(2019)によれば、提題文の「といえば／というと」は言語的な先行詞が存在しない限り、名詞句を主題として提示することが不可能であるとしている。

- (4) デザインを芸術とする新しい芸術世界を切り開いて、西欧に大きな影響を与えたのがウィリアム・モリスである。モリスといえば、社会主義者の草分けの一人として知られ、中世の手づくりの装飾芸術的な印刷と造本のケルムスコット・プレスや、民衆運動、工芸品の分野の比類ない独創性でも知られているが、本当の意味での影響力の大きさは、カーペットや壁紙のデザインであった。  
(岩男 2019 : 61)
- (5) 「お前が兄貴分か」「まあ、そうです」「職業は」「無職です」「無職ということはないだろう。何で食っていたのか」「先頃までは白井組の者でしたが、最近脱会しました」「白井組というと、暴力団だな」「まあ、世間ではそう言っとりますが」  
(岩男 2019 : 62)

(4)(5)に示した用例では、「といえば／というと」の主題名詞句が前文脈に出現しており、言語的な先行詞が存在することが確認できる。このように、既出の表現を指示するという文脈指示的という特徴が見られる。なお、(6)のように、一見すると言語的な先行詞が存在しない例もある。

- (6) 若狭の私の在所は、まだ火葬場がない。人が死ぬと、穴を掘って埋めている。それ故、お葬式といえば、かならず、お巡りさんの監視つきだが、その在所の山を何十本の送電塔が、まるで、銀のフォークを山へさしこんだみたいにつながっていて、足もとは真つ暗なのである。  
(岩男 2019 : 66)

<sup>1</sup> 先行研究からの引用に関して、下線などはすべて先行研究によるものである。それ以外の下線や囲み線はすべて発表者によるものである。なお、先行研究や用例の引用における句読点は本稿に合わせて「、」「。」に統一している。

主題名詞句「お葬式」が前文脈に出現しておらず、言語的な先行詞が存在しないように見える。岩男（2019：67）は、この場合も「それまでの文脈と関連を持つ語句であり、談話に間接的に導入されている」と述べており、(4) (5) と同様に「といえば／という」は言語的な先行詞を必要とするという考えが一貫して示されている。

一方、2節で見てきた通り、岩男（2016）では「はといえば／はという」は「といえば／という」と異なり、言語的な先行詞が存在しなくても用いられると指摘されている。岩男（2016）で挙げられた用例は次の (7) ～ (10) である。

- (7) セイモウリアは、脊椎動物が両生類から爬虫類に進化したときの、いちばんさいごの両生類だった、というわけです。そのまた、セイモウリアの先祖は、といえば、古生代デボン紀のおわりにいた、「イクチオステガ」（図八十九）という両生類がいられています。
- (8) こうした上級生の活躍によって、とうとう校長が更迭されることになった。私はといえば、上級生の演説によって、前の校長はわるく、自分らは大化の改新のごとき事業を行っていると感じて疑わなかった。
- (9) 現在、一般につかわれる「海老」は中国からの借用。蛸の文字は人の苗字として残っている程度である。ところで、全体の国字の数はという、これが百数十もある。
- (10) 旧地主の家の庭先に、麦を収穫して積み上げた麦束の山が火を噴いているのです。農民達はという、驚いたことに火を囲んで、焼けてポップコーン状になった麦を、手に手に拾い集めて食べているではありませんか。  
(岩男 2016：196-197)

これらの用例 (7) ～ (10) の「はといえば／はという」は、果たして言語的な先行詞が存在しないのか。まず、(8) (10) を岩男（2016）の引用箇所をよりさらに前の文脈まで遡って確認する。

- (8) この校長排斥運動は、学生大会などが行われて派手に幕をあげた。しかし、そういう壇上には辻邦生は現われなかった。ところが、辻はまだ二年生であるのに、三年生を主体とした連中から、いわば知恵袋のように思われていたのだ。私もその現場を見たことがある。(中略)。辻はまさに幸村といってもよかった。(中略)。こうした上級生の活躍によって、とうとう校長が更迭されることになった。私はといえば、上級生の演説によって、前の校長はわるく、自分らは大化の改新のごとき事業を行っていると感じて疑わなかった。
- (10) 赴任して以来、麦作の重要性を農民に説き、焦熱の劣悪な条件の下で労働意欲の乏しい人達を説得したりして、やっと収穫した穀物でした。(中略)。農民達はという、驚いたことに火を囲んで、焼けてポップコーン状になった麦を、手に手に拾い集めて食べているではありませんか。

確認した結果、「はといえば／はという」の主題名詞句が前文脈に出現していることがわかる。また、(8) (10) に共通する特徴として、主題名詞句と同一語形で前文脈に出現している点である。このようなタイプを本発表では「同形」タイプと名付ける。

次に、(7) (9) の用例について検討する。(7) (9) の主題名詞句である「セイモウリアの先祖」「国字の数」は、確かにそのままの語形で前文脈に現れていない。しかし、(7) の前文脈に「セイモウリア」という表現が確認できる。(9) も遡って確認すると、次の (9) に示すように、「国字」という表現が確認される。

- (9) 腰の曲がった老人と虫（この場合、甲羅をつけたもの）の意味をあらわす「蛭」は国字。現在、一般につかわれる「海老」は中国からの借用。蛭の文字は人の苗字として残っている程度である。ところで、全体の国字の数はというと、これが百数十もある。

前文脈に「X」という表現が出現し、その後文脈に「Xの～」の形として「はといえば／はという」との主題名詞句に用いられる。「の～」が「X」の一側面を表すため、このようなタイプを本発表では「側面」タイプと名付ける。前文脈の表現「X」を参照することから、既出の表現を指示していると十分に言える。

岩男（2016）では挙げられていないものの、実はもう1つのタイプが存在する。

- (11) 革新派は、侵略戦争の尖兵だった日本の兵士の死者を「汚れた死者」として嫌っているからだ。他方、保守派はといえば、「二千万のアジアの死者」を顧みず、日本の兵士の死者を靖国神社に「英霊」として祀るという「虚妄」に陥っている。

(LBn3\_00173 4320 『戦後責任論』)

- (12) 約1兆円の有償資金協力のうち、実は、財投の部分は七千億円ほどです。では、残りの三千億円はというと、これは、日本政府からの「出資金」、要するに「タダで税金をあげている」形になってます。

(PM11\_00378 17870 『現代』2001年10月号)

- (13) 木曜日ということで本来はチラシ配りもあるんですが・・・。雨がひどい為明日に延期。ずぶ濡れになって風邪でもひいたら余計たちが悪くなってしまうからね。店長は午前中から店長会議の為不在。自分はというと朝一点検来店のお客さんを対応。その後健康診断がありました。

(OY01\_01385 1180 Yahoo!ブログ)

(11)～(13)の主題名詞句である「保守派」「三千億円」「自分」は、前文脈を遡っても、「同形」タイプのように、同一語形の先行詞は確認されなければ、「側面」タイプのように、「Xの～」の「X」に相当する部分も確認されない。しかし、(11)の前文脈に「革新派」が出現しており、集合の中に「保守派」の存在も容易に想定できる。(12)も同様に、「約1兆円」「七千億円」が出現していることから、集合の中に「三千億円」の存在が明らかである。(13)は出典がブログであることから、集合の中に書き手である「自分」が含まれることも容易に理解できる。つまり、主題名詞句は前文脈に直接出現しないものの、「それまでの文脈と関連を持つ語句であり、談話に間接的に導入されている」(岩男2019:67)と解釈でき、「といえば／はという」と同様の特徴が見られる。このように、集合の中の一部を指示するタイプとして、本発表では「一部」タイプと名付ける。

BCCWJの実例を精査した結果、すべての「はといえば／はという」とが「同形」「側面」「一部」タイプのいずれかに分類できる。その分類結果を表1に示す。

表1 「はといえば／はという」との主題名詞句のタイプ

	「同形」タイプ	「側面」タイプ	「一部」タイプ	合計
「 <u>は</u> といえ <u>ば</u> 」	146 (40.0%)	172 (47.5%) <sup>2</sup>	47 (12.9%)	365
「 <u>は</u> というと」	86 (34.1%)	80 (31.7%)	86 (34.1%)	252

<sup>2</sup> 「はといえば」の「側面」タイプが多い理由は、「元はといえば」「もとはといえば」が合わせて119例あるからである。「はというと」に「元」「もと」が前接するのは1例のみである。



このように、「はといえば／はというと」は、文脈に既出の表現を指示する文脈指示的な特徴を持つ。また、岩男（2019）において「はといえば／というと」にも同様の特徴が指摘されていることから、既出の表現を指示するという点で両者は共通すると言える。

## 5. 「対比」を表しているのか

5節では、「はといえば／はというと」の意味用法を考察し、その意味を捉えるには「対比」だけでは不十分であることを指摘したうえで、その表現が何を表すのかについて検討する。

前述したように、日本語記述文法研究会編（2009）は、次の用例（14）（15）を挙げ、「あるものを対比的に取り上げるのに用いられる」（p. 249）と述べている。

（14）兄は本の虫で、暇さえあれば本に読みふけっている。弟ははといえば、本になど見向きもしないでスポーツに熱中している。

（15）江戸時代の人、少ない資源でも有効に活用してそれなりに充実した生活を送っていた。現代人ははというと、便利すぎる生活に慣れきって、資源の供給が追いつかない有様だ。

（日本語記述文法研究会編 2009：249-250）

確かに、（14）（15）のような用例は「対比」として解釈可能であり、BCCWJからも同様の用例が確認できる。しかし、「対比」として捉えがたい用例も少なくない。

（16）十月にはいって八日目のこと、李績、辛讜、李延枢、宗緑雲、それに徐珍の五人が旅装をととのえ、通化門を出て東へ向かった。馬は李績を選んだ。自分と辛讜のためには悍馬を、李延枢と宗緑雲のためにはおとなしい馬を選んだのである。徐珍はというと、辛讜たちが揚州からつれてきた驢に騎っている。  
（LBj9\_00102 2710『絳繡城綺譚』）

（17）「想像を絶する幻の宮殿」「洞窟や、塔や、庭園や、城や、美術館や、彫刻」「原初の時代の古い建築」—ノートの中に記されているのは、こうした言葉だけだ。洞窟に関しては、現在の宮殿には、オートリーヴの守護聖人である聖アメデの洞窟、（中略）。塔なら、まさに林立している。（中略）。庭園はと言うと、いちじくや、アロエや、椰子や、サボテンなど石の樹々の繁るテラスは、まさに屋上庭園だ。（PB15\_00384 10650『郵便配達夫シュヴァルの理想宮』）

（16）（17）は（14）（15）と比べると、「対比」の意味が薄れており、単に前出したものを「列挙」して、それらの状況や特徴を説明している。さらに、次の（18）の「業績」、（19）の「内容」はそれぞれの先行詞の一側面であり、その側面について説明しているに過ぎない。このような用例は、「対比」として理解することが困難であると考えられる。

（18）調書を読みながら、僕はこの仙台ワンアイホテルの全体的なことを調べた。このホテルが開業したのは十一年前。…（中略）このホテルの土地はもともと伊達通信工業のなじみの取引先が持っていた土地で、…（中略）ホテルの業績のほうははというとバブル崩壊以降の不景気で客数の減少はどうにもならず、数年前から徐々に悪化。

（LBs9\_00164 3110『女子大生会計士の事件簿』）

（19）その中でも初期に属すサイレント作品に、『可愛いリリー』（千九百二十七年）がある。リオ・デ・ジャネイロに生まれ、フランス、イギリス、さらには生国ブラジルで旺盛な活動を展開

した、これまた越境する映画人と呼ぶにふさわしい人物、アルベルト・カヴァルカンティの初期作品だ。(中略)。さて、『可愛いリリー』の内容はと言えば、ミシン工場の女工がせっかく素敵な恋を掴みかけるものの、昔の男がひどく嫉妬し刃物を振りかざして追いかけてきて…といった一幕をコミカルに描く、キュートな珍品にすぎない。

(PB17\_00053 3900 『ジャン・ルノワール越境する映画』)

では、「はといえば／はという」とを捉えるには「対比」では不十分であるとすれば、いったい何を表しているのか。「はといえば／はという」の用例には次の共通点が見られる。主題名詞句およびそれ以外の名詞句が前文脈に提示され、後文脈ではまず主題名詞句でないものについて述べ、その後に主題名詞句に切り替えそれについて述べる、という構造である。例えば、(17) では「洞窟や、塔や、庭園」が前文脈に提示され、後文脈でまず「洞窟」「塔」といった主題名詞句でないものについて述べ、その後に主題名詞句の「庭園」に切り替えて述べている。(18) も同様に、前文脈に「ホテルの全体」が提示され、後文脈でまず「開業」「土地」といった主題名詞句でないものについて述べた後、主題名詞句の「業績」に切り替えて述べている。

一方、上記の構造は「といえ／はという」とには見られない特徴である。

(20) この本がでる頃は、西条の大好きな季節、夏が来ているわけで。夏という、甲子園ですよ。もちろん、西条は、甲子園が大好きです。(岩男 2019 : 62)

(20) では、先行詞である「夏」のみが前文脈に提示され、後文脈で「という」を用いて主題名詞句「夏」について述べる。つまり、先行詞の「夏」と主題名詞句「夏」の間にそれ以外の事柄が現れず、名詞句の切り替えや取り立てる事柄の転換は見られない。図 1 に示すように、これは「はといえば／はという」との明確な相違点であると考えられる。

「はといえば／はという」：主題名詞句およびそれ以外の名詞句	→	それ以外の名詞句	→	主題名詞句
用例 (17)：「洞窟や、塔や、庭園」	→	「洞窟」→「塔」	→	「庭園」
「といえ／はという」：主題名詞句	→	主題名詞句		
用例 (20)：「夏」	→	「夏」		

図 1 「はといえば／はという」と「といえ／はという」の違い

このように、「はといえば／はという」は対比ではなく、既出主題名詞句の再提示を表す表現であり、主題名詞句でないものから主題名詞句に切り替え、既出の主題名詞句を再提示し再び焦点を当てる際に用いられる。興味深いことに、(9) (11) (12) (19) の囲み線で示した接続表現も、この結論を支持している。「はといえば／はという」と共起する接続表現をまとめると、次頁の表 2 のようになる。

表 2 からわかるように、「一方」「それに対して」といった対比を表すものや、「さて」「では」ところで」といった話題転換を表すものが比較的用例数が多い。「しかし」「だが」といった逆接を表すものや、「そして」「で」といった添加を表すものも数多く確認される。これらの接続表現は一見すると意味が異なるように見えるが、ほとんどが対象の切り替え時に一般的に用いられるものである。「はといえば／はという」は既出主題名詞句の再提示を表す表現であるため、表 2 に示した接続表現と高頻度で共起することが理解できる。

表2 「はといえば／はという」と共起する接続表現

「はといえば」	用例数	「はという」	用例数
「一方・他方」	18	「さて・さて一方・さて最後に」	21
「そして」	12	「では・じゃ」	15
「さて」	11	「一方」	14
「しかし・しかしながら」	6	「そして・そうして」	10
「だが」「では・それでは」	4	「ところで」	6
「しかも」「ところが」「で・それで」	3	「対して・これに対して・それに対して」	5
「ところで」「例えば」	2	「で」	4
「そのうえ」「それでも」「それに反して」「対する」「反対に」「片や」「だから」「おまけに」「最後に」「でも」「次に」「それゆえ」	1	「しかし・しかしながら」	3
		「が」「次に」	2
		「けれども」「ただ」「もっとも」「にもかかわらず」「その反面」「それに引き換え」「ちなみに」「そこで」「まず」「また」「例えば」「さらに」	1
合計	80	合計	94

## 6. 「は」は物足りないのか

6節では、「は」との違いを検討し、先に示した「はといえば／はという」の意味用法の妥当性を確認するとともに、その表現効果を明らかにする。

これまで挙げてきた「はといえば／はという」の用例は「は」に置き換え可能な統語構造を示す用例が多い。しかし、(21)のように、「は」に置き換えにくい統語構造を示す用例もある。では、なぜ(21)では「はといえば／はという」を用いることができるのか。

- (21) 発売当初、香りでダイエットできるなら使ってみたいという人が多く、大変な反響を呼びました。…(中略)。しかし、肝心のダイエット効果はというと、その製品を使って劇的にやせたという話は聞いたことがなく、香りを嗅いだり、皮膚から成分を浸透させるだけでは、みえる脂肪を燃やすという“奇跡”は起きないのが現実です。

(LBs4\_00060 2520 『お医者さんも知らない健康の知恵300』)

「は」は一般的に格成分など文の一部を主題化するマーカーである。(21)を「ダイエット効果は」に置き換えると、統語的に不自然な破格の文になってしまう。一方、「はといえば／はという」を後接させて節レベルにすると、(21)のような統語構造も可能になる。さらに、「はといえば／はという」は格成分を要求せず、単に主題名詞句に切り替え、既出の主題名詞句を再提示し再び焦点を当てるマーカーである。この意味的特徴もまた、(21)のような統語構造を自然なものとする根拠の一つとなり得る。

また、「は」と比べると「はといえば／はという」の用例数は少なく、使用頻度が圧倒的に低い。その理由として、以下のことが考えられる。「はといえば／はという」を用いることで、文脈に応じた内容の区切りや取り立てる事柄の切り替えが強調され、前文脈とは異なる事柄に対して注目を促すという表現効果がある。そのため、既出の名詞句を列挙して述べる場合、「はといえば／はという」は基本的に最後の名詞句を主題名詞句として提示する。

- (22) 羊市場には異様な殺気がただよっているという。買うほうは、よい羊を求めての品定めに余念がないし、売るほうは必死でお客をつかもうとする。袖を引っぱって自分の羊を売り込む。羊はというと、自分たちがなんのために連れてこられたのか、うすうす悟っているようすで、落ち着きがない。  
(LBa3\_00028 11970 『住んでみたサウジアラビア』)

「羊市場」に「買う」人、「売る」人、「羊」の存在が想定される。「買うほう」「売るほう」には「は」が後接する。一方、最後の名詞句である「羊」には「は」ではなく「はというと」が用いられる。文脈に応じた内容の区切りや取り立てる事柄の切り替えが強調され、前文脈とは異なる事柄に対して注目を促すという表現効果がある。そのため、「はといえば／はというと」は最後の名詞句に用いられると考えられる。前掲の(16)(17)が最後の名詞句の「徐珍」「庭園」に「はといえば／はというと」を用いるのも同様の理由である。このような特別な表現効果により、「はといえば／はというと」は頻繁に使われる表現ではなく、最後の名詞句に後接して用いられると考える。

## 7. まとめと今後の課題

本発表は「はといえば／はというと」はどのような場面で用いられ、どのような意味用法を表すのか、また「は」や「といえば／というと」とは異なる特徴を持っているのか、という問いを立て、「はといえば／はというと」の使用実態や意味用法を明らかにすることを目的とした。結論は以下の3つである。第一に、「はといえば／はというと」は言語的な先行詞を必要とし、前文脈に既出の表現を指示する。この点は「といえば／というと」と共通している。第二に、「はといえば／はというと」は既出主題名詞句の再提示を表す表現であり、主題名詞句でない名詞句から主題名詞句に切り替え、主題名詞句を再提示し再び焦点を当てる文脈で用いられる。この点は「といえば／というと」との相違点であり、「は」に置き換えにくい統語構造を自然なものとする根拠の一つでもある。第三に、「はといえば／はというと」は取り立てる事柄の切り替えを強調し、前文脈とは異なる事柄に注目を促すという表現効果がある。これは「は」より使用頻度が低い理由であると考えられる。

今後の課題として、まず「はといったら」が現代日本語でほとんど用いられない理由を明らかにする必要がある。「といったら」が持つ評価的意味を手がかりとして検討していく。また、「は、といえば／は、というと」「はどうかといえば／はどうかというと」といった形態的バリエーションが示す意味についても、用例収集の範囲を拡大して検討を行う。さらに、本発表は「はといえば／はというと」を区別せずに論じたが、両者の間に意味・用法上の違いが存在するかどうか、主題名詞句やレジスターを中心に検討することも今後の課題である。

### 参考文献

- 岩男考哲 (2016) 「引用形式を用いた提題文の主題名詞句と叙述の類型」 福田嘉一郎・建石始 (編) 『名詞類の文法』 pp. 185-202. くろしお出版  
岩男考哲 (2019) 『引用形式を含む文の諸相—叙述類型論に基づきながら—』 くろしお出版  
友松悦子・宮本淳・和栗雅子 (2010) 『改訂版 どんな時どう使う日本語表現文型500』 アルク  
日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法5 第9部とりたて 第10部主題』 くろしお出版

### 調査資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) . 国立国語研究所. <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

# 形式名詞の無助詞用法

パリハワダナ ルチラ（京都大学）

## 1. はじめに

形式名詞、すなわち、実質的な意味が稀薄化し、代わりに文法的な機能を獲得した名詞が無助詞の形で、あるいは助詞を伴って接続助詞的に機能する。寺村(1992:298)<sup>(1)</sup> はこのような形式名詞の接続助詞化について、連体修飾節の被修飾名詞の中に「本来副詞的な要素を含んでいるものがあるとき、その副詞性を利用して、前接する修飾節もろとも副詞節つまり連用修飾節として後の(主)節にかからせる」働きであると述べている。

接続助詞化が頻繁に見られるのは、助詞「に」が形式名詞に後接するときであるが、「で」、「を」、「が」「から」「へ」「の」を伴った形式名詞の接続助詞化も見られる。これらの助詞の本来の機能は、名詞句と述語動詞などの文中の他の要素との関りを示すことであり、それ故、形式名詞の接続助詞化の際にそれらの果たす役割が重要であると想定できる。そのことは、寺村(1992:307)が、助詞「で」の助けをかりて接続助詞化する名詞として「おかげ」、「せい」、「うえ」を位置付けていることから窺われる。

一方、このような助詞の助けのない無助詞用法は「形式化」すなわち、脱実質名詞化が一段と進んだ場合に見られる現象であると推察可能である。しかしながら、形式名詞の無助詞用法の実態に焦点を当てた研究は管見の限り見られない。ゆえに、本研究は形式名詞の無助詞用法を考察対象としながら、その機能を明らかにすることを目的とする。

以下の第2節では、助詞の有無による相違について考察し、第3節では無助詞形の出現状況について検討する。

## 2. 助詞の有無による相違

形式名詞が助詞を伴って現れる場合と無助詞の形で出現する場合とでは異なる機能を担うことがある<sup>(2)</sup>。その例として「あいだ」「うち」「通り」が挙げられる。以下では、全体と部分の表し分け、作用域内外の表示、並びに概数的な量や凡その程度の表現に大別して考察する。

### 2.1 全体と部分の表し分け

#### 2.1.1 期間全体の表現

時間を表す形式名詞「あいだ」の無助詞用法は、主節の事態が「あいだ」の表す期間全体において継続したことを表す(例1)<sup>(3)</sup>。一方、例2が示している通り、「あいだに」の形で、助詞「に」を伴って現れる用法では、主節の成立が従属節の期間内に起きるものとして描写される(寺村1992:141、笠松他1993:144、工藤1995:246)。

(1) わたしにとってとうてい無関心ではいられないこの謎を解こうとしながら、たっぷり

一時間のあいだ、こうした思いにふけていた。(LBt9\_00209)

(2) さあ、待ってるあいだになにか食べましょ。(LBt9\_00262)

後者において主節の出来事と従属節の出来事が部分的に重なっている。このような部分的同時性の解釈は助詞「に」の成立時点を限定する機能によるものであり、従属節と主節の接続の仕方の決定に助詞が重要な役割を果たしていることを示している。ゆえに、「に」のように一時点への限定の機能を持たない「が」や「は」を伴う「あいだ」は述語の出来事の成立時間として期間全体を表す(例 3)<sup>(4)</sup>。

(3) またランチタイム(午前十一時～十二時)とディナータイム(午後五時～閉店)の間が  
時間的にあいていたが、休憩はなく、バーも開店と同時に営業していたという。  
(LBt7\_00035)

森田(1989:16-20)が指摘しているように「あいだ」の範囲限定には二パターンがあり、その一つは例 3 のように二つの基準点に挟まれた範囲としての捉え方であり、もう一つは例 1、2 のようにある一つの状態が続いている範囲としての捉え方である。期間全体を捉える無助詞用法が見られるのは後者においてのみである。後者における範囲の把握は、一体としてのものであるからであると推察される。

以上の考察から明らかとなり、助詞「に」を伴った「あいだに」は主節の出来事の生起する時間帯を表すのみならず、助詞「に」の本来の機能を生かしつつ、主節の出来事を該当の時間帯内の任意の一時点、または一部分に限定する役割も果たしている。一方、無助詞の「あいだ」は主節が生起する時間枠として範囲全体を示す機能を果たす。すなわち、助詞の有無により、述語の出来事の時間限定の仕方が異なるのである。

#### 2.1.2 全体における部分の位置づけ

形式名詞「うち」の無助詞用法にも、助詞を伴った「うちに」にはない例 4 のような独自の用法が見られる。

(4) リユースでは、四十四の飲食店のうち8店舗が、新たに開発された生分解性プラスチック製リターナブル食器を使用しました。(OW6X\_00037)

例 4 が示している通り、この用法では、範囲全体から一部分が限定される。例 4 では「四十四の飲食店」は範囲全体であり、「8 店舗」はその中の該当部分である。範囲全体を指す表現に後接する無助詞の「うち」は、その全体の中に内包される該当部分を限定している。述語の事態は規定された部分的範囲内に限定される。

それに対して、主節の出来事が従属節の可変的な事態の成立期間以内に生起する(のが望ましい)ことを述べる用法(例 5)では形式名詞「うち」が助詞「に」を伴って出現する。同様に、従属節の出来事が反復される期間中に(例 6)、あるいは生起している期間中に(例 7)、主節の出来事が自ずと発生することを表す用法の「うち」も助詞「に」を伴う。一方、主節の出来事が発生する時間状況を設定する従属節の「うち」は例 8 のように無助詞として出現することもできる。このように、無助詞の「うち」と比べると、「うちに」の方が主節との、時間的条件付けなどの関りを表していると判断できる。

- (5) 語学の習得は若ければ若いほど早いから、留学もなるべく若いうちにするのが望ましい、という説があります。(LBm3\_00098)
- (6) 「ダメなことはないよ。練習しているうちにきっと打てるようになるから、うちにも一台、買ってほしい」(LBk2\_00044)
- (7) さらに体ごと目のものに投じているうちに、自分を忘れてしまうところまでいくと、そう、無心という境地に入ります。(PB11\_00013)
- (8) 水鳥などわずかな色彩は、かえて雪の白さを強調する。でもじっと眺めているうち、怖いと感じ始めた。(PN2b\_00002)

## 2.2 作用域の内外の表示

助詞の有無による用法の違いが形式名詞「とおり」においても見られる。「とおり」が否定述語と共起する際に、否定の作用域内外の区別は助詞「に」の有無によって示される。以下の例 9 は「～通りに」節が接辞否定の作用域内に入るものであるが、対する例 10 の「とおり」節は否定の作用域外に置かれている。つまり、「に」を伴った場合に連体修飾節の動作の様態が否定の作用を受けるのに対して、無助詞用法では、否定の作用を受けるのは主節の事態のみである。そのことは無助詞用法の「とおり」節が主節から独立していることを示している。

- (9) 仕様の変更等により、解説する手順通りに操作できないこともあります。(LBsn\_00011)

- (10) 彼女がいったとおり鍵はかかっていなかった。(LBh9\_00104)

肯定述語の場合も、「に」を伴う「とおり」節は、主節の事態を修飾し、そのあり方を描写する(例 11)。一方、無助詞の「とおり」節は、主節の事態にかからずに、例 12、13 のように、従属節内に留まりつつ、従属節の事態を描写する。

- (11) 「だから、おれは、あなたの言う通りに従ってきたじゃないか」(LBo9\_00226)

- (12) トムがいうとおり、カワウソはおぼれて息をしなくなっていた。(LBkn\_00023)

- (13) 湖上は風もなく、穏やかにみえたが、なにしろ湖といっても東西八、九里、南北十九里という大きさと、昔から遭難する舟も少なくないと聞いているので、新八郎は治助のいう通り、陸路をたどった。(PB19\_00552)

森山(2013:186)は「言う通り(に)」を例に、「彼が言う通り、私は反対している」を注釈的な用法として、「彼が言う通りに、私は反対している」を動詞修飾的な用法として位置づけている。

なお、目的を表す形式名詞「よう」には、「とおり」と異なり、無助詞用法が見られない。Kato(1985:191)が指摘している通り、助詞「に」を伴って目的を表す「ように」節は否定の作用域外に置かれる(「子供を起こさないように大きな声で話さなかった」)。

## 2.3 概数的な量や凡その程度の表現

形式名詞「ほど」の数量を概数的に示す用法は無助詞の形で表現される(例 14)。スケールの任意の点の前後を含めた概数的な位置づけである。「三時間」のような数量的な表現はそもそも無助詞の形で述語動詞の前に現れるが、その数量的な表現に「ほど」が後接し、概数的な量であ

ることを示す際も助詞を伴わない。スケールの限界点などを例示する例 15 の程度を表す用法でも「ほど」は同様に無助詞の形で現れる。「～死ぬ」のような動詞節が述語の動詞に直接かかることができない故、動詞節と動詞述語の接続は「ほど」が担っていると判断可能である。上述のような量や程度を表す「ほど」が「に」を伴って現れることができない理由は、2.1.1 で考察したように、格助詞「に」による承接は、限定の意味を伴うからであると考えられる。

一方、限度を表す用法では、「程がある」という形で助詞「が」を伴って出現する(例 16)。その際に許容される範囲の限界点としてスケールの上限が示される。「ほどがある」はコロケーション化した表現であるが、名詞としての接続であり、残されている「ほど」の名詞性を示す用法であると言える。

(14) 「ここまで来るには三時間ほどかかります。」(LBg9\_00006)

(15) 「僕は疲れましたよ。生きている連中がよく言うように、死ぬほど疲れました」と彼は遺書に書く。(LBp3\_00157)

(16) 敵に塩を送るところか、敵を相手に商売しようとは、図々しいにもほどがある。(LBi9\_00188)

以上見てきたように、形式名詞の無助詞用法における述語との関りは以下のように表現される。

- ・述語の出来事が形式名詞「あいだ」の表す期間全体において生起することを表現
- ・無助詞用法の形式名詞「とおり」は述語動詞の作用域の外に置かれるため、述語の事態の方法、あり方、様態に触れない。むしろ、従属節の事態のあり方を規定しながら、それと主節の事態の一致を表現する。
- ・形式名詞「ほど」は述語の事態の概数的量やその実現の程度を例示する役割果たしつつ、述語の事態に対して副詞的に機能する。

### 3. 無助詞形の出現状況

本節では、無助詞形が出現する文中の位置について、述語として事実的事態をとる従属節を伴う場合、副詞化した表現を伴う場合、一語化した表現を伴う場合、更には硬い文体に出現する場合に大別し、考察する。

#### 3.1 述語として事実的事態をとる従属節を伴う場合

形式名詞「ために」の無助詞形の出現率は原因・理由用法において最も多く見られる<sup>(5)</sup>(例 17)。

(17) ところが、東京の業者がシカの肉を缶詰にしてもうけようと目論見、シカを大量に捕らえたため、エゾオオカミは食べるものがなくなり絶滅してしまったのです。(PB24\_00012)

(18) 正確に大量の情報を顧客に伝えるためにビデオを活用して、インターネットで流している。(PB13\_00021)



「ため(に)」節の事態が未完了で意志的なものでなければならない目的用法(例 18)と異なり、因果の認知において主節の事態の把握は事実的で既に成立した従属節の事態を手掛かりとしてなされる(例 17)。故に、前件の事態の独立度が相対的に高く、無助詞の形が好まれると判断可能である。

形式名詞「ところ」にも同様の事実的な用法がある。無助詞用法に限定される「V たところ～」の場合も、後件の把握の手掛かりとなる「ところ」節の事態が既に成立したものであり、独立度が高い(例 19)。

(19) わけを話して相談したところ、「どうぞ会館にお越し下さい」と京都の裏千家の会館に呼ばれたのです。(LBk6\_00019)

一方、例 20 の「お忙しいところ」の場合、無助詞の形でも、助詞「を」に伴う形でもどちらも許容されるが、無助詞用法の独立性により生じる節間の断絶は、事態の進展が妨げられた(寺村 1992:333)という意味を強める役割を果たすと判断できる。

(20) きょうはお忙しいところおいでいただきまして、心から感謝申し上げます。(OM61\_00001)

(21) ばかなことを、いいあっているところに、捜査一課の課長がやってきた。(LBin\_00017)

それに対して助詞「に」を伴って現れる従属節の「ところ」は主節の生起する状況などを表現するが、主節の述語との結合度が相対的に高いと考えられる(例 21)。

以上見てきた通り、従属節の事態が事実的な事態である際に、主節への従属度が低く、無助詞形でその独立度が表現される<sup>(6)</sup>。

### 3.2 副詞化した表現を伴う場合

形式名詞「うち」が出現する表現に副詞化した「そのうち」がある。「そのうち」は無助詞の形でも(例 22)、「に」を伴ってでも(例 23)文に現れることができる。「に」を伴う「そのうちに」はより一時点に縛られている。しかし、「そのうち」は「近いうち」「近日中」といった不定の時間を表す故、具体的な一時点に縛られずに、無助詞の形で副詞的に述語の事態にかかるようになったと想定できる。このように無助詞化は「そのうち」の副詞化が進んでいることの証として捉えられる<sup>(7)</sup>。

(22) 「ま、いっか。そのうちできるようになってくれたら、うれしいけど…」(PB46\_00126)

(23) 「小さいうちから聞いていたら、もしかしたら、そのうちにわかるようになるかもしれないでしょ、だからなのよ」(PB19\_00228)

### 3.3 一語化した表現を伴う場合

形式名詞「頃」は無助詞の形で文に出現することが最も多い(前田 2012:7)。とりわけ例 24 のように先行する要素と一語化する際に無助詞の形で文に現れる。例 24 から示唆されるようにこのような「頃」は接続助詞というよりも状況語として機能している。そのことは、仁田(2002:207-229)では一部の用法を除いた「ころ」が「時の状況成分」として位置づけられていることか

らも窺える。

- (24) アメリカでは、統計学的に二千一年の七月頃、おそらく人口の十四％が六十五歳以上になると予想しました。(PB25\_00406)

上記の例の「頃」は期間を表しているが、岡崎(2018:81-83)が指摘しているとおり、「頃」には接辞的に時点を表す用法がある。助詞「に」は一時点への限定の役割を担うため、時点を表す用法において、一語化した形式でも「に」を伴って現れることがある(例 25)。また、例 25 のように述語動詞が変化を表す「なる」である際も「頃」は「に」を伴って現れる傾向が見られる。一方、時点を表す語であっても、無助詞の形で出現する一語化した例 26 のような場合もある。

- (25) 今朝、午前6時二十五分頃に日が明るくなった。(OY03\_11823)

- (26) この頃から高齢者福祉と高齢者環境の整備に政策の重点を移動する準備をしておけば、今頃慌てなくて済んだのかもしれない。(OB5X\_00137)

形式名詞「あいだ」の一語化した形式に「こないだ」がある。「こないだ」に「まで」「から」は後接できるが、基本的に例 27 のように無助詞の形で現れる。一語化したこの形式では「あいだ」の期間的な意味が薄れ、「先日」「近ごろ」といった意味を表す。

- (27) 「あっ、それ、こないだもらった方です。返してください！ こっちです、こっち」 あわてた相手は、くるみに別の名刺をにぎらせました。(LBb9\_00036)

### 3.4 硬い文体に出現する場合

3.1 で述べた通り、原因・理由を表す「ため」は無助詞の形で現れることが最も一般的である。「ため」の原因を表す用法は文章語などの硬い文体において見られることが多い(例 28)。

- (28) さらに、調査過程の公表を通じて被害者救済を図るべきだとしているが、公表は必然的にメディアに対する制裁の性格を帯びるため、行政による報道への不当な干渉につながりかねない。(PN1b\_00016)

一方、前述の通り、目的を表す用法の「ため」は「に」を伴って出現することが最も多い。しかし、無助詞の形で現れる場合もあり、その際も硬い文体において見られる(例 29)。

- (29) 近畿日本鉄道の定時株主総会では、グループ企業の資金管理を一元化するため、「金融業」を事業項目に追加する定款変更議案が承認された。(PN1d\_00021)

同様に形式名詞「よう」も硬い文体では、より改まった表現として無助詞の形で出現する(例 30)。

- (30) また、お年寄り、体のご不自由な方には席をお譲りくださいますようお願いいたします。(LBp0\_00016)

- (31) 久保田真苗君ぜひそのようにお願いします。(OM46\_00002)

以上見てきたように、従属節の独立の度合い、形式名詞表現の副詞化の度合い、並びに形式名詞表現の一語化の度合いが相対的に高い場合において無助詞形が出現する。更に、硬い文体においても無助詞形が好まれる傾向が見られる。

#### 4. おわりに

形式名詞の無助詞用法は助詞の単なる省略形ではない。無助詞であることの特徴を生かした独自の機能を獲得した用法であると結論付けられる。

その機能の一つは部分に対する全体の表示である。同様に全体における部分の位置づけもその働きとして挙げられる<sup>(8)</sup>。これらにおける〈全体〉は限定を受けないある範囲の全域を意味する。同様に、一時点に限定されない概数的量や凡その程度の表現も無助詞の形をとる。更に、否定の作用域外であることの表示も無助詞用法の役割の一つであり、無助詞形の出現により述語の縛りから解放されていることが示唆される。

無助詞用法は形式名詞の副詞化の度合いや一語化の度合いを示すバロメーターであることも示された。

無助詞用法は脱名詞化の証として捉えられるが、本研究ではその度合いについて考察できなかった。その上、本研究では形式名詞の無助詞用法を網羅的に扱うことができなかった。それらについての詳細な検討は今後の課題としたい。

#### 注

(1) 再録版より引用

(2) 刈宿(2014:148)は助詞を使った場合と使わない場合とで意味が変わる実質名詞を「無助詞名詞」と呼び、助詞を使っても使わなくても意味が変わらない実質名詞を「助詞省略名詞」と呼んでいる。一方、加藤(2003:335-347)は、助詞があつて然るべき位置に助詞を欠くことを「無助詞」と呼び、本来助詞出現可能な位置で助詞が欠落している無助詞は「ゼロ助詞」として扱っている。

(3) 「あいだ」の無助詞用法は「しばらくの間」「長い間」などの形でも見られる。なお、空間を表す「あいだ」は助詞を伴って現れることが一般的であるが、以下のような無助詞の場合も見られる。

パトロールのお兄さんがディレクターの指示でいろいろな滑りをしたのですが、木々の間数十cmをすり抜けて十m以上ジャンプして着地したときには、さすがに驚きました。(PM51\_00122)

(4) 「あいだ中」「あいだずっと」などの語彙的手段により期間全体を表すこともできる。

(5) 「ため(に)」の用法別に助詞の有無を調べたところ、原因・理由を表す例 251 中 205 は無助詞の形で出現していることがわかった。一方、目的を表す用法においては、「ため」が助詞「に」を伴って現れることが最も多く、無助詞の形は 273 例中 74 例のみであった。利益用法に至っては無助詞の形は 1 例しか見られなかった。

(6) なお、形式名詞「ほど」の場合、程度を例示する「ほど」の従属節は単なる例示である時もあれば(「死ぬほど苦しかった」(LBc9\_00114))、事実的な事態を表す時もある(「ルイもなにがなし感動を覚えて、手が痛くなるほど拍手を送った。」(LBm9\_0015))が、いずれも無助詞の形をとる。その上、事実的であると想定可能な際にも、動詞のスル形で表現され、表現機能として例示を表す。

- (7)「そうこうしている間」の意味を表す「そのうち」も助詞「に」を伴って現れることもあれば、無助詞の形で出現することもある(『日本国語大辞典(第二版)』)。
- (8)〈全体〉・〈部分〉はイメージ・スキーマの一種である(Johnson 1990:126)。イメージ・スキーマとは人間の行動、知覚や概念を体系的に捉えることを可能にするパターン化・規則化された認知図式である。

#### 参考文献

- 岡崎友子(2018)『「頃」の用法と歴史的変化—現代語・中古語を中心に—』藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院, 75-102.
- 加藤重弘(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 笠松郁子・菅原厚子・鈴木美都代・登野城ルリ子 (1993)「同時性をあらわす時間的なつきそい・あわせ文—『あいだ』と『うち』—」言語学研究会(編)『ことばの科学』6:141-177, 東京:むぎ書房.
- 刈宿紀子(2014)『「無助詞」研究の現状と課題』『学術研究 : 人文科学・社会科学編』62:147-162.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京:ひつじ書房.
- 寺村秀夫(1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その 4—」,『日本語・日本文化』7, 再録版:寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I—日本語文法偏—』くろしお出版.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 前田直子(2012)「時間節および時間句『時』『頃』の用法」『学習院大学文学部研究年報』58:1-12.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』180-186, 東京:角川書店.
- 森山卓郎(2013)「同一性を表す形式名詞『通り』について」, 藤田保幸編『形式語研究論集』177-188 和泉書院.
- Johnson, M.(1990) *The Body in the Mind*, The University of Chicago Press.
- Kato, Y.(1985) *Negative Sentences in Japanese*, Sophia Linguistica 10.

#### その他の資料

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ):  
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編(2000-2002)『日本国語大辞典(第二版)』東京:小学館.

# 日本語学と形式意味論をつなげる —GrammarXiv データベースの活用の可能性—

司会：田中英理（大阪大学）

## 概要

日本語学と形式意味論は、研究伝統や方法論の違いのため、現在まで十分な研究交流がなされてきたとは言いがたい。本パネルセッションは、「話者の知識状態」を参照するとされる談話的現象の分析を通じて、両分野の協働を促進することを目的とした試行錯誤と提言を行う。具体的には、言語学の仮説やデータを検索・共有可能な形で可視化するデータベース「GrammarXiv DB」の試作版のデモを交えて、研究知見を分野横断的に活用する可能性を幅広く検討する。発表1で背景と目的を述べたのち、2件のケーススタディを通じて実践的課題を論じる。発表2では、日本語の最上級修飾語「少なくとも」の形態意味論的特性と語用論の効果に関する研究を紹介し、記述研究を参照する際に生じた問題を考察する。発表3では、対比のハに関する共同研究を例に、日本語学の先行研究が品詞分類や独自用語に基づく点が、分野間の交流を阻む要因となりうることを指摘する。

## 全体の流れ

発表1：田中英理（大阪大学）導入・背景の説明（本発表）

発表2：水谷謙太（愛知県立大学）・井原駿（津田塾大学）最上級修飾語「少なくとも」をめぐって

発表3：窪田悠介（国立国語研究所）対比のハをめぐって

全体討論・質疑応答

## 1 背景・趣旨説明

### 本パネルディスカッションの目的

言語の意味理論、特に形式意味論における日本語研究の意義を確認した上で、形式意味論者からみた日本語学における記述研究と形式意味論研究をつなぐ際の「障壁」を提示する。この「障壁」をどのように乗り越えれば良いのかをともに考えたい。

### 形式意味論とは

- ・ 言語の形式と意味の対応関係について、要素の意味と要素の合成のあり方によって規則的に全体の意味を算出できると考える。
- ・ 言語の意味を記述するのに論理学や数学を利用する。

### 形式意味論の現在地点

**始まり** 直接的な「始祖」はR.Montagueの*The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English*. (Montague (1970)、通称PTQ)。英語、特に量化に関して、論理（様相論理）を援用した分析が可能であることを示した。英語という自然言語を一種の形式的な文法体系とみなして、統語解析とそれに対応した意味規則が与えられている。

**生成文法との関わり** B.Partee などによって統語論に N.Chomsky らの変形文法・生成文法の成果が反映され、それをもとに意味規則を与えるようになる。その成果は、現在も広く使われている Heim and Kratzer (1998) に結実している。<sup>1</sup>

**関心の移り変わり** 当初からの関心として、真理条件的な意味を構成的に算出することがあるが、1980 年代には代名詞の指示、前提などの現象によって文単位ではなくより大きな談話を扱う非真理条件的意味論（動的意味論）への展開があり、2000 年代には推意 (implicature) を含む推論によって生じるいわゆる「語用論的な」意味への関心が高まっている。

**形式意味論で扱われてきた言語現象** 量化、時制、アスペクト、様相（モダリティ）、命題態度、名詞の指示対象、段階性、疑問、焦点、前提、etc.

**形式意味論で扱われてきた言語** 英語 >> インド・ヨーロッパ語族 > 日本語、中国語 (Mandarin)、韓国語 >> ベトナム語、タイ語 …, アメリカ大陸先住民族などの少数言語の研究も行われている (L. Mathewson の研究などに代表される)。

#### 形式意味論による日本語研究の意義

- 英語を中心として構築されてきた理論であるが、目標は、個別言語の記述やそれを説明する理論ではなく、言語知識の意味理論として耐えうるような理論としていくことである。
- 意味的な普遍性に関する議論は特に 1990 年代後半から 2000 年以降に盛んになってきているように思われる (von Stechow and Mathewson (2008) を参照)。例えば、Chierchia (1998) では、名詞の意味論として次のような意味的なパラメータがあると考えている。中国語や日本語のように英語やヨーロッパ言語と体系の異なるものの理解が重要な役割を果たしている。

##### (1) Nominal Mapping Parameters ((Chierchia 1998:400))

- a. 各言語の「名詞」が冠詞を伴わずに動詞の項として生じるかどうか：[± arg]
  - b. 各言語の「名詞」が述語としても使えるかどうか：[± pred]
- (2) a. [− pred, + arg]：すべて ‘mass’ (中国語、日本語)
- b. [+ pred, + arg]： } mass/count の区別あり (ゲルマン系、スラブ系)
- c. [+ pred, − arg]： } (イタリア語、フランス語)
- d. [− pred, − arg]：名詞が述語としても項としても使えない言語はない

日本語によって意味論研究に貢献することができる現象は他にも多くあると思われる。この際、日本語学における膨大な研究の蓄積を参照することは理論研究者にとって必須である。

#### 日本語学の研究にアクセスする際の「障壁」

**目標設定の違い** 形式意味論は、特定の語彙項目や形態の研究を通じて、言語の意味の理解に重要であろうと思われる意味概念の規定やそれらがどのような法則性で得られるかといったことに関心がある。一方で、日本語学では、日本語における品詞や語彙項目の詳細な記述に重きが置かれている。

1. Heim and Kratzer (1998) は、N.Chomsky らの統率・束縛理論における LF というレベルを意味論の入力と考えている。一方で、LF を介しないで意味論を与える考えも提案されており、この方法が唯一の方法ではない。

「キーワード」になるものの違い 上記のような目標設定の違いから「キーワード」として想定するものが異なる。

用語や概念の定義のあり方 形式意味論などの理論研究では、意味概念の定義において、概念的な定義とともに操作的な定義（つまり言語的なテスト）がセットになっている。一方で、日本語学における意味概念の定義には必ずしも操作的な定義がないように思われることがあり、分野外の研究者には似たような概念同士の関係が分かりにくい。

これらの障壁を少しでも取り除き、研究対話が進められるようにしたい！

## 2 各発表について

どちらの発表にも関連するキーワード：Ignorance inference/implicature

ある言語表現を使うことによって、話し手の知識内に存在しないことを推論させる現象。

- 第一発表：「最上級修飾語「少なくとも」をめぐる」(水谷謙太氏・井原駿氏)

### 主な論点

- 意味論的普遍性という観点から
- 日本語学の知見にアクセスする際の困難さ

(3) Mary won at least a [silver]<sub>F</sub> medal.

- a. 話し手は、Mary が実際にどのメダルを取ったかということについての知識は定かではないが、銀メダル以上であるとは言える。
- b. 話し手は、Mary は金メダルがとれず、銀メダルに終わったことは知っている。銅メダルやメダルなしなどではなく銀メダルを取ることはできた（のだからよかったじゃないか）。

⇒ *at least* に対応するように思われる日本語の「少なくとも」が提示する問題について

- 第二発表：「対比のハをめぐる」(窪田悠介氏)

### 主な論点

- 用語の統一性、概念同士の関係
- 言語テストの存在（操作的な定義の可能性）

(4) 明日のパーティーには、花子は来るだろう。

*implies* → 話し手は花子以外の人がパーティーに来るかどうかは知らない。

### 3 GrammarXiv と展望

GrammarXiv プロジェクト (<https://grammarxiv.net/>)

成田広樹氏（東海大学）・窪田悠介氏（国立国語研究所）・瀧田健介氏（同志社大学）を創立・中心メンバーとして、現在五十数名が参加する言語学のデータベース構築プロジェクト。

GrammarXiv とは —

What is GrammarXiv?

GrammarXiv is a database of linguistic truths.

Truths are diverse, especially linguistic ones, and no one has a complete grasp of them (yet). Truths can also take many different forms, including professional theories, hypotheses, equations, data, figures, experiments, publications, histories, relations, explanations, etc., as well as people's intuitions, conversations, and personal beliefs. GrammarXiv collect them all and share them in the form of connected graphs, inviting users to locate their "truevotes" through the tangled web of linguistic truths.

- このデータベースは、文献で主張されている、または、前提となっている仮説間の関係や文法性判断などをデータベース化するものである。例えば、文献 A の仮説が正しいことが文献 B の説明の前提となっている場合、A と B の間に 'truevote' という関係が登録される。
- データベースを検索すると、文献間の関係や文献で使用されている概念との関係が接点と線で表されるグラフで表示される。
- このデータベースの最大の特徴は、利用者がそれらを修正・追加することができるようにする点にある。
- データベースの構築・利用・改変を通して、研究者間の議論を醸成することを目標としている。

(GrammarXiv のデモンストレーションについては、窪田氏が発表内で行う。)

#### 今後の展望（希望）

- このパネルセッションでの問題提起を契機として、いわゆる理論研究者と日本語学の研究者との対話がより有益な方向へ進むこと。
- GrammarXiv がこの対話の「ハブ」として機能する可能性があること。

#### 参考文献

- Chierchia, Gennaro. 1998. Reference to kinds across language. *Natural language Semantics* 6:339–405.
- von Stechow, Kai, and Lisa Matthewson. 2008. Universals in semantics. *The Linguistic Review* 139–201.
- Heim, Irene, and Angelika Kratzer. 1998. *Semantics in Generative Grammar*. Blackwell.
- Montague, Richard. 1970. The proper treatment of quantification in ordinary English. In *Approaches to Natural Language*, ed. K.J.J. Hintikka, J.M.E. Moravcsik, and P. Suppes, 221–242. Kluwer Academic Publishers.



# 最上級修飾語「少なくとも」をめぐって

水谷 謙太（愛知県立大学）・井原 駿（津田塾大学）

## 1 はじめに

### ■ 最上級修飾語「at least」 .....

- Nakanishi and Rullmann (2009), Chen (2018, 2024) らは、英語の最上級修飾語 (superlative modifier) 「at least」には、認識的 (epistemic) 解釈と譲歩的 (concessive) 解釈の2つがあることを指摘している。

- (1) 認識的解釈  
不知の推論 (ignorance inference) を伴う解釈

- (2) a. Mary won at least a [silver]<sub>F</sub> medal.  
b.↗ [T]he speaker is sure that Mary won either a silver medal or a gold medal, but cannot say anything more definitive. (Chen 2024:362)

- (3) 譲歩的解釈  
真であることがわかっている事象に対して、話者が最低の結果でも最高の結果でもないという評価を示す解釈。

- (4) a. Mary didn't win a gold medal, but at least she won a [silver]<sub>F</sub> medal.  
b.↗ Mary's winning silver, while less desirable than a winning a gold medal, is better than her winning a bronze. (Chen 2024:362)

- 形式意味論の分野では、「at least」が様々な論点から研究されてきた。

- (5) a. 認識的解釈における不知の推論
- 認識的解釈における不知の推論はどのような性質を持つか、またどのように導出されるか.
  - Geurts and Nouwen (2007)・Büring (2008)・Coppock and Brochhagen (2013) など
- b. 認識的解釈と譲歩的解釈の統一分析
- 認識的解釈と譲歩的解釈の両方を導出することができる統一分析は可能か.
  - Biezma (2013)・Chen (2018, 2024) など
- c. 語彙分解分析
- 「at least」を構成する要素の意味から「at least」の意味を導出することができるのか.
  - Chen (2018, 2024) など

#### ■ 最上級修飾語「少なくとも」 .....

- 日本語には、「at least」に類似した表現として「少なくとも」が存在する.
- 以下の例が示すように、「少なくとも」も「at least」と同様に認識的解釈と譲歩的解釈の両方が可能である.

- (6) a. 正確な数はわからないけど、少なくとも 10 人来た。  
 ~> 10 人来たことは確かだが、実際に何人来たかについてはわからない。  
 (認識的解釈)
- b. 金メダルは取れなかったけど、少なくとも太郎は銀メダルを取った。  
 ~> 太郎が銀メダルをとったことは事実であり、銀メダルという結果は金メダルよりは劣っているが、銅メダルよりは優れている。  
 (譲歩的解釈)

#### ■ 本発表の目的 .....

- 発表者らは、Ihara and Mizutani (2021), Mizutani and Ihara (2022), 井原・水谷 (2022) において「少なくとも」の分析を行ってきた.
- 以下では、これらの研究を概観したあと、
  - どのような興味、関心、問題意識のもとでこれらの研究を行ってきたか、
  - 発表者らの興味、関心、問題意識のもとで、日本語学の研究において蓄積されてきた様々な知見を参照しようとした際に、どのような問題に直面したか
 について議論する.

## 2 これまでの研究の概観

- Ihara and Mizutani (2021), Mizutani and Ihara (2022), 井原・水谷 (2022) では、主に以下の 2 つの問いに着目し「少なくとも」の研究を行ってきた.

## ■ 問い1: 言語間の形態・統語構造の不一致.....

- 前述したように, 「at least」と「少なくとも」は認識的解釈と譲歩的解釈を持つという点で類似している.
- しかしながら, 両者は最上級形態素を含むかどうかという点で異なっている.
- 実際, Chen (2018, 2024) は「at least」に含まれる**最上級形態素**が持つ意味を利用して, 認識的解釈と譲歩的解釈を導出する統一的分析を提案している.

### (7) 問い1: 言語間の形態・統語構造の不一致

「少なくとも」は最上級形態素を含まないにもかかわらず, 「at least」と同様に認識的解釈と譲歩的解釈を持つのはなぜか?

## ■ 問い2: 認識的用法と譲歩的用法の分布の違い.....

- 「at least」を解釈するには, 何らかのランクにもとづく尺度(scale)が利用される.
  - Coppock and Brochhagen (2013), Mendia (2022) らは尺度のタイプによらず認識的解釈が可能であることを指摘している.
  - さらに, Chen (2018) は尺度のタイプによらず譲歩的解釈が可能であることを指摘している.
- ここでは特に, 相互に排他的な尺度(mutually exclusive scale)と相互に排他的でない尺度(mutually inclusive scale)の違いに着目する.

### (8) 相互に排他的な尺度

- a. 尺度を構成する要素が同時に真にはなりえないもの.
- b. 例: 金, 銀, 銅メダルのランクにもとづく尺度
  - 「金メダルをとる」 $\succ$ 「銀メダルをとる」 $\succ$ 「銅メダルをとる」
  - 1つのトーナメントで, 1人の選手が同時に2つのメダルを獲得することはできない.

### (9) 相互に排他的でない尺度

- a. 尺度を構成する要素が同時に真になりえるもの.
- b. 例: 対象となる事物の数量の増減によって段階的に構成される尺度
  - 「太郎, 次郎, 花子が来た」 $\succ$ 「太郎, 次郎が来た」 $\succ$ 「太郎が来た」
  - 「太郎, 次郎が来たこと」と「太郎が来たこと」は同時に真になりえる.

- 以下の例が示すように、どちらのタイプの尺度であっても「at least」は認識的解釈と譲歩的解釈の両方が得られる。

#### (10) 相互に排他的な尺度

- a. John at least got a [silver]<sub>F</sub> medal. (Chen 2018:271)
- b. ✓ 認識的解釈  
話者はジョンが銀メダルか金メダルを取ったことを確信しているが、どちらかはわからない。
- c. ✓ 譲歩的解釈  
話者はジョンが銀メダルを獲ったという事実について、最低の結果でも最高の結果でもないと評価している。

#### (11) 相互に排他的でない尺度

- a. John at least hired [Adam and Bill]<sub>F</sub>. (Chen 2018:271)
- b. ✓ 認識的解釈  
話者はジョンがアダムとビルを雇ったことは確信しているが、二人に加えてさらに誰かを雇ったかはわからない。
- c. ✓ 譲歩的解釈  
話者はジョンがアダムとビルを雇ったという事実について、最低の結果でも最高の結果でもないと評価している。

- 一方、「少なくとも」の場合、尺度のタイプに応じて可能な解釈が異なる。
  - 相互に排他的でない尺度の場合、認識的解釈、譲歩的解釈のどちらの解釈も可能である。

#### (12) 認識的解釈が要求される文脈・相互に排他的でない尺度

- A: 昨日のパーティにはどれくらいの人が来たの？  
(ランク: ... > 12 > 11 > 10 > 9 > ...)
- B: 少なくとも 10 人来た。(↗ 10 人を超えて何人来たか知らない.)  
(井原・水谷 2022:150)

#### (13) 譲歩的解釈が要求される文脈・相互に排他的でない尺度

- A さんと B さん主催のパーティに期待していたより人が来なかった。
- a. A: 昨日のパーティ（の成功度）についてどう思う？  
(ランク: ... > 12 > 11 > 10 > 9 > ...)
- b. B: 少なくとも 10 人来た。(だから十分成功だよ.)  
(井原・水谷 2022:150)

- 相互に排他的な尺度の場合，認識的用法の解釈は得られず，譲歩的用法の解釈のみが得られる。

(14) 認識的解釈が要求される文脈・相互に排他的な尺度

AさんとBさんは前年度の高校3年生の進路に関するデータを集めている。

A: 花子さんはX大学・Y大学・Z大学のうちどの大学に入学したの？

(ランク: X-U.>Y-U.>Z-U.)

B: #花子は少なくともY大学に入学した。

(井原・水谷 2022:150)

(15) 譲歩的解釈が要求される文脈・相互に排他的な尺度

花子は，第一志望X大学，第二志望Y大学，第三志望Z大学であったが，第一志望のX大には落ちている。

A: 彼女の受験の結果についてどう思う？

(ランク: X-U.>Y-U.>Z-U.)

B: 花子さんは少なくともY大学に入学した。(だから十分成功だよ)

(井原・水谷 2022:150)

(16) 問い2: 認識的解釈・譲歩的解釈の分布の違い

「at least」とは異なり，「少なくとも」は認識的解釈の可否が利用する尺度のタイプに応じて変化するのはなぜか？

■ Ihara and Mizutani (2021) らの主張 .....

- 上述した2つの問いに対して，Ihara and Mizutani (2021) では以下の主張を行った。

(17) a. 主張1

「少なくとも」は英語の「even-if」条件文に類似した譲歩的条件文であり，最上級の意味は「少ない」と「even」に対応する「も」の尺度前提 (scalar presupposition) の相互作用によって得られる。

b. 主張2

「少なくとも」の認識的解釈と譲歩的解釈は，帰結節 (consequent) が含意されるかどうか異なる「even-if」条件文の2つの解釈に対応する。

- (18) a. Even if the bridge were standing, I wouldn't cross. (introduced-if)  
 ⇒ I wouldn't cross.  
 b. Even if he drank [one ounce]<sub>F</sub> of whiskey, she would fire him. (standing-if)  
 ≠ she would fire him. (Guerzoni and Lim 2007:276)

- (19) 主張3  
 相互に排他的な尺度の場合において認識的解釈が得られないのは、この  
 尺度の性質と「も」の累加前提 (additive presupposition) が相容れないか  
 らである。

### 3 研究の背景

#### ■ 意味的普遍性 (semantic universal) .....

- von Fintel and Matthewson (2008) 以降、形式意味論の分野でも通言語的な研究が行われるようになってきている。
- 発表者らは、日本語の語彙項目に関する形式意味論的研究を行うことによって、意味的普遍性 (semantic universal) の解明に貢献したいと考えている。

- (20) 意味的普遍性に関する問い
- a. 意味の中には、普遍的に語彙項目として表されるものが存在するのか？
  - b. 普遍性が確認されない意味については、それが語彙項目として表現されるかどうかにかかわらず、何らかの制約は存在するのか？  
 (von Fintel and Matthewson 2008:148)

- (21) 意味の普遍性に関する調査が進められている領域  
 名詞句、テンス・アスペクト・モダリティ、色彩語、機能的形態素、量化詞、  
 論理演算子、意味合成規則、語用論の意味のかかわる概念や現象 (前提、尺  
 度推意、会話の公理など) (cf. von Fintel and Matthewson 2008)

- 上記の意味的普遍性に関する問いを踏まえ、発表者らは以下の興味・関心から研究を行ってきた。

- (22) a. 興味・関心 1  
ある意味的・語用論的概念を表すために、通言語的に見てどのような手段、語彙項目が存在しうるのか、存在しえないのか？
- b. 興味・関心 2  
同じ意味的・語用論的概念を表すものであっても、言語ごとに可能な解釈、使用環境に違いが生じる場合があるが、それはなぜか？

#### ■ 最上級修飾語と意味的普遍性.....

- 前述した「少なくとも」に関する一連の研究は、(22)の興味・関心を反映したものである。

- (23) a. 興味・関心 1  
最上級の意味や不知の推論・譲歩性を表すために、通言語的に見てどのような手段、語彙項目が存在しうるのか、存在しえないのか？
- b. 興味・関心 2  
「at least」と「少なくとも」はともに最上級の意味と不知の推論・譲歩性を表すが、なぜ認識的解釈が可能な環境が異なるのか？

- 近年、(21)にとどまらず、最上級修飾語についてもその形態意味論的な普遍性が着目されつつある。
  - このような通言語的な多様性は明らかに無作為なものではなく、なんらかの意味的共通点に依存していると考えられる (cf. von Fintel and Matthewson (2008:170)).
  - しかしながら、最上級修飾語の研究についてはまだこの種の普遍的主張を行える段階には至っておらず、より広く意味記述を推し進めることが求められている。

#### (24) 最上級の意味を表出する手段と言語 (Chen 2018:8)

- a. 最上級形態素を利用する最上級修飾語  
*at least* (英語), *en az, en az-in-dan* (トルコ語), *zui-shao* (中国語)
- b. 比較級形態素を利用する最上級修飾語  
*kam se kam* (マガヒー語), *pomen'shej mere* (ロシア語)
- c. 条件形態素を利用する最上級修飾語  
「少なくとも」(日本語), *cek-eto* (韓国語)

- 「少なくとも」には不知の推論のような語用論的概念も付随していることから、この観点からも普遍性と類型の追求が可能である。
  - 例えば、不定名詞句 (indefinite noun phrase) や選言 (disjunction) は不知の推論を表出する点で最上級修飾語と概念的に結びつく。
- 日本語においては、対比の「は」は「少なくとも」と同様に不知の推論と譲歩性の意味を表出するため、異なる品詞の語彙項目が同様の意味的・語用論的概念を表す手段として存在していると言える。
  - これは、潜在的に異なる意味を持つ二つの語彙が、結果的に同様の効果の表出に到達している可能性を示している。
- 一方で、文法的・機能的にほとんど同様である語彙や表現が、(等しい振る舞いを示すことが期待されるにもかかわらず) 異なる振る舞いを示すことがある。
  - 第2節で取り上げた英語の「at least」と日本語の「少なくとも」の違いがこれに相当する。
  - 同じ言語内であっても、例えば英語の「at least n」と「more than n」はともに「n より大きい可能性」を含意する点で同様の意味を持つものの、「more than n」は特定の環境下で不知の推論を表さないなどの差が見られる (Nouwen 2010, Westera and Brasoveanu 2014)。

## 4 日本語学における研究との接続

- 発表者らが上記の興味・関心のもとで日本語の何らかの語彙項目、表現に関する研究を進めようとする際に、日本語学分野において蓄積されてきた研究を参照したいと思うことが多々ある。
- 特に、以下の図が示すように、上述した興味・関心1と2を踏まえ、何らかの意味論・語用論の概念がまずあり、その概念を表すものに関する記述を参照したいと考えることが多い。

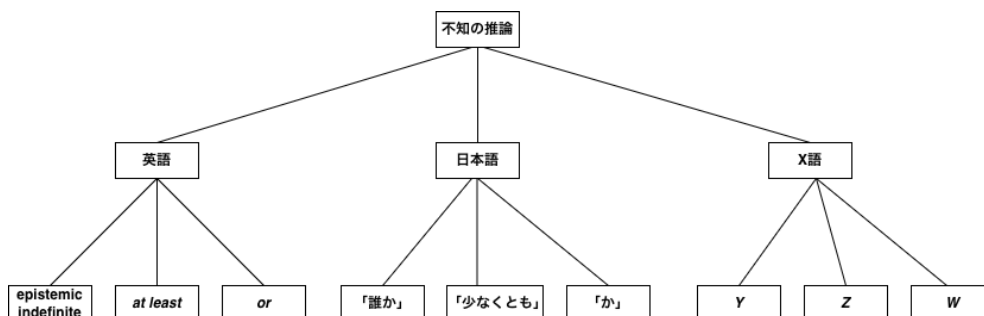


図 1: 「不知の推論」の意味概念と結びつく語彙項目



- しかし、日本語の言語表現・語彙項目のうち、不知の推論やそれに類する概念を表すものについて扱ったもの、あるいはそれらを比較したものを、日本語学の文献の中から探そうとしたが、上手くいかなかった。
- Noda (2017:131) では、工藤 (1977) において「少なくとも」をはじめとするいわゆる「とりたて副詞」が扱われているが、これらの表現の研究は極めて限定的であることが述べられている。
- また、不知の推論を表すという観点から様々な語彙項目、表現をまとめたものは、発表者らが調べた限りでは、存在しないようである。
- それゆえ、日本語には「少なくとも」以外にも不知の推論を表す語彙項目、表現が存在すると思われるが、それらに対して日本語学の分野で蓄積されてきた重要な観察に対して、隣接分野の研究者がアクセスしにくいという状況が生じている。

## 5 まとめ

- 本発表で示した事例は、特定の意味的・語用論的概念に基づく記述と分析が、日本語の言語現象の理解を深めるだけでなく、他言語との比較や関連理論への貢献という観点からも、日本語を対象とする記述研究に携わるすべての研究者にとって参照すべき価値を持つことを示唆している。
- 形式意味論の研究者にとって、日本語学における記述研究の成果を、アクセスのしにくさという不本意な事情から結果的に無視して研究を進めることは大きな損失である。
- 研究を円滑に進めるためであることは言うまでもなく、特定の母語話者集団や限定的な研究領域のみに閉じた記述とならないためにも、研究成果を相互に参照する環境を整備することが重要である。

## 参考文献

- Biezma, María. 2013. Only one *at least*: Refining the role of discourse in building alternatives. *Proceedings of Penn Linguistics Colloquium* 36:12–19.
- Büring, Daniel. 2008. The least *at least* can do. In *West Coast Conference on Formal Linguistics (WCCFL)*, volume 26, 114–120.
- Chen, Yi-Hsun. 2018. Superlative Modifiers: Ignorance and Concession. Doctoral dissertation, Rutgers University.
- Chen, Yi-Hsun. 2024. Ignorance and concession with superlative modifiers: a cross-linguistic perspective. *Linguistics and Philosophy* 47:361–400.
- Coppock, Elizabeth, and Thomas Brochhagen. 2013. Raising and resolving issues with scalar modifiers. *Semantics and Pragmatics* 6:1–57.
- von Fintel, Kai, and Lisa Matthewson. 2008. Universals in semantics. *The Linguistic Review* 25:139–201.
- Geurts, Bart, and Rick Nouwen. 2007. *At least* et al: The semantics of scalar modifiers. *Language* 83:533–559.

- Guerzoni, Elena, and Dongsik Lim. 2007. *Even if*, factivity and focus. In *Proceedings of Sinn und Bedeutung*, volume 11, 276–290.
- Ihara, Shun, and Kenta Mizutani. 2021. Superlative modifiers as concessive conditionals. In *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-isAI 2020 Workshops, JURISIN, LENLS 2020 Workshops, Virtual Event, November 15–17, 2020, Revised Selected Papers 12*, 66–81. Springer.
- Mendia, Jon Ander. 2022. Structural effects on implicature calculation. *Journal of Semantics* 39:409–442.
- Mizutani, Kenta, and Shun Ihara. 2022. Two strategies for being ‘at least’: Japanese *sukunakutomo* and English *at least*. *Japanese/Korean Linguistics* 29:393–402.
- Nakanishi, Kimiko, and Hotze Rullmann. 2009. Epistemic and concessive interpretations of *At Least*. *Talk Presented at the Canadian Linguistic Association (CLA) 2009*.
- Noda, Hisashi. 2017. Toritate: Focusing and defocusing of words, phrases, and clauses. In *Handbook of Japanese Syntax*, ed. Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda, 123–156. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Nouwen, Rick. 2010. Two kinds of modified numerals. *Semantics and Pragmatics* 3:3:1–41.
- Westera, Matthijs, and Adrian Brasoveanu. 2014. Ignorance in context: The interaction of modified numerals and quds. *Semantics and Linguistic Theory* 24:414–431.
- 井原 駿・水谷 謙太. 2022. 最上級修飾語の QuD-Sensitivity: 新グライス学派と構造理論によるアプローチ. 『日本言語学会第 164 回大会予稿集』 149-155.
- 工藤 浩. 1977. 限定副詞の機能. 『国語学と国語史』 松村明教授還暦記念会（編）. 969–989. 東京: 明治書院.

# 対比のハをめぐって

窪田悠介（国立国語研究所）

## 1 本発表の主な論点

問題意識:

- 形式意味論などの理論言語学研究と、日本語の記述研究との有益な分野の交流のためには何をするのが有効か?
- 形式意味論研究者の立場から、最近の自分の研究を通して実地に体験したことを報告する
- 第25回大会パネル「「よい」文法記述」について考える」(企画: 三好伸芳) に触発された
  - － 他分野との交流
  - － 研究実践に関するメタ的な考察

経緯、今日の話の要点:

- 日本語には意味論研究に対して貢献しうる重要な現象がいろいろある
- これらの現象に関する記述的研究の蓄積も豊富である
- だが、分野外の研究者にとってこの記述的研究の蓄積はアクセスしにくい側面がある
- 形式意味論研究者として、具体的な現象 (対比のハ) の分析を進める際に直面した問題に関して報告する
- 形式意味論と日本語学は、異なる研究伝統に根ざしており、研究の目的も異なっている
- どのような研究がどのような関連性のもとでまとまりを成しているかが大きく異なる
  - － 形式意味論: 意味的な概念や、言語普遍的な法則性の探求
  - － 日本語学: 品詞・形態や特定の語彙項目群
- 関連研究の間の関係性を分野横断的な方法で整理する方法はないか?

## 2 対比のハ

### 2.1 無知の含意 (ignorance implicature)

- 対比のハは無知の含意 (ignorance implicature)を誘発する ( Hara (2006), Tomioka (2010)) (寺村 (1991)なども参照)

1. 明日のパーティーには、花子は来るだろう。→ 花子以外については来るかどうか話者は知らない

cf.: 選言

2. 昨日のパーティーには、太郎か次郎が来るだろう。→ どちらかが来るか話者は知らない

- Hara (2006) の分析 (概略):
  - 対比のハは代替集合を想起させる (花子、道子、太郎、次郎、...、花子+道子、花子+道子+太郎、...)
  - 話者は1を発話した
  - 代替集合を用いて、より強い発話が出来たはずである
  - より強い発話をしなかったのだから、話者の知識は1に限られる
- Griceの会話の含意とfocus semanticsを組み合わせた説明

## 2.2 対比のハの「含意」

- 対比のハの含意は「無知」に限らない。(cf. Sawada (2012); 英語の *even* のスケール含意)
- 3. 銅メダルは取りたい (願望)
- 4. 銅メダルは取れるよ (可能)
- 5. (警察や先生はともかく) 親には相談すべきだ (義務)
- 6. どこに進学するのでも、英語は勉強しておいたほうがいい (目的論的)
- 7. (私と夫は殺してもいいが) 子供は助けてやってくれ (命令・依頼)
- speech act未満の「何か」の強さに関連しているように思われる
- 対比のハの含意は信念に埋め込める
- 8. 花子は太郎は試験に受かると思っていたらしい。
- 9. 花子は (フランス語や中国語はともかく) 英語は勉強し直したいと長年言っていた。
- 「無知」に限らず信念に埋め込める、この手の「含意」を会話の含意から導出できるかは自明ではない
- 可能性や望ましさに関する、当該文脈で会話参与者間で共有されている、何らかの評価・想定に関係する序列が関与しているように思われる

## 2.3 分析 (途中)

- 「 $x \wedge P$ 」の意味 (Kubota and Ido (2025))
  - 主張:  $P(x)$ 
    - \* ただし、 $P(x)$  は「裁量命題」(discretionary proposition) (Coppock (2018))
    - \* 裁量命題: 客観的事実がすべて定まったあとでも、なお真偽が確定しない命題
  - 前提:
    - \* 当該文脈における $x$ の対比集合の要素 $y$ すべて( $x$ を含む)に関して $P(y)$ が成立することを論理的に含意する、命題 $\phi$ が存在する。
    - \*  $\phi$ を共有知識として認めるかどうか、会話参与者の間で審議中である。

## 2.4 問い

- この「評価の序列」の正体は何か?
- 関連する他の現象はあるか?

### 3 関連研究を探す

#### 3.1 形式意味論

- 形式意味論の研究においては、意味的な特徴や理論的な概念を中心に研究が進む  
e.g.: 無知の含意、スケールの含意、談話構造、代替集合 (cf. 大島 (2025))

対比のハの含意と関係がありそうな意味現象の例:

- 前提・投射の意味 (Tonhauser et al. (2013), Potts (2005), Abrusán (2023))
  - 「評価の意味」は真理条件から独立しているか、その正確なステータスは何か?
  - 関連する問い: 前提投射、既知性などの性質を細かく調べる
- スケール性・極性 (Israel (1996), Horn (2017))
  - *even* の研究で言われている ‘expectation scale’ のようなものとの関係性? (*even* の含意は「前提」なのかそうではないのか?)
  - 関連する問い: 極性表現の認可条件は意味論的か、語用論的か?
- 焦点、対比 (Büring (2003), Greenberg (2018), Chen (2024))
  - 焦点の解釈との関係、代替集合の役割
  - 関連する問い: 他言語の類似現象 (英語の音調によるContrastive Topicや、他言語の *even*, *at least* などの語) との関連は? 例: ヒンディー語の *=to* (Deo (2022))
- 談話構造 (Roberts (2012), Farkas and Bruce (2010))
  - 対比のハの本質的機能は「留保」「(談話戦略としての) 和らげ」だと思われる
  - 関連する問い: 談話構造のモデルの中でこのような談話戦略的性質を捉えることができるか?

いくつかの特徴:

- 個別の現象に対して複数の切り口があり、それらがお互いに関連している
- 「前提」などの専門用語や概念については、一応の合意が存在する (もちろん、常に批判的精査がされ続けている)
- 理論的な概念の解明が主眼であり、個別の現象の詳細・完全に正確な記述自体を目指しているとは限らない

#### 3.2 日本語学

##### 3.2.1 寺村 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』

「XハP」における「ハ」の基本的な機能は、「XについてPである」ことを言うのと同時に、「～Xについて～Pである」ということ (影) を暗示し、その影との対比的な意味を生じさせるところにある。(寺村 (1991), p.41)

- 「(影)を暗示」は「評価」や「想定」のようなことと関連しそうだが、定かでない
- 「(影)を暗示」する現象というのは他にあるのか?
- (寺村 (1991)の意味での) 「対比的」な意味を表す現象というのは他にあるのか?

### 3.2.2 (隣接分野の研究者としての) 戸惑い

ここから先が難しい。

- 評価的・談話的現象を名指す一般的な用語・概念が存在しないように思われる
- そのため、以下のような(理論研究者がほとんど無自覚にやっている)論文のネットワークの探索手法が使いにくい
  - － 「そういえばこれって最近巷で流行ってる無知の含意 (ignorance implicature) と似て  
ない?」
  - － 「これ、前提っぽいけどなんか違う感じもするんだが一体何なんだろう? そういえば  
投射的意味 (projective meaning) の例の怪しげな議論ってどこまで進んでたっけ?」
  - － 「談話構造といえばRobertsのQuestion Under Discussion (QUD) 理論が有名だ  
が、最近あれを使って談話標識の研究とかしてる人っているんだろうか?」
- 個別の語彙項目に関する研究は探せばたいてい見つかる。だが用語の問題が立ちはだかる
  - － それぞれの現象の特徴の記述が、論者独自の用語によってなされている
  - － 「前提」のような理論の文献で定着している用語と文字面が同じ用語が用いられてい  
る場合、理論的な概念と必ずしも同一でない

### 3.2.3 いくつかの具体例

工藤 (1977) 「限定副詞の機能」

10. ばかに若くみえるね。少くともハワイあたりから帰つて来た手品師くらみには踏めます  
ぜ。

[10.] の「少くとも」は、「ハワイあたりから帰って来た手品師」や「二三度」の部分  
を、〈最低限の見積り〉として取りだすことを表わしている (工藤 (1977/2016), p.91;  
強調引用者)

森本 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』

11. 練習しても、練習しなくても、どうせジョンは勝つだろう。

「どうせ」は、次のような、話し手の認識を担う。[1] ある行為に関係する現在の状  
況に、ある一定の判断評価を与えられるということ。...[3] この既定性を前提にする  
と、対応可能なことの範囲は限定されているということ (森本 (1994), p.129; 強調引  
用者)

沼田 (1986) 「とりたて詞」(『いわゆる日本語助詞の研究』)

12. A. 君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう。 B. いや、ビールくらい飲むよ。

[12.] の「くらい」は「ビール」を自者としている。そしてAの / (2) ビールも、ビー  
ル以外—例えばウィスキーやウォッカなどの強い酒—も飲まないだろう。 / という  
否定的な評価に対して、「他の強い酒は飲まなくても」最低限の「ビール」は、 / (3)  
ビールを飲む。 / と自者を述語句「飲む」に対し肯定するのである。従って、...他  
者否定という期待を含みとする (沼田 (1986), p.210, 原文では / の部分で改行; 強調  
引用者)

寺村 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』

「XナドP」が、「xについてPである(XがPする)ことが、真実、あるいは自分の思いからとんでもなくかけはなれたことだ」ということを表すとして、そのような発話を動機づけるものとしてどういう状況が考えられるだろうか。これまでの多くの例を見返して考えてみると、話し手の頭のなかになにか非常に＜高い存在＞があって、それとの関連で、Xのように＜低い＞ものがPすることが思いもよらないことだ、というのが典型的な場合のようである。(寺村 (1991), p.188)

13. こんな奴、坊主なんかじゃありませんや。(→\*坊主なんかです)
14. 貧乏人の俸は、大学なんか卒業できないからな。
15. 匂いのない生物なんかあるはずはないんだが。

澤田 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』

定義3: 「EXPECT値」(EXPECT値をE値と略すことがある)

「EXPECT値」とは、話し手が、表現時以前の聞き手との共通知識から、対照集合の要素が、命題関数を満たすことに関して、期待・予測する主観的な評価の度合である。話し手は、聞き手も同様のE値をもつと仮定する。「EXPECT 値のスケール」とは、対照集合の要素を EXPECT 値の大きい順から小さい順に並べた順序集合である。(澤田 (2017), pp.15-16)

定義4: PREFER値 (PREFER値をP値と略す場合がある)

「PREFER値」とは、話し手が、話し手自身の価値判断によって、提示した要素がその文脈で問題となっている命題を満たす要素として、適切であると評価する度合いである。話し手は聞き手が同様のP値を持つとは仮定しない。PREFER値のスケールとは、話し手が対照集合の要素をP値の大きい順から小さい順に並べた順序列である。(澤田 (2017), p.146)

井戸 (2023) 『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』

態度表示タイプのナド・ナンカ

態度表示タイプの「Pナンカ/ナド Q」は、先行文脈で導入された命題「PがR」を参照して、認識主体がPについて、「Rするのに不適切である」「Rしない／すべきでない／してほしくない」という趣旨の否定的態度を、Qを用いて表示しているときに用いられる。(井戸 (2023), p.66; 強調引用者)

3.2.4 ここから見えてくること

用語の乱立とテストの不在

- 「見積り」、「話し手の認識」、「既定性」、「期待」、「価値判断」、「否定的な評価」、「適切であると評価」、「否定的態度」...
- 操作的テストが与えられることは稀 (cf. 前提投射テスト、否定極性下方含意テスト)

- 品詞別、あるいは語群別に研究がまとまりを成している (?)
  - － 品詞分類を横断する形で研究が行われることは極めて稀
  - － 例: 談話構造を参照した「評価的意味」に関する知見は、文献の海の中に細切れの形で散在。品詞に分断され、さらに個別の項目に分断されている。
    - \* 副詞: 「所詮」「やはり」「結局」「まさしく」(工藤 (1977)、森本 (1994) など)
    - \* 取りたて詞: 「くらい」「なんか」「こそ」(沼田 (1986)、安部 (1999)、澤田 (2007)、井戸 (2023) など)

## 考察

- 用語の統一や操作的テストの強要は、分野のあり方を考えると現実的ではない?
- とはいえ、基本的な概念や用語があまりにも属人化されていると、若い世代や異分野からの参入障壁となる
- 特に以下の点でハードルが高い
  - － 個々の研究の関連性が見えにくい
  - － 分野全体としてどういう営みを行っているのか、何がゴールなのかが分かりにくい

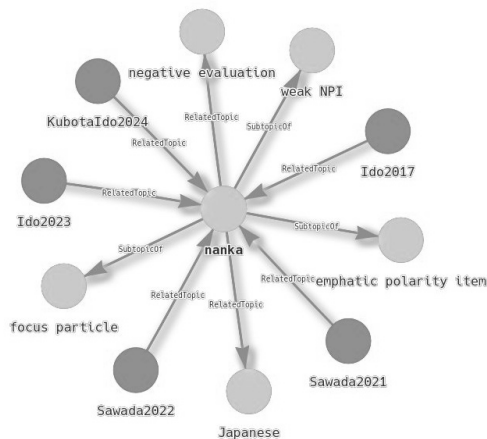
## 提案

- 現象の緩やかな一般化のレベルである程度のまとまりを作ることができると見通しが良くなるのではないか?
- 個別の現象と用語を紐付け、用語同士も関連性を明示的に紐付けることができれば、ミッシング・リンクの発見につながるかも

## 4 GrammarXivの可能性

事例: ナンカの極性的な意味について

「ナンカ」という特定の語彙項目と文献、現象群、一般化との対応





[illegible]

## 参考文献

- 安部朋世. 1999. 「『とりたて』のクライ文の意味分析」『筑波日本語研究』4, 1–15
- Abrusán, Márta. 2023. The perspective-sensitivity of presuppositions. *Mind and Language* 38:584–603.
- Büring, Daniel. 2003. On D-trees, beans, and B-accent. *Linguistics and Philosophy* 26(5):511–545.
- Chen, Yi-Hsun. 2024. Ignorance and concession with superlative modifiers: a cross-linguistic perspective. *Linguistics and Philosophy* 47:361–400.
- Coppock, Elizabeth. 2018. Outlook-based semantics. *Linguistics and Philosophy* 41:125–164.
- Deo, Ashwini. 2022. Could be stronger: Raising and resolving questions with Hindi *=to*. *Language* 98:716–748.
- Farkas, Donka and Kim Bruce. 2010. On reacting to assertions and polar questions. *Journal of Semantics* 27:81–118.
- Greenberg, Yael. 2018. A revised, gradability-based semantics for *even*. *Natural Language Semantics* 26:51–83.
- Hara, Yurie. 2006. *Grammar of knowledge representation: Japanese discourse items at interfaces*. Ph.D. thesis, University of Delaware.
- Horn, Laurence. 2017. *Almost et al.*: Scalar adverbs revisited. In C. Lee, F. Kiefer, and M. Krifka, eds., *Contrastiveness in Information Structure, Alternatives and Scalar Implicatures*, 283–304. Heidelberg: Springer.
- 井戸美里. 2023. 『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』くろしお出版
- Israel, Michael. 1996. Polarity sensitivity as lexical semantics. *Linguistics and Philosophy* 19:619–666.
- Kubota, Yusuke and Misato Ido. 2025. Contrastive *wa* operates on outlooks. Paper presented at the 32nd Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 32), Cornell University, Ithaca, NY.
- 工藤浩. 1977. 「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と言語史』969–986、明治書院 (工藤浩. 2016. 『副詞と文』ひつじ書房に再録)
- 森本順子. 1994. 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 沼田善子. 1986. 「取り立て詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 大島デヴィッド義和. 2025. 「現代日本語の尺度的累加量化詞について: 類推・添加・最低条件用法の再考」日本語文法学会第26回大会口頭発表
- Potts, Christopher. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Roberts, Craige. 2012. Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics* 5(6):1–69. Reprinted from Jae-Hak Yoon and Andreas Kathol, eds., (1996) *Papers in Semantics: Ohio State University Working Papers in Linguistics*, vol. 49.
- 澤田美恵子. 2007. 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- Sawada, Osamu. 2012. The Japanese contrastive *wa*: A mirror image of EVEN. In *Proceedings of Berkeley Linguistic Society* 33, 374–387.
- 寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版
- Tomioka, Satoshi. 2010. Contrastive topics operate on speech acts. In C. Fery and M. Zimmermann, eds., *Information Structure from Theoretical, Typological and Experimental Perspectives*, 115–138. Oxford: Oxford University Press.
- Tonhauser, Judith, David Beaver, Craige Roberts, and Mandy Simons. 2013. Toward a taxonomy of projective content. *Language* 89(1):66–109.

# 方言におけるノダ相当形式の対照研究

野田春美（神戸学院大学）

江口 正（福岡大学）

田附敏尚（神戸松蔭大学）

野間純平（島根大学）

## 本パネルセッションの構成

野田春美「本パネルセッションの趣旨と概要」 (20 分)

江口 正「ノダ相当形式にコンピュータが現れにくい方言—福岡県福岡市方言—」 (20 分)

田附敏尚「複数のノダ相当形式がある方言—青森県五所川原市方言—」 (25 分)

野間純平「ノのない方言における「ノダ文」

—山梨県早川町奈良田方言・島根県出雲市平田方言—」 (25 分)

ディスカッション (30 分)

## 上記以外の研究メンバーと担当地域

中田一志（大阪大学、山口県宇部市担当）

小西いずみ（東京大学、山梨県早川町奈良田・富山県富山市担当）

林 淳子（東京大学） 范 一楠（横浜国立大学）

※ 江口は大阪府大分市も担当、野間は大阪も担当。

---

## 本パネルセッションの趣旨と概要

野田春美（神戸学院大学）

### 1. 背景と目的

標準語のノダに相当する方言形式を取り上げ、異同を論じる。（便宜上、ノダ相当形式と呼ぶが、機能や性質には異なりが見られ、必ずしもノダと同じ機能をもつわけではない。）

#### 1-1. 標準語のノダ（基本的に野田（1997）に基づく）

- ・「のだ」は文を名詞文の形にすることから、既に定まった事態として示す性質をもつ。

（1）[発話時の意志を述べる場合]

＊「じゃあ、私が {行きます／\*行くんです}」

- ・否定などのスコープを広げ、事態の成立以外の部分を焦点にする機能がある。ただし、肯定で文末に現れる場合は、モダリティ形式としての性質も兼ねる。

（2）仕事で行ったんじゃない。遊びで行ったんだ。

- ・モダリティ形式としての用法は、[提示／把握] と関係づけの有無で4つに分けられる。

表 1 2つの軸によるモダリティのノダの分類

	提示（野田（1997）の対人的）	把握（野田（1997）の対事的）
関係づけ	状況や先行文脈の事情・意味を既定の事態として提示	状況や先行文脈の事情・意味を既定の事態として把握
非関係づけ	既定の事態として提示	既定の事態として把握

・把握の用法では、ダが必須である（野田（1993）（私信：井上優）、野田（1997））。

（3） あの人、来ないね。きっと忙しいん{んだ／??の}。

## 1－2. 方言のノダ相当形式に関する先行研究

・井上（2006）では、ノダ相当形式に、活用のある形式と、活用のない形式がある場合、活用のない形式の意味は実情説明（本発表の「提示」）に特化されることが指摘されている。井上（2006）は自身による富山県南砺市井波方言の観察と、松丸（1999）による京都方言の例、村田（2003）による宮崎方言の例を合わせて表2のようにまとめている。

表 2 井上（2006）による実情説明（本発表の「提示」）と実情理解（本発表の「把握」）

	共通語	京都市方言		井波方言		宮崎方言	
実情説明	のだ。	ネン。	ノヤ。	ガイ（ゲー）。		ト。	
実情理解						チャ。	

本発表ではコピュラの有無を重視し、コピュラを含むノダ相当形式と、含まないノダ相当形式がある場合、把握用法ではコピュラを含む形だけが使われることを、以下、「把握用法におけるコピュラの必須性」と呼ぶ。

## 1－3. 研究の目的

次の点を明らかにする。

- ①「把握用法におけるコピュラの必須性」の検証
- ②否定などのスコープは、ノダ相当形式で表されるか
- ③関係づけのほうが非関係づけよりノダ相当形式が使われやすいか
- ④既定性を表すノダの性質はノダ相当形式でも同じか
- ⑤そのほか、方言による違いはあるか

## 2. 調査項目

（小西ほか（2024）の調査票をもとに本研究用に改編。以下、本パネルセッションに関する項目のみ。）

【平叙文のスコープの「の（だ）」】（ただし、肯定文文末では提示や把握も兼ねる）

- 1・2（「太郎、来るんでしょ？」）太郎が来るんじゃないよ。花子が来るんだよ。
- 3・4（あの皿は）太郎が割ったんじゃないよ。花子が割ったんだよ。
- 5（「太郎、風邪ひいたらしいよ」）じゃあ、今日は太郎じゃなくて、花子が来るんだろう。
- 6（行事を中止して）雨が降ったからやめたんじゃないよ。
- 7（行事が中止になったと聞いて）きっと雨が降ったからやめたんだろう。

【疑問文】

- 8 (担当者が1人来ることになっていて) 今日は誰が来るの? (スコープ)
- 9 (担当者が1人来ることになっていて) 今日は花子が来るの? (スコープ)
- 10 どうして遅れたの? (スコープ+関係づけ)
- 11 雨が降ったから遅れたの? (スコープ+関係づけ)
- 12 (道で友達に会って) どこに行くの? (スコープ+関係づけ)
- 13 (道で友達に会って) 仕事に行くの? (スコープ+関係づけ)
- 14 (「きのうは遊びに行ったよ」) どこに行ったの? (スコープ)
- 15 (「きのうは遊びに行ったよ」) 新宿に行ったの? (スコープ)
- 16 (咳をしている人に) 風邪ひいてるの? (関係づけ)
- 17 (知人のお祝いの会に、知らない人が混じっていて) あの人、誰なの? (関係づけ)
- 18 (知人のお祝いの会に、知らない人が混じっていて)  
あの人、あなたの知り合いなの? (関係づけ)
- 19 昨日の飲み会、行ったの? (非関係づけ)
- 20 (会合の後に皆で食事に行くことが急に決まったとき、一緒に行く一人に)  
じゃあ、どこに行く? (ノダ無、判断)
- 21 (会合の後に皆で食事に行くことが急に決まったとき、一緒に行く一人に)  
じゃあ、駅前の中華の店に行く? (ノダ無、判断)
- 22 (本の表紙について意見を聞くつもりで) この表紙、どう思う? (ノダ無、判断)
- 23 10年前に一緒に温泉に行ったこと、覚えている? (ノダ無、判断)

【関係づけ】

- 24 私、明日は来ないよ。(「なんで?」)  
ちょっと用事があるんだ(よ)。(提示、話し手の事情)
- 25 (「昨日、どうして来なかったの?」) 用事があつたんだ(よ)。(提示、話し手の事情)
- 26 (「花子はどうしたの?」)  
花子は今いないよ。[お客さん]に呼ばれてるんだ(よ)。(提示、事情・知識)
- 27 (「花子はどうしたの?」)  
さっき出ていくのが見えたから、たぶん買い物に行ってるんだ(よ)。  
(提示、事情・発話時以前の推論)
- 28 (「花子はどうしたの?」)  
あ、いないね。たぶん買い物に行ってるんだ(よ)。(提示、事情・推論)
- 29 (「花子はどうしたの?」)  
あれ、いないね。あ、そうだ。思い出した。花子は買い物に行ってるんだよ。  
(提示、事情・思い出)
- 30 (大声を出している人に) おまえはいつもうるさいんだ(よ)。(提示、一般化)
- 31 この店は木曜から土曜まで休みだよ。つまり、週に4日しか開いてないんだ。  
(提示、換言)
- 32 (独り言で) あれ、花子がいらないなあ。たぶん買い物に行ってるんだ。(把握、事情・推論)

33 (独り言で) あれ、花子がいらない。あ、そうだった。思い出した。花子は買い物に行ってるんだ。(把握、事情・思い出し)

34 (「ここには誰も住んでいないよ」と言われて)  
ふーん、空き家なんだ。(把握、聞き手からの情報の換言)

35 (建物も庭も荒れた様子の家を見て)  
たぶん空き家なんだ。(把握、事情・推論)

#### 〔関係づけと非関係づけの境界、把握における対人意識の有無〕

36 (友達の本棚を見て独り言で)  
こんなにたくさん本があるんだ。(非関係づけ、把握、眼前の事態)

37 (友達の本棚を見て、友達に向かって)  
こんなにたくさん本があるんだ。(非関係づけ、把握(対人意識)、眼前の事態)

38 (友達の本棚を見て独り言で)  
こんなにたくさん本を読むんだ。(関係づけ、把握、推論)

39 (友達の本棚を見て、友達に向かって)  
こんなにたくさん本を読むんだ。(関係づけ、把握(対人意識)、推論)

40 (テレビがつかない原因を探していて、独り言で)  
あ、コンセントが抜けていたんだ。(関係づけ、把握、眼前の事態～推論)

41 (友達とテレビがつかない原因を探していて)  
あ、わかった。コンセントが抜けていた {んだ／んだよ}。  
(関係づけ、把握(対人意識)、眼前の事態～推論)

#### 〔非関係づけ〕

42 (さぼったんだろうと言われて) 違うんだ。誤解だよ！ (提示、聞き手と異なる認識)

43 (電車に乗る前に、子どもに)  
電車の中では静かにする {の／んだ／んです} よ。(提示、典型的な教示)

44 赤いライトが点いたら、このスイッチを押す {んだ／んだよ／のよ}。  
(提示(命令・教示的)、矛盾非考慮・非即時)

45 さあ、このスイッチを押すんだ！ (提示(命令)、矛盾非考慮・即時)

46 何をしている。早くスイッチを押すんだ。(提示(命令)、矛盾考慮・即時)

47 じゃあ、次回は赤いライトが点いたらこのスイッチを押すんだよ↑。  
(提示(命令)、矛盾考慮・非即時)

48 そんなこと言うんじゃない。(提示(禁止))

49 (親に向かって) 僕、今日は絶対徹夜するんだ。(提示、意志の表明)

50 (独り言で) 今日は絶対徹夜するんだ。(把握、意志の自己確認)

51 (唐突に) 実は私、留学するんだ。(「え？ いつから？ どこに？」)(提示、話題冒頭)

52 あ、思い出した。今日は花子が来る {んだ／んだった}。(把握、想起ノダ・ノダッタ)

53 こんなことなら、早く出発するんだった。(把握、後悔ノダッタ)

54 あの時、あんなこと言うんじゃないかった。(把握、後悔ンジャナカッタ)

55 こんなことなら、早く出発するんだった。(把握、後悔ノダッタ)

#### 4. 調査結果の概要

表3 対照の概要（発表対象に下線）

	標準語	準体助詞（+コピュラ）	準体助詞+コピュラ その他の形式 が併存	準体助詞なし
ス コー プ	ノ	ト（福岡） ガダ（富山） ソ（ジャ）・ホ（ジャ）（宇部） ンヤ・ンジャ（大分）	ンダ・ンズ（五所川原） ンヤ・ネン（大阪）	ドー（奈良田） <u>ダナイ否定のみ</u> （平田）
提 示	ノダ ノ	ト（福岡） ガ（富山） ソ（ジャ）・ホ（ジャ）（宇部） ンヤ・ンジャ（大分）	ンダ・ンズ（五所川原） ンヤ・ネヤ・ネン（大阪）	ドー（奈良田） <u>ダ限定的（平田）</u>
把 握	ノダ	トタイ（福岡） ガダ（富山） ンジャ（宇部） ンヤ・ンジャ（大分）	ンダ（五所川原） ンヤ・ネヤ（大阪）	ドー・ヅラ （奈良田） <u>ダ（平田）</u>
疑 問	ノ ノデスカ	ト（福岡） ガ（ケ）（富山） ソ（カ）・ホ（カ）（宇部） ン（カ・カエ）（大分）	ンズ（+ガ・ナ）ンダガ・ ンダナ（五所川原） ン（カ）・ネン（詰問） （大阪）	<u>〇（カ）、ヅラ（カ）、</u> <u>ラ（カ）（奈良田）</u> <u>ダ（限定的）（平田）</u>

##### ① 「把握用法におけるコピュラの必須性」の検証と関連する問題

準体助詞をもつ方言では基本的に、その傾向がある。ただし、コピュラではなく終助詞が必須となる方言もある（⇒江口発表）。また、五所川原市方言では提示でコピュラを含まない形（ンズ）が使えない場合がある（⇒田附発表）。一方、大阪方言では把握用法（事情の思い出し）でコピュラを含まない形（ネン）が使える場合がある。

33（独り言で）

あれ、花子がいらない。あ、そうだった。思い出した。花子は買い物に行ってるんだ。

イッテンネン（大阪）

準体助詞のない方言では、提示用法でコピュラが現れるかは方言による（⇒野間発表）。

36-41 で、把握用法において対人意識の有無によってノダ相当形式の使用に違いがあるかを見たが、明らかな違いはなかった。把握用法で対人意識のある文は「こんなにたくさん本を読むの？」といった疑問文と連続するため、その観点からの考察もさらに必要である。

38（友達の本棚を見て独り言で）／39（友達の本棚を見て、友達に向かって）

こんなにたくさん本を読むんだ。

（38・39 いずれも） ヨム {ンダ／\*ンズ} 〈五所川原〉

##### ②否定などのスコープは、ノダ相当形式で表されるか

スコープの項目は7方言（準体助詞をもたない平田方言以外）でノダ相当形式が使われる。

1（「太郎、来るんでしょ？」）太郎が来るんじやないよ。花子が来るんだよ。

クルツチャナカ〈福岡〉

##### ③関係づけのほうが非関係づけよりノダ相当形式が使われやすいか

標準語でノダ文の典型とされやすい関係づけ・提示の平叙文は、24・25は8方言すべてで、26～31は準体助詞をもつ6方言すべてでノダ相当形式が使われている。

24 私、明日は来ないよ。（「なんで？」）ちょっと用事があるんだ（よ）。

アルンズ〈五所川原〉

非関係づけではノダ相当形式の使用は項目による。8 方言で使が見られるのは、既定性を明示する必要性が高いと考えられる次のような項目である。

44 赤いライトが点いたら、このスイッチを押す {んだ／んだよ／のよ}。（教示的・非即時）

オスドーヨ〈奈良田〉

52 あ、思い出した。今日は花子が来る {んだ／んだった}。（想起）

クル {ンヤ・ンジャ／ンヤッタ・ンジャッタ}〈大分〉

55 こんなことなら、早く出発するんだった。（後悔）

デルダッタ〈平田〉

一方、非関係づけで多くの方言でノダ相当形式が使われない項目は次のようなものである。

46 何をしている。早くスイッチを押すんだ。（命令・即時）

50（独り言で）今日は絶対徹夜するんだ。（意志の自己確認）

46ではノダ相当形式より命令形などが選ばれやすい可能性がある。50も、そもそも標準語でノダがどの程度使われるのかに疑問が生じる。方言の調査結果から、標準語のノダについても各用法の使用状況などを見直す必要があることが示唆された。

#### ④既定性を表すノダの性質はノダ相当形式でも同じか

その場での判断を問う、標準語でノダを用いない疑問文（20-23）では、ノダ相当形式も用いられないこと、教示や想起・後悔のように既定性の明示が重要な文（③参照）ではノダ相当形式が用いられやすいことなどから、基本的には標準語と共通していると考えられる。

#### ⑤そのほか、方言による違いはあるか

名詞述語文でノダ相当形式が現れにくい方言がある。（⇒江口発表、野間発表）

準体助詞のない方言では、疑問文でノダ相当形式と対応しにくい。（⇒野間発表）

#### 参考文献（全体に関連するもののみ）

井上優（2006）「第4章 モダリティ」佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂

『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店, pp. 137-178

小西いづみほか（2024）「日琉方言の準体形式:調査票とデータ集」

<https://doi.org/10.5281/zenodo.10849165>

野田春美（1993）「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる」『日本語学』12-11, 明治書院, pp. 43-50

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

松丸真大（1999）「京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1, pp. 61-73

村田真美（2003）「宮崎方言の「チャ」と「ト」」『阪大日本語研究』15, pp. 109-129

付記 本パネルセッションは科学研究費補助金基盤研究（C）「ノダと方言におけるノダ相当形式の対照研究」（課題番号 22K00598、代表者：野田春美）による成果の一部である。



## ノダ相当形式にコピュラが現れにくい方言—福岡県福岡市方言—

江口 正（福岡大学）

### 0 はじめに

九州西部の肥筑方言はノダの「ノ」にあたる形式が「ト」あるいは「ツ」を使う地域である。福岡市方言は「ト」を使う地域であるが、他の肥筑方言と同様、ノダの「ダ」にあたるコピュラ（断定形式）を言い切りでは使うことができない。これは名詞述語文の非過去言い切り形でコピュラが生起できないという当該方言の制約によるものである。日本全国の方言におけるコピュラの生起について調査した白岩ら（2016:108）では、以下のように記されている。

- (1) 繫辞による文終止の頻度は近畿以東の方言では高いが、それより西では低くなる。特に肥筑方言では繫辞による文終止の例が見られない。

野田（1997）ではノダ文において「ノ」単独で終わる場合と「ノダ」で終わる場合とで用法が異なることが指摘された。本パネルセッションではその観察を方言に広げ、「把握用法におけるコピュラの必須性」と呼んでいる。福岡市方言は「ノダ」に直接対応する形式が存在しないため、この制約が働くかどうか、働いた場合どのように対応しているかが問題になる。第1節ではその点を扱う。

本方言でのノダ文の問題点はもう1つある。それは、名詞述語文でトをつかったノダ文を作ることが困難であるということである。第2節では文法体系に特定の品詞で「空き」があるということについて問題の整理を行う<sup>1</sup>。

### 1 把握用法とコピュラのない方言の関係について

野田（1997:68）はノとノダの使い分けについて、次のように述べている。

- (2) 対事的「のだ」は「の」「んです」といった形はとりにくい。「の」や「んです」は、聞き手が存在するときに、その聞き手を意識して選ばれる形である。「の」は、女性が同等か目下の聞き手と話すときに用いられ、「んです」は、男女ともに、目上の人やあまり親しくない聞き手に話すときに用いられる。対事的「のだ」は聞き手の存在を前提とせずに用いられるので、このような聞き手を意識した形はとらない。

共通語の「の」で終わる文は福岡市方言のトで終止する文と形式的に対応する。「聞き手を意識した」とは本パネルセッションの例文でいえば「提示」の文である。福岡市方言で提

---

<sup>1</sup> 本発表のデータは65歳の福岡市方言話者への対面調査と、学生およびその親世代へのアンケート調査のデータをもとにしている。

示用法は、ト終止用法で表現できる<sup>2</sup>。

(3) 私、明日は来ないよ。(「なんで?」) ちょっと用事が[アルト]。(あるんだ(よ)) 24

(4) (「昨日、どうして来なかったの?」) 用事が[アッタト]。(あったんだ(よ)) 25

(5) (「花子はどうしたの?」)

あれ、いないね。あ、そうだ。思い出した。花子は買い物に[イットート]

(行っているんだよ)。29

また、聞き手に問いかける疑問文もト終止の典型的な例である。

(6) (担当者が1人来ることになっていて) 今日は誰が[クルト]? (来るの) 8

(7) 雨が降ったから[オクレタト]? (遅れたの) 11

なお、福岡市方言の単独のトは共通語のノ単独終止とは違って女性的なニュアンスはなく、また非丁寧であるという以上のぞんざいさもない。

一方、「把握」の文は「ト」終止では不自然である。終助詞(以下では「タイ」)を補うことで自然になる。

(8) (独り言で) あれ、花子がいらないなあ。たぶん買い物に{\*イットート/イットッタイ}。

(行ってるんだ) 32

(9) (独り言で) あれ、花子がいらない。あ、そうだった。思い出した。

花子は買い物に[イットート/イットッタイ]。(行ってるんだ) 33

(10) (友達の本棚を見て独り言で)

こんなにたくさん本が[\*アルト/アルッタイ。] (あるんだ) 36

(11) (テレビが見つからない原因を探していて、独り言で)

あ、コンセントが[\*ヌケトッタト/ヌケトッタッタイ] (抜けていたんだ) 40

(12) (友達とテレビが見つからない原因を探していて)

あ、わかった。コンセントが[\*ヌケトッタト/ヌケトッタッタイ] 41

平塚(2024)は、トとトタイ(ッタイ)の使用実態を調査し、若年層では対事的モード(把握)ではタイの使用が義務的になりつつあると指摘している。

本パネルセッションでは「把握用法におけるコピュラの必須性」に注目している。上記の現象を見ると、コピュラが存在しない福岡市方言ではコピュラではなく終助詞が必須になる条件と見ることができる。ただし、本方言のノダ文に対応する表現では、タイだけでなく他の終助詞が必要になることがある。特にタイは疑問文では用いられないため、自問の文で

---

<sup>2</sup> 例文の最後にある番号は、野田発表の例文番号である。

はタイ以外の終助詞類が用いられる。

(13) (独り言で) どうしてそんなことを したんだ

[\*シタト/\*シタッタイ/シタトカ (イナ)]

先に挙げた (1) ~ (5) のト終止の文には、終助詞の意味的性質は加わるものの、タイを付加することが可能である。しかし (6) (7) は疑問文であるため、タイは付加できず、終助詞を付加するとしたら疑問「ヤ・ネ・カ・カイナ」などになる。

また、終助詞ヤンが把握の文で用いられることもある。タイ・ヤンともに終助詞であり、それぞれのニュアンスは異なる。

(14) (テレビが見つからない原因を探していて、独り言で)

あ、コンセントが[ヌケトッタッチャン] (ツチャン=ト+ヤン) 40

以上のように、福岡市方言では把握用法で必須になるのはコピュラではなく、文脈に合った終助詞である。つまり、[準体助詞 vs 準体助詞+コピュラ]という対立だけでなく、広く[準体助詞 vs 準体助詞+終助詞等有標形式]という対立軸で考える必要があることになる<sup>3</sup>。

ここで問題になるのは、共通語のノ終止文と本方言のト終止文の文法上の位置づけの違いである。本方言のト終止文は、コピュラあるいは終助詞がない形式が無標である。一方、共通語のノ終止文は通常コピュラで終止する名詞述語文にコピュラが付いていない形式であり、普通の文終止の形とは異なる有標な形式といえる。女性的な表現になっているのもその有標性が関わっていると思われる。有標・無標という見方で共通語のノ vs ノダの対立を考えると、ノ終止文は有標な形式であるため用法の幅が狭く、ノダ終止文のほうが無標な形式であるため用法の幅が広いと見ることは不自然ではない。しかし福岡市方言ではト終止が無標であるにもかかわらず、用法の幅では共通語のノ終止と同様に狭くなっている。このことについては有標・無標の説明法では説明できない。もし仮に「把握用法におけるコピュラの必須性」が多くの方言に見られる制約であるのなら、それをどう説明するのかという点が問題になるが、それが問題になるとき、福岡市方言のようなト終止が無標な方言の存在は無視できないものである。この問題については今後さらに研究を進める必要がある。

## 2. 名詞述語ノダ文の不存在について

共通語における名詞述語のノダ文は以下のような形式になっている。

(15) 学生①+な②+の③+だ④

前節では福岡市方言のノダ文におけるコピュラ④の不在と、それに関係する用法上の制約を扱った。本節では①の名詞と③の準体助詞の間に入る連体形②が存在しない点を扱う。

<sup>3</sup> 江口 (2017) でも同様の観察を行った。

これも肥筑方言に広く見られる制約であり、方言文法研究会編の『全国方言文法辞典資料集』では長崎県佐世保市宇久町方言、佐賀県武雄市北方方言、福岡県柳川市方言、長崎県雲仙市南串山町鬼池方言でいずれも名詞述語の「のだ形」について、該当する形はないとされている。同資料集で福岡市方言については以下のような記述がある。

- (16) 伝統的な福岡市方言では、名詞はのだ形をもたない。しかしながら、中年層以下では名詞に直接準体助詞「ト」のついた「学生ト」などが用いられ、のだ形をもつようになっている。これは60代以上の話者ではほとんど聞かれることはない。(平塚 (2014 : 134))

「のだ形をもたない」というのは、名詞にトをつなげる連体形②のような形式もなく、60代以上では直接つなげることもできないということである。福岡市の60代以上の伝統方言話者には名詞述語のノダ文は存在しないことになるが、これは体系に一部「抜け」があることになる。これは他の肥筑方言でも同様である。名詞述語文に見られるこの「抜け」はどう考えればよいだろうか。

名詞述語文に関して、坪内 (1995) が挙げた終助詞ヤンの例を以下に挙げる。(p.27)

- (17) あ、わかった。太郎は学生ヤン！(気づき)

これは本パネルセッションの「把握」の用法に入れられるものである。この例は「太郎は学生なんだ」と非常に近い関係にあるため、名詞述語ノダ文が「名詞＋終助詞」で代替できる可能性があることを示している。そこで、いくつかの名詞述語ノダ文を終助詞付きの文で表現できるか確認する<sup>4</sup>。

- (18) あの人、誰なの？      ≡      誰 {ヨ／ヤ／ネ／ナ} ？ 17

- (19) (「ここには誰もいないよ」と言われて)

ふーん、空き家なんだ      ≡      空き家 {カ／ネ} 34

- (20) (建物も庭も荒れた様子の家を見て) たぶん空き家なんだ。      空き家 {タイ／ヤン}

- (21) 私、明日は来ないよ。(「なんで?」) 歯医者なんだ(よ)。

≡      歯医者 {タイ／ヤン} (24 を名詞文に)

- (22) 実は私、学生なんだ。      ≡      学生 {タイ／ヤン}

終助詞の違いによるニュアンスの違いはあるものの、断定的文であればタイ・ヤン、問いかけ疑問文であればヤ・ネ・ナ、納得や疑念の文であればカを使うことでほぼモダリティのノ

---

<sup>4</sup> 平塚雄亮 (2024) が指摘するように名詞に直接終助詞が続くのは伝統方言形である。

ダ文に対応する名詞述語文になるように思われる。

しかし全てのノダ文が名詞＋終助詞で表せるわけではない。どうしても表現できないのは、述語以外に焦点があるスコープのノダ文である。

(23) どうしてあの人はまだ平社員なんだ。      ≠      平社員 {ヤン／タイ／カ}

(24) あの人が問題なのではない。      ≠      問題 {ヤナイ／ヤナカ}

これらは統語論的にノダ文にする必要があるものであるが、終助詞による意味的操作だけでは作れないようである。モダリティの名詞述語ノダ文は終助詞を使って代替できるが、スコープのノダ文は準体助詞を使わず名詞述語のまま文を作ろうとする限り対応することができないことになる。

このように見てくると、名詞述語ノダ文が作れないことは体系全体に関わるような問題というより、特定の文パターンにおいてだけ問題になることがわかる。

### 3. まとめ

福岡市方言の準体助詞トを使ったノダ文にはコピュラが生起できない。本発表ではそのことと「把握用法におけるコピュラの必須性」との関係を確認し、コピュラでなく終助詞が対応していることを示した。また、名詞述語のノダ文が文法的に作れない仕組みであることについて確認したが、モダリティのノダについては終助詞で対応していることを示した。これらの観察は、伝統的方言ではノダ文（ト文）において終助詞が重要な働きを持っていたことを示している。平塚（2024）のいうように終助詞の働きが弱くなってきた福岡市方言は伝統方言とどれくらいシステム上の違いがあるか、丁寧に観察していく必要がある。

### 参考文献

- 江口正（2017）「準体形式・断定辞の機能と条件文」有田節子編『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷—』pp.33-58. くろしお出版
- 白岩広之・平塚雄亮・酒井雅史（2016）「繫辞生起の方言差」『日本語文法』16(2) pp. 94-10.
- 坪内佐智世（1995）「福岡市博多方言における「だ」相当助詞に現れるモダリティ」『KLS』15, pp. 25-35, 関西言語学会
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 平塚雄亮（2014）「福岡県福岡市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』, pp.125-134.
- 平塚雄亮（2019）「福岡市方言の準体助詞にみられる言語変化」『中京大学文学会論叢』5, pp.71-88.
- 平塚雄亮（2024）「方言の言語変化と維持—福岡市方言の終助詞タイを例に—」『方言の研究』10, pp.53-72, 日本方言研究会

## 複数のノダ相当形式がある方言―青森県五所川原市方言―

田附 敏尚（神戸松蔭大学）

### 1. はじめに

青森県五所川原市方言では、ノダ相当形式としてンダとンズという2形式が主に使われる。ンダは共通語同様、準体助詞「の」＋コピュラだと考えられる。一方のンズは形式名詞「奴（やつ）」に由来すると考えられており、コピュラがついていない形式である。次の例のように、コピュラをつけると非文となる。

- (1) （「昨日、どうして来なかったの？」）用事があった {ンズ／\*ンズダ}。  
(25：提示、話し手の事情)<sup>1</sup>

ここから、ンダがコピュラあり、ンズがコピュラなしの形式であると言える。本発表では、まずはこれらの用法を、以下に詳しく見ていくこととする。文法の適格性判断は、五所川原市方言話者である発表者の内省による<sup>2</sup>。

### 2. 把握用法

#### 2. 1. 典型的な把握用法

まず、把握用法から見ていこう。

把握用法は、話し手がそれまで認識していなかった事態を発話時に把握するものであり、必ずしも聞き手を必要としないものである<sup>3</sup>。そこで、独り言の例を見ると、以下のようにンダはOKだがンズはNGであることがわかる。

- (2) （独り言で）あれ、花子がいらないなあ。たぶん買い物に行ってる {ンダ／\*ンズ}。  
(32：把握、事情・推論)
- (3) （独り言で）あれ、花子がいらない。あ、そうだった。思い出した。花子は買い物に行ってる {ンダ／\*ンズ}。  
(33：把握、事情・思い出し)
- (4) （友達の本棚を見て独り言で）こんなにたくさん本を読む {ンダ／\*ンズ}。  
(38：関係づけ、把握、推論)
- (5) （テレビが見つからない原因を探していて、独り言で）  
あ、コンセントが抜けていた {ンダ／\*ンズ}。(40：関係づけ、把握、眼前の事態～推論)

---

<sup>1</sup> 本発表内の例文は1から通し番号を付すが、本研究で用いている調査項目に関しては、例文末に（例文番号：項目名）として載せておく。詳しくは野田発表を参照。

<sup>2</sup> ここでは本研究の調査項目を基に検討しているが、詳細については田附（2006）も参照されたい。

<sup>3</sup> 野田（1997：80）の対事的ムードの「のだ」を参照。

## 2. 2. 対人意識のある把握用法

把握用法は、必ずしも聞き手を必要としないということであって、聞き手がいてはいけ  
ないわけではない。そこで、把握用法でも対人意識がある例文を見てみると、以下のよう  
にこれらの例でもンズはNGであることがわかる。

- (6) (友達の本棚を見て、友達に向かって) こんなにたくさん本を読む {ンダ/\*ンズ}。

(39: 関係づけ、把握 (対人意識)、推論)

- (7) (友達とテレビが見つからない原因を探していて)

あ、わかった。コンセントが抜けていた {ンダ/\*ンズ}。

(41: 関係づけ、把握 (対人意識)、眼前の事態～推論)

このように、五所川原市方言は対人意識の有無にかかわらず「把握用法におけるコピュ  
ラの必須性」という原則にもれなく当てはまっていることがわかる。

## 3. 提示用法

### 3. 1. 典型的な提示用法

それでは提示用法ではどうだろうか。まずは、聞き手は認識していないが話し手は認識  
している事態を提示する<sup>4</sup>という典型的な提示用法の例をあげる。

- (8) (「昨日、どうして来なかったの?」) 用事があった {ンダ/ンズ}。

(25: 提示、話し手の事情)

- (9) (「花子はどうしたの?」) 花子は今いないよ。[お客さん]に呼ばれてる {ンダ/ンズ}。

(26: 提示、事情・知識)

- (10) (唐突に) 実は私、留学する {ンダ/ンズ} (「え? いつから? どこに?」)

(51: 提示、話題冒頭)

(8)～(10)からわかるように、典型的な提示用法ではンダもンズも用いることができる (た  
だし、ンズのほうが用いやすく、ンダは終助詞がつくか、イントネーション的な操作があ  
るほうが座りが良い。イントネーションについては後述)。

### 3. 2. 推論などを伴う提示用法

提示用法であっても、話し手の知識ではなく、話し手の推論や、あるいはその場で思い  
出した事態を提示する場合がある。以下のような例である。

---

<sup>4</sup> 野田 (1997: 91) の対人的ムードの「のだ」を参照。

(11) (「花子はどうしたの?」)

さっき出ていくのが見えたから、たぶん買い物に行ってる {ンダ/\*ンズ}。

(27: 提示、事情・発話時以前の推論)

(12) (「花子はどうしたの?」) あ、いないね。たぶん買い物に行ってる {ンダ/\*ンズ}。

(28: 提示、事情・推論)

(13) (「花子はどうしたの?」)

あれ、いないね。あ、そうだ。思い出した。花子は買い物に行ってる {ンダ/\*ンズ}。

(29: 提示、事情・思い出)

(11)~(13)を見るとわかるように、このような例だと、ンズがNGとなる。これらは、話し手の事態の把握を伴っている点で対人意識のある把握用法(2.2.)と隣接するものであり、ンズはそのような把握を伴うものに使うことができないということがわかる。

### 3. 3. さらなる提示用法の内実

ここまでの例は、大雑把に提示用法か把握用法か、その中間に位置するものか、という視点だったが、共通語や他方言において典型的に提示用法だと解されるものでも、五所川原市方言のンズでは言えない(14)のようなものが存在する。類例として、(15)も掲載する。

(14) (大声を出している人に) おまえはいつもうるさい {ンダネ/\*ンズ}。

(30: 提示、一般化)

(15) A1: 昨日パチンコに行ったら負けちゃってさあ。

B1: いくら負けたの?

A2: 3万円。

B2: そんなことしてるから月末金がなくなる {ンダ/\*ンズ}。

(田附 2006: 64-65 より改変)

(14)や(15)は、当然聞き手が認識していないと話し手が判断しているから伝えているのだろうが、聞き手が認識している可能性も排除できない。あるいは聞き手は認識しているかもしれないがあえて伝えているのかもしれない。このようなものは五所川原市方言のンズでは言い表すことができない。

また、以下の(16)(17)は、共通語では「のだ」のあとに終助詞「よ」<sup>5</sup>が後接するものである。この「よ」は「やさしく教えて相手の反応を求める」(郡 2020: 169)のものであり、これらの場面では行為要求となっているが、このような文でも「ンズ」はNGとなる。

---

<sup>5</sup> よは上昇イントネーション(疑問型上昇調)を表す。上昇の幅は無段階にさまざまであるが、便宜上一括して示す。



- (16) (電車に乗る前に、子どもに) 電車の中では静かにする {ンダ/\*ンズ}。  
(43: 提示、典型的な教示)
- (17) 赤いライトが点いたら、このスイッチを押す {ンダ/\*ンズ}。  
(44: 提示 (命令・教示的)、矛盾非考慮・非即時)

これらと(8)~(10)の違いは何か。それは、知識を一方的に伝達している文か否かという点にありそうである。(8)~(10)はまさに聞き手の知らないこと(知識)を一方的に伝達するものである。一方で(14)~(17)はそうではない。(14)(15)で伝えていることは聞き手が知らない知識とは言えないし、(16)(17)に代表されるような行為要求や認識要求、あるいは反応をうかがうようなものは一方的な伝達とは言えない。このようなものがンズでは言い表すことができないのである。

#### 4. 大阪方言との対照

さて、ここまでで青森県五所川原市方言のンズは、提示用法の中でも知識を一方的に伝達する用法に特化した形式であることがわかった。

ここで、同様に複数のノダ相当形式がある方言である大阪方言と対照させて見てみよう。大阪方言のネン (テン)<sup>6</sup>と五所川原市方言のンズは、何がどのように違うのだろうか<sup>7</sup>。

##### 4. 1. 提示用法

ここまで取り上げてきたものを列挙する。まずは提示用法から。

- (18) (「昨日、どうして来なかったの?」) 用事があっテン。(25: 提示、話し手の事情)
- (19) (唐突に) 実は私、留学するネン (「え? いつから? どこに?」)  
(51: 提示、話題冒頭)
- (20) (大声を出している人に) おまえはいつもうるさいネン。(30: 提示、一般化)
- (21) (電車に乗る前に、子どもに) 電車の中では静かにする {??ネン/ネンデ}。  
(43: 提示、典型的な教示)
- (22) (「花子はどうしたの?」)  
あ、いないね。たぶん買い物に行ってる {??ネン/ネンワ}。(28: 提示、事情・推論)
- (23) (「花子はどうしたの?」)  
あれ、いないね。あ、そうだ。思い出した。花子は買い物に行ってる {ネン/ネンワ}。  
(29: 提示、事情・思い出し)

<sup>6</sup> 大阪方言のノダ相当形式ネンは、伝統的には過去形に接続することがなく、その場合はテンという形式が用いられる。例: 今学校行って {\*きたネン/きてン}

<sup>7</sup> 本発表では調査項目を基に検討しているが、詳細については野間 (2013, 2019) なども参照されたい。

(18)(19)は知識を伝達する用法だが、これは大阪方言のネンも OK となっており、おそらくこの用法がコピュラなしの形式の典型的な用法なのではないかと考えられる。

(20)は聞き手が認識している可能性がある事態を提示するものだが、これは OK となっており、五所川原市方言とは異なる判定となっている。行為要求をしている(21)は NG であり、この点は五所川原市方言と同様である。

推論を伴う提示用法は、五所川原市方言は NG だったが、大阪方言では(22)が NG、(23)が OK と判定が分かれる。これについて野間氏は、その場での判断を表す(22)は NG だが、一度知識として自分の中にあったものを思い出して述べる(23)は OK となるという解釈を示している。その場での判断かどうか判定の分かれ目となっている点で、五所川原市方言とは別の基準を持つことがわかる。

#### 4. 2. 把握用法

では、把握用法はどうだろうか。

(24) (友達の本棚を見て、友達に向かって) こんなにたくさん本を読む {\*ネン／ネンナ}。

(39：関係づけ、把握 (対人意識)、推論)

(25) (独り言で) \*あれ、花子がいらないなあ。たぶん買い物に行ってるネン。

(32：把握、事情・推論)

(26) (独り言で) あれ、花子がいらない。あ、そうだった。思い出した。花子は買い物に行ってるネン。

(33：把握、事情・思い出)

(27) (友達の本棚を見て独り言で) \*こんなにたくさん本を読むネン。

(38：関係づけ、把握、推論)

(24)は対人意識のあるものであり、対人意識のない(27)と対になっているが、いずれもネン単独では NG となっている。(22)が NG であったことも併せて考えると、対人意識の有無、把握用法か提示用法かに関わらず、とにかくその場での判断を伴うとコピュラなしの形式は NG となるということが言える。そしてこれは、五所川原市方言と同じである。

一方で、推論を伴う提示用法の(22)と(23)の違いが、把握用法の(25)と(26)にもみられることは特筆すべき点かもしれない。(26)はこれまで把握用法の典型例の一つと考えられてきたように思うが、野間氏によると、(23)同様、一度知識として自分の中に取り入れているものはネンで言えるということである。

今回は、どのような文脈でこれが OK になるかの精査は発表者にはできていない。さらに詳細に調べることで、五所川原市方言のンズによって典型的な提示用法が分かれたように、現時点で「典型的な把握用法」としているものが、内実の異なるものであることが明らかにされる可能性もある。

## 5. (いったん) まとめ

ここまで、今回の調査項目を基に、五所川原市方言のンズ、ンダの用法を整理し、また大阪方言と対照させて見てきた。ここから、提示用法と把握用法について連続的に見てみると、表1の枠組みが仮設できる。

今回見てきた内容に沿って考えると、A.が典型的な提示用法、D.の把握のほう  
が典型的な把握用法であると考えられ、  
その間にいくつかの段階がある枠組みと  
なっている。そして、五所川原市方言のン  
ズはA.とB.の間に、大阪方言のネンはC.  
とD.の間にその用法上の境界があると言

える。ただし、C.とD.は同じ枠に提示と把握が両方とも入っており、つまるところここでは当初設定していた提示と把握という枠組みは機能しておらず、それよりも「思い出し」か「その場での判断」かのほうが優先されているということがわかる。

では、提示と把握という枠組みは不要なのかと言えば、決してそうではない。ンズが使用可能なA.の範囲がンズにおける「提示」であり、ネンが使用可能なA.～C.の範囲がネンにおける「提示」であって、各地域の各型式でその線引きや基準のあり様が異なっているのではないか。今のところ発表者はそのように考えている。

今回の結果から、その方言が何を基準としているかが異なることが示唆された。さらに対象を増やすことで、これらの枠組みがバラバラなのか、いくつかかにまとめられるのか、見えてくることになるだろう。

表1：五所川原市方言と大阪方言のコピュラなしの形式の比較

	ンズ	ネン
A.知識を一方向的に伝達する提示	○	○
B.聞き手が認識している 可能性のある事態の提示	×	○
C.思い出しを伴う提示／把握	×	○
D.その場での判断を 伴う提示／把握	×	×

## 6. 提示用法におけるンズとンダの違い

さて、ところで、提示用法において五所川原市方言ではンズもンダも使うことができる文脈が存在する。このとき、ンズとンダは何か違いがあるのか、というのは気になるところである。最後にその点についての観察を述べる。

田附 (2013) では、五所川原市の談話資料において、ンズやンダがどのように用いられているかを調査した。その結果、表2にあるように、平叙文のンダは上昇調をとることが多いが、対して、ンズは決して平叙文では上昇調

表2：ンダとンズのイントネーション

	上昇調	下降調	総計
ンダ	12	2	14
ンズ	0	15	15
総計	12	17	29

を取ることはなく、基本的には自然下降調であることがわかった<sup>8</sup>。この取り得るイントネーションの差が、提示用法におけるンズとンダの違いであると言える。

文末イントネーションの捉え方は研究者によって多少異なるが、ここで言う上昇調は郡 (2020) の「疑問型上昇調」、下降調は「無音調」ということになるだろう。郡 (2020) は裸の文末で疑問型上昇調を使うのは、(1)答えを求めるとき、(2)反応を求めたり注目を引

<sup>8</sup> ンズが上昇調になると、疑問文と解される。

くとき、(3)とまどいの気持ちを表すという3つの場面に大きく分けられるとする(p.139)。無音調については「意味的には中立、つまり何も意味をつけ加えない言いかた」(p.160)であるという。この文末イントネーションの機能の説明は共通語の裸の(終助詞などがつかない)文末という限定がかかっているが、これは五所川原市方言のノダ相当形式のイントネーションの記述にも援用できる。

ここでいったんイントネーションを対他性の有無という観点で見ると、上昇調(疑問型上昇調)には回答要求や反応要求、注意喚起といった対他性が見られるのに対し、下降調(無音調)はその点で無標であり、対他性は見られないということになる。

それでは形式の持つ対他性はどうかという点、五所川原市方言のンダは、それ自体対他性を有していないと考えられる。それゆえ、ンダが提示で使われる場合には、上昇調をとることによって対他性を表示し、そこに反応要求や注意喚起といった機能を併せ持つことになる。典型的には(15)～(17)のような教示をしたり反応を求めたりするものでは、上昇調は必須となる。(8)～(10)のンダも、用いるとすれば上昇調がとられ、ンズとは異なるニュアンスを表すのである。一方、(2)～(7)の把握用法や(11)～(13)の推論を伴う提示用法のンダは下降調となり、対他性は表示されない。このようなンダに対して、ンズはそれ自体が対他性を有していると考え、無標である下降調でも言い切り、知識を伝達するという機能が発せられるのだと解釈できる。

他の方言においても、同じ用法に2形式がある場合があり、そこに何らかの違いが存在する可能性がある。これを端緒として、探っていく必要がある。

## 7. おわりに

本発表では、複数のノダ相当形式がある方言のうち、青森県五所川原市方言に焦点を当て、特にコピュラなしの形式であるンズが、提示用法の中でも知識を一方的に伝達する用法に特化した形式であることを示した。また、同じく複数のノダ相当形式がある大阪方言のネンと五所川原市方言のンズを比較し、その異同も示した。さらに一歩踏み込んで、同一方言内に存在する複数のノダ相当形式が同じ用法で用いられるときの違いは何なのかにも着目すると、違いが見出せる可能性を指摘した。

## 参考文献

- 郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用—』大修館書店
- 田附敏尚(2006)「青森県五所川原市方言の文末形式「ンズ」」『国語学研究』45, pp.61-72
- 田附敏尚(2013)「青森県五所川原市方言の「のだ」相当形式「ンダ」「ンズ」の相違」『国語研究』76, pp.41-59
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野間純平(2013)「大阪方言におけるノダ相当表現—ノヤからネンへの変遷に注目して—」『阪大日本語研究』25, pp.53-73
- 野間純平(2019)「大阪方言の平叙文における「ネンナ」—「ネン」に固有の意味特徴—」『阪大社会言語学研究ノート』16, pp.35-54

# ノのない方言における「ノダ文」

—山梨県早川町奈良田方言・島根県出雲市平田方言—<sup>1</sup>

野間 純平（島根大学）

## 1. はじめに

本パネルセッションの主題である「ノダ相当形式」は、準体助詞（+コピュラ）がもとになった文末形式である。一方、以下のように、コピュラが準体助詞を介さずに名詞以外の述語につくことができる方言も存在する。

(1) ナカナカ ナオラン ダ。(なかなかおらないよ。)

(神部 1982: 236 より、出雲南部の例)

このような方言は「ゼロ準体助詞型方言」などと呼ばれ（彦坂 2006）、主に中部地方や山陰地方に分布していることが知られている（大西 2013）。

本発表では、このような「行くダ」型の表現を便宜的に「ダ形」と呼び、ダ形を持つ方言として、山梨県早川町奈良田方言（以下「奈良田方言」）と島根県出雲市平田方言（以下「平田方言」）を取り上げる。そして、同じダ形を持つ方言の中にも多様性があることを示す。

## 2. 先行研究と問題のありか

### 2.1. 先行研究

多くの先行研究では、この「行くダ」は連体形準体法の残存として、「行くノダ」と並行的にとらえられている。大西（2013）では、たとえば次の（2）のような例が存在することを示し、このような例もまた連体形準体法の残存であることを指摘している。

(2) ソレコサ ソレガ コメオ ヒクガ エライダヨ

(それこそ それが 米を 挽くが 大変なのだよ。) 山梨県塩山市中荻原

(国立国語研究所『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第8巻』) このような見方は他の先行研究においてもおおむね一致しており、個別の方言記述においても「用言+ダ」は「用言+ノダ」に対応するものとして記述されている（佐々木 2022:67、小西ほか 2022:128 など）。

一方で、杉浦（2005）は、ゼロ準体助詞型方言における「用言+コピュラ」が先行研究においてしばしばノダ文に相当すると記述されることに対して、以下の（3）から（5）を問題点として指摘している。

(3) その方言におけるその形式が共通語の「ノダ」にあたるという判断は、方言の話し手もしくは調査者が直観もしくは文脈から下したものである。

(4) その形式が見られる環境すべてにおいて、共通語の「ノダ」にあたるのかについて

<sup>1</sup> 本発表は、JSPS 科研費 22K00598、25K04120、25H00472 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」による成果の一部である。

て、十分な検証がない。

(5) 共通語の「ノダ」の性質の検討がない。

(以上、杉浦 2005:7)

これを踏まえて杉浦 (2005) では、談話資料に現れた「用言+コピュラ」の用例を環境ごとに分けてノダに相当するか否かを検討している。しかし、検討しているのはあくまで談話資料に現れた例のみであり、(4) のように「その形式が見られる環境すべて」をカバーしているとは言いがたい。また、杉浦自身も述べているように、(5) の問題は未解決である。

## 2.2. 本研究の立場

そこで、本研究では、共通調査票を用いてエリシテーション調査を行う（以下の例文における〈 〉内の数字は、野田発表で示された例文番号に対応する）。つまり、標準語のノダ文を当該方言に訳してもらい、そこにダ形が使用できるか否かを記述する。つまり、ダ形がどのような意味を表すかではなく、標準語のノダに当たる意味を表すのにどのような表現が用いられ、そこにダ形がどのように参加するかを明らかにするのである。これにより、(5) の問題にアプローチすることができる。

そして、本発表では、パネルセッションのテーマである「ノダ相当形式の多様性」のうち、「ノのない方言の中の多様性」を示す。そのために取り上げるのが奈良田方言と平田方言であり、それぞれの平叙文および疑問文における「ノダ相当の文」である。

## 3. 奈良田方言におけるダ形と「ノダ文」

まずは、奈良田方言のダ形とノダ文との対応関係について、小西いずみ氏の調査結果および奈良田方言の文法概説である小西ほか (2022) にもとづいて記述する。奈良田方言は、山梨県南巨摩郡早川町の北端の集落である奈良田で用いられる方言で、周囲の山梨県西部方言とは異なった体系を持つことが知られている。

### 3.1. コピュラとダ形

奈良田方言におけるコピュラの基本形は「ドー (=doo)」および「ダ (=da)」である。ドーのほうが優勢だが、ダとの用法差はない (小西ほか 2022:109)。

(6) ソリャー オイシノ {カシドーヨ／カシダヨ}。

それはあなたの菓子だよ。

奈良田方言では、このコピュラが用言にも後接し、形式上「ノダ」に対応するダ形を作る。

(7) シャテーカ° ナイテールドーヨ。

(「さっきから外を見てどうしたの?」と聞かれて)

弟が泣いているんだよ。

なお、名詞述語のダ形、すなわち「名詞+なのだ」に対応する形はない。

(8) ソーカー アキヤドーナー。

(「ここには誰も住んでいないよ」と言われて)

そうか。空き家なんだな (lit. 空き家だな)。

### 3.2. 平叙文

奈良田方言の平叙文では、ノダにおおむねダ形が対応する。以下の(9)(10)は、焦点のスコープを述語以外に広げる用法のノダに相当するダ形の例である。「ジャーナイ」はコピーの否定形（おそらく「デワナイ」の縮約）である。

- (9) タローガ サラー ワットージャー ナイヨ。 ハナコガ ワットードーヨ。  
太郎が皿を割ったんじゃないよ。花子が割ったんだよ。〈3・4〉
- (10) アメガ フットーデ ヤメトージャー ナイヨ。  
雨が降ったからやめたんじゃないよ 〈6〉

次に、モダリティとしてのノダの用法について述べる。以下の例のように、事態を既定のものとして提示する提示用法においてもダ形が用いられる。(11)や(12)のように、先行発話や文脈に関係づける場合も、(13)のように関係づけない場合もダ形が用いられる。

- (11) オリヤー アシタ コノーヨ。 ヨージカ° アルドーヨ。  
俺は明日来ないよ。用事があるんだよ。〈24〉
- (12) ヨージカ° アットードーヨ。

(昨日どうして来なかったのか聞かれて) 用事があったんだよ。〈25〉

- (13) オリヤー キニョー コーフイ イットードーヨ ソシタイバ

(昨日の出来事を話しはじめる) 昨日、甲府に行ったんだよね。そしたら、同様に、以下の(14)のように、把握用法でもダ形が用いられる。

- (14) コノ スイッチオ オスドーナ。  
(独り言で) このスイッチを押すんだな。

### 3.3. 疑問文

次に、疑問文におけるノダとダ形の対応について記述する。奈良田方言の疑問文については、おおむね小西(2022)にもとづいている。ここでは、そのうちノダと関係する内容についてまとめる(例文の音調記号は省略する)。

奈良田方言の疑問文においては、標準語のノ有り疑問文・ノ無し疑問文のどちらに対応する場合も、述語は非ダ形になる。以下の(15)は発話時における聞き手の判断を問うている文であり、標準語ではノ無し疑問文で表現される。一方、(16)は発話時には既定とされる聞き手の知識を問うている文であり、標準語ではノ有り疑問文が好まれる。奈良田方言では、どちらの場合も、述語がダ形ではない。

- (15) コリョー {クー／クーカ}。  
(目の前の料理を指さして) これ食べる？
- (16) オイシャー シコ° トニ {イクー／イクカ}。

(道で友達に会って) あなたは仕事に {??行く／行くの}？

同様のことは疑問詞疑問文についても言える。(17)はノ無し疑問文が、(18)はノ有り疑問文がそれぞれ好まれる疑問詞疑問文だが、奈良田方言ではどちらも非ダ形が用いられる。さ

らに、(19)のように、標準語では特にノ有り疑問文が好まれる「なぜ」の疑問文においても、やはり非ダ形が用いられる。

(17) オイシャー ナニオ クー。

(食堂でメニューを渡しながら) あなたは何を食べる？

(18) オイシャー ドコイ {イクー／イクカ}。

(道で友達に会い) あなたはどこに行くの？

(19) ナゼ コノ マダー アイテルー。

どうしてこの窓は {?開いている／開いているの} ？

以上の例から、奈良田方言の疑問文においては、標準語のノ有り・ノ無し疑問文の区別がダ形・非ダ形の対立と対応しているわけではないことがわかる。ただし、ノ有り疑問文に当たる文を、推量形「ヅラカ」を用いて表すことはできる。この「ヅラ」は標準語の「のだろう」に相当する形式であり、自問形式であった「ヅラカ」が問いかけ用法まで拡張されたものと考えられる。

(20) アメガ フルデ {セノー／セノーカ／セノーヅラカ}

雨が降るから (運動会を) {\*しない／\*しないか／しないの} ？

なお、以下の例のように、疑問文でダ形が用いられることはあるが、これらは主文末においては優勢な形式ではないという。

(21) アノ サツマイモデ ヨイダカ。

あのサツマイモでいいの？

#### 4. 平田方言におけるダ形と「ノダ文」

次に、平田方言のダ形とノダ文の関係について、発表者が行った調査および文法概説である野間・友定 (2022) にもとづいて記述する。平田方言は、島根県東部の出雲地区のうち、北部に位置する出雲市平田地区 (2005 年まで平田市) で話される方言である。

##### 4.1. コピュラとダ形

平田方言におけるコピュラの基本形は「ダ (=da)」である。

(22) オラノ オヤジワ イシャダ。

俺のおやじは医者だ。

平田方言では、このコピュラが用言にも後接し、ダ形を作る。

(23) ウワー コゲン イッパイ ホンガ アーダノー。

(友達の本棚を見て独り言で) こんなにたくさん本があるんだ。〈36〉

なお、奈良田方言と同様に、「名詞+なのだ」に対応する形はない。

##### 4.2. 平叙文

平田方言の平叙文では、ノダに相当する箇所ではダ形が必ずしも用いられない。(24) (25) が示すように、否定のスコープを述語以外に広げる場合は、否定形「ダナイ」が用いられる



が、(24) の 2 文めのように、肯定の場合はダ形が現れない傾向がある。

- (24) アノ サラ タローガ ワッタダ ネジ。 ハナコガ ワッタジ。  
あの皿は太郎が割ったんじゃないよ。花子が割ったんだよ。〈3・4〉
- (25) アメガ フッタケン ヤメタダ ネジ。  
雨が降ったからやめたんじゃないよ。〈6〉

同様に、提示用法においてもダ形が用いられにくい。以下の (26) ではダ形と非ダ形のどちらも回答されているが、ダ形は調査者が使用の可否を確認したものであり、話者から自発的に得られた回答ではない。

- (26) チョッコ ヨーガ {アーガ／アーダガ}。  
（「私、明日は来ないよ」）ちょっと用があるんだ。〈24〉

さらに、以下のように、文によってはダ形が不自然と回答されることもある。

- (27) ダテテ ヨーガ {アッタワナ／\*アッタダワナ}。  
（「昨日、どうして来なかったの？」と聞かれて）だって用があったんだよ。〈25〉
- (28) \*タブン カイモノ イッチョーダジ。  
（「花子はどうしたの？」と聞かれて）たぶん買い物に行っているんだよ。〈28〉

把握用法については、上掲の (23) のように、把握用法でもダ形が使用可能な場合もあるが、次の (29) のように、ダ形が不自然と判断される例もある。

- (29) \*タブン カイモノニ イキチョーダ。  
（花子がいなことに気づいて独り言で）たぶん買い物に行ってるんだ。〈32〉

以上のように、平田方言の平叙文におけるダ形（特に肯定形）は、標準語のノダと対応しているとはいいがたい。まったく対応していないわけではないが、標準語のノダほど選好されるわけではない。平叙文におけるダ形の使用可否に関わる規則は未解明な点が多いが、少なくともこの点においては奈良田方言との違いが明確であるといえる。

#### 4.3. 疑問文

平田方言の疑問文では、(30) のように標準語のノ有りに対応する場合も、(31) のようにノ無しに対応する場合も、述語が同じ形をとり、ダ形にはならない。

- (30) ナニ クーカネ。  
（食堂でメニューを見ながら）何食べる？
- (31) オイ オマエ ドコエ イクカネ。  
（道端で会った友達に）おい、お前、どこへ行くの？

また、(32) のように焦点が述語以外にある場合や、(33) のような「なぜ」疑問文でも、ダ形ではない形が用いられる。

- (32) アメガ フッタケン オクレタカイ。  
雨が降ったから遅れたの？ 〈11〉
- (33) キョーワ ナシテ オクレタカイ。  
今日はなぜ遅れたの？ 〈10〉

以上のように、平田方言では、標準語のノ有り疑問文とノ無し疑問文に対応する区別をしない。ダ形が疑問文で用いられることはあるが、それはノ有り疑問文に対応するのではなく、〈必要・妥当〉という意味を持ち、「～しなければならないのか」「～することになっているのか」という問い方をすることが明らかになっている（野間 2025 予定）。たとえば、次の（34）は上記の（31）とは違ってダ形が用いられているが、これは「会社から出張を命じられた」という文脈があるためである。

（34）ソーデ ドコエ イクダカネ。

（出張に行くことになったと聞いて）それで、どこへ行くの？

このように、平田方言の疑問文におけるダ形は、標準語のノ有り疑問文と一部重なるところはあるものの、基本的には別のはたらきをしていると言える。

## 5. 奈良田方言と平田方言の位置づけ

以上、本発表では、奈良田方言と平田方言を取り上げ、ノダに相当する意味がどのように表され、そこにダ形がどのように参加するかを記述した。どちらも「ノのない方言」ではあるが、ノダに相当する意味とダ形とが完全に対応しているわけではなく、その対応のあり方にも方言差があることが明らかになった。奈良田・平田方言以外のダ形を持つ方言も含めて、さらに記述を進めることで、ダ形を持つ方言における「ノダ文」の多様性が明らかになると考えられる。

### 【参考文献】

- 大西拓一郎（2013）「用言準体法の分布と形式」熊谷康雄（編）『大規模方言データの多角的分析 成果報告書一言語地図と方言談話資料一』59-68, 国立国語研究所。
- 小西いずみ（2022）「山梨県奈良田方言の疑問文—準体助詞のない方言におけるスコープ、事態既定性—」『日本語文法学会第 23 回大会発表予稿集』1-8。
- 小西いずみ・三樹陽介・吉田雅子（2022）「山梨県早川町奈良田」セリック, ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一（編）『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』77-150, 国立国語研究所。
- 佐々木冠（2022）「千葉県南房総市三芳地区」セリック, ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一（編）『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』37-76, 国立国語研究所。
- 杉浦滋子（2005）「「ノダ」をもたない方言の諸相」『言語と文明：麗澤大学大学院言語教育研究科論集』3：3-20。
- 野間純平（2025 予定）「島根県出雲市平田方言の疑問文における「ダ」—「行くダカ」は「行くのか」と同じか—」日本方言研究会（編）『方言の研究 11』ひつじ書房。
- 野間純平・友定賢治（2022）「島根県出雲市平田」セリック, ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一（編）『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』215-266, 国立国語研究所。
- 彦坂佳宣（2006）「「行くダ」などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会会報』23：1-11。

## 日本語文法学会 第26回大会シンポジウム

### 日本語文法研究は何がどう進化しているのか

企画：建石 始（神戸女学院大学）

#### 1. 趣旨説明

過去の学会誌や研究会誌を眺めていると、現在とは異なる分析手法や分析内容があることに気づかされる。あるいは、昔なら採用されていたが、現在ならやや難しい…というものもあるかもしれない。

過去の研究と現在の研究を比較した際の上記の気づきをかりに進化と呼ぶとすれば、日本語文法はこの数十年間で進化している部分が多々あるとともに、変わらない部分もある。本シンポジウムでは、複数の分野、領域から、進化している部分と変わらない部分、あるいは今後の進化の可能性について、じっくり議論を行いたい。

#### 2. 登壇者・コメンテーター・司会

##### 登壇者

きぬはたとみひで  
衣畑智秀（福岡大学）「仮説検証としての文法史研究」

なかまたなおき  
中俣尚己（大阪大学）「日本語文法研究はデータをどのように扱ってきたか」

みやけともひろ  
三宅知宏（大阪大学）「文法研究における「記述」とその展開」

##### コメンテーター

たがわたくみ  
田川拓海（筑波大学）

##### 司会

たていし はじめ  
建石 始（神戸女学院大学）

#### 3. シンポジウムの構成（予定）

13:40-13:45：趣旨説明

13:45-14:25：講師1による発表

14:25-15:05：講師2による発表

15:05-15:10：休憩（5分）

15:10-15:50：講師3による発表

15:50-16:05：休憩（15分）

16:05-16:20：コメンテーターから

16:20-17:10：登壇者間でのディスカッション・フロアとの質疑応答

ご質問は  
こちらから



# 仮説検証としての文法史研究

衣畑智秀 (福岡大学)

tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

## 1 はじめに

文法の研究では、仮説を立ててそれをデータによって検証するというプロセスが一般的に認められるたとえば、現代日本語のシテイルは動作動詞を取って、「進行」と「結果継続」を表す。

(1) 太郎は(その)本を読んでいる。

これは、われわれ日本語話者の直感という形で「観察」されるでしょう。それに対し、これはシテイルが「局面変化の後を取り出す」からだとするれば、それは直接観察できないので、「仮説」されたものとも言える。この仮説は、動作動詞(「読む」)が動作の「開始前から開始後」、「終了前から終了後」という2つの局面変化を持つという(補助)仮説(時に「想定」とも)と合わせることで、上の観察(「開始後」なら「進行」、「終了後」なら「結果継続」)を説明することができる。

仮説は「観察」をうまく説明するだけでなく、適切に定義されれば、他の想定と合わせることでさらなる現象を予測し、仮説を検証することができる。たとえば、変化動詞が1つの局面変化しか持たないとする(想定)と、シテイルに動作動詞のような曖昧性が生じないことを予測する。また、状態動詞に局面変化がないとする(想定)と、シテイルのような状態形にならないことが予測される。これらはそれぞれ(2)のように検証でき、仮説の妥当性を高めることができる。

(2) a. 電気が点いている。

b. \*机の上に本がっている。

仮説を立てることの重要性は、現象をうまく言い当てているように見せるのではなく、より広範な現象を予測し、検証が可能になることである。予測が確認されればわれわれの言語に対する理解は深まる(と感じる)し、たとえ反証されてもよりよい仮説を立てようとすることで学問は進歩する。このようなプロセスは文法の研究である以上、古典日本語でも歴史変化でも変わらない。

## 2 歴史的研究は特別か？

日本語の歴史的研究には「理論的反省を経験することが少なく、ひたすら「実態」の研究を積み上げて来た」(山口 2011: 530-1)や「文献資料に見いだされた事実を指摘しただけであり、その事実を日本語史の中に位置づけようとしていない」(小松 1999: 4)といった批判的反省がなされることがある。一方で、日本語の歴史を有機的な体系のもとに捉えようという考えも古くからあり、たとえば阪倉 (1975: 3章5節)では語彙体系、文法体系、音韻体系の変遷の動機として「心情的な連帯感によってむすばれていた、閉じられた社会から、さらに開かれた社会へと、コミュニケーションの場が拡大する」(p. 291)ことを挙げ、その結果として文体の変化、係り結びの衰退、二段活用的一段化、上代特殊仮名遣の喪失やア・ハ・ワ行の合流に触れている。

しかし、一つの要因が、語彙・文法・音韻・文体の変化を引き起こすという仮説はまず検証不可能である。実際、大木 (2016)では時枝 (1976)が批判する「要素史的国語史研究」、すなわち、語彙、文法、音韻、文体の個別史的な研究をむしろ肯定的に捉え、しかし「事実の羅列」という評言(p. 22)を避けるために、その背後にある「歴史叙述」の方法を模索している。大木 (2016)は言語変化も政治史や社会史などと同じ「歴史」の一部とみなし、時間的に隔った2つ以上の出来事が「物語り(narrative)」によって組織化されるとする。その結果、言語の歴史にもダント (1989)の言う「物語説明の構造」が当てはまるとし、その例として係り結びの衰退過程に触れている。すなわち、(1)平安時代に係り結びが盛んに使われ、(3)鎌倉時代以降衰退が進む、という「被説明項」の関係を、(2)平安末期に終止形と連体形が合流する、という「説明項」で結びつけることによって、「物語り」が組織化されるという。仮に(1)と(3)が(統計的に確認された)「観察」データだとすると、それらの説明になる(2)は「仮説」と言えそうである。しかし、大木 (2016)には「物語り」がどのように検証されるのか、ということについての議論はない。本発表で取り上げたいのは、この検証の問題である。

小柳 (2018)も大木 (2016)と同じく言語変化と歴史の記述を重ね合わせ、歴史は現在から過去を振り

返る「物語り文 (narrative sentence)」によって語られるため、「＜ありのままの言語変化＞自体を捉えることはできず、唯一の＜真の言語の歴史＞にも届かない」(p. 5) とする。しかし一方で、言語変化を「自分の視角から好き勝手に記述し、思いのままに修正してもよい」(p. 7) わけではないとし、言語資料の「手がかり」から、他の「解釈」と矛盾しない、理にかなった、「価値のある解釈」を引き出さねばならない、としている(序章 3.2 節)。小柳 (2018) の「手がかり」を観察データ、「解釈」を仮説と考え、以下で述べる本発表の立場に重なりそうだが、小柳 (2018) の「手がかり」には資料の年代も含まれ、「手がかり」と「解釈」の関係がどのようなものか明確に述べられていない。この関係が明確に述べられなければ、言語の文法や変化を推測することは、小説の一節を解釈する手続とさほど変わらないことになるが、はたしてそうなのだろうか。本発表では、仮説が観察データを演繹的に予測するものとしてこの関係を明確化する。

### 3 仮説検証法

1 節で述べたように、本発表では古典語の共時的研究も、言語変化を明らかにする通時的研究も、よって立つ方法論は現代日本語の文法研究と変わらないという立場に立つ。仮説を立てそれを検証することによって研究を進めるなら、歴史的研究が「事実を指摘しただけ」とはならないし、歴史研究に特異な「物語り」を想定する必要もない。ただし、仮説の立て方はともかく、仮説の検証方法については、内省に頼ることができない歴史的研究は現代日本語の研究に比べて極めて大きな制約を持つ。本節ではこの点について、上代日本語の副助詞ダニの共時的分析と、中古日本語への歴史変化(衣畑 2005、衣畑 2019、Kinuhata 2024)を例に議論する。副助詞ダニを取り上げるのは、観察と仮説の区別が直感的に理解しやすいためであり、それ以外の理由はない。仮説検証による文法史研究は幅広いテーマで実践されていると考えられるからである。

#### 3.1 共時の研究

##### 3.1.1 観察・観察的一般化・仮説

日本語の歴史的研究で積み上げて来た「実態」や文献資料に見いだされた「事実」とは何だろうか。小柳 (2018) が現代の我々には＜真の言語の歴史＞が手に入らないと言うように、文献の奥に潜む「真実」を指すとは考えられないだろう。個別的な文法形式の意味や変化が「実態」や「事実」として言及されている可能性はある。しかし、それらは適切な研究の文脈に置かれることによって、学術的な意味を持ちうると考えられる。一方、文献に観察されるデータそのものは、何らかの解釈が加わらない限り、言語研究としての価値を見出すのは難しい。

たとえば、副助詞ダニを例に取ると、**観察データ**とは以下のようなものである<sup>\*1</sup>

- (3) a. 万葉集に副助詞ダニの例は 91 例ある。
- b. 万葉集の副助詞ダニは、30 例が否定文で使われる。
- c. 万葉集の副助詞ダニは、39 例が広義の願望文で使われる。
- d. 万葉集の副助詞ダニは、8 例が疑問文で使われる。
- e. 万葉集の副助詞ダニは、11 例が条件節の中で使われる。
- f. 万葉集の副助詞ダニは、3 例が上記以外の環境で使われる。

もちろん諸本や訓詁の問題はあるにしても、「万葉集」の本文を一つに決めてしまえば、(3) のような形で「事実」を取り出すことが可能だろう。また、「万葉集」が「上代語」をもっとも典型的に写し取った資料である、という前提を入れれば、(3) の観察から(4) のような一般化(**観察的一般化**)を導くことができる。

- (4) a. 上代語の副助詞ダニは、約 1/3 が否定文とともに使われる。
- b. 上代語の副助詞ダニは、2/3 近くが願望文、疑問文、条件節で使われる。
- c. 上代語の副助詞ダニは、上記以外の肯定文で使われることはほとんどない。

<sup>\*1</sup> 以下、述語に何らかの否定形態素が現れる文を「否定文」、述語に広義の願望(「詠え」「意志」「仮想」「希望」「禁止」「命令」)を表す形態素が現れる文を「願望文」と仮に呼ぶ。これはダニの意味や変化を捉えるための便宜的な用語であり、そのような文タイプが古典語にあると主張しているわけではない。

(4) の観察の一般化は、統計的に(3) のデータから母集団を推定することで得られる。(3) から母集団の比率の 95% 信頼区間を推定すると、(4-a) が 23.5~43.6%、(4-b) が 53~73.6%、(4-c) が 0.7~9.3% となり、それぞれに有意差があることがわかる\*2。

しかし、(3) から(4) へは分布の当てはまる範囲を広げるだけで、なぜそのような分布になっているのかを説明しているわけではない。ダニの分布が、話者の持つ文法の結果だとすれば、「事実」として見られる分布をダニの意味から説明する必要がある。衣畑 (2019) および Kinuhata (2024) では、上代語のダニの意味(5-a) とダニが使われる語用論的条件(5-b) を立て、ダニが否定文や願望文に生起し、願望のない肯定文に生起しないことを説明している\*3。

(5) a. ダニ上代の意味：実現可能性の高い命題を取る（それを前提として付け加える）

b. 語用論的条件：実現可能性が高いことがダニの現れる文の「主張を強化」する。

（主張の強化：ダニの現れる文 ⇒ 代替集合にある命題を用いた文）

このダニの意味と語用論的条件から、否定文(6-a) と願望文(6-b) に生起し、願望のない肯定文に生起しないことは、概略、以下のように説明できる。

(6) a. 夢にだに(夢尔谷) 見ざりし(不在之) ものを〔夢でさえ逢えなかったのに〕おほほしく宮出もするか(万葉 175)

b. 夢にだに(夢尔谷) 見えむ(将所見) と〔夢でだけでも逢いたいと〕我はほどけども(万葉 772)

「夢で逢う」と「現実で逢う」を比べた場合、可能性が高いのは前者である。よって、(5-a) から、(6-a) も(6-b) もダニは「夢に見え(夢で逢う)」という命題を取っている。もし、否定も願望もない単純な肯定文ならば、「夢で逢う」ことは「現実で逢う」ことを含意((5-b) の ⇒) しないので、(5-b) の語用論的条件からダニは認可されない。一方、(6-a) のように否定文で使われれば、より実現しやすい「夢で逢う」ことが叶わなければ、現実でも逢えないことが含意されるので、ダニは(5-b) を満たし認可される。また、話し手が恋人に逢えない状況で(6-b) を詠んだとしたら、より実現可能性の高い「夢で逢う」ことを望んでいるなら、より実現しにくい「現実で逢う」ことも望んでいることになる。よって、ダニは願望を表す述語においても認可される。

より形式的で、正確な説明は当該論文に当たられたいが、ここでの議論のポイントは、(5) のダニの意味と語用論的条件は、演繹的に(4) を導く**仮説**であるということである。このことを本発表では**仮説が現象を予測**と言う。仮説が現象を予測するとは、現象を「説明」として意味的に等価である。本発表の観点からは、観察の一般化によって得られた現象を「説明する」とは、仮説を立ててその現象を正しく予測することにはほかならない。

ここまで来ると、(3) から(4) への推論と、(4) から(5) に至る過程が異質であることがわかるだろう。前者は限られたサンプルの観察を一般化する帰納推論であり、サンプルを多く集めていけば母集団に限りなく近似していく。一方、(5) はいくらサンプルを集めても近似するものではなく、帰納とは異なる**仮説形成**(abduction)と言われるプロセスである(図 1)。

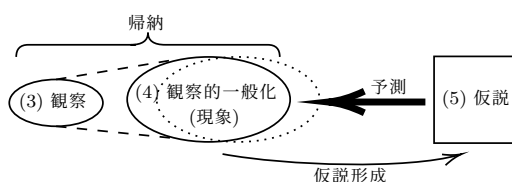


図 1 観察・観察の一般化・仮説の関係(概念図)

### 3.1.2 予測と検証

本発表では仮説から現象を演繹的に導くことを**予測**(prediction)と呼ぶが、これは現象が既に知られているかいないかを問わない。日常語の「予測」はふつう未知の出来事を言い当てるため、ここでの使い方は日常語とは異なる。ただし、立てた仮説がまだ知られていない現象を予測する(してしまう)こともある。

\*2 R Core Team (2025) の `binom.test` 関数を使って Clopper-Pearson 区間を求めた。

\*3 ダニの意味(5-a) は衣畑 (2019) と Kinuhata (2024) で変わらないが、語用論的条件の書き方が若干異なる。(5-b) は後者に従った書き方にしている。

前節で立てた仮説 (5) は、否定極性表現と言われる英語の *any* の意味 (Kadmon and Landman 1993 による仮説) と並行的である (表 1 参照。詳しくは衣畑 2019: 4.2 節、Kinuhata 2024: 2.3 節)。よって、仮説 (5) は、**ダニ**が *any* と同じく否定極性表現が認可される下方含意文脈 (downward entailing context: Ladusaw 1979) で認可されることを予測する。

下方含意文脈としては条件節(7-a)、全称量化詞の制限節(7-b)、後続事態を表す時間節(7-c)、比較の対象となる節(7-d) 等が知られている (用例は澤田他 2019: p. 3, 12)。

- (7) a. [If Mary sees **anyone**], she will cry.  
 b. Every student [who likes **any** flower] goes to the flower shop.  
 c. [Before going **any** further], let us discuss this problem.  
 d. I would walk rather than [wait for **any** bus].

しかし、このうちダニの生起が確認できるのは条件節(8) のみであり、ほかの例は確認できていない。

- (8) [朝霞鹿火屋が下に鳴くかは**づ** 声だに聞か]ば (声谷聞者) [声だけでも聞けたら]我恋ひめやも (万葉 2265)

表 2 にまとめたように、仮説がダニの生起を予測する文脈のうち、「否定文」「条件文」ではダニの例が確認できるが、「全称制限節」「後続時間節」「比較節」では確認できない。前者のように現象が予測どおりの場合、予測が**確認**されると言い、後者のように予測と異なる場合、予測が**確認**されないと言う。

ただし、確認される、確認されないの意味合いは、予測のタイプによって異なる。表 2 は仮説 (5) がダニの生起を予測する、よって、用例が「ある」と予測する文脈である。一方、願望のない肯定文のように、ダニが生起しない、よって、用例が「ない」と予測する文脈もある。この予測の違いと、それぞれの予測に対する実例による確認／非確認の関係は図 2 のようにまとめられる。

まず、仮説が用例の存在を予測する場合、実際に用例が見られるケース 1 では、ひとまず素直に予測は確認されたと考えてよいだろう。一方、用例が見られないケース 2 には、たまたまその文献で用例がない可能性も考慮する必要がある。たとえば、用例が「ある」と予測する全称量化詞の制限節は、上代語だと「[かはづの声を聞く] ものみな、恋ひめやも」のようになると思われるが、管見の限り、上代語で、全称量化詞ミナが制限節を取る例自体が確認できない。とすると、この場合の「確認されない」は、未だその例が確認できていない、といった程度の意味にすぎない場合もある。もちろん、生起すると予測されるパターンがその時代のその資料に不自然でない場合には、仮説に何らかの制約を加えるような修正が必要になるだろう。しかし、内省にもとづく文法判断ができない文献調査では、用例の不在を証明することがむずかしく、用例がないことがただちに仮説の棄却を意味するわけではないことは注意しておきたい。

次に、予測が用例の不在を予測する場合について考えてみよう。ケース 3 は、実際に用例が確認されず、予測が確認される場合である。ただし、上記のように、文献調査における用例の不在は証明しにくく、たまたま確認されている可能性ももちろん排除できない。しかし、注意したいのは、予測が確認されたとしても、仮説自体が「確認」されることはない、ということである。仮説はあくまで仮説であり、予測を演繹的に導くに過ぎない。予測が当たれば当たるほど、仮説の確からしきは増していくが、演繹の結論が前提を真にするわけではない<sup>\*4</sup>。このことが意味するのは、たとえ用例の不在が証明されたと

表 1 *any* とダニの比較

	<i>any</i>	ダニ
意味	名詞句の指示 領域を広げる	実現可能性の高い 命題を取る
条件	主張の強化	主張の強化 (strengthening)

表 2 下方含意文脈

	<i>any</i>	ダニの例
否定文	認可	あり
条件節	認可	あり
全称制限節	認可	なし
後続時間節	認可	なし
比較節	認可	なし

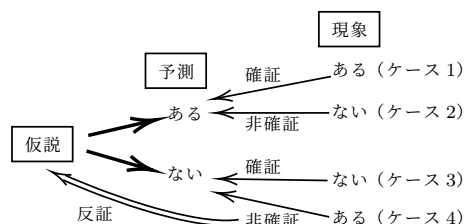


図 2 予測の確認／非確認と仮説の反証  
 (「ある」「ない」は用例があるかないか)

<sup>\*4</sup> たとえば「あらゆる生命体は死ぬ」という仮説の持つ予測は個々に見られる人の死やペットの死によって確認され、仮説は確らし

しても、仮説が正しかったということにはならないということである。よって、大切なのは、用例の不在の証明ではなく、「あってもよいはずの用例がない」（たとえば肯定平叙文の用例はたくさんあるのに、ダニの例にはない）ことによって、仮説の確らしさが増すことである。

「あってもよいはずの用例がない」ということは、ケース4とセットで重要な意味を持つ。用例が「ない」ことを予測している場合、「あってもよいはずの用例がない」ことは仮説の確らしさを増す一方、用例が「ある」ことはそのまま仮説の反証(falsify)に繋がるからである。特に文献調査では用例の不在が証明しにくいので、用例が「ある」ことによる仮説の反証はより一層重要になる。用例が「ない」とこと違い、用例が「ある」ことは文献調査の範囲を広げても変わらないからである。

以上をまとめると以下ようになる。仮説はその性質上、真にはなりえない。ただし、仮説の持つ予測を現象によって確認することで、その蓋然性を高めることができる。一方、仮説は予測が確認されないことによって、反証される。文献調査では、用例の不在を証明することが難しいため、用例の存在によって予測が間違っていることを示せるように、仮説の反証可能性(falsifiability)を担保することが重要になる。このように仮説は予測を通して現象によって検証できるように立てなければならない。

### 3.1.3 仮説の棄却と保持

前節では「ない」と予測する用例が「ある」ことによって仮説が反証されると述べた。では、このような反例が1例でもあれば仮説は棄却されなければいけないのだろうか。しかし実際には、そのように仮説を即座に棄却するということはありませんと思われる。たとえば仮説(5)のもとでは、ダニは肯定の平叙文では使えないことを予測する。しかし、実際は(3-f)のように、肯定の平叙文で使われることもある。(9)はその1例である。

(9) 風をだに(風乎太尔)恋ふるはとし〔風だけでも恋しく思えるのは羨ましい〕 (万葉489)  
衣畑(2019)等ではこの例を「とし(羨ましい)」という形容詞の意味から「風を恋いたい」という願望の意味を読み取ることができるとして、(3-c)の諸例と同様に処理し、仮説を保持している。

実際に例外をどのように処理するかはさまざまであり、一律に論じることは難しい。そこでここでは、仮説の棄却・保持を、文献の調査範囲との関係に絞って議論したい。

まず、ケース1とケース2は用例が「ある」ことを予測する場合である。ケース1ではすでに用例の存在によって予測が確認されているので、調査範囲を広げても変わりはない(わざわざ狭めることも考えにくい)。しかし、ケース2では予測が確認されていないので、調査範囲を広げることにより、予測を確認する用例が見つかるかもしれない。適切な資料がある場合には、追加調査をしてもよい事例になると言えよう。

次に、ケース3とケース4は用例が「ない」ことを予測する場合である。ケース3は用例が「ない」ことによって予測を確認しているが、調査範囲を広げることによって、反証されにくい仮説であることを示すことができる。ケース4では既に仮説が反証されていれば、調査範囲を拡大しても反証されている状態は変わらない。一方で、調査範囲を縮小することによって、仮説を保持できる可能性はある。たとえば、例外と思われる例が全て東国方言の例であり、奈良方言に関しては仮説が当てはまるかもしれない。

## 3.2 通時的研究

### 3.2.1 観察・観察的一般化・仮説

平安時代(中古)に入り、ダニは(10)のように願望の意味がない肯定文でも使われるようになった。

(10) はかなき御くだものをだに、いとものうくしたまひて〔ちょっとした食べ物さえいやがりなさって〕(源氏・若菜)

(10)のダニが付いている命題「(紫の上が)ちょっとした食べ物をいやがる」は、文脈から対比される命題「普通の食事をいやがる」「豪勢な食事をいやがる」と比べて実現可能性が低い。よってダニの意味は、中古に入って以下のように変化し(つつあつ)たと考えられる。

(11) ダニ中古の意味：実現可能性の低い命題を取る(それを前提として付け加える)

---

さを増すが、これら個々の事例が仮説を真とするわけではない。宇宙にはまだ見ぬ生命体が存在する可能性がある。



ダニの意味自体を我々は観察できないため、ダニの意味が(5-a)から(11)に変わったというのは仮説である。(11)の意味も、ダニの生起する命題や文脈を考慮して仮定していることに注意されたい。なお、(5-b)の語用論的条件に変化はない。「ちょっとした食べ物を嫌がる」が「普通の食事を嫌がる」「豪華な食事をいやがる」を含意(⇒)し「主張を強化」しているため、願望のない肯定文でも認可されている。

また、衣畑(2005)では、ダニの変化はダニの句と否定のスコープが(12-a)から(12-b)のように再解釈されたことで起こったと考えた。

(12) a. 上代のダニ：[[夢にだに見え]ず] (否定 > ダニ句：ダニが「(妻が)夢に見え」を取る)

b. 中古のダニ：[夢にだに[見えず]] (ダニ句 > 否定：ダニが「(妻が)夢に見えず」を取る)

この変化の過程も当然仮説である。変化について仮説をまとめると(13)のようになる。

(13) a. ダニの意味変化：実現可能性の高い命題を取る > 実現可能性の低い命題を取る

b. 意味変化の過程：ダニ句と否定のスコープの再解釈

(13)の変化についての仮説はどのようなことを予想するだろうか。まず、上で見たように、ダニが願望のない肯定文で使われるようになることを予測する。その結果、相対的に、願望で使われる割合が減ることも予測される。これに対して、否定文の変化を予測するのは簡単ではない。そこで、(13-b)の対立仮説を考えてみよう。(13-b)の仮説が否定文での変化を想定するので、対立仮説は願望文からの変化を想定する。この仮説では否定文が減ることはあっても増えることは予測できないだろう。そこで、仮説(13-b)には、用例が「増える」という予測ができるように(「増える」ことを説明できるように)、否定文が肯定文で使われるダニへの供給源になるという補助仮説を加える。

以上の予測を表3にまとめ、上代から中古の散文の粗品度(観察)を表4に\*5、95%信頼区間を付した母集団における比率(観察的一般化)を図3に示す。

表3 変化の予測

	移行期	収束期
願望文	減る	減る
否定文	増える	?
肯定文	増える	増える

表4 文脈ごとの粗品度

	上代	中古前	中古中
願望文	58	23	221
否定文	30	27	233
肯定文	3	7	229
合計	91	57	683

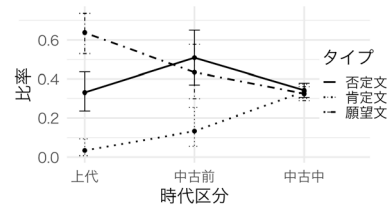


図3 現れる文脈の比率

(13-a)の変化は肯定文でダニが生起する割合が増えることで確認される。(13-b)の変化は上代から中古前期にかけて、否定文でのダニ生起が増えることによって(対立仮説を破棄し)確認される\*6。

### 3.2.2 予測と検証

共時的研究における仮説が用例の「ある」「ない」を予測するのに対し、変化についての仮説は用例が「増える」「減る」を予測する(図4\*7)。たとえば $a > b$ という変化を仮定すると、 $a$ であることを表す特徴 $a'$ ,  $a''$ ,  $a'''$ , ...が失われ、 $b$ であることを表す特徴 $b'$ ,  $b''$ ,  $b'''$ , ...が現れることを意味する。具体的には、 $a > b$ を(13-a)のようなダニの意味変化とすると、特徴 $a'$ はダニが願望文に現れること、特徴 $b'$ は願望のない肯定文に現れることようになる。

ただし、一つの文法的性質が用例の「ある」「ない」を予測するのと異なり、変化の予測する「増える」「減る」は基本的に異なるプロセスである。すなわち、「増える」は $b$ という性質(形態・統語・意味のいずれにしろ)が現れることの結果であり、「減る」というのは $a$ という性質が失われることの結果である。図5の $a$ が失われ $b$ が現れれば、同時に特徴 $a'$ が減り特徴 $b'$ が増えることもあるが、片方だけ

\*5 中古前期、中古中期の資料および集計は衣畑(2005)による。

\*6 ただし、どの程度増えれば確認されるのかという問題は残る。ここでは、上代で願望文と否定文の生起に有意差があったのに対し、中古前期で有意差がなくなっていることを持って増えたとみなしておく。

\*7 「増える」や「減る」は確率を含む命題(確率命題)と考えることができる。たとえば上代から中古へのダニの変化では、願望のない肯定文に生起する確率が高くなる、と言える。ただし、この確率は仮説にも含まれる( $b$ への変化でその特徴が増える)ため、仮説から予測が演繹される。

が起こることもある。たとえば、a という意味を保持したまま b という意味が現れれば、その形式が多義的になる。このことが意味するのは、b への変化が起こったかどうかというのは、基本的に b が予測する特徴  $b'$ ,  $b''$ ,  $b'''$ , ... によってしか確認できないということである\*<sup>8</sup>。

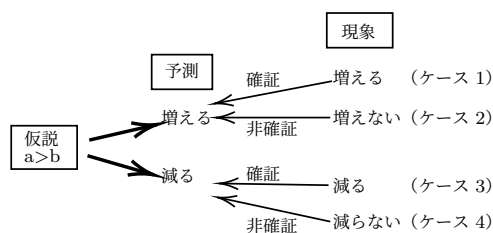


図4 変化の予測の確認／非確認（「増える」は b の特徴を表す例、「減る」は a の特徴を表す例）

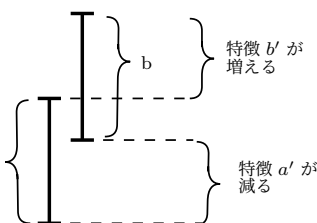


図5  $a > b$  への交替

一般的に、ある性質の出現は、メタファー、メトニミー、再分析、文法化等々によって説明されるのに対し、ある性質の消失は偶然性の関与が高いため、ここでは図4のケース1、ケース2のみについて言及する。ケース1は仮説がbの特徴  $b'$ ,  $b''$ ,  $b'''$ , ... を示す用例が「増える」ことを予測し、実際増える場合である。この場合は予測が現象によって確認されると言える。もちろん3.1.2節で論じたように仮説自体が「確認」されることはないが\*<sup>9</sup>、仮説の確らしさは高まる。ケース2は実際に用例が増えず、予測が確認されない場合である。bの特徴  $b'$ ,  $b''$ ,  $b'''$ , ... が一つも見られなければ、 $a > b$  へと変化したという根拠を失うだろう\*<sup>10</sup>。一方、 $b'$ ,  $b''$  はの増加は見られるものの、 $b'''$  の増加は見られないといった場合は、 $b'''$  が見られない理由を文献の性質やbの意味的制約から説明することで、仮説は保持される。

### 3.2.3 仮説選択

仮説は事実と異なり、その性格上一つに定まっているわけではない。複数の仮説が現象によって検証され、より妥当な仮説が選択されることにより、我々の知識が深まる。これは歴史変化の仮説についても同様である。複数の変化過程が対立する事例として、変化の順序や変化の経路についての仮説が考えられる。

変化の順序はたとえばaからdへの変化の途中段階が  $b > c$  か  $c > b$  かが問題になる場合である。bが先かcが先かは、どちらの特徴が先に現れるかで予測が変わる。変化の経路は、aからdへの変化について、bを経由するか、cを経由するかである。ダニの例において、願望のない肯定文への変化が、否定文から起こったのか、願望文から起こったのかも経路の問題と考えることができる。

どちらの場合も、仮説が少数に限られていれば、他方を棄却することで一方を採択することができる。たとえばbを示す特徴  $b'$  の増加はbを経由して起こったならば「bがdへの供給源となった」という補助仮説とともに予測することができる。しかし、cの経路を支持する仮説では「cがdへの供給源となった」という補助仮説を補っても  $b'$  の増加は予測できない。よってcを経由したという仮説を破棄し、bを経由したという仮説を（暫定的に）採用することになる。

仮説の選択は、問題となる仮説が少数であれば、共時的研究にも有効である。たとえば仮説Aと仮説Bが問題になるとき、この2つの仮説の予測が異なる現象によって、より妥当な仮説を選択することができる。仮説Aは否定文での生起を予測するが、仮説Bでは生起しないと予測する場合、もし当該の形式が否定文に生起していれば仮説Bを棄却することができる（3.1.2節）。つまり、仮説の選択には、対立仮説が「ない」ことを予測するのが重要である。歴史変化の場合、 $a > b$  への変化が  $b'$  が「増える」ことを予測するならば、対立仮説  $a > c$  は  $b'$  が「増えない」ことを予測し、 $b'$  の増加によって反証される。

\*<sup>8</sup> 前節では(13-a)の変化によって、願望文に現れるダニが「減る」としたが、それは否定文が増えることによって、ダニの用例の中の比率が減るということであり、新しい意味の発生の直接的な帰結ではない。

\*<sup>9</sup> 確率論的には、「増える」というケースが何度も確認される場合、「増える」という仮説の確率（事後確率）が高まり、一定の基準で仮説を選択することができる。しかし、日本語の歴史的研究の場合、何度も実験を繰り返すということが難しい。

\*<sup>10</sup> 共時的研究についても用例が「ある」と予測される特徴  $a'$ ,  $a''$ ,  $a'''$ , ... の全てで用例が見られなければ、性質aを仮定する根拠は乏しいと言える。

## 4 なぜ仮説検証法なのか？

2 節冒頭で見たように、日本語の歴史的研究には、1) 事実を指摘しただけであり、2) 理論的反省なく日本語史における位置づけがなされていない、という批判的反省が加えられてきた。しかし、これまで見てきたように、仮説は事実ではない。たしかに「文献資料に見いだされた事実」(＝観察)の指摘では研究の位置づけが難しいが、仮説であれば、それを日本語の歴史や一般言語学的研究の中に位置付けることができる。たとえば、ダニが上代語で否定文・願望文等に現れるという指摘は個別の事例に言及しただけであり、「ダニ」という形式を持たない諸言語と比べることはできない。しかし、ダニを否定極性表現と位置付けることにより、否定極性表現の類型の中で、ダニの特徴を議論することができる。また、ダニが肯定文に生起するようになったという事実は「ダニ」がない言語にとって有益な情報ではないが、スコープの再解釈により否定極性が失われる変化は、他の言語にも起こりうるだろう。このように観察を仮説に昇華することで、一般言語学的な文法研究や変化の研究へ貢献しうる。

にもかかわらず、事実(＝観察)は歴史的研究にとって極めて重要である。仮説は観察を予測(説明)するために立てられ、観察によってしか検証されないからである。しかし、観察によって仮説の検証を繰り返しても、仮説は真にはなりえない。我々が世界についてより知ることができるのは、無数にある仮説のうち、どれが誤っているかを知ることができるためである。よって、仮説は反証可能な形で書かれなければならない。たとえば「閉じられた社会から、さらに開かれた社会へと、コミュニケーションの場が拡大する」ことが「係り結びの衰退」を予測(説明)していると言えるだろうか。もし、歴史の事実とは反対に、係り結びが後世に発達していれば、「コミュニケーションの場が拡大」したことが係り結びを発達させたとも言うるのではないか。「仮説」が目的論になり観察からあまりにかけ離れてしまうと、反証可能性を担保できなくなり、我々の世界に対する理解を深めることができなくなる。つまり、仮説は観察を離れては生きられないのである。

## 5 文法史研究は何がどう進化しているのか

仮説検証法の適用は文法史研究の「進化」と言えるのだろうか。学会誌に載る水準の論文であれば、大抵は、特定の事実に着目し、観察データを集めて一般化し、その要因を説明する、という構造を持っているのではないだろうか。だとすると、本発表は、研究のありうべき方向性を示したというより、研究の実情を表現したにすぎない。学会誌に採用される水準にない論文の中には、「事実を指摘しただけ」「実態」の研究を積み上げただけの論文もあるかもしれない。しかし、「事実を指摘」した背景に何らかの視点があるとすれば、仮説形成まではそう遠くないとも考えられる。だとすれば、「事実」(＝観察)を離れない限り、文法史研究はおおむね健全性を保ってきたと言える。一方、日本語の歴史についての大胆な仮説は反証しえないものならば、いかなる進歩ももたらさない危険性がある。常に我々は、自身の立てる仮説が観察データと相対しているかどうか、心に留める必要がある。

### 参考文献

- Kadmon, Nirit and Fred Landman (1993) “Any,” *Linguistics and Philosophy*, Vol. 16, pp. 353–422.  
Kinuhata, Tomohide (2024) “Scope ambiguity and the loss of NPI feature: Evidence from the history of *dani* in Japanese,” in Kishimoto, Hideki, Osamu Sawada, and Ikumi Imani eds. *Polarity-sensitive expressions: Comparisons between Japanese and other languages*, Berlin: De Gruyter Mouton.  
Ladusaw, William (1979) “Polarity sensitivity as inherent scope relations,” Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.  
R Core Team (2025) *R: A Language and Environment for Statistical Computing*, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, URL: <https://www.R-project.org/>.  
大木一夫 (2016) 「言語史叙述の構造」、『日本語史叙述の方法』, 1–25 頁, ひつじ書房。  
衣畑智秀 (2005) 「副助詞ダニの意味と構造とその変化—上代・中古における—」, 『日本語文法』, 第 5 巻, 第 1 号, 158–175 頁。  
—— (2019) 「上代日本語の否定極性表現—副助詞ダニの意味再考—」, 澤田治・岸本秀樹・今仁生美 (編) 『極性表現の構造・意味・機能』, 第 14 章, 356–379 頁, 開拓社。  
小松英雄 (1999) 『日本語はなぜ変化するか—母語としての日本語の歴史』, 笠間書院, 東京。  
小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』, くろしお出版, 東京。  
飯倉篤義 (1975) 『文章と表現』, 角川書店。  
澤田治・岸本秀樹・今仁生美 (2019) 「第 1 章 序論—極性表現の構造・意味・機能」, 澤田治・岸本秀樹・今仁生美 (編) 『極性表現の構造・意味・機能』, 1–47 頁, 開拓社, 東京。  
時枝誠記 (1976) 『言語生活論』, 岩波書店, 東京。  
山口佳紀 (2011) 『古代日本語史論究』, 風間書。  
ダント・アーサー C. (1989) 『物語としての歴史—歴史の分析哲学』, 国文社, 東京。

# 日本語文法研究はデータをどのように扱ってきたか

中俣 尚己 (大阪大学)

## 1. はじめに

このシンポジウムの趣旨・概要の冒頭は「過去の学会誌や研究会誌を眺めていると、現在とは異なる分析手法や分析内容があることに気づかされる。」で始まっている。また、発表者は中俣(2024)において、2022年-2023年における日本語文法(理論・現代)の展望論文を書いたが、そこでも理論的道具立てや調査方法に工夫がなされた研究が多く勉強になった。発表者は、たまたまこれまでに調査が行われていない現象を調査することは進化とみなさず、新しい方法論のおかげで、これまでとは異なる分析が可能になったり、新しい現象に光があたりようになることを進化とみなしたい。

発表者は理論言語学には明るくなく、自身ではコーパスを用いた量的研究に取り組んでいる。そこで、発表者は『日本語文法』掲載の研究論文を対象に、過去の研究がどのように数値と向き合ってきたかを調査し、そこから進化の流れを論じようと考えた。

## 2. 方法

2001年の創刊号から2025年の第2号までの「研究論文」計314編を対象にした。寄稿論文、研究ノート、書評は対象外とした。

調査は「どのように数値を扱っているか」である。文法研究には大別して「作例」に基づくものと「実例」に基づくものがある。しかし、これは車の両輪であり、作例が実例になったから進化したとは言えない。一方、作例のみに基づいた研究であっても、容認度調査を元にモデル化を行い、どのような要因が解釈に強く影響しているのかを特定するような研究(井上ほか2022)などは新しい方法論を切り開いていると評価できる。また、コーパスを使ったとしても、単に例文をあげているだけなら、それはその例文を見つけるのにかかる時間が短縮されたということなので、あくまでも数値を扱っているかどうかを調査した。

表1のように整理すると全体の中で(c)と(d)がどれくらいあるかということを調査したということである。

表1 数値データによる研究の分類

	実例に基づく研究	作例に基づく研究
数値データを扱わない研究	(a)実例をとりあげる	(b)発表者の文法性判断のみで論じる
数値データを扱う研究	(c)条件に合致する例の数を報告する	(d)文法性判断に関する調査結果を報告する

※数値データを扱う研究には、心理実験やテキスト全体の計量研究も一部含まれる。

### 3. 結果

#### 3. 1 全体による傾向と経年変化

まずは、各年の調査結果を図1に示す。

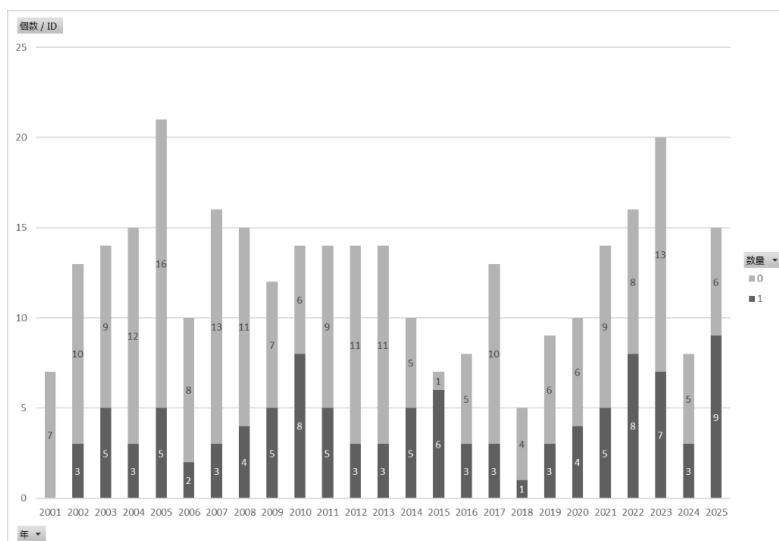


図1 25年間の全論文のうち、数値を扱ったもの(=1)

図1からすぐに読み取れることは『日本語文法』においては数値を扱った研究の割合はほとんど変化がないということである。コーパス自体は2011年のBCCWJ公開前後から利用が増えている。しかし、例の数を報告するような研究の増加には結びついていない。ただし、統計的には2013年以前よりも2014年以降の方が数値を扱った研究が多い。数値を扱った研究が50%を超えたのは2010年、2015年、2025年の3回のみである。数値データを扱った論文は全部で106本であり314例中34%に相当する。

なお、2016年の日本語文法学会では「文法性判断」がテーマとして取り上げられた。背景にはコーパス研究の波の中で、文法性判断による研究の重要性を再確認するという意味があったと思われる。しかし、掲載論文を見れば、このタイプの研究の割合は減少していない。

#### 3. 2 作例研究における数値の報告の少なさ

次に、この数値を扱った研究は実例か作例かという点、そのほとんどは表1の(c)に該当する実例の例文数の報告である。文法性判断について、例えばX人中Y人がその文をOKと判断したという記述があれば、それは数値を報告したとみなす。そのような基準でカウントした、表1の(d)に該当する論文の掲載数を図2に示す。25年間で文法性判断の数値を報告した研究は11本のみであった。

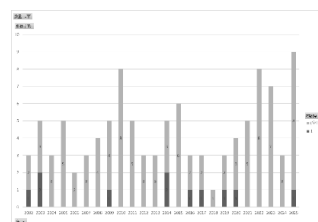


図2 数値を扱った研究における文法性判断の割合(黒)

### 3. 3 数値の処理の仕方

数値の報告といっても、ただ文を正しいと判断した人数や用例数(raw data)を報告するだけでなく、その割合を報告するなどの統計的操作を行ったものも存在する。数値を扱った 106 本の論文のうち、どのような統計的操作を行ったかで集計したものが表 2 である。

なお、ここで記述統計について補足しておく。一般には記述統計とは平均や標準偏差など、多数のデータの特徴を圧縮して示すための処理であり、要約統計量と呼ばれることもある。しかし、例文数などのカウントデータにおいては平均値の算出は馴染まない。割合の計算は  $P=Y/X$  という形であり、 $X$  と  $Y$  という 2 つのデータを圧縮・要約しているとみなせるため、ここでは記述統計に含めた。実際には記述統計にカウントしているのはほとんどが割合の計算である。「文法研究は全く統計を利用していない」という結論を避けるため、このような処理を行った。

表 2 数値を扱った論文における統計処理の内実（重複あり）

大分類	処理の目的	具体例	論文数(N=106)
記述統計	多数の数値を要約し、データの特徴を <u>わかりやすくする</u> 。	割合、平均値、相関、標準偏差、特化係数	61(58%)
推測統計	少数のデータから、全体の傾向を確かめる。特に群間に差があるのかを <u>検証する</u> 。	t 検定、 $\chi^2$ 検定、分散分析	13(12%)
多変量解析	様々な大量のデータから、傾向や特徴を <u>発見する</u> 。	主成分分析、対応分析、クラスター分析	2(2%)
モデリング	ある変数の値が決まった時に結果を <u>予測する</u> モデルを作る。	ロジスティック回帰、決定木	1(1%)

割合の計算、つまり実数に加えてパーセントの値まで出しているような研究は 6 割に満たない。発表者の感覚からはこれは少ないと感じる。パーセントの値がないと、35 例中 7 例と 59 例中 10 例ではどちらのほうが多いか、読者としては直感的にわかりにくい。このような時にパーセント表示があればと思う。だが、4 割ほどの研究がそれを行っていない。また、時代による変化も見られない。昔からきちんと割合を出している研究は出しているし、現在でも出していない研究は出していないということである。

また、多変量解析とモデリングは発表者も近年取り組んでいる手法であり、文法研究にも新たな光を当てるものと期待している。（推測統計は心理学や計量言語学分野ではすでに下火である。）しかし、『日本語文法』においてはこの手法を扱った論文は 3 本のみである。また、その 3 本中 2 本の著者に玉岡賀津雄氏が入っていることには触れておくべきだろう。（玉岡 2005, 李ほか 2023）

### 3. 4 分野による傾向差

以下、あくまでも参考程度であるが発表者の主観によって研究を「現代・理論・歴史・方言」の4つに分類し、分野ごとに数値を扱った研究の割合を示したものである。歴史的研究は基本的に用例数を報告するものが多い。ただし、記述統計（割合）を示さない研究は依然として見られる。また、現代語については、傾向は全論文の傾向と一致した。

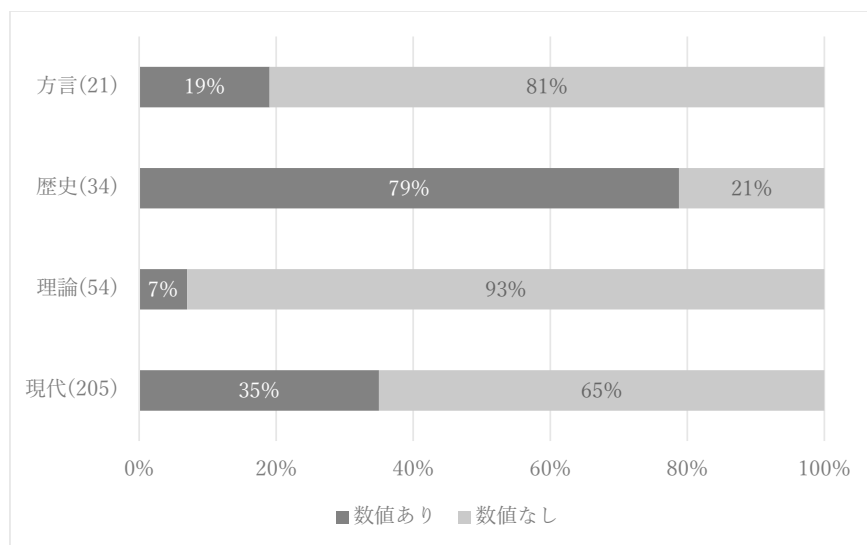


図3 研究分野ごとの数値を扱った研究の割合

## 4. 今後の日本語文法研究

### 4. 1 実例に基づく研究

コーパス研究は基本的に例の数を数えることにより研究を進めていく。現在でも、例を取り上げるだけの論文もあるものの、歴史的研究を中心にすでにこの方法は定着しているといえる。しかし、実数（＝粗頻度）を報告するにとどまる研究が依然として多いことは気にかかる。数の大小を論じるためには必ず比較という心的操作を必要とする。そのためには単位をそろえる必要があり、割合を計算してパーセントで示すといったことが必要になる。このような心的操作を読者に任せてはいけない。

割合の計算、パーセントの示し方は小学校で学習する内容ではあるが、卒論指導をしていても適切な表・グラフを作れない学生は非常に多い。論文の査読においてさえ、初歩的なミスは散見される。中俣(2021)はパーセントの計算だけを扱った非常に初歩的な言語統計学の入門であるが、学生指導には役立つものとする。パーセントは分母を100とした値であるが、必ずしも100でなくてもよい。史的研究の分野では分母を10とした研究も存在する(森2023)。

また、異なるコーパスないしサブコーパスを比較するとき必ず調整頻度を算出する必要があることを忘れてはならない。この時の単位にはよく 100 万語あたりの語数(pmw)が使われるが、数値は何でもよい。もちろん、コーパスの総語数というのはテキストの選定、語の認定といった大きな問題が絡むが、しかし、誤差はあれど傾向差を明らかにすることは重要である。例えば、「中納言」の「まとめて検索 KOTONOHA」という機能は検索した語がどのコーパスに多いかを図示してくれる非常に便利な機能を有しているが、これが可能になるのも pmw という共通の単位を用いているためである。ある単一のコーパスについて、形式 X が N 例出現したという情報は単独ではなんの価値ももたない。しかし、pmw という共通の単位を多くの研究者が用いれば、異なる論文どうし、異なる資料どうしであっても、数値の比較が可能になり、相違または変化を論じられるようになってくる。2010 年代は多くの文法研究者が BCCWJ を使った時代であった。単位は統一されていないくても、資料が統一されていた。しかし、今後はより多様なコーパスを複合的に観察することが必要になってくる。その際には単位をそろえることを常に念頭におかなければならない。

#### 4. 2 作例に基づく研究

発表者が危うさを覚えるのは、25 年間で文法性判断における数値を報告した論文が 11 例しかない、という事実のほうである。研究者ひとりの内省のみで良いということは、他の研究者や学生がどんな判断を持ってきた、「その例文、他の人にも聞いてみた?」「もっと多くの人に聞いてみたら?」と言うことはできないということになる。この言葉を言ったことがない人間のみが、自身の内省のみに基づいて論文を書く資格がある。

もし、そうではなく、多くの協力者に対して文法性判断を行ってもらっているのであれば、その事実は数値とともに報告するべきである。『日本語文法』の論文を読むと「査読者から例文の解釈について疑問が付されたが、執筆者の語感では問題ない」と押し切ったり、「執筆者の周囲に聞くとほとんどが同じ判断であった」と曖昧に書くケースも見られる。しかしながら、5 名中 4 名のほとんどなのか、50 名中 40 名のほとんどなのかは、統計学的には全く異なる意味をもつため、数値の報告は必要であると考ええる。

発表者は作例に基づく研究は文法研究において欠かすことができないと考えている。コーパスには限界があるからだ。発表者が問題視しているのは（よりもよって利害対象者本人の）ひとりの内省だけで論を進めることである。文法性にせよ、意味解釈にせよ、自分以外の話者も自分と同じ判断であるという担保が必要であるという主張である。心理学者が自身の内省のみに基づいて心理効果を主張したという話は聞いたことがない。また、研究で使用するすべての例についてアンケートを行えという主張でもない。しかし、研究においてキーとなる例文は必ずあるはずである。その例文についてだけでも、調査を行うべきであるという主張である。



調査を行う際には条件をきちんと統制し、ある程度まとまった数の協力者に対して調査を行うということである。この点で、2016年のシンポジウムで取り上げられた上山・傍士(2017)、Hoji(2015)の調査システムは卓越している。この研究ではある種の文法性判断ができる話者とできない話者がいるという前提に立ち、できる話者を選別するようにデザインされている。この文法性判断ができる話者とできない話者という考え方については金水(2017)は「ステレオグラム」のたとえを出して説明している。

発表者はまず多くの協力者に質問をするという点に強く賛同する。一方で、文法性判断はできる、できない、訓練によって身に着ける、という考え方よりも、そこには個人差があり、異なる文法が共存していると考えるほうが「記述的」であると考えられる。言語が変化することを考えれば、すべての時空間で文法性判断が一致することはあり得ない。共時的に見れば、調査を行えば必ずどこかに不一致が見られると考えるべきであろう。

このような状況においても、綿密に用意された例文を多数の協力者に回答してもらい、理論に合わない結果を切り捨てるのではなく、すべての回答データをまるごと使って統計モデリングを行うことで、どのような要因が文法性判断に影響しているのか、また個人差はどれぐらいあり、回答者にはどのようなパターンが存在するのかを明らかにすることが可能になる。

図4はモデリングでよく使われるロジスティック曲線である。この曲線自体は言語変化のS字カーブ(Aitchison1991)として説明に用いられることが多いが、基本的には0から1の値を出力する関数のグラフである。この性質を利用して、ある文が容認される確率を表現することも可能である。発表者は2016年のシンポジウムで傍士氏に「文法性判断は3段階ぐらいまでならで

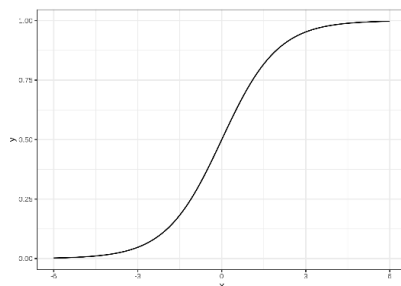


図4 ロジスティック曲線

きと思うが、4段階、5段階というのは可能だろうか？」という質問を投げかけた。氏の答えは「訓練を積みばできる」ということであつた。しかしながら、訓練をつまなくても、多数のデータを元にロジスティック回帰分析を行うことで、ある文の文法性（あるいは容認される確率）を0から1の間で予測したり、記述したりすることも可能になる。つまり、文法性判断があいまいな文というのは、100%正文でも100%非文でもないということであるが、このパーセントは何かの量ではなく、確率と考えるのだ。実際には条件が整えば言えるが、整わなければ言えないといったことであろうが、これは確率の考え方にマッチする。

実際にロジスティック回帰分析を応用した研究としては井上ほか(2022)を挙げることがができる。量子子の解釈について1文につき13もの質問を重ねた研究であるが、どのような因子がどの程度効いているのかを一般化線形混合モデル(GLMM)によって明らかにしている。

### 4. 3 オープンサイエンス

少し方向性は変わるが、オープンサイエンスという概念についても触れたい。研究成果を専門家・非専門家問わず誰でもアクセスできるようにする、という試みである。オープンサイエンスの構成要素のうち、論文を無料で公開するオープンアクセスについては、我々にとってもかなり身近な存在になってきたと言ってよいであろう。ただし、日本語文法学会ではこの問題を議論するのは難しい。

ここでは、得られたデータを公開するオープンデータや、方法論を公開・共有するオープンメソドロジーについて研究者が意識すべきと思われる。この点については方言研究者の営みが大きな参考になる。『岡崎敬語調査』や『方言文法全国地図』の回答がExcel ファイルで公開されており、統計的な分析を行える準備が整っている。また、松岡葵氏の『日琉諸語の調査票ポータルサイト』などはオープンメソドロジーの優れた取り組みである。

発表者の取り組みはそれと比べれば小規模であるが、多変量解析の分析結果を付録として公開するようにしている。実際、中俣(2020)の付録データを元に、馬場(2021)が別角度からの検証を行っている。また、分析用のコードも公開している。研究者のためというわけではいが、授業でコーパスを分析した結果をハンドブックの記事として公開する『文法コロケーションハンドブック E』プロジェクトも、研究成果を全世界の学習者に伝えるという観点からはオープンサイエンスと呼べるかもしれない。

発表者は現在、院生たちとBaayen(2008)を使って統計とRの勉強会を実施している。この本にはLanguageR というRのライブラリが含まれており、その中には、反応時間や親密度調査の回答結果も含んだ様々な研究の生データが含まれている。読者はそのデータを使って統計計算やグラフ描画を行っていくのだが、例えばオランダ語の接辞や語源に関するデータ、ソロモン諸島の言語のデータなど、学生にとって、とっつきにくいデータも多い。

文法研究者が綿密に計画された調査を行い、そのデータや調査票を公開することで、妥当性の検証や研究者育成につながると考えられる。文法性判断の個別の回答など、何の役に立つかわからないデータであっても、例えば25年もすれば、言語変化に関連する貴重なデータになる可能性はある。この時、生の回答データであれば、時間にかかわる変数を一列加えるだけで、すぐにモデリングを行って時間の影響を測定することが可能になるのである。

### 5. おわりに

本発表では過去25年間の『日本語文法』掲載論文を調査し、数値の扱いについてはほぼ何の変化も見られないということを明らかにした。しかしながら、文法性判断に対して統計モデリングを適用することで、文法研究を進化させることができると考えられる。さらに、データの積極的な公開は、研究者コミュニティ全体の進化につながることを主張した。

## 参考文献

- 井上雅勝・藏藤健雄・松井理直(2022)「日本語量化文の解釈と処理方略」『言語研究』162, 91-118
- 上山あゆみ・傍士元(2017)「容認可能性と言語理論の説明対象」『日本語文法』17-2, pp. 20-36.
- 金水敏(2017)「文法研究におけるデータについて—文法研究は経験科学たりうるか—」『日本語文法』17-2, pp. 54-63.
- 玉岡賀津雄(2005)「中国語を母語とする日本語学習者による正順・かきませ語順の能動文と可能文の理解」『日本語文法』5-2, pp. 92-109.
- 中俣尚己(2020)「主成分分析を用いた副詞の文体分析」『計量国語学』32-7, 419-435.
- 中俣尚己(2021)「言語統計学入門(3) —パーセンテージと比率—」『計量国語学』33-3, pp. 205-213
- 中俣尚己(2024)「2022年・2023年における日本語学界の展望 文法(理論・現代)」『日本語の研究』20-2, pp. 21-28.
- 馬場俊臣(2021)「副詞の文体の計量について——中俣論文の主成分分析結果との比較——」『語学文学』60, pp. 26-35, 北海道教育大学語学文学会.
- 森勇太(2023)「江戸後期洒落本に見る丁寧語の運用とその地域差—京都・大坂・尾張・江戸の対照」『日本語文法』23-1, pp. 104-120.
- 李依格・張佩霞・玉岡賀津雄(2023)「話し言葉における動詞の否定でいい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因」『日本語文法』23-2, pp. 87-102.
- Aitchison, J. (1991) *Language change: progress or decay? 2nd ed.*, Cambridge University Press.
- Baayen, R. H. (2008) *Analyzing Linguistic Data*, Cambridge University Press.
- Hoji, H. (2015) *Language Faculty Science*, Cambridge University Press.

## ウェブサイト

- 国立国語研究所「データとプログラム」  
[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/dp\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/dp_index.html)
- 松岡葵「日琉諸語の調査票ポータルサイト」  
<https://sites.google.com/view/japoniclanguages-questionnaire/>
- 中俣尚己「文法コロケーションハンドブックE」  
<https://grammarcollocation.wordpress.com/>

## 日本語文法学会入会案内

入会についての条件はありません。学会ホームページから入会申し込みの上で年会費1年分をクレジットカードで納入するか、下記の口座にお振り込みの上で学会ホームページから入会申し込みを行ってください(振込用紙の通信欄にはご記入なさらないでください)。学会ホームページにアクセスできない場合は、事務局にお問い合わせください。会費は、振り込まれた年度の会費となります。ただし、3月中の振り込みの場合は、翌年度の会費となります。

振り込みによる場合、入会申し込みは、振り込み後、なるべく早く行ってください。入会申し込みがない場合、入会の手続きは完了しません。なお、振り込みの確認のため、振り込み年月日を必ずご記入ください。

なお、会費には、学会誌代も含まれます。年度途中に入会された場合も、その年度に発行された学会誌が配付されます。ただし、入会以前に発行された号は、入会後に発行される号の発送の際にあわせて発送します。また、9月以降に入会された場合は、9月末刊行の学会誌は、次の号(翌年3月刊行)と合わせて送付することになりますので、ご注意ください。

その他、学会についての詳細は、学会ホームページをご覧になるか、事務局までお問い合わせください(学会ホームページ、事務局については奥付をご参照ください)。

年会費：一般会員 6,500 円、学生会員 4,000 円、維持会員 1 口 10,000 円

ただし、ODA 対象国在住者は、一般会員 3,300 円、学生会員 2,000 円

(なお、暫定的に、2025 年度も学生会員の会費を半額免除とする。)

### ●銀行振込みの場合

銀行名： ゆうちょ銀行

口座名称： 株式会社 QM 日本語文法学会係

ふりがな： カ) キューエム ニホンゴブンポウガッカイカカリ

口座番号： 00160-0-548086

※他行等から振込む場合は、受取口座として次の内容をご指定ください。

銀行名： ゆうちょ銀行

店名(店番)： 0一九(ゼロイチキユウ)店(019)

口座名称： 株式会社 QM 日本語文法学会係

ふりがな： カ) キューエム ニホンゴブンポウガッカイカカリ

預金種目： 当座

口座番号： 0548086

なお、維持会員は、学会の財政的維持にご協力いただくもので、資格、義務等はございません。ご協力のほど、お願い申し上げます。

### [住所変更等について]

住所変更等、登録情報に変更があった場合は、学会ホームページ(会員マイページ)から変更を行ってください。学会ホームページにアクセスできない場合は、事務局にお問い合わせください。

### [継続会費の納入について]

継続して会費を納入する場合は、学会ホームページからクレジットカードで支払うか、上記口座宛振り込みで8月末日までにお払い込みください。お振り込みの場合は、通信欄に「継続(20XX 年度会費)」と明記してください。その年度の会費を8月末日までにご納入いただけない場合、会員資格が一部停止され、会費納入まで論文投稿や大会発表が制限されます。また、学会誌送付も停止いたします。9月以降にご納入いただいた場合は、9月末刊行の学会誌は、次の号(翌年3月刊行)と合わせて送付することになりますので、ご注意ください。なお、年度が変わった後で、前年度の会費を納入することはできません。会費の納入の確認には2週間ほどかかります。余裕をもってお支払いください。

※開催校へのアクセスおよびキャンパス内の案内については、以下のページをご覧ください。

専修大学 web サイト＞大学案内＞キャンパス・施設紹介＞神田キャンパス  
<https://www.senshu-u.ac.jp/about/campus/>

## 日本語文法学会 第26回大会発表予稿集

---

主 催	日本語文法学会
公開シンポジウム共催	言語系学会連合
大会委員	岡崎 友子（委員長），窪田 悠介（副委員長）， 建石 始（副委員長），岩田 美穂，田川 拓海， 陳 秀茵，堤 良一，中川 奈津子，野間 純平， 林 淳子
発 行 日	2025 年 12 月 20 日
編集・発行	日本語文法学会 〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山 4-1 神戸女学院大学文学部 朴秀娟研究室内 日本語文法学会事務局 E-mail：nihongo.bunpo.daihyo@gmail.com <a href="https://www.nihongo-bunpo.org/">https://www.nihongo-bunpo.org/</a>
印 刷	株式会社 Big Hug

